ジョン・フォックス

フォックス『殉教者の書』

New Covenant Publications International Ltd. Japanese

版権©2020. 国際新しい契約の出版物。

無断で複写転載することを禁じます。本書のいかなる部分も弊社の許諾なく検索システムへ保存したり、 電子データ、 紙媒体、または録音などの方法で複写・ 転送することを禁じます。

この文書は、国際著作権法によって保護されています。この文書のいかなる部分も、いかなる形式でも複製、配布、翻訳、または送信することはできません。 または、電子的または機械的、コピー、記録、または保存を含む任意の手段 あらゆる情報の保存および検索システム。

式や手段によって。ISBN：359-2-85933-609-1

データカタログ

編集とデザイン：国際新しい契約の出版物。

イギリスで印刷。
初版 2020 年 5 月 26 日

New Covenant Publications International Ltd.,
Kemp House, 160 City Road, London, EC1V 2NX

ウェブサイトをご覧ください：www.newcovenant.co.uk

フォックス『殉教者の書

JOHN FOXE
ジョン・フォクシー

死にたいなら; それは豚のようにはならない、

追い詰められて、不名誉な場所に追い詰められて。

周りでは狂った飢えた犬が吠えている。

我々の不幸を嘲笑う

私たちが死ななければならないのなら、

高貴な死を迎えましょう。

我々の尊い血が無駄に流されないように。

そうすれば、我々が逆らう怪物でさえ

我々に敬意を払わざるを得なくなるだろう。

我々は死んだが！

近親者よ、我々は共通の敵に会わなければならない!

多勢に無勢ではあるが、我々は勇敢であることを示そう。

そして彼らの千の打撃に対して

致命的な一撃を与えよう

我々の前に開かれた墓があっても？

男らしく、人殺し、臆病者の群れに立ち向かい、戦おう。

壁に押しつけられ、死にながらも反撃しよう。

死にたいなら、1919

クラウデ・マッケイ

このページは意図的に空白になっています。

New Covenant Publications

International Inc.

改革ブック、変換された心は

Alt-Heerdt 104, 40549 Düsseldorf, Germany
Tel : +49 211 399 435 234

Email: newcovenantpublicationsintl@gmail.com

謝辞

この本を天の神にささげる

序文

新しい契約出版物国際は、天と地を結合し、愛の律法の永続性を強化する神の計画を読者に再接続します. ロゴ、契約の箱は、キリスト イエスと彼の人々と神の律法の中心性との間の親密さを表しています. 新しい契約とはこうだ - の書にあるとおりです "わたしは、わたしのおきてを彼らの心に刻みつける。そのため彼らは、わたしをあがめたいという気持ちになる。こうして、彼らは文字どおりわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。" (エレミヤ書 31:31-33) 確かに、新しい契約は償還を証明し、衰えのない闘争によって生まれ、血によって封印されます.

数え切れないほどの世紀のために、多くは真実を消し去るために計算され、かじり苦悩と不可解な弾圧を耐えてきました. 特に暗黒時代に,この光は非常に四面楚歌と人間の伝統と人気の無知によって隠されていました,世界の住民は知恵を軽蔑し、契約を犯していたの 増殖する悪との妥協の疫病は、多くの人生が不当に犠牲にされ、良心の自由を放棄することを拒否した、放逸な退化と悪魔的な非人道的な惨状を引 それにもかかわらず、失われた知識は、特に改革の時に復活した.

16世紀の改革の時代は、反改革に反映されるように、真実、根本的な変化とその結果としての乱流の瞬間を巻き起こしました. しかし、この巻を通じて、改革者や他の勇敢な開拓者の視点から、この特異な革命の否定できない意義を再発見する. 彼らの説明から、荒廃した戦い、そのような驚異的な抵抗と超自然的な介入の根底にある理由を理解することができます.

私たちのモットー："改革ブック、変換された心は、"重要な時代とその影響で構成される文学の明確なジャンルを、強調する. それはまた個人的な改革、再生および変形の緊急を共鳴させる. 翻訳の代理店によって結合されたグーテンベルク印刷機として、改革信仰の原則を広め、約500年前に、デジタル化されたプレスとオンラインメディア.

목차

第 1 章 - キリスト教殉教者の歴史（第一次一般迫害）.....6

第 2 章 - 10 回の初期迫害の数々 12

第 3 章 - ペルシャの聖人たちに加えられた迫害たち..... 38

第 4 章 - ローマ教会による迫害 42

第 5 章 -宗教裁判の説明 68

第 6 章 - 教皇庁下のイタリアにおける迫害についての記述 82

第 7 章 -ジョン・ウィクリフの生涯と迫害に関する記事 139

第 8 章 - 教皇権下で行われたボヘミアの迫害の数々 143

第 9 章 - マーティン・ルーサーの生涯と迫害に関する記事 153

第 10 章 -ドイツの一般的な迫害..... 157

第 11 章 - オランダの迫害についての説明 166

第 12 章 - 神様の真のしもべであり、殉教者である。 171

第 13 章 - ジョン・カルバンの生涯に関する記事..... 184

第 14 章 - 1641 年のアイルランド人虐殺事件の全貌 188

第 15 章 -フランスとユグノー 199

第 16 章 ヘンリー8 世時代のスコットランド迫害の記録..... 209

第 17 章 - 聖書の戦い、そして火薬の陰謀* 217

第 18 章 - 1605 年ジェームズ 1 世治世における火薬陰謀事件の発覚*..... 227

第 19 章 -アイルランドにあったプロテスタント信仰の進歩と迫害..... 248

第 20 章 -ジョン・バンヤンの生涯と迫害に関する記事 254

第 21 章 -ジョン・ウェスリーの生涯に関する記事..... 269

第 22 章 - 1789 年のフランス革命とその迫害 275

第 23 章 - 1814 年から 1820 年までフランスで プロテスタントに加えられた迫害の数々 310

第 24 章 - アメリカ海外宣教の始まり 331

オリジナル版へのエピローグ 355

第 1 章 - キリスト教殉教者の歴史（第一次一般迫害）

教授の序曲

マタイによる福音書(16:16)で、私たちの救い主であるキリストは、シモン・ペテロから「主はキリスト、すなわち生きておられる神の御子です」という告白を聞きます。他の誰よりもペテロは彼が神の御子であるという事実を認識し、御父の中にある秘密の救いの手を感知した。主は彼をペテロと名づけ、石である御自分の上に教会を建てられた。そしてその教会は強力なもので、

イエスは言われた：あなたはペテロ（岩）です。わたしはこの大きな岩の上にわたしの教会を建てます。地獄のどんな恐ろしい力も、わたしの教会に打ち勝つことはできません。 19 あなたに天国のかぎをあげましょう。あなたが地上でかぎをかけるなら、天でも閉じられ、あなたが地上でかぎを開けるなら、天でも開かれるのです。」

この御言葉から私たちは 3 つの事実に注目しなければならない。

第一に、キリストはこの世界に教会を建てられる。

第二に、その教会は世界からだけでなく、すべての陰部の最高能力と権力からも強力な迫害を受けるだろう。

第三に、その教会は悪魔と彼の恨みによる極悪な攻撃にもかかわらず、悠然と続くだろう。

私たちは驚くべきことに、キリストのこの預言が的中したことを知っており、今日まで教会が歩んできたすべての足跡は、この預言された言葉を確証すること以外に何もないことを示している。

第一に、言うまでもなく、キリストが教会を建てた。

第二に、この世の貴族や王、君主、統治者、指導者たちは、公にせよ、陰にせよ、自分のすべての権力と狡いさを総動員して教会を迫害することに身を捧げた。

第三に、キリストが言われた通り、それにもかかわらず、今も教会はそれに耐えており、支えてきた。

ステファン(Stephen)

ステファンは最初の殉教者です。彼はイエス・キリストを殺した裏切り者や殺人者に忠実に福音を伝え、それが彼の死を引き起こした。 罪の刺し傷に興奮したユダヤ人の狂乱的な反応は、こう言われて、会堂にいた人たちはひどく腹を立て、どっと ステファンに襲いかかり、その町の丘のがけ。 石を投げつけて殺すに至った。

ステファンが迫害された時期は、イエス様が死んで復活された翌年の春、ペンテコステの時期だったと推定され、この見解が一般的に受け入れられている。

この事件の後すぐに、キリストをメシアまたは預言者として告白するすべての人々に大迫害が行われた。 この事実は、ルカが使徒言行録に「その時、エルサレムにある教会に大きな迫害が加えられ、使徒たち以外の全ての人がユダヤとサマリア全域に散らばった」(使徒言行録 8:1)と記録していることからすぐに分かる。七人の執事の一人であったニカノルを含む約 2 千人のクリスチャンが「ステファンによる迫害」期間中に殉教した。

ヤコブ (James)

次に私たちが出会う殉教者はセベデの息子ヤコブです。彼はヨハネの兄弟であり、イエスの親戚でもある。(彼の母とマリアは従姉妹です。ヤコブの殉教はステパンの死後、約 10 年ほどで起こった。 これはヘロデ・アグリッパがユダヤの総督に任命されると、彼はユダヤ人の心をつかむためにキリスト教徒に対して激しい迫害を始めました。

フィリップ(Philip)

彼はガリラヤのベツァダで生まれ、最初に「弟子」と呼ばれた人である。彼は北アジア(Upper Asia)で忠実に主に仕え、フリジアのヘリオポリスで殉教した。彼は鞭打たれ、刑務所に入れられた後、A.D.54 年に十字架で処刑された。

マタイ(Matthew)

マタイは税関係であり、ナザレで生まれ、パティアとエチオピアで働き、エチオピアで迫害され、A.D.60 年にナダバで槍で殺された。

小さなヤコブ(James)

小ヤコブはイエスの兄弟である。彼はエルサレム教会の監督でもある。94 歳の時、彼はユダヤ人に殴られ、石を投げられ、最終的に脳を損傷して殉教した。

マティアス(Matthias)

マティアは他のほとんどの弟子よりあまり知られていないが、ユダ・イスカリオテの空白を埋めるために任命された。彼はエルサレムで石を投げつけられ、後に斬首されて殉教した。

アンドリュー(Andrew)

アンドレはペトロの兄弟であり、多くのアジア諸国に福音を伝えた。エデッサで 捕らえられ、十字架で処刑されたが、地上で十字架の両端を垂直に釘付けされて死んだ。

マーク(Mark)

マルコはレビ族のユダヤ人の両親のもとに生まれた。マルコはアレクサンドリアの人々によって、彼らの偶像であるセラピスを称える壮大な宗教儀式を行う際に殉教した。彼は無慈悲な処刑方法で体が引き裂かれ、彼の生涯を終えた。

ピーター(Peter)

他の多くの聖人の中で祝福された弟子であるペテロは死刑を宣告され、十字架で処刑された。ジェロームはペトロの死についてこう記録している。"ペテロは頭が地面に、足が上を向いた姿勢で、つまり逆さまに十字架につけられた。彼はこのように主と同じ姿勢で死ぬほど自分は高貴ではないと考えたと伝えられている。"

ポール(Paul)

最初はサウルと呼ばれた使徒パウロは、キリストの福音を宣べ伝えるために崇高な犠牲と計り知れない労苦を払った後、やはりネロの迫害の下で殉教した。アブディアス(Abdias)は、ネロがパウロに処刑を宣告するために彼の兵士ネレガ(Nerega)とパルテミウス(Parthemius)を送ったと述べている。その二人の兵士はパウロのところに来て、人々にこの事実を知らせ、パウロが自分たちのために祈ってくれることを願った。 な

ぜなら、彼らはキリストを信じることを望んでいたからだ。彼らは人々にすぐに自分たちがキリストを信じ、イエスの墓のそばでバプテスマを受けると言った。

この出来事の後、兵士たちはパウロを村の外の死刑執行場に連れて行き、そこでパウロは祈りを終えた後、ナイフで喉を切り裂かれて殉教した。

ユダ(Jude)

ヤコブの兄弟で、タデオ(Thaddeus)と呼ばれた。彼は A.D.72 年にエデッサ(Edessa) で十字架刑を受けた。

バトローム(Batholomew)

バドローマは様々な国で福音を伝えた。 彼は長い間残酷な暴行を受け、凶悪な偶像崇拝者によって十字架上で処刑された。

トーマス(Thomas)

トマスはディドゥモ(Didymus)と呼ばれ、パティアとインドで福音を伝え、ここで異教の祭司たちを激怒させた。そこで彼は槍で体を貫かれて死んだ。

ルカ(Luke)

ルカはルカ福音書と使徒言行録の記録者であり、福音伝道者である。彼はパウロと一緒に多くの国で宣教し、ギリシャの偶像崇拝の祭司たちによってオリーブの木に首を吊るされて殉教したと推定される。

シモン(Simon)

シモンの別名はゼロテ(Zelotes)である。彼はアフリカのマウリタニア(MAuritania)で福音を伝え、イギリスでも宣教した。A.D.74 年に彼はイギリスで十字架刑に処された。

ジョン(John)

この「愛された弟子」は、大ヤコブ（James the Great）の兄弟である。エペソからローマへの強制送還命令を受け、そこで油が沸騰する釜に投げ込まれる刑を受けたが、

奇跡的に逃げて逃げることに成功した。その後、ドミティアヌス(Domitian)は彼をポトモ島に追放し、ヨハネはそこで「黙示録」を記録した。ドミティアンの後継者であるネルバがヨハネを再送還した。彼は使徒の中で唯一悲惨な死を免れた人なのだ。

バルナバ(Barnabas)

バルナバはキプロス(Cyprus)出身で、ユダヤ人の子孫である。彼は A.D.73 年頃に殉教したと推定される。このように続くすべての迫害と恐ろしい処刑にもかかわらず、教会は日々成長し、使徒たちと使徒職を遂行した兄弟たちの教えの中に深く根を下ろし、その上に聖徒たち の血が豊かな糧となった。

第 2 章 - 10 回の初期迫害の数々

ネロ政権下の最初の迫害、A.D.67 年

教会に加えられた最初の迫害は A.D.67 年、ローマの第 6 代皇帝ネロの統治時代に起こった。 この独裁者が行ったことの中で有名なのは、ローマの街を燃やしたことだった。皇帝の威容を誇っていたローマが炎に包まれたとき、ネロはマカエナ(Macaenas)の塔に登り、ハープを弾きながら「燃えるトロイ」を歌い、「私が死ぬ前に全てが廃墟になることを願う」と公然と叫んだ。 彼は一言で言えば、悪魔に取り憑かれた狂気の君主だった。

壮大な建築物や数々の宮殿や家屋が焼け野原となった。数千万人が炎に焼かれたり、煙に窒息したりした。そうでない人々は倒壊した建物の山に埋もれた。この途方もない大火災は 9 日間もその炎が消えることはなかった。 しかし、ネロの仕業に対して猛烈な非難と憎しみが殺到すると、ネロはそのすべての原因を無実のキリスト教徒に帰すことを決意した。火災の責任を免れると同時に、自分の悪魔的な性格を楽しませてくれる別の残虐劇を存分に見る機会が生まれるからだった。

これをきっかけに最初の迫害が起こり、キリスト教徒に行われた獣のような所業がどれほど恐ろしいものであったか、それを見るローマ人たちも沸き上がる同情を隠せなかった。ネロは残酷さの極みを見せ、極悪非道としか言いようがない想像で作り出すことができるあらゆる種類の

処刑の手口を考案した。ある者は、獣の皮に縫い付け、息が絶えるまで犬に噛ませた。また、蜜蝋を塗った硬い下着を着せ、馬車の車軸にしっかりと固定させた後、自分の庭で燃やし、真夜中の真っ暗な庭を昼間のように明るく照らした。

しかし、ローマ帝国全体で総体的に起きたこの残酷な迫害にもかかわらず、聖書通りに信じるキリスト教信仰はむしろより強固になり、その中で使徒パウロが殉教した。殉教

者にはパウロのほか、コリントの財務官であるエラストゥス(Erastus)、マケドニアのアリスタルコ(Aristarchus)、パウロを通して回心したエペソ人トロフィモ(Trophimus)、パウロの協力者でありバルサバ(Barsabas)と呼ばれるヨセフ(Joseph)、ダマスカス監督アナニア(Ananias)などがいた。**ドミティアヌス(Domitian)の支配下の第二次迫害、A.D.81 年**

ドミシアン皇帝は生まれながらにして残忍さを身につけた人物で、最初は親兄弟やローマ元老院

議員数人を殺し、ついにはキリスト教徒に迫害の手を伸ばした。この迫害で殉教した数え切れないほどの人々の中に、エルサレムの監督として十字架につけられたシメオン(Simeon)が含まれていた。使徒ヨハネは沸騰した油に入れられ、パトモス島に追放された。特にローマ元老院議員の娘であるフラビア(Flavia)がポント(Pontus)に流刑されたことがきっかけとなり、次のような特別法令が制定された。"キリスト教徒が裁判にかけられ、庶民官の前に立ったとき、誰も信仰を捨てずに罰を免れることはできない。"

ドミシアンの支配期間には、キリスト教徒を苦しめる目的で捏造された物語が様々な形で飛び交った。飢 や疫病、地震のようなものがローマの支配下の屬州のどこかにぶつかるだけで、そのすべての原因がキリスト教徒に帰された。キリスト教徒の間に吹き荒れた迫害で信仰のない内部告発者の数が増加し、お金に目がくらんだ虚偽の告発者たちが無実の命を消し去ることが一件や二件ではなかった。 ひどいことに、どんなキリスト教徒でも執政官の前に立つととにかく死を免れない法廷宣誓が提案されたが、裁判を望まずそれを拒否しても死刑が宣告され、たとえ宣誓した後でもキリスト教徒であることを告白すれば死刑が言い渡されるという宣誓だった。

多くの人がこの迫害の時期に殉教したが、その中でも傑出した人物は以下の通りである。

ギリシャ文学を熟知した後、天文学を勉強するためにエジプトに旅行に出かけ、私たちの救い主が十字架に処刑されたその時刻に起こった途方もない規模の"超自然的な"日食を観察したアレオパゴス（Areopagus）のディオニュシオ（Dionysius）は、その唇に宿る聖さと体に染みた純潔がキリスト教徒に強い好感を持ち、アテネの監督に任命され、その後殉教しました。

私たちがよく知っている心温かいクリスチャンであるニコデモ(Nicodemus)は、ドミニコ迫害時代の激動の中でローマで死を えた。

プロタシオ(Protasius)とゲルバシオ(Gervasius)はミラノ(Milan)で殉教した。

使徒パウロの弟子であり、霊的な息子と呼ばれたディモテ(Dimothy)はエペソの監督であり、 A.D.97 年まで熱心に教会に奉仕しました。この迫害期間にカタゴギオン(Catagogion)という偶像祭りを執り行おうとする異教徒の街頭行列に遭遇し、彼らの虚栄心の強い偶像崇拝を強力に叱責すると、怒りが頂点に達した異教徒たちが棍棒で彼を容赦なく殴りつけ、ディモテはその時負った傷で 2 日後に息を引き取った。

トラヤヌス(Trajan)統治下の第三次迫害、A.D.108 年

博識で名高かったプリニウス 2 世(Pliny the Second)は、この 3 回目の迫害の際、統治者トラヤンに手紙を出したが、その理由は、キリスト教徒の中にローマの法律に反して迫害されるべき者が一人もいないにもかかわらず、一日に数千人ずつ虐殺されるのを見て沸き上がる同情を抑えることができなかったからである。

アンティオキア司教イグナティウス(Ignatius)が まさにこの迫害の時に苦難を受けた。捕まってスマーナにたどり着いた彼は、殉教してキリスト・イエスを得るようにしてほしいという手紙をローマにある教会に送り、殉教に対する熱望を示し、その後、猛獣の檻に放り込むという刑を宣告され、獅子たちの鳴き声が耳元に聞こえると、「ああ、私は

キリストの麦粒である。純潔なパンとして発見されるために猛獣の歯の間で砕かれよう」と言った後、猛獣に引き裂かれて殉教した。

トラヤンに続いてアドリアン(Adrian)が台頭し、彼もまた苛酷な過酷さでこの三度目の迫害を続けた。ローマの監督アレキサンダー(Alexander)が彼の二人の執事と共に殉教し、キルヌス(Quirnus)とヘルネス(Hernes)とその家族だけでなく、ローマの貴族ゼノン(Zenon)と 10,000 人に迫る他のキリスト教徒も死に渡された。アララト山では、キリストの苦難を模倣して多くの人々が茨の冠をかぶせられ、槍で脇腹を刺されて十字架につけられた。特にユスタキウス(Eustachius)というローマの指揮官は、彼のいくつかの伝承を祝うための偶像の犠牲祭に参加するよう皇帝の命令をキリスト教徒として丁重に拒否し、これに腹を立てた恩知らずの皇帝は、このベテラン指揮官の功績を忘れ、彼とその家族を全滅させてしまった。

ファウスティネス(Faustines)とジョビタ(Jovita)、そしてブレシア(Brescia)の兄弟と市民が殉教する際には、苦難に対する彼らの忍耐に感心したカロセリウス(Calocerius)という異教徒が「キリスト教徒の神は偉大である！」と叫んだ後、逮捕されて一緒に殺されました。 A.D.138 年、アドリアンが任期を終えると、柔和な性格のアントニヌス・ピウス（Antoninus Pius）が後を継ぎ、これによりキリスト教徒に対する迫害は一時中断された。

マルクス・アウレリウス・アントニヌス

(Marcus Aurelius Antoninus)統治下の第四次迫害、A.D. 162 年 - ①.

A.D.161 年頃、王 に就いたマルクス・アウレリウス。 キリスト教徒に毒を抱き、凶暴に振る舞ったこの男によって、4 度目の迫害が始まった。

ある殉教者たちは、すでに剥がされた足の裏で棘、釘、尖った貝殻のようなものの上を通らなければならなかったし、他の人たちは彼らの筋肉と血筋が皮膚の外に飛び出すま

で鞭で叩かれ、それでも足りないのか、人間が考案できる最も極端な拷問で肉を切り取る苦痛を味わった後、不気味な殺害を受けた。若くて忠実なキリスト教徒であったゲルマニクス(Germanicus)は猛獣に引き渡された時、猛獣を嘲笑うように大胆な信仰を守り、それを見ていた数人の異教徒が彼の確固たる信仰を見て主へ改宗した。

スマーナの高潔な監督ポリカープ(Polycarp)は地方総督の前に連れて行かれ、死刑を宣告され、市場の床で火刑に処された。"呪え、そうすればお前を解放してやる。キリストを非難してみろ！」総督のこの妥協案にポリカープは「私が主を仕えて 86 年経ったが、主は一度も私を不当に扱ったことがなかった。 それなのに、どうして私が私を救ってくれた私の王を冒涜することができるのだ」と応酬した。火刑台に一人で縛られた彼を、木の枝につけた炎がアーチ状に巻いたが、毛髪の一本も触れないのを見た総督は、ナイフで刺すように命令し、ナイフで刺すと炎を消すほど多くの血が注がれた。

大きな勇気を持って御言葉を伝えた主の働き者メトロドロス(Metrodorus)と、何度もキリスト教の信仰を卓越して擁護したピオニウス(Pionius)も焼失し、カルプス(Carpus)とパピルス(Papilus)という二人の優れたキリスト教徒と敬虔な信仰のアガトニカ(Agathonica)という女性もアジアのペルガモポリス(Pergamopolis)で殉教しました。

ローマの名家の貴婦人フェリシタティス(Felicitatis)は敬虔なキリスト教徒で、슬하에七人の息子をもうけた。そのうちの長男ジャヌアリウス(Januarius)は鞭で打たれた後、重い錘に押されて圧死し、下の二人の弟フェリックス(Felix)とフィリップ(Philippe)は棍棒に打たれて脳が破裂し、四番目のシルヴァヌス(Silvanus)は崖から突き落とされて転落死した。幼いアレクサンダー(Alexander)とヴィタリス(Vitalis)とマルシャル(Martial)は斬首され、母親もその子供たちの血がついたナイフで首を切られた。

真理をひどく愛唱した博識な学者ジャスティン(Justin)は、もともと哲学に傾倒した哲学者だったが、A.D.133 年頃、30 歳で回心してキリスト教徒となり、以後、初めて真理の味を知るようになった。異教徒たちがキリスト教徒をひどく酷く扱うと

、彼らのための最初の弁護書を作成することになり、そこに培われた優れた学識と天才性に手を挙げてしまった皇帝は、キリスト教徒に有利な勅令を宣布するに至った。しかし、社会のすべての既成事実を軽蔑し、世界をひねくれ、歪んだ目で見るキニック学派のクレッシェンス(Crescens)と頻繁に論争を繰り広げるうちに彼の意に反することになり、ジャスティンを殺そうと企んだクレッシェンスは、ジャスティンがキリスト教徒のための第二の弁護書を作成した時、皇帝を煽って彼を嫌う心を持たせ、結局ジャスティンと彼の 6 人の仲間はその文章によって逮捕されてしまう。偶像に供物を捧げるという命令を拒否した彼らに鞭打ちと一緒に斬首刑が宣告され、彼らは舌を吐かせるようなあらゆる過酷な刑罰で死を えた。この時期に数人がジュピター(Jupiter)像への供物を拒否した理由で斬首刑に処せられたが、そこにスポリト(Spolito)市の執事コンコルドゥス(Concordus)が含まれていた。彼は執事の職分をよく務めた人らしく、キリスト・イエスの中にある信仰の中で大きな勇気で死を えた(Ⅰテモテ 3:13)。

マーカス・アウレリウス・アントニヌス（Marcus Aurelius Antoninus）統治下の第四次迫害、A.D.162 年 - ②。

ローマの第四次迫害期間に、列王記 18 章の「エリヤとバアルの預言者の対決」を連想させる出来

事があった。ローマに不満を持っていたいくつかの北の国々がローマに対して武装して立ち上がると、皇帝は彼らと交戦するために出陣した。ところが、敵軍が待ち伏せしている場所に入り込んでしまい、鬱蒼とした山の中のどこかに敵が陣取っている上に、また灼熱の渇きで死にそうになった彼らは、異教徒の神々に懇願するが、いったい何をやっているのか全く無言であった。「彼らが受け取った子牛を取り、朝から正午まで、バアルの名を呼び、「オバアルよ、わたしたちの声を聞いてください」と言ったが、何の音もなく、応答する者もいなかった」(1 Kings 18:26)。

このように戦意を喪失していた頃、藁にもすがる思いで民兵、つまりキリスト教徒で構成された「脳性軍団」の隊員たちに「彼らの神に」救助を求める命令が下された。「...預言者エリヤが近づき、「アブラハムとイサクとイスラエルの主なる神よ、あなたがイスラエルの神であること、わたしがあなたのしもべであること、わたしがこのすべてのことをあなたの言葉通りに行ったことが今日知られるように。主よ、私に聞いてください、主よ、私に聞いてくださり、この民に主が主の神であることを知らせてください...』（1 Kings 18:36,37）。案の定、奇跡的な救いがその直後に続いた。 滝のような雨が降り注ぎ、部隊員たちが作った溝を満たし、それによって時ならぬ驚くべき救いが訪れ、自分たちの面前に吹き荒れた不可思議な嵐にあまりにも怯えてしまった一部の敵がローマ軍に投降し、そうでない残りは敗北の苦杯を味わい、反乱を起こしたすべての属州が平常を取り戻したのである。

「彼の標的がいかに偉大であり、彼の異蹟がいかに能力があるか！』(ダニエル 4:3)。「主よ、彼は神である。主よ、彼は神である』（1 Kings 18:39）。クリスチャンの神は偉大である!!!

この事件により、しばらくの間、迫害は緩和された。

しかし、迫害はすぐにフランス、特にリヨン(Lyons)で猛威を振るった。そこで数多くのキリスト教徒が受けた拷問を言葉で表現すれば、全く口がふさがるほどである。この殉教者たちの中で断トツのトップは、ベティウス・アガトゥス(Vetius Agathus)という青々とした青年、キリストを信じる細い体型の女性ブランディナ(Blandina)、白熱した真鍮の皿を身体の最も柔らかい部分に当てなければならなかったウィーン(Vienna)の執事サンクトゥス(Sanctus)、かつて一度キリストを否定したことのある弱骨の女ビブリア(Biblias)がいて、ペルガモ(Pergamus)のアタルス(Attalus)とリヨンの立派な監督である九十歳のポティヌス(Pothinus)もここに含まれていた。

ブランディナで言えば、彼女は自分と他の 3 人のチャンピオンが初めて円形劇場に引きずり込まれた日、地面に固定された杭に縛られ、猛獣の餌食にさらされた。彼女はその時、切実な祈りで他の者たちの力を後押ししたが、どういうわけかどの猛獣も彼女だけは手を出そうとせず、彼女は再び監獄に残されることになった。彼女が三度目、そして最後に再び円形劇場に連れ出されたとき、彼女の隣にはポンティクス（Ponticus）という十五歳の少年が一緒だった。 彼らの信仰の固い地 に腹を立てた群衆は、彼らを性的な餌食にし、あらゆる手段を駆使して拷問し、処刑する残虐行為を行った。少年はブランディナから力を得て死ぬまで信念を貫くことができ、彼女も様々な拷問を耐え忍び、最後はナイフで殺された。

初期のキリスト教徒の生活は、「地上での迫害と地下での祈り」に満ちていた。彼らの生活はローマの円形競技場「コロッセオ」と地下墓地「カタコンベ」に代表される。「カタコンベ」はローマの地中に掘られた洞窟で、教会堂と墓を兼ねて使われた。初期のローマの教会は、別名「カタコンベ教会」だったのだ。ローマ近郊には約 60 のカタコンベがあり、その中で 600 マイルほどの地下通路が発見されている。これらの地下通路は、高さ約 1.8 メートル、幅 1-1.5 メートルほどで、各側壁には水平線のように細長く低くへこんだ部分が、船の階段状のベッドのように上下に刻まれている。

これらの中には遺体が安置されており、前面が一枚の大理石や漆喰で繋いだいくつかの大きな瓦葺きで囲まれていた。これらの大理石の板や瓦の上には墓碑銘が刻まれていたり、何らかの象徴が描かれている。異教徒とキリスト教徒の両方とも彼らの死者をここの地下墓地に埋葬したが、キリスト教徒の墓を開けると、彼らの骨を通して彼らがいかに悲惨な死を遂げたかを知ることができる。頭部が体から切り取られた状態で発見される一方、肋骨や肩甲骨が壊れており、また骨はしばしば焼かれて二酸化炭素が除去された生石灰になっているのだ。私たちはこれらを通して恐ろしい迫害

の記事を読んでいくかもしれないが、その碑面に刻まれた碑文は私たちに平安と喜びと勝利のキスを送っている。

"マルシア(Marcia)が安らぎを夢見てここに眠っている。"

"ローレンス(Lawrence)が天使の腕に抱かれて旅立った愛すべき息子に捧げます。"

"キリストの中で安らかに勝利した。"

"召され、安らかに行った。"

セヴェルス(Severus)と共に始まった第五次迫害、A.D.192 年

重病で寝たきりになっていたセベラスは、あるキリスト教徒の助けによって病床から立ち上がる。その後、キリスト教徒に大きな好意を示すようになったが、無知な群衆の偏見と狂気に負けて、

キリスト教徒に対する法令を実行させることになる。キリスト教信仰が目に見えて活気を取り戻すと、これに驚いた異教徒たちは、偶発的な災難の原因をキリスト教徒に帰すという昔ながらの誹謗中傷を再開するが、時は西暦 192 年であった。

しかし、迫害がどんなに猛威を振るっても、福音は輝きを放ち、どんな攻撃にも屈しない岩のように、敵の凶暴で荒々しい攻撃を見事に乗り切った。もしキリスト教徒が一斉にローマ帝国から出て行ったら、帝国が深刻な人口不足に陥るほど、キリスト教徒の数は日増しに増えていった。

ローマの司教ビクター(Victor)は第三世紀が始まった年、つまり西暦 201 年に殉教した。ライス (Rhais)は、真っ黒なビチューメンを頭にかぶせられ、母親と同じように火刑に処された。姉ポタイニエナ(Potainiena)もライスと同じように死を えたが、彼女の刑の執行を担当したバシリデス(Basilides)という将校が彼女によって改心する。

その後、バシリデスは軍将校として当然すべき特定の誓約を求められたとき、キリスト教徒である以上、ローマの偶像の名前で誓うことはできないと断固として拒否した。その言葉を信じられない人々の前で何度も固い決意を表明すると、すぐに裁判官の前に連れて行かれ、刑務所に引き渡され、その後急遽斬首された。

今や迫害の火種はアフリカに移りつつあり、数多くの人々が地球のあの片隅で殉教した。

ペルペトゥア(Perpetua)は二十二歳ほどの既婚女性でした。一緒に苦難を受けたのは、満期で満腹のフェリシタス(Felicitas)と信仰を持ったばかりの奴隷レヴォカトゥス(Revocatus)でした。他の囚人名簿には、サトゥルニヌス(Saturninus)、セクンドゥルス(Secundulus)、そしてサトゥル(Satur)がいた。処刑当日、彼らは円形劇場に連れて行かれ、サトゥールとサトゥルニヌス、レヴォカトゥスを「狩人たち」の間で絞首刑に処するよう命じられた。 それでも死なない場合は、彼らを猛獣に引き渡すのが慣例だった。狩人たちが二列に並ぶと、彼らは狩人たちの間に飛び込み、通り過ぎる際に激しく殴打された。フェリシタスとペルペトゥアは裸のまま狂った牛に投げ込まれ、その狂った牛はペルペトゥアにぶつかって気絶させた後、一気にフェリシタスに突進し、無惨に受け止めた。それでも死なない彼らを、死刑執行人がナイフで息の根を止めてしまった。 結局、レヴォカトゥスとサトゥルは猛獣たちによって、サトゥルニヌスは斬首刑で、セクンドゥルスは刑務所で死を えた。これらの出来事は A.D.205 年 3 月 8 日に執行された。

スペラトゥス(Speratus)と他の 20 人も同じく首を切られた。フランスのアンドクレス(Andocles) も同様だった。アンチョークの監督アスクレピアデス(Asclepiades)は、数多くの拷問を受けながらも命だけは守ることができた。

ローマの名家出身の女性セシリア(Cecilia)はヴァレリアン(Valerian)という紳士に嫁いだ。 彼女は彼女の夫と弟を主のもとに導き、二人とも斬首されたが、彼らの刑の執行を担当した将校が彼らによって改心し、彼も同じ運命を えた。セシリアは裸で

沸騰した湯船に浸され、しばらくしてナイフで喉を切られた。この出来事は西暦 222 年に起こった。

ローマの司教カリストゥス(Calistus)は A.D.224 年に殉教したが、どのように死んだかは記録されておらず、ローマの司教ウルバン(Urban)も A.D.232 年に同じ運命を えた。

マキシマス(Maximus)統治下の第六次迫害、A.D.235 年

A.D.235 年はマクシムスが統治していた時だった。カッパドキア(Cappadocia)では、そこの総督セレミアヌス(Seremianus)があらゆる努力を尽くして、その地方からキリスト教徒を一掃しようとした。

この統治下で亡くなった主な人物には、ローマの司教ポンティアヌス(Pontianus)とギリシャ人で彼の後継者であり、殉教者たちの行跡を収集して政府の嫌われ者であったアンテロス(Anteros)、ローマの元老院議員パンマキウス(Pammachius)とキリトゥス(Quiritus)、そして彼らの元家族や他の多くのキリスト教徒がいます、また、元老院議員であるシンプリシウス(Simplicius)とティベル

(Tyber)に追放された主の働き者カレポディウス(Calepodius)、高貴で美しい処女マルティナ(Martina)、荒れ狂う野生の馬に縄で吊るされ、息が絶えるまで地面に引きずり回された主のしもべヒッポリュトス(Hippolytus)がいる。

マクシムスが起こしたこの迫害期間中、数え切れないほどのキリスト教徒が裁判に立つこともなく殺され、彼らの死体が山積みになり、埋葬された。ある時は、死者に対する最低限の礼儀もなく、一度に五十人ずつ穴に投げ込まれたこともあった。

日に日に朽ちていく肉体が死んでこのように無価値に捨てられたとしても、主の聖徒たちの死は、死そのものが価値ある美しいものだった。「主の聖徒たちの死は、主の御目

に値するものである』 (詩篇 116:15)。もうすぐ贖われた体で復活すれば、その日、迫害された聖徒たちの死が主の御目には実に美しいものであったことを、全世界に知らせる。

デキウス(Decius)の治世下の第七次迫害、A.D. 249 年今回の迫害は、キリスト教徒とされた先王フィリップに対するデシウスの憎しみと、教会の盛んな成長に対する彼の時期が絡み合って起こった。デシウスは'キリスト教徒'というまさにその名前を根こそぎ摘み取ろうとした。 さらに悪いことに、教会内に多数の誤謬が流入し、聖徒たちは一つになって愛を持っても難しい状況で分裂し、様々な分派を作ることになった。このような状況に異教徒たちは皇帝の勅令を受け、キリスト教徒を一人でも多く殺してそれを自分たちの功績にしたい気持ちで燃えていた。

シチリア(Cicilia)生まれのジュリアン(Julian)は、キリスト教徒であるという理由で逮捕され、毒蛇とサソリがはびこる皮袋に入れられ、そのまま海に投げ込まれた。ピーター(Peter)という青年はヴィーナスへの供物を拒否し、次のように言った。"私は、あなたが悪名高い女に供物を捧げるという事実に驚愕を禁じ得ない。 彼女の放蕩についてはあなたの歴史家も記録しており、彼女の人生はあなたの法律が処刑すると規定しているもので、このなんと驚くべきことか！ 私は決してできない。むしろ、主が喜ばれる賛美と祈りの供物を真の神に捧げよう。"アジアの総督オプティマス(Optimus) はこの言葉を聞くやいなや、彼を刑車の上で引き裂くように命じた。 これによりすべての骨が粉々に砕けてしまった青年は、その後、別の場所に送られ斬首された。まだ十六歳の処女デニサ(Denisa) は一人の青年が信仰を否定するのを見て、突然こう叫んだ。"ああ不幸で可哀想な人よ、なぜあなたは一瞬の安らぎで永遠に悲惨になろうとするのか！" この言葉を聞いたオプティマスは彼女に怒鳴りつけ、デニサは自分もキリスト教徒であることを明らかにした後、斬首された。

殉教者ニコマクスの二人の友人アンドリュー(Andrew)とパウロ(Paul)は、A.D.251年に福なる救い主を呼び、石に打たれて殉教しました。アレクサンドリアのアレクサンダーとエピマコス (Epimachus)は「罪」と呼ばれる彼らの信仰を否定しなかったため、棍棒で叩かれ、鉤縄で引き裂かれた後、最終的に焼かれて死んだ。

二人の邪悪な異教徒ルシアン(Lucian)とマルシアン(Marcian)は巧みな魔法使いだったが、改心してキリスト教徒となり、熱弁を吐く説教者に変身し、数多くの魂を主に導いた。 彼らは生きたまま火刑に処せられる刑を宣告され、主の名のもとに殉教した。

トリフォ(Trypho)とレスピシウス(Respicius)はキリスト教徒であることを理由に逮捕され、ニース(Nice、フランス南部の避暑地)に投獄された。両足に釘が打ち込まれたり、街中を引きずり回されたり、鞭打ちされたり、鉄の鎖で引き裂かれたり、火のついた松明で焼かれたりした後、A.D.251 年

2 月 1 日に首を切られた。

シチリア(Sicily)の女性アガサ(Agatha)は、彼女が個人的に培ってきた資質も資質だが、信仰も同様に際立っていた。あまりにも秀麗な彼女の美しさに魅了されたシチリアの総督クィンティアン (Quintian)は、彼女の純潔を奪おうとあらゆる試みを試みたが、たびたび失敗に終わった。彼はその貞淑な女性をアフロディーカ(Aphrodica)という淫乱で悪名高い女性の手に渡し、彼女を売春させるためにあらゆる手口を尽くしてみたが、すべての苦労が水の泡となった。クインティアンは自分の計画が挫折したことへの怒りを抑えきれず、彼女がクリスチャンであることを知ったとき、彼の欲望は怒りに変わり、彼女に報復することを決意した。 彼の命令により、彼女は鞭で叩かれ、灼熱の鉄板で焼かれ、鋭利な鉤爪で肉を切り裂かれた。これらの拷問を辛抱強く見事に耐えた彼女は、今度は尖ったガラスの破片が混じった熱い石炭の上に裸のまま置かれ、再び牢獄に入れられ、そこの牢獄で A.D.251 年 2 月 5 日に息を引き取った。

他にも、イエス・キリストの忠実な証人たちの血は迫害の手が届くすべての場所に溢れかえった。迫害の怪物デシウスが聖徒たちの集まりを覗き見しようとするのを拒んだが、三人の弟子たちと一緒に斬首されたバビラス(Babylas)と過酷な監獄生活で生涯を終えたエルサレムの監督アレクサンダー、ラクダなどに縛られたまま過酷な鞭打ちを受けた後、火の穴に投げ込まれ一握りの灰となった老人ジュリアヌス(Julianus)とクロニオン(Cronion)、投獄され鞭打たれて焼かれたアンティオクの 40 人の処女たち、エペソに異教の神殿を建てた皇帝が偶像に供物を捧げるように命じたとき、丁重に拒絶し、皇帝が遠征で留守の間にある洞窟に身を隠した後、戻った皇帝が入り口を封鎖して餓死した親衛隊員マクシミアヌス(Maximianus)、マルティアヌス(Martianus)、ジョアネス(Joannes)、マルクス (Malchus)、ディオニシウス(Dionysius)、セライオン(Seraion)、コンスタンティヌス(Constantinus)が

いた。そして、セクンダニアヌス(Secundianus)が兵士たちによって刑務所に連れて行かれる時、「今、

その無実の人をどこに連れて行くのですか」と尋ねたが、逮捕されて一緒に拷問され、絞首刑に処された後、首を切られたベリアヌス(Verianus)とマルセリヌス(Marcelinus)がいた。

これだけでなく、この時期に欠かせない実に美しい聖人たちの愛の物語があります。デオドラ (Theodora)という美しい女性がローマの偶像への供物を拒んだという理由で売春宿に送られると、ディディモ(Didymus)はローマの兵士の軍服を着て売春宿に偽装して入り、彼女を自分の軍服を着て逃げさせた。後に彼は捕まり、死刑を宣告されたが、自分を救ってくれた彼が死刑に処せられると聞いたデオドラは耐えられなかった。 彼女はすぐに裁判官に駆けつけ、彼の足元に身を投げたまま、ディドゥーモの罪は自分が負うから彼を放してくれと泣き叫びながら訴えた。 しかし、冷酷な裁判官は彼女にも死刑を宣告

してしまった。二人はまず首を切られた。その後、遺体はバラバラにされ、そして焼却された。

この殉教の物語は、男女間の愛情よりも深い、極めて崇高な聖人の愛を示したものである。恋人ではなく聖人として、彼らは主イエス・キリストが示された愛を実践した。聖人のために自分の命を惜しまなかった彼らは、その愛を主イエス・キリストから学び、実践した天下に二つとない美しい人々であった。「わたしの戒めは、わたしがあなたがたを愛するように、あなたがたも互いに愛し合うことである。人が友のために自分の命を差し出すより、より大きな愛はない。....。純粋な心で互いに熱く愛し合いなさい』(ヨハネ 15:12-14、1 ペテロ 1:22)。

ヴァレリアン(Valerian)統治下の第八次迫害、A.D.257 年

この迫害は A.D.257 年 4 月、ヴァレリアンの統治時代に始まり、3 年半にわたって続いた。

片親の下で育ったルフィナ(Rufina)とセクンダ(Secunda)姉妹はどちらも美貌に優れ、教養にあふれた女性で、お金持ちの貴族と婚約していた。 しかし、キリスト教徒であることを自称していた二 人の新郎は、迫害が来ると財産を失うことを恐れて信仰を捨て、婚約者たちを説得できなかったため、 いつ愛したのかと密告してしまった。キリスト教徒として捕まった二人の女性は、ローマ総督ジュニウス・ドナトゥス(Junius Donatus)の前に連れて行かれ、A.D.257 年に自分たちの血を印章として殉教の印を押された。

ローマの司教ステファン(Stephen)もその年に斬首された。その頃、トゥールーズ(Toulouse)の敬虔な正統派司教サトゥルニヌス(Saturninus)は、偶像に捧げることを拒否したことにより、雄牛の尻尾に縛られた。迫害者たちは雄牛を神殿の階段の下に追いやったが、その獣は激怒して鼻息を荒くしながら走り去り、その立派な殉教者の脳が破裂してしまった。ステフェンの後を継いだローマの司教セクストゥス(Sextus)は、ローマ政府

の財務官マルシアヌス(Marcianus)が皇帝を唆し、ローマのすべての司教を殺すという命令を受けたことで、彼の 6 人の執事と共に 258 年に殉教した。

ローレンス(Lawrence)は聖餐(バプテスマと主の晩餐)を主管し、教会の資産分配を担当している働き者だった。暴君ヴァレリアンはローレンスが教会財産をどこに保管したかを追及したが、これは教会の聖徒の財産を強奪した後、迫害するためだった。ローレンスは 3 日間の余裕を与えれば、それを手に入れることができる場所を満天下に公開すると約束した。ローレンスはその間に多数の貧しい聖徒を集め、答弁の日が来ると、貧しい聖徒の上に両手を広げて次のように言った。"これらは教会の貴重な財産です。主がその中に住むと約束された彼らより、キリストにとって大切な宝石がどこにあるでしょうか？" これに対して、その暴君は沸き上がる怒りを抑えきれず、怒ったイノシシのように力二の泡を噛みながら叫んだ。「薪に火をつけろ！ 鞭で叩き、棒で股間を裂き、拳で叩き、棍棒で頭を打ち砕け。この逆臣が皇帝を侮辱するとは、火にあぶった箸で肉を抉れ。熱く熱した盆で肉をこすりつけろ。最も頑丈な鎖と火の熊手と鉄格子のベッドを取り出し、ベッドの上に火をつけ、逆賊の手足を縛り、ベッドが熱くなったところで奴をその上に乗せ、あちこちひっくり返して焼いてしまえ。ああ、拷問の執行者たちよ、下手なことをすれば、お前らもそのようになることを忘れるな」 この命令は即座にそのまま実行された。ローレンスは数多くの残酷な手技に惨めに弄ばれた後、熱く加熱された鉄のベッドに寝かされ、殉教した。

ウティカ(Utica)では、総督の命令で 300 人のキリスト教徒が燃える石灰窯に囲まれて立てられた。炭火の上でお香が焚かれている皿が準備されると、ジュピターに供物を捧げるか、窯の中に投げ込まれるかを選べと命令が下った。 彼らは一斉に供物を拒否し、勇敢にその窯の中に飛び込み、窒息死してしまった。

Fructuosus というスペインのタラゴン(Tarragon)の監督と彼の二人の執事 Augurius(Augurius)と Eulogius(Eulogius)はキリスト教徒であるという理由で火刑

に処された。マキシマ(Maxima)、ドナティラ(Donatilla)、セクンダ(Secunda)、つまりトゥブルガ(Tuburga)の 3 人の処女は、彼らに与えられた胆汁と酢を飲んだ後、ひどく鞭打たれ、梟示臺(梟示臺、罪人の首を切り落とし、高いところに吊るして多くの人々に警戒するよう見せしめをする絞首台)で拷問され、石灰でこすりつけられ、熱した鉄板で焼かれ、猛獣に噛まれ、最終的に首が切られた。

アウレリアン(Aurelian)統治下の第 9 次迫害、A.D. 274 年

この 9 回目の迫害の時、ローマ司教フェリクス(Felix)は、A.D.274 年、ローマ管区に派遣された後、不機嫌そうなアウレリア人による最初の殉教者となった。彼は同年 12 月 22 日に斬首された。また、自分の私有地を売って得たお金で貧しい人々を助けていた若い紳士アガペトゥス(Agapetus)は、キリスト教徒であることを理由に逮捕され、拷問を受けた後、ローマから 1 つ先のプラネテ (Praenete)市で斬首された。この統治期間に殉教した人々に関する記録は彼らに関するものがすべてであるが、これは皇帝がビザンチウム(Byzantium)で信者たちに殺害されたため、迫害が早期に中断されたためである。その後、タシトゥス(Tacitus)、プロバス(Probus)、カルス(Carus)、カルニオウス(Carnious)、ヌメリアン(Numerian)が王 を継ぎ、A.D.284 年にディオクレティアヌス(Diocletian)が皇帝の座に就いた。 彼は最初はキリスト教徒に大きな好意を示したかと思えば、286 年にマクシミアン(Maximian)と手を組んで大々的な迫害を起こす前から、いくつかのキリスト教徒を死に追いやり始めた。彼らの中にはフェリシアン(Felician)とプリムス(Primus)という二人の兄弟がいて、マーカス(Marcus)とマルセリアヌス(Marcellianus)は柱に縛られ、足に釘を刺されたまま昼夜を吊るされ、槍に体が刺されて殉教した。ゾーイ(Zoe)はこの殉教者たちを守っていた看守の妻だったが、彼らを通して改心し、足元に藁束が燃える木にぶら下がって殉教した。

A.D.286 年に非常に珍しい事件が発生した。たった 6,666 人のキリスト教徒の歩兵だけで構成されたテバン軍団(Theban Legion)が全員殉教したからだ。この軍団は全ての

兵士がテビアス(Thebias) で育ったのでテバン軍団と名付けられた。ローマ帝国の東側に置して宿営していた彼らは、ブルゴーニュ(Burgundy)の反乱軍に対して自分たちを助けるようにと皇帝マクシミアンの命令を受け、ゴール(Gaul、古代ケルト人の土地で現在の北イタリア、フランス、ベルギーなどを含む)に向かって進軍した。 彼らは立派な司令官であるマウリティウス(Mauritius)、キャンディドゥス(Candidus)、エクシュペルニス(Exupernis)の指揮の下、アルプス山脈を越えてゴール地方の皇帝軍と合流した。彼らが到着する頃、マクシミアンは全軍が参加する大々的な犠牲祭を命じ、テヴァン軍団も忠誠を誓い、ゴールからキリスト教信仰を根絶することに協力することを誓わなければならないと命じた。 これに対してテヴァン部隊は全員絶対拒否の意思を示し、犠牲祭を捧げることも、規定された宣誓をすることもしなかった。これにマクシミアンは 10 人に 1 人ずつ選んで殺すように命令したが、この血なまぐさい命令が遂行されたにもかかわらず、生き残った者たちがまだ微動だにしないので、そのうち 10 人に 1 人に相当する者たちが再び死に渡された。 しかし、2 回目の残酷な処遇にも効果がないため、 全軍団を全滅させる命令が下され、他の軍団隊員たちが彼らをナイフで切り刻むことによって、 6,666 人全員が 286 年 9 月 22 日の一日に殉教した。

他にもイギリスの最初の殉教者アルバン(Alban)とフランスのアキテーヌ(Acquitain)でキリストに仕えていた女性フェイト(Faith)、ゴールで殉教したクィンティン(Quintin)とルシアン(Lucian)がこの時期に殉教した主の聖なる聖人たちが

ディオクレティアヌス(Diocletian)統治下の第 10 回迫害、A.D.303 年①。

"殉教者の時代(the Era of the Martyrs)"と呼ばれるこの 10 回目の迫害は、ディオクレシアンの養子であるガレリウス(Galerius)の憎しみが一役買っていた。 彼は頑固な異教徒の母親の勧めを受け、皇帝を絶えず説得してキリスト教徒を迫害する目的を達成した。

西暦 303 年 2 月 23 日はテルミナリア(Terminalia)を記念する日だった。残酷な異教徒たちは、その日、キリスト教信仰を根こそぎ根絶やしにしようとし、迫害はニコメディア(Nicomedia)から始まった。 その日の朝、市当局者たちは将校と兵士を伴って教会に押し寄せ、ドアを押し倒して侵入し、聖書という聖書はすべて集めて燃やしてしまった。このすべての残虐行為の現場にはディオクシアンとガレリウスが一緒だったが、彼らはこれに満足せず、教会の建物を粉々に壊してしまった。

その後、他のすべての教会と聖書も壊し、焼却するように勅令が宣布され、キリスト教徒からすべての法的恩典と保護を剥奪する命令が下った。 その直後に殉教が続いた。 これは、ある勇敢な聖人がその布告文を壁から引きちぎって破り、皇帝の名前に罵倒を浴びせたからである。異教徒たちは彼を捕まえて惨めに拷問した後、生きたまま焼却し、すべてのキリスト教徒を捕まえて投獄した。

ただ「キリスト教徒」というその名前が異教徒をひどく嫌悪させたため、すべてのキリスト教徒が彼らの誹謗中傷の犠牲となった。多くの家屋が焼き払われ、主を信じる家族全員が炎の中で全滅したほか、他の人々は首に石をぶら下げられ、束縛されたまま海に投げ出された。迫害はローマ帝国のあちこちで 10 年間にわたって大々的に続いたので、殉教者の数と蛮行の方法をいちいち列挙することは、一言で言えば不可能である。

手足を引っ張る拷問台、鞭、鋭い刃、 剣、十字架、毒薬、そして飢餓がキリスト教徒を殺すために各地で使用され、無実のキリスト教徒を拷問するための器具が工夫に工夫を重ねた末に発明された。大虐殺を行い、自ら疲れてしまったいくつかの地方総督たちは、このような迫害が適切ではないという主張を皇居に上げるに至った。これにより死刑から一息つくことになったが、代わりに耳を切り落とされ、鼻を切り裂かれ、右目だけ切り取られ、関節が無残に脱臼して手足が使えなくなり、真っ赤に熱

くなった鉄の塊で目立つ身体部 が焼かれるなど、むしろ死ぬことしかできなくなった。

著名な殉教者セバスチャン(Sebastian)はゴールのナルボンヌ(Narbonne)で生まれ、ミラノ (Milan)でキリスト教教育を受けた後、ローマの親衛隊の将校になりました。彼は偶像崇拝が横行する中にも真のキリスト教徒としての信仰を守ったが、皇帝は異教徒になることを拒否する彼をキャンパス・マルティウス(Campus Martius)というローマ近郊の野原に連れて行き、矢で撃って殺すように命じた。死刑判決はそのまま執行された。しかし、遺体を埋葬しようとした聖人たちは、彼の息が止まっていることを知り、直ちに安全な場所に移し、極力看護した。セバスチャンは急速に回復し、これは二度目の殉教のための準備であった。 外に出る気力を取り戻すと、彼は異教の寺院に向かう皇帝の前に立ちはだかり、キリスト教徒に対する残酷な仕打ちと常識から外れた偏見を叱責した。死んだと思っていた彼が突然現れたことに驚き胸をなでおろした皇帝は、気を取り直した途端、彼を皇居の近くまで引きずって殴り殺すよう命じた。そして死体を公共の下水道に投げ込み、キリスト教徒が彼の体を回復させたり、埋葬したりすることを禁じた。 しかし、ルキナ(Lucina)という女性道士が彼の死体を下水道から引き上げ、地下の納骨堂であるカタコンベに安置した。

当時のキリスト教徒たちは慎重に熟考した結果、異教徒の皇帝の支配下でキリスト教徒を殺す 兵役に服することは神の法に反することだと結論を下し、これによりファビウス・ビクター(Fabius Victor)の息子マクシミリアン(Maximilian)が最初に斬首された。

ヴィトゥス(Vitus)はシチリア(Sicilia)島の名家出身で、幼い頃から主を信じて育った。父フラス (Hylas)は異教徒だったが、息子が乳母からキリスト教の教義を学んだことに気づき、再び異教信仰に戻すためにあらゆる努力をした。 しかし、努力が失敗し、結局、A.D.303 年 6 月 14 日、自分の息子を偶像に捧げてしまった。

ヴィクトル(Victor)はマルセイユ(Marseilles)の立派な家のクリスチャンであった。 彼は夜になると迫害者たちの目を避けて自分の財産を奪い、貧しい聖徒や病人を助けていた。 しかし、最終的にマクシミアの布告令により捕らえられ、彼を縛り、路上で引きずり回す命令が下った。 彼がまだ信仰を曲げないので、マクシミアンは彼を拷問台の上で四肢が引き裂かれる苦痛を経験させた。ヴィクトルは拷問中も両目を主のおられる天国に上げ、忍耐を与えてくださいと祈った。そして感嘆を呼ぶほど少しも動じることなく拷問に耐え抜いた。拷問していた刑執行人たちが疲れ果ててしまうと、彼は今度は地下監獄に移され、閉じ込められている間にアレクサンダー(Alexander)、フェリシアン (Felician)、ロンギヌス(Longinus)という名前の囚人たちを主のもとに導いた。 しかし、このことを聞いた皇帝はその囚人たちを斬首してしまった。ヴィクトルはその後、再び拷問台に置かれ、棒で無慈悲に殴打され、再収監された。信仰に関する 3 度の尋問にも最後まで原則を守ると、今度は小さな祭壇を持ち込み、彼にその上にお香を焚くように命じた。しかし、その要求に燃えるような怒りを隠せなかったヴィクトルは、数歩前に進み、祭壇と偶像を蹴り、一気に倒してしまった。それを見ていたマクシミアンは、祭壇を蹴ったその足を即刻切り落とすよう命じた。ヴィクトルは製粉機の間に投げ込まれ、石臼によって形がわからなくなるまで押しつぶされた。

タルソ(Tarsus)に勤務するキリシア(Cilicia)の総督マクシムス(Maximus)の前に、老人タラクス (Tarachus)と、プロバス(Probus)、アンドロニカス(Andronicus)、つまり 3 人のキリスト教徒が連れてこられた。拷問を受けても信仰を否定しなかったため、ついに死刑にする命令が下った。円形競技場に引きずり込まれた彼らに五、六匹の猛獣が入れられたが、獣たちは飢えながらも毛一本触れようとしなかった。監視していた飼育員が、その日 3 人を殺した大きなクマを一匹連れてきたが、肉なら四肢が不自由なこの生き物も彼らに手を出すのを嫌がった。獣で殺そうとした計画が失敗

に終わると、マクシムスは彼らを剣で斬り殺すよう命じ、彼らはそうして殉教した。この出来事は A.D.303 年

10 月 11 日に起こったことである。

ディオクレティアヌス(Diocletian)統治下の第 10 回迫害、A.D.303 年 ②.

パレスチナ(Palestine)のロマヌス(Romanus)は迫害が始まった頃、カエサルリア(Caesarea)教会の執事であった。 彼は彼の信仰のためにアンティオキアで死刑を宣告され、鞭打たれ、四肢が引き裂かれ、鉤縄で胴体が引き裂かれ、鋭いナイフで肉が切り取られ、顔が殴られ、殴られた歯が抜け落ち、髪の毛が根こそぎ引き抜かれた。その後直ちに命令が下り、西暦 303 年 11 月 17 日、首を絞め殺された。

ローマの監督カイウス(Caius)の嫡女スザンナ(Susanna)は、皇帝の近親者と結婚するよう皇帝の圧力を受けたが、目の前の栄誉を拒否し、首を切る道を選んだ。皇室の執事ドロテウス(Dorotheus) は、罪人たちを主のもとに導こうと努力を惜しまなかった。ゴルゴニウス(Gorgonius)と宮廷の他のキリスト教徒も加わり、福音を伝えたが、彼らは捕らえられ、拷問を受けて絞殺された。皇帝の宦官ペテロ(Peter)は鉄板の上に寝かせられ、息が絶えるまで弱火でゆっくりと焼かれた。

魔法使いとして知られるシプリアン(Cyprian)はアンティオキア生まれで、ジャスティナ(Justina) というアンティオキアの若い女性と知り合った。それを知ったある異教徒の紳士がジャスティナに求婚しようとシプリアンに手を貸してほしいと依頼した。 しばらくしてシプリアンは主を信じるようになり、シプリアンの回心は異教徒の紳士にも影響を与え、彼も信じるようになった。シプリアンとジャスティナはキリスト教徒であることを理由に逮捕され、二人とも拷問に苦しめられた後、首を切られた。

ユーラリア(Eulalia)は、堅実な明哲が際立つスペインの処女だった。彼女はキリスト教徒という 罪で捕らえられ、異教徒の神々を激しく嘲笑し、指をさした。 そのため、

脇腹が鉤縄で切り裂かれ、開いた目で見ることができないように胸が燃やされた。 そして A.D.303 年 12 月、猛烈な炎に飲み込まれて息を引き取った。

迫害がスペインにまで及んだ 304 年、テラゴナ(Terragona)の総督ダシアン(Dacian)は、司教ヴァレリウス(Valerius)と執事ヴィンセント(Vincent)を捕らえ、肩の枷を外して刑務所に入れるよう命じた。しかし、彼らの信仰をどうすることもできず、ヴァレリウスは追放し、ヴィンセントは拷問台の上で四肢を引き裂き、脱臼させ、鉤爪で肉を引き剥がした。 彼をグリルの上に寝かせて焼いたと

き、グリルの上面の釘が彼の胴体を直通に突き刺さった。 これに対して、彼は微動だにしなかった。

死ぬどころか信仰も少しも変わらなかった。 彼は再び投獄され、窮屈で悪臭が漂い、あちこちに鋭

い燧石とガラスの破片が敷き詰められた地下監獄に閉じ込められることになった。304 年 1 月 22 日、彼はそこで生涯を終え、遺体は川に投げ込まれた。

アグラペ(Agrape)、チオニア(Chionia)、アイリーン(Irene)の三姉妹は、迫害がギリシャに及んだ

とき、テッサロニカ(Thessalonica)で逮捕されました。西暦 304 年 3 月 25 日、彼らは火刑に処され、

炎の中で殉教の冠をかぶった。敬虔な知性を所有したアガト(Agatho)はカシケ(Cassice)、フィリッパ (Phillippa)、ユティキア(Eutychia)と一緒に同じ時期に殉教した。マルセリヌス(Marcellinus)はカイウス(Caius)に続いてローマの司教になったが、ディオクレシアンを神として敬意を表することに強く反対したという理由で拷問を受け、324 年に殉教した。

ヴィクトリウス(Victorius)、カルポフォルス(Carpophorus)、セベリウス(Severus)、セベリアヌス(Severianus)は親兄弟だった。 彼らは偶像崇拝に大声で反対したという理由で逮捕され、鉛の塊がついた鞭を打たれた。刑罰はひどく残酷に執行されたため、兄弟は残酷さに耐えられず息を引き取った。モーリタニア(Mauritania)の執事ティモテ(Timothy)と彼の妻マウラ(Maura)は、迫害のために離れ離れになっていたため、3 週間以上新婚生活を送ることができなかった。 彼らは捕らえられたときに初めてお互いを間近で見ることができ、A.D.304 年に十字架に処刑された。

アッシジウム(Assisium)の監督サビヌス(Sabinus)は、ジュピターへの供物を拒否し、その偶像を押しのけたとして、総督トスカーナ(Tuscany)の命令で手を切り落とされた。 彼は監獄に閉じ込められながら、総督と彼の家族を主に導き、彼ら全員が信仰を守って殉教した。 彼らの処刑の直後、サビヌス自身も鞭打ちに耐えられずに死を えた。A.D.304 年 12 月のことだった。

ディオクレシアヌスが皇帝の座から退 すると、コンスタンティウス(Constantius)とガレリウス (Galerius)が権力を握った。これにより、帝国は帝国東側のガレリウスと帝国西側のコンスタンティウスが双璧を成す二つの政府に分かれた。ガレリウスの命令で殉教した聖人たちの中で最も革命的なものは次の通りである。

ジュリッタ(Julitta)はルカオ(Lycao)人で、王族の子孫だった。拷問台に横たわっている間、彼女の子供たちは母親の目の前で殺された。処刑が終わると、彼女の両足に沸騰したビチューメンが注がれ、脇腹が鉤縄で引き裂かれた。彼女は最終的に喉を切られることで殉教の苦しみを終えた。西暦

305 年 4 月 16 日のことだった。

パンテレオン(Panteleon)家と親交があったヘルモラウス(Hermolaus)は、一緒に信仰を守ったパンテレオンと同じ日に同じ方法で殉教した。アルミナ(Armina)の総督の書

記官エウストラティウス (Eustratius)は捕らえられた数人のキリスト教徒に信仰の中で忍耐するようにと勇気を与えた後、燃える炉に投げ込まれた。ローマ帝国軍の高級将校ニカンデール(Nicander)とマルシアン(Marcian)は斬首された。

ナポリ(Naples)王国で十数回の殉教があった。特にベネベントゥム(Beneventum)の司教ジャヌアリーズ(Januaries)、ミセン(Misene)の執事ソシウス(Sosius)、もう一つの執事プロクルス(Proculus) とフェストゥス(Festus)、そしてエウティチェス(Eutyches)とアクティウス(Acutius)という二人の聖人と祈祷書の朗読者デシデリウス(Desiderius)は、キリスト教徒であるという理由で猛獣に投げつけられたが、猛獣たちが手を出そうとしなかったため、首を切られて殺された。

シスキアの司教(bishop of Siscia)キリヌス(Quirinus)は総督マテニウス(Matenius)の前に引きずり出され、異邦の神々に供物を捧げるという命令を拒否し、首に石をぶら下げられ、川に投げ込まれた。刑が執行される間、キュリヌスは水の上に浮かんでいた。彼は見物人に主を信じるように強

く勧めた後、次のような祈りで訓戒を締めくくった。"全能の主イエスよ、主が水の流れを止めたり、人に水の上を歩かせるのは、昨日今日のことではありません。 主は主のしもべペテロにそのようなことをされ、ここに集まった人々も私の中で主の力を見ました。主よ、私の神よ、今、主のためにこの命を捨てることを許してください。"最後の言葉を言い終わると、彼は石と一緒に水中に沈んでしまった。西暦 308 年 6 月 4 日のことだった。

ローマの司教マルセル(Marcellus)は彼の信仰のために追放され、流刑生活時の数々の苦しみで A.D.310 年 1 月 16 日に殉教した。第 16 代アレクサンドリアの監督ペテロ(Peter)は、東ローマ帝国マクシムス・シーザー(Maximus Caesar)の命令で A.D.311 年 11 月 25 日に殉教した。まだ十六歳の処女アグネス(Agnes)はキリスト教徒であるという理由で首を切られ、ディオクレシアンの皇后セレーネ

(Serene)も同様に処刑された。監督エラスムス(Erasmus)はカンパニア(Campania)で殉教した。

第 3 章 - ペルシャの聖人たちに加えられた迫害たち

太陽崇拝者である異教徒の僧侶たちは、福音がペルシャに伝わると、自分たちの影響力を失うことを恐れた。彼らはキリスト教徒がペルシャ帝国の敵であるという戦略的な不満を皇帝に打ち明け、ペルシャの鉄壁の支援者であるローマ人とも陰謀を企てる書簡を交わした。

もともとキリスト教に反感を持っていた皇帝サポレス(Sapores)は、キリスト教徒に対する暴言をそのまま受け入れ、帝国全体に迫害を行うよう命じた。この勅令で教会と帝国内の多数の著名なキリスト教徒が異教徒の無知と凶暴な手によって惨めに殉教した。

ペルシャの迫害のニュースを聞いたコンスタンティヌス大帝は、ペルシャの君主に迫害をやめれば大きな幸運が訪れるという長文の手紙を出し、おかげで迫害は当分の間尾を引いた。 しかし、数年後、別の王がペルシャの権座に就くと、迫害は再び頭を上げ始めた。

アリウス(Arius)異端者たちが犯した迫害たち

アリアン異端教理はリビア(Libya)生まれのアレクサンドリア(Alexandria)修道士アリウス(Arius)が初めて主張し、A.D.318 年に彼の誤りを本にまとめ始めました。 彼はリビアとエジプトの司教たちの公会議で有罪判決を受け、その判決は A.D.325 年のニケア公会議で確定されました。コンスタンティヌス大帝が死去すると、アリア主義者たちは彼の息子で東ローマ帝国継承者であるコンスタンティヌス(Constantinus)의 환심을買う口実を見つけ、こうして正統派司教と聖職者に対する迫害が大々的に行われるようになった。その結果、アタナシウス(Athanasius)と他の司教たちが追放され、彼らの教区はアリウス派の異端者たちで溢れかえった。

エジプトとリビアで 30 人の司教が殉教し、他の多くの聖人たちも残酷に拷問されました。A.D.386 年には、アレクサンドリアのアリウスパの監督ゲオルゲ(George)が皇帝の権限を背負い、その都市と周辺付近で迫害の火を引き、非常に悪質で残酷に聖人たちを殺していった。迫害がどれほど残酷な猛威を振るったのか、偶像崇拝者たちの蛮行に劣らず、歯がゆい思いをしたアリウス派の異端者たちの迫害により、教会の聖職者たちはアレクサンドリアから追い出され、彼らの教会が閉鎖されるほどだった。

皇帝ジュリアン(Julian)が犯した迫害

この皇帝はジュリアス・コンスタンティウス(Julius Constantius)の息子でコンスタンティヌス大帝の甥で、コンスタンティウスが A.D.316 年に亡くなるとその座を継いだ。彼は皇帝の威厳を手に入れるやいなや、偶像崇拝を回復させ、追放された異教徒をすべて呼び寄せ、各宗派ごとに自由な宗教儀式を行うことを許可した。キリスト教徒からは宮廷や行政職、軍隊でのすべての職 を剥奪し、コンスタンティヌス大帝が聖職者に与えた特権をすべて奪った。

司教バジル(Basil)は、アリウス派に対抗したことをきっかけに初めて世に知られるようになった。彼はアリウス派と異教の信仰を一緒に非難したという理由で、コンスタンティノープルのアリウス派司教の復讐を招いた。皇帝の手先たちは、約束で説得し、脅し、拷問台で手足を引き裂き、彼の心を変えようとあらゆる手口を尽くしたが、結局何も得られなかった。彼が揺るぎない信念を貫き、他の拷問に苦しんでいる時、偶然アンキラ(Ancyra)に立ち寄ったジュリアンは、自分が直接バシルを尋問してみることにした。 しかし、あらゆる手段を講じて尋問してもバシルの信念は揺るがず、むしろ皇帝が死んだら異世界で苦しみを受けるという唐突な予言まで吐き出した。それを聞いて怒りが頂点に達したジュリアンは、バシルの肉皮と筋肉が完全に砕け散るまで、体の七つの部 を毎日 置

を変えながら引き裂くよう指示した。人として到底あり得ないこの刑は厳格に執行され、その残酷さに耐え切れなかった殉教者は西暦 362 年 6 月 28 日に息を引き取った。

アレッツォの司教ドナトゥス(Donatus)とローマ執政官ゴルディアン(Gordian)も同じ時期に殉教した。エジプト駐留ローマ軍の総司令官だったアルテミウス(Artemius)は罷免された後、財産を奪われ、その後彼の首まで差し出すことになった。

西暦 363 年末、迫害は想像を絶するほど猛威を振るった。しかし、その全貌が私たちにそのまま伝わっているわけではないので、必要に応じて、パレスチナで多くの人々が生きたまま火刑に処され、他の人々は足が縛られ、裸の体で息が止まるまで路上で引きずり回され、また、ある人々は沸騰したお湯で焼かれて死に、多くの人々が石に打たれ、非常に多くの人々が棍棒で頭が折れ、脳が破裂したというような概略的な言及だけで満足しなければならないだろう。

アレクサンドリアでは数え切れないほど多くの人々が斬られ、焼かれ、十字架につけられ、石に打ち付けられ、殉教しました。アレトゥーサ(Arethusa)では、何人かの人々の腹の皮を裂いて広げ、彼らの腹部にトウモロコシの粒を詰め込んだ後、豚を引き連れてきてその中を食べさせ、穀物だけでなく、殉教者の腸まで貪欲に食べ尽くさせ、トラキア(Thrace)ではエミリアヌス(Emilianus)が火刑台で焼かれ、ドミティウス(Domitius)が避難していた洞窟の中で殺害された。

皇帝ジュリアンは西暦 363 年にペルシャ遠征で負った傷で亡くなったが、最後の息を呑む瞬間まで、聞く人を苛立たせるような罵声を浴びせたという。 ジュリアンに続いてジョビアン(Jovian)が権力を握ると、教会に平和を取り戻した。ジョビアンの死後、ヴァレンティニアン(Valentinian)が皇帝の座に就き、東ローマ帝国の統帥権者であるヴァレンス(Valens)と手を組んだが、ヴァレンスはアリウス主義者であり、無慈悲な迫害を楽しんだ人物と伝えられている。

第４章 - ローマ教会による迫害

これまで私たちは、キリスト教徒 に対する迫害の歴史が一次的に異邦の世界によって行われてきたことを見てきた。 しかし、今、私たちはキリスト教の名目をつけて異邦のローマが行った迫害よりもさらに極悪な迫害を行った時代を見ることになる。福音の精神と教えを無視して、ローマ教会は数世紀の間、武力を 앞 워神の教会を苦しめることに全力を注ぎ、歴史ではこの期間を最も相応しい用語で「暗黒時代」と呼ぶ。世の王たちは自分たちの権力をその"獣"に渡し、ローマ教会の聖職者でいっぱいのその邪悪な狂人に完全に服従した。

1.フランスでのワルデン派の迫害

忌まわしいローマ・カトリックが前代未聞の様々な教義を教会内に持ち込み、キリスト教界に暗闇と迷信を広めると、この虚偽で破滅的な傾向を事前に察知した何人かの人々は、従順な福音の光を照らすことを決意し、狡猾な司祭たちが人々を盲目にし、福音の真の光を曇らせるために起こしたこのすべての雲を一掃することを決意した。

これらの中で代表的な人物が A.D.1000 年頃に生きたベレンガリウス(Berengarius)であり、彼は彼らの初期の純粋さに従って非常に勇敢に福音の真理を伝えた。当時、信仰の信念から彼の教義に賛成した多くの人々はベレンガリウス派(Berengarians)と呼ばれた。

ベレンガリウスに続いてピーター・ブルイス(Peter Bruis)が登場し、彼はヘルデフォンス (Hildephonsus)伯爵の保護下にトゥルース(Toulose)で福音を伝えた。また、彼は改革派の信念とローマ・カトリックから分離した理由を記録し、「反キリスト(Antichrist)」(Antichrist)というタイトルで本を出版したりもした。

1140 年頃の改革派の数は非常に驚くべきものであり、彼らがさらに増加する公算が大きくなると、当時の教皇たちは大きく不安になり、彼らをローマ教会から追放するために学識の高い人々を雇った。

1147 年には、当時最も優れた福音伝道者とされるトルスのヘンリー(Henry)のために、彼に従う人々はヘネヴィシアンズ(Henevicians)と呼ばれた。彼らは信仰に関するいかなる証明にも同意せず、ただ聖書自身で推論するものを信じたので、ローマ・カトリック側では彼らを使徒の後継者と呼んだ。結局、リヨン(Lyons)出身で、信仰心と学問において優れていたピーター・ワルド(Peter Waldo)は強力なローマ・カトリックの反対者となり、それによって当時の改革派はワルデン派 (Waldenses)またはワルドイス(Waldoys)という名称を得ることになった。リヨンの司教たちからこのような分離運動について情報を得た教皇アレクサンダー3 世は、ワルドとその信奉者たちを追放し、可能であれば地球上から彼らを消し去るよう司教に命じた。ここからワルデン派に対するローマ・カトリックの迫害が始まったのである。ワルドと改革派に対する異端審問が尋問官によって初めて始まり、教皇イノセント 3 世は尋問官を任命して彼らを尋問し、世界の裁判所に彼らを引き渡した。まるでその告訴事件が犯罪行為に該当するのが当然であるかのように、その裁判は迅速に行われ、彼らには公正な審理が許されなかった。

この残酷な方法が意図通りに効果を発揮しなかったので、教皇は学識のある修道士をワルデン派の人々に送って説教させることによって、改革派の見解を反駁させた。これらの中の一人としてドミニク(Dominic)という修道士がいたが、彼はローマ・カトリックが追求する目的に極めて熱心な人として、彼は修道士で構成された尋問官機関を創設し、この世のどこにもない強力なものとして、彼らは無소불위의権力を享受した。彼らは自分たちが望みさえすれば、その人の年齢が何歳であろうと、女であろうと男であろうと、階級が高かろうが低かろうが関係なく裁判に付託した。被告人は力が弱かったので、その告発は正当なものとされ、さらには無名で投書された情報も有効な証拠として採用されることがあった。

金持ちになることも異端の宗派と同じ犯罪として扱われたため、お金が多かった多くの人々が異端者として訴えられたり、異端教義の信奉者として追い詰められ、彼らは自分たちの見解に対する代償をしっかりと払わなければならなかった。 また、投獄された人々を支える近親者や友人たちも危険を冒さなければならなかった。投獄された人に少しの麦わらや一杯の水を渡しても、彼らは異端の教義を好む人々とみなされ、すぐに迫害を受けた。自分の血肉のために弁護できる弁護士もなく、ローマ教会の敵意は墓の向こうまで拡大し、死んで埋葬された人の骨を掘り起こして燃やし、生きている人々にその様子を見させた。

死んだ人もワルドの信者として訴えられれば、彼のすべての財産が没収され、財産の相続人を騙してそのうちの何人かを「聖地」(Holy Land)に送り、その家と財産をドミニコ会修道士が奪い、主人が戻ると彼らを知らないふりをすることがあった。このような迫害が何世紀にもわたって様々な教皇とカトリック教会の高 聖職者によって行われてきた。

2. アルビゲン派(Albigenses)に対する迫害

アルビゲン派の人々は、アルビ(Albi)という地域に居住し、改革信仰を持っていた人々を指す。

彼らはラテラン公会議(Council of Lateran)で教皇アレクサンダー3 世の命令によって宗教的な理由で非難された。それにもかかわらず、彼らは非凡な速度で増加し、多くの都市が彼らの信仰を持つ人々だけで構成され、いくつかの有名な貴族も彼らの教義を受け入れた。レイモンド、トルソの伯爵、フォイクス伯爵、ベジエルの伯爵などがこれに属する人々である。

ピーターという修道士はトルソ伯爵が支配する地域で継続的な殺人を犯し、教皇はその貴族と彼が支配する地域の人々を迫害するためにその殺人者を利用した。この仕事を効果的に遂行するために、教皇は全ヨーロッパ地域に人々を送り、アルビゲン派の人々を圧

制するための軍隊を起こすように従わせ、彼らが聖なる戦争(Holy War)と呼んだこの戦争に参加する人々には快適な生活を約束して 40 日間軍隊を招集した。この戦争に参加する人々に対するこのような寛大さが、十字軍の聖地奪還の目的を遂行させた。

トルソー伯爵を公に屈服させることが不可能になると、フランス王と王妃の母、そして 3 人の大司教は、別の強力な軍隊を起こし、その伯爵を巧妙に説得して会議に出席させた後、彼を逮捕して投獄し、彼の敵の前に裸足で頭に何もつけずに現れさせ、強制的に屈辱的な自分の信念を撤回させた。その後、アルビゲン派に対する大々的な迫害が続き、この時、平信徒は聖書を読むことを許さない命令が公布された。

1620 年のアルビゲン派に対する迫害は極めて厳しいものだった。1648 年にはリトアニアとポーランドを経て、恐ろしい迫害が猛威を振るった。コサッカ(Cossacka)の野蛮さは度を越え、タルタス(Tartas)でさえ彼らの野蛮さを恥じた。

迫害の苦しみを受けた多くの人々の中にアドリアン・チャリンスキー牧師(Rev. Adrian

Chalinski)がいる。彼は生きたまま弱い火で長時間焼かれ、彼の苦しみと殺された方法は、当時クリスチャンであることを告白した人々が私たちの贖い主である主の敵から耐えなければならなかったその恐怖をよく説明してくれるものだった。

ローマ・カトリックの誤りを改革するための計画が非常に早い段階でフランスで立てられた。3 世紀に学識の高かったアルメリクス(Almericus)と 6 人の彼の弟子たちは、次のような主張を展開するために迫害されることを命じた。 すなわち、神は聖餐式の時に裂くパンに存在しているというのは嘘であり、財団を築くことは偶像崇拝であり、聖人を神聖視することと彼らに分香することは狂気であるということだった。アルメリクスと彼の弟子たちは殉教しなかったが、彼らの意図の正当性が認められ、多くの誤謬が盛行するのを防ぎ、彼らの改革信仰の純粋性によってキ

リストに対する信仰が持続的に増加し、この時、フランスだけでなく世界各国に福音の火が広がるきっかけとなった。

1524 年フランスのメルデン(Melden)では、ジョン・クラーク(John Clark)という人が教会の門に部屋を貼り、教皇は反キリストだと言った。この事により、彼は直ちに逮捕され、鞭で打たれ、額に烙印を押されることになった。

その後、ロレーヌ(Lorraine)のメンツ(Mentz)に行った彼は、彫像を破壊したという理由で右手と鼻を切断され、獣にバラバラにされる受難を受けた。彼はこのような野蛮な迫害にもかかわらず、驚くべき忍耐力で耐え、詩篇 115 篇を歌いました。その後、彼は火の中に投げ込まれ、一握りの灰となった。

この当時、引き裂かれ、殴られ、鞭打たれ、焼き殺された多くの改革信仰の持ち主がおり、特にフランスの様々な地域、特にパリ、マルダ(Malda)、そしてリモシン(Limosin)などに多くいた。

西暦 1546 年、ピーター・チャポ(Peter Chapot)がフランスに大量の聖書を持ち込み、公然と販売した。これにより彼は裁判にかけられ、刑を宣告され、数日後に刑が執行された。しばらくして、マックス(Meaux)のある障害者としてペラ(Pera)の学校教師であるステファン・ポリオ(Stephen Poliot)とジョン・イングリッシュ(John English)が彼らの信仰を守って火に酸化された。

(1) 教皇が犯した迫害の数々

福音の原理と精神はお構いなしに、ローマ・カトリック教徒は手刀を持ち、神の教会を苦しめ、それを何世紀にもわたって荒廃させ、私たちはそれを"暗黒時代"(dark ages)と呼んでいます。教皇によって吹き荒れた迫害の嵐は、フランスのワルデンヌ(Waldenses)に初めて吹き荒れた。

フランスのワルデンヌへの迫害

ローマ・カトリックが教会の中に雑多な革新案を持って入ってきたことを見抜いたいくつかの聖人たちは、真の純度を保った福音の光を照らすことを決意した。 その中心にブランガリウス (Berengarius)という人物がいたが、A.D.1000 年を前後して彼の純粋な福音の真理の説教に確信を得た多数の人々が彼の教義に同意を表明し、彼らはブランガリアン(Berengarians)と呼ばれた。

ブランガリューに続き、ピーター・ブルーイ(Peter Bruis)がイルデフォンス(Hildephonsus)伯爵の保護下にトゥールーズ(Toulouse)で言葉を説いた。ローマ・カトリックから離れたブルーイは、改革者たちのすべての教義を一冊の本にまとめ、〈反キリスト・Antichrist〉という名前で出版した。

A.D.1140 年頃、信仰を刷新した人々の数が驚くほど増え、驚いた教皇は遅ればせながら手を打たざるを得なかった。いくつかの領主に領土から改革者を追放するよう手紙を出したり、多くの学者を雇って彼らの教義に反論する文章を書かせた。A.D.1147 年、改革者たちは彼らの最も優れた説教者であったトゥルスのアンリ(Henry)によって「ヘネリシャン(Henericians ・アンリ派)」と呼ばれ、信仰に関するいかなる論証も聖書自体に基づくものでなければ決して容認しないとして、カトリック教徒たちによって「アポストロリクス(apostolics ・使徒たち)」と呼ばれた。その後、リヨン(Lyons)生まれの敬虔さと学識で有名なピーター・ワルド(Peter Waldo or Valdo)がローマ・カトリック制度に対する極端な反対者として姿を現し、改革者たちはワルデンス(Waldenses)またはワルドイ

ズ(Waldoys) と呼ばれるようになった。リヨンの司教からこれを聞いた教皇アレクサンダー3 世は、ヴァルドとその信奉者たちを破門し、その司教に彼らを一掃するよう指示した。

ワルドと改革者たちにかかった訴訟事件は、尋問者(inquisitors)という存在を初めて浮き彫りにした。尋問者は、教皇イノセント 3 世(Innocent III)が改革者たちを見つけ出し、世間の権力に引き渡すことができる尋問者としての権限を与えた特定の修道士たちだった。訴訟手続きは簡単だった。告訴一つで罪をかぶせるのに十分であり、被告は公正な裁判を夢にも思わなかった。しかし、この残

酷な策略が意図した結果を引き出せなかったため、いくつかの学識のある修道士をワルデンスに送り、彼らの中で説教して彼らの心を変えるようにした。この修道士たちの中には、ドミニク修道士団という騎士団を組織したドミニク(Dominic)がいた。修道士団員たちはその後、様々な異端審問で首長級の尋問官となった。

尋問官の権威は天下一品で、彼らは年齢や性別、地 に関係なく、意のままに誰にでも訴訟を起こした。どんなに不謹慎な訴えでも合法とされ、匿名の手紙で流れた情報さえも十分な証拠とみなされた。財産が多いということは異端に匹敵する犯罪だったので、裕福な人々は異端や異端擁護者として数多く訴えられた。また、最も親しい友人や家族であっても、危険を冒さずに信仰のために閉じ込められた人々を誰も世話することはできなかった。監禁された人々に小さなわら一つでも渡したり、水一杯でも持ってきた日には、異端者たちと一蓮托生して迫害を受けた。弁護士でも自分の親兄弟のために弁護することができなかった。

彼らの悪意が及ぶところは墓場も例外ではなかった。 多くの人の骨を墓から掘り出して焼却することで、誰でも気が向いたらこうなるという見本を見せた。臨終を目前にした人がワルドの信者として訴えられれば財産が没収され、遺産を相続した者がいればそれを騙し奪った。 例えば、ある者はパレスチナの聖地(Holy Land)に送られ

、彼らがいない間にドミニコ修道士たちが家や財産を強奪したが、所有者が旅行から戻ると、全く知らないことだと言い訳した。 このような迫害はローマ・カトリックの様々な教皇や高 聖職者によって何世紀にもわたって行われた。

アルビゲンス(Albigenses)に対する迫害

アルビゲンスはアルビ(Albi)という地方に住んでいた改革派信者たちだった。教皇アレクサンダー3 世の命令でラテラン(Lateran)公会議で有罪判決を受けたが、彼らは驚くべきスピードで増えて

いった。トゥールーズ伯(earl of Toulouse)のレイモンド(Raymond)や、同名のフォア伯(earl of Foix)、ベジエ伯(earl of Beziers)のような著名な貴族も彼らの教義を受け入れた。

ピーター(Peter)という名前のタクバル修道士がトゥルス伯爵領内で殺害されると、教皇はこれを口実にその貴族とその領民を迫害した。アルビゲンスを鎮圧する軍隊を起こそうとヨーロッパ全域に特使を派遣し、聖戦(Holy War)と名付けたこの戦争に参加して 40 日間奉仕するすべての人に天国を約束し、十字軍戦争に参加した人たちにしたのと同じ免罪符を与えた。しかし、トゥルス伯爵は教

皇の使者とカトリック貴族のモンフォール伯爵(earl of Montfort)に対してトゥルスと他の地域を守り、何度も勝利を収めた。どうしてもトゥルース伯爵を公に屈服させることができなくなると、今度はフランス国王と王妃と三人の大司教がまたもや加工すべき兵力を起こした。 彼らはトゥルース伯爵に交渉することがあるから出てきてくれないかと策略を立て、彼らを鉄のように信じて現れた彼を捕らえた。 彼は敵の目の前で裸足と裸頭で強制的に立たされ、信仰を捨てるという屈辱的な署名を強要された。この後、アルビゲンスたちに厳しい迫害が加えられ、平信徒が聖なる聖書を読むことを禁止させるという特命が下った。

アルビゲンスに対する迫害が非常にひどかったのは 1620 年にも同じだった。1648 年にはリトアニア(Lithuania)とポーランド(Poland)全域にわたって猛烈な迫害が行われたが、コサック人 [Cossacks：ロシア南部の辺境地方に住む混血の農耕民族で、馬によく乗り、帝政時代には軽騎兵として有名だった]がどれほど極悪非道な残虐行為をしていたか、タタール人[Tartars：中世にアジア西部とヨーロッパ東部を侵略したモンゴル族やトルコ族の遊牧民族]自身も彼らの野蛮さを恥じるほどだった。殉教者の中にはアドリアン・チャリンスキー(Adrian Chalinski)という牧師がいたが、彼はゆったりとした火で生きたまま焼かれた。

1524　年、フランスの小都市メルダン(Melden)のジョン・クラーク(John Clark)は、教皇を反キリストと書いたチラシを教会のドアに貼ったことで鞭打たれ、額に烙印を押された。彼はこれに屈せず、その後もロレーヌ(Lorraine)のメンツ(Mentz)に行っていくつかの像を破壊したが、このために右手と鼻が切られ、両腕と胸がペンチで引き裂かれた。彼はこのような残酷な行為に耐え忍び、偶像崇拝を禁じる「詩篇 115 篇」を歌うほど冷静であった。 その後、彼は火の中に投げ込まれ、一握りの灰になった。

マルダ(Malda)生まれのある人は、ミサがキリストの苦難と死を明らかに否定するものだと言ったという理由で、徐々に燃え上がる火に焼かれた。リモシン(Limosin)では、改革派の牧師ジョン・ド・カドゥルコ(John de Cadurco)が火刑に処された。ペレイ枢機卿(cardinal of Pellay)の書記官フランシス・ブリバード(Francis Bribard)は、改革者たちの味方をしたという理由で舌を切り落とされ、 A.D. 1545 年に焼かれた。ジェームズ・コバード(James Cobard)、すなわち聖ミカエル(St. Michael)市の学校長は「ミサは何の役にも立たず、理にかなっていない」と発言し、西暦 1545 年に火刑に処せられた。同じ時期、マルダでは 14 人の男性が焼かれ、妻たちは夫の処刑を横目で見守ることを余儀なくされた。

A.D.1546 年、ピーター・シャポ(Peter Chapot)はフランス語の聖書をフランスに持ち込み販売していたため、死刑を宣告され処刑された。Meaux に住むある肢体不自由者とスティーブン・ポリオ (Stephen Poliot)と呼ばれるフェラ(Fera)の学校長ジョン・アンリッシュ(John English)が信仰のために火刑に処された。宝石商のブロンデル(Blondel)は西暦 1548 年にリヨンで逮捕され、パリに送られ、西暦 1549 年に法廷の判決により信仰のために火刑に処せられた。19 歳の青年ヘルベルト(Herbert) はディジョン(Dijon)で火刑に処され、フローラン・ヴェノート(Florent Venote)も同じ年に火刑に処された。

西暦 1554 年、改革信仰の二人の男が、そのうちの一人の息子、娘と共に逮捕され、ニーベルン (Niverne)城に監禁され、調査を受ける際に信仰を隠さずに告白したため、死刑が宣告された。彼らは体に油と硫黄と火薬が塗られるとき、次のように叫んだ。「むしろ塩を塗ってほしい。この罪悪に満ちた腐敗した肉に塩を塗れというのだ！」 すると彼らの舌が切られ、彼らは燃えるような炎に引き渡された。炎は彼らの体に塗られた可燃性物質のために、彼らを一瞬にして灰に変えてしまった。

(2) パリで起きた聖バドロマエの大虐殺事件

血塗られたこの悪魔的な残虐行為は、プロテスタントの根を一挙に摘み取ろうという意図で 1572 年 8 月 22 日に始まった。フランス国王は、妹とプロテスタント[16～17 世紀フランスのユグノー教徒(Huguenots)]の首長であり収奪者であるナヴァルの君主コリニー(Coligny, the prince of Navarre)との間の結婚を狡猾に提案した。この慎重でない結婚は、8 月 18 日にパリでブルボン (Bourbon)の枢機卿の司式で公に行われた。彼らは教皇が同席した席で盛大な晩餐を聞き、パリでは国王と夕食を共にした。このことがあってから四日目の日、君主は議会から帰る途中で両腕に銃創を負った。 彼は逃げるという忠告を拒否してパリに留まり、しばらくしてアーク(Bemjus)に殺害された。

司令官コリーニが死んだ後、ある指令が下った。 それは、信号が出たら市全域で即座に虐殺を行うというものだった。司令官を殺した彼らは、彼を窓の外の路上に投げ出し、そこで彼の首を切り落とし、教皇に送った。これに満足できなかったその凶悪なローマカトリック教徒は、彼の両腕と膣を切り落とし、その死体を 3 日間、路上あちこちに引きずり回し、足首をロープで縛って市外閣に逆さまに吊るした。他にも彼らは偉大で立派な多くのプロテスタント、すなわちロシュフコー伯爵

(Count Rochfoucault)、殺された司令官の義理の息子であるテリニウス(Telinius)、アントニウス(Antonius)、ラヴェリー(Ravely)の侯爵であるクラリモントゥス(Clarimontus)、ルイ・ブッシュ(Lewes Bussius)、バンディーヌ(Bandineus)、プルヴィアリウス(Pluvialius)、ブルネユ(Burneius)などを殺害した。彼らは一般プロテスタントにも襲いかかり、最初の 3 日間ですべての階層と身分を網羅して 10,000 人に達する聖人たちを殺害した。死体が川の中に投げ込まれ、血が激しい水の流れのように通りを流れ、川はすぐに血の海になったようだった。 そしてパリで始まったこの大虐殺はフランスの隅々まで広がっていった。

オルレアン(Orleans)では 1,000 人、ルーアン(Rouen)では 6,000 人が殺害された。メルディット(Meldith)では 2,000 人、リヨンでは 800 人が虐殺された。アウグストボナ(Augustobona)では、パリの大虐殺を聞いた市民は、プロテスタントが逃げるのを防ぐため、すぐに城門を閉めてロックし、彼らを刑務所に入れ、野蛮に殺害した。同じ残虐行為がアヴァリクム(Avaricum)、トロワ(Troys)、トゥールーズ(Toulouse)、ルーアン(Rouen)だけでなく、市から市に至る他の多くの地域や小都市、村落などフランス全土で行われ、約 100,000 人のプロテスタントが虐殺された。

この知らせを聞いたローマは邪悪な喜びの中、盛大な祝祭日と記念日を指定した。フランス国王もユグノ教徒の種を枯らしたという結論を下し、喜びを隠さずに心ゆくまで祭りを楽しむよう命じた。

しかし、虐殺はここで終わらなかった。自分たちの身代金としてかなりの金額を支払った多くの人々がその後すぐに殺害された。保護と安全を保証するという王の約束だけを固く信じていたいくつかの村の住民は、約束だけを信じて自発的に投降したものの、すぐに殺された。

ボルドー(Bordeaux)では、あるならず者のような修道士の扇動で 264 人が残酷に殺害された。ブロワ(Blois)に進軍したギス公爵は、自分の軍人たちにプロテスタントを殺させ、メール(Mere)に進軍し、同じ残虐行為を行い、カセボニュ(Cassebonius)という牧師を川に投げ込んだ。アンジュではアルビアキュー(Albiacus)という牧師を殺し、多くの女性を罵倒した後、その場で殺害した。

トゥーリン(Turin)の大臣は、両足を上にして頭と胸を川に沈めたまま吊るされた。彼が息を引き取る前に、彼らは彼の腹を切り開き、腸を引き裂いて川に投げ込み、その後、彼の心臓を槍の刃に刺して川を歩き回った。

+バール(Barre)では、鉄モールは子供たちの腹を切り開き、腸を取り出した後、歯でそれらを噛み砕いた。城に逃げ込んだ彼らは、降伏した際、ほとんど全員が絞首

刑に処せられた。マチスコン (Matiscon)市では、手足を切断して殺すことを娯楽とし、彼らは自分たちの訪問者を楽しませるために、「跳ねるように跳ねる人を見たことがありますか」と言いながら、プロテスタントたちを高い橋から川に投げ込んだ。

ペナ(Penna)では 300 人を獣のように殺し、アルビア(Albia)では 1 週間で 45 人を殺害した。ノンネ(Nonne)では市全体が保護を条件に降伏したが、無差別に殺害された。あちこちに血が流れ落ち、家々が炎に包まれた。夫と一緒に隠れていた場所から引き出されたある女性は、最初は残酷な兵士たちに罵倒され、その後、兵士の強要でナイフを無理やり手に取り、彼らの力強さに押され、それを夫の腹に突き刺した。

サマロブリッジ(Samarobridge)で彼らは 100 人以上のプロテスタントを殺害し、アンティシドー(Antisidor)でも 100 人が殺され、そのうちの一部は野外便所で、残りは川に捨てられた。オルレアンで投獄された 100 人は、激怒した群衆によって無惨に殺された。

悪魔に取り憑かれたローマ・カトリックから逃れたロシェルのプロテスタントたちは命を懸けて抵抗した。国王はフランスのほぼ全ての軍事力をロシェルに派遣し、長期にわたる包囲攻撃で

22,000 人のうち 18,000 人を殺害した。しかし、攻撃の度にぶつかった抵抗が만만치 않았기 때문에 국왕の軍隊は 132 人の隊長をその兵士たちと一緒に死んだまま野原に残さなければならなかった。結局、包囲作戦は国王の親兄弟でポーランド(Poland)の王と宣言されたアンジュ公爵(duke of Anjou) の要請で幕を閉じた。

プロテスタントが受けた悲劇的な苦しみは、ピリップ・ド・ドゥ(Philippe de Deux)が受けた苦しみを見ればその概念をつかむことができる。この殉教者を彼のベッドで殺害した悪質な殺人者たちは、助産師の助けを借りて出産しようとしている彼の妻に向かった。赤ちゃんが生まれるまでだけでも殺人を止めてほしいと訴える助産師を、彼らは 剣で突き刺した。母親は死を免れようと穀倉の中に飛び込んだが、彼ら

は追いかけてきて彼女の腹を刺し、路上に投げ捨てた。投げ出された衝撃で死にそうになっていた母親から赤ん坊が出てきたが、ローマカトリックのならず者の一人が赤ん坊を持ち上げてナイフで刺し、川に投げ捨ててしまった。

(3)パリでのバドローメの大虐殺

パリでのバドローメ大虐殺

1572 年 8 月 21 日、血なまぐさい極悪非道な残虐行為が始まった。これはプロテスタントを一挙に根絶するために行われたもので、それまではプロテスタントが部分的にしか迫害されていなかった。フランスの王は、プロテスタントの指導者であるナヴァル（Navarre）王子と自分の妹との結婚を偽装して提案した。 このような無分別な結婚が 8 月 18 日、その結婚のために建てられた高い舞台の上で、ボオヴォン枢機卿によって公開的に執り行われた。彼らは司教と共に豪華な晩餐を受け、パリで王と一緒に飲んだ。それから 4 日後、議会から戻ってきた王子(コリーニ)が両腕を撃たれた。 彼はその時、亡くなった母の将軍であったモーレ(Maure)に言った。"ああ私の兄弟よ、私は今、私の神から私が本当に愛されていることを認識している。それは、至高の聖なる方のために私が負傷したからである」。ヴィダム(Vidam)が彼に逃げるように忠告したにもかかわらず、彼はまだパリにとどまり、その後すぐにベミアスに殺された。彼は後に、その将軍より勇敢に死を える人を見たことがないと言った。

特定の合図により、パリ全域から兵士たちが突然殺戮を開始することが約束されていた。将軍を殺害した後、彼らは彼を窓から通りに投げ出し、頭を切り落とし、教皇に送った。 彼にまだ激 怒していたローマ・カトリック教徒は、彼の腕と各肢を切り落とし、3 日間通りを引きずり回した後、街の外に逆さまに吊るした。 その後、彼らは数多くの尊敬されるプロテスタントを殺害した。 そして、数日間、平民を虐殺し続けた。まず

三日間で彼らは十万人ものあらゆる階級の人々を殺害した。死体は川に投げ込まれ、強い急流とともに血が街を流れた。彼らの地獄のような怒りはあまりにも巨大で、彼らの極悪非道な宗教に忠実でないと疑われるすべてのローマ・カトリック教徒まで殺害した。このような破壊はパリからすべての地域に広がった。

オルレアン（Orleans）では千人の人々と子供たちが殺害され、ルーレン（Rouren）では 6 千人、メルディスでは 2 百人が監禁され、その後一斉に残酷に殺害された。

リヨン(Lyons)では 8 百人が虐殺された。ここで、親にしがみついた子供たちと、子供たちを愛おしそうに抱きしめていた親たちが、剣と血に飢えた、カトリック教会と名乗る者たちのおいしい餌食となった。ここでは 3 百人が司教の家で殺され、邪悪な修道士たちは彼らが埋葬されることを許さなかった。オーガストヴォーナでは、人々がパリでの虐殺の知らせを聞くやいなや、プロテスタントが逃

げるのを防ぐために門を閉め、改革教会のすべての人々を熱心に探し出し、刑務所に入れ、その後、野蛮に彼らを殺害した。アバリコム、トロイ、トウロス、ローエン、その他多くの場所でも、都市から都市へ、田舎から田舎へ、町から町へ、国全体にわたって同じような残虐性を実行した。

このような恐ろしい虐殺の確かな証拠として、ある教養あるローマ・カトリック教徒が書いた次の興味深い記述を特別な妥当性をもってここに提示する。

"若いナヴァル王とフランス王の妹の結婚式（彼が言うには）が盛大に行われた。すべての称賛の言葉、友情を深める言葉、男たちの間で交わされるすべての神聖な誓いが、カトリーヌ女王と王によって惜しみなく発せられた。その間、宮廷の人々はお祭りと演劇と仮面舞踏会のことばかり考えていた。ついに聖バドローマ前夜の 12 時に信号が出され、直ちにすべてのプロテスタントの家の扉が強制的に開かれた。コリー二将軍は大きな音に驚いてベッドから飛び起き、その時、一団の暗殺者たちが彼の部屋に押し寄せた。ベスメ(Besme)が彼らを率いていた。 彼はグイエスの家で従者として育てられた。

彼らはベスメ将軍の胸にナイフを突き刺し、また彼の顔を切り裂いた。ベスメはドイツ人だった。プロテスタントが彼を連れ去った後、ロチェスラーは人々が彼を吊るし、手足を引き裂くために連れて行ったが、彼はブレタンヴィルによって殺された。グイセの若い公爵であるヘンリーはブロイスで殺された。彼は後にカトリック連盟を結成し、この恐ろしい虐殺が終わるまで門の前に立って「ベスメ！終わったか」と大声で叫んだ。この言葉ですぐに悪党が窓から死体を投げつけ、コリニーはグイセの足元で息を引き取った。"

「デルリー二伯爵も犠牲になった。彼は 10 ヶ月前にコリニーの娘と結婚していたが、彼の容姿はとても魅力的で、悪党が彼を殺害しに来たとき、彼らに同情を抱かせた。 しかし、もっと野蛮な他の人たちが後で押し寄せてきて殺害した。

"その間、コリニーの友人たちはパリ全土で暗殺された。老若男女を問わず、 닥치는 대로虐殺

され、すべての通りは息絶えた死体で散らばっていた。ある司祭は、片手に十字架を、もう片手に剣を持ち、殺人者の首領のもとに行き、親戚や友人も見殺しにするよう諭した。"

「フランスの司令官カバネスは無知で迷信的な兵士だったが、彼は宗教の怒りを激情のパーティーに取り込み、パリの全街を馬に乗って走り回り、部下に叫んだ。血を流せ!血を流せ!血を流すことは 5 月のように 8 月にも健全なものだ」このような情熱の人生の記録が彼の息子によって記録されたが、彼の父親は臨終時に彼の香動に対する一般的な告白をしたという。司祭が驚いて彼に言った。聖バドローメの虐殺については言及しないでください」この言葉にタバネスは答えた。私はそれを、私のすべての罪を洗い流すための称賛に値する行為だと考えています」そのような恐ろしい考えは、偽りの宗教の精神を高揚させることができるのです。

"王の宮殿が主要な屠殺場の一つとなった。ナバルの王はルーヴルに宿泊しており、彼の家来はすべてプロテスタントであった。彼らの多くは妻と一緒に寝室で殺された。他の人々は裸のまま逃げ出し、兵士たちに追われ、宮殿のいくつかの部屋を通り抜け、王の待合室までたどり着いた。ナヴァルのヘンリーの若い妻は、恐ろしい騒ぎに目を覚まし、恐ろしくなり、彼の配偶者と彼女自身の命のために、半分死んだ状態で寝室から逃げ出し、彼女の兄弟である王の足元に伏せようとした。 兵士たちはすぐに追いかけ、王女の目の前で彼らを追いかけ、彼女の寝室に隠れていた人を殺害した。槍で負傷した他の二人が女王の足元に倒れ、彼女は血まみれになった。"

「ド・ラ・ロチェポケルト伯爵は若い貴族で、その穏やかな気品と礼儀正しさ、そして会話における特異な気品により、王の好意を大いに受けた。その日、彼は喜びの中で最高の喜びと湧き出る想像力をもって、11 時までその夜を過ごした。君主は多少の良心の呵責を感じ、ある種の同情の発露から、二、三度彼に家に帰らずにルーブルにとどまるように言った。伯爵は自分の妻のところに行かなければならないと言った。この言葉に、王はもはや彼に圧力をかけず、「彼を行かせなさい！神が彼の死を宣言したことを私は知っている。 そして二時間後に彼は殺された。"

"熱狂的な迫害者の怒りから逃げたプロテスタントは極めて稀であった。 その中に 10 歳ほどの子供、ラ・フォスがいた。 (後に彼は有名なド・ラ・フォスの司令官となった。) 彼が救出されたのは実に珍しいことであった。 彼の父と兄、そして彼はアンジュール公爵の兵士たちに囲まれた。この殺人者たちはこの三人に襲いかかり、 닥치는 대로彼らを襲った。 この時、彼ら全員が倒れ、次々に積み重なった。たとえ死んだように見えたとしても、最年少だった彼は一発も打たれず、翌日逃げ出した。 こうして彼の命は驚くほど保存され、85 年間続いた。"

悲惨な犠牲者のうち、多くの人が水辺に逃げ込んだ。何人かはセーヌ川を越えて、聖ジャルメーヌの郊外まで泳いで行った。王は川を見下ろす彼の窓から彼らを見下ろし

、そして彼の従者の一人がこの目的のために装備していたカービン銃で彼らを撃った。一方、殺戮の中でも動じることなく平静を保つ女王は、バルコニーから下を見下ろし、殺人者たちに勇気を与え、殺された者たちの瀕死のうめき声に笑いを送った。この野蛮な女王は激動する野望に燃えており、この野望を満たすために彼女の垣根を変え続けた(?)。

このような恐ろしい措置が行われた数日後、フランス宮廷はそれを法律の形で言い訳しようとした。彼らは中傷で虐殺を正当化するふりをし、司令官を共謀の疑いで非難した。しかし、誰もそれを信じなかった。議会はクリニエに対する火刑に反対するよう委託された。彼の死体はモンフォコンの絞首台に鎖で吊るされていた。王はこの驚異的な光景を直接見に行ったが、彼のお世辞係の一人が後ろに下がるように忠告し、死体の悪臭を訴えた。彼は「死んだ敵の匂いは実に良いものだ」と答えた。聖バドローメナルの大虐殺は、バチカンの王のホールに次のような文言と共に描かれている。教皇はコリニョー二の死を承認する。

この恐ろしい虐殺は、単にパリ市に限ったことではなかった。同様の命令がフランスのすべての地域の領主に宮廷から出された。その結果、一週間で約 10 万人のプロテスタントが国中でバラバラにされた。たった二、三人の領主だけが王の命令に従うことを拒否した。そのうちの一人であるオーバーンの領主モントオリンは、次のような手紙を王に送った。

「陛下、私は陛下の印章が押された命令書を受け取りました。 私は陛下をとても尊敬しているため、その手紙は偽物だと信じています。 しかし、もしこの命令が本当であれば、(そんなことはあり得ませんが)私は陛下をとても尊敬しているため、その命令に従うことはできません。

ローマでは、その喜びは非常に大きかったので、彼らは一日を祝祭日と禧年と定め、誰もがこれを守り、彼らが考案できるあらゆる喜びの表現を見せた。そして最初にそ

の知らせを伝えた人はロレーヌの枢機卿から、彼の不遜なメッセージのおかげで 1000 クラウンを受け取った。王はまた、すべてのユグノーが絶滅したと考え、あらゆる喜びを表すためにこの日を守るように命じた。

身代金として多額のお金を払った人々も即座に殺された。保護と安全について王の約束を受けたいくつかの都市は、その約束を根拠に王の将軍たちに自分たちを差し出した途端に首が切られた。

ボデックスでは、説教中にカトリック教徒に殺戮の衝動に駆られた邪悪な修道士の扇動により、264 人が残酷に殺害された。そのうちの何人かは上院議員だった。似たような信仰心の別の友愛団体がメイン州のアゲンディカムで同様の虐殺を行った。そこでは、異端審問官の悪魔的な提案により、市民がプロテスタントに突撃し、彼らを殺害し、彼らの家を略奪し、彼らの教会を破壊した。

グイス公はブロイスに入るやいなや、兵士たちに略奪品に襲いかかり、見つけられる限りのプロテスタントを殺すか、溺死させるように命じた。この言葉に、彼らは年齢や性別を問わず、女性を汚した後、彼らを殺害した。そこで彼はミレに行き、同じ暴動を数日間行った。ここで彼らはカセボニウスという官吏を見つけ、彼を川に投げ込んだ。

アンジュで彼らは官僚のアルビカスを殺害し、多くの女性が汚され、そこで殺された。彼らの中には 2 人の姉妹がいて、彼らの父親の前で痴漢された。暗殺者たちは彼らを見ることができるように壁に縛り付けた後、彼らとその父親を殺害した。トゥリンの張は、自分の命の代償として多くのお金を払ったにもかかわらず、棍棒で残酷に殴

られ、服を剥ぎ取られ、川に逆さまに吊るされました。 彼が死ぬ前に、彼らは彼の腹を切り裂き、内臓を取り出し、川に投げ込み、彼の心臓を槍に刺して詩に持ってきました。

バーレ(Barre)でも極悪な残虐行為が行われた。幼い子供たちの腹を切り裂き、腸を取り出し、極度の怒りでそれを噛み砕くこともあった。城に逃げ込んだ人々は、降伏したとき、ほとんど全員が絞首刑に処せられた。マティスコン市では、腕や足を切り落とした後、彼らを殺すことがスポーツと見なされたこともあった。観光客を楽しませるために、彼らは時々「人があんなにうまく飛び降りるのを見たことがありますか」と言った。

ペンナでは彼らに安全を約束した後、三百人を虐殺した。アルビアでは一週間で 45 人が虐殺された。ノンネでは、安全を条件に降伏したにもかかわらず、最も恐ろしい光景が繰り広げられた。

男女が無条件に無差別に殺され、通りは悲痛な叫び声が響き渡り、血が流れ、家々は不謹慎な兵士たちが投げた火で炎に包まれた。一人の女性が夫と一緒に隠れ家から引きずり出され、まず残酷な兵士たちに痴漢された後、彼らは彼女にナイフを抜くように命じ、そして強制的に夫の内臓を刺された。

サマロ橋で彼らはプロテスタントに平和を約束した後、百人以上を殺害した。アンティシドでは百人が殺され、川に投げ込まれた。オリエンズでは、刑務所に投獄された百人が怒った群衆に殺された。

地獄の怒りから奇跡的に逃れ、ロチェッレに逃げ込んだプロテスタントたちは、あの聖なる悪魔に屈した者たちがいかに不当な扱いを受けたかを見て、自分たちの命を守るために戦った。他の都市でもこれに勇気を得て、同じように行動した。ロチェレを打ち砕くために、王はフランスのほぼ全ての軍隊を動員し、7 ヶ月間そこを包囲した。 彼らの攻撃にもかかわらず、彼らはそこの住民をほとんど殺すことができなかった。しかし、飢餓で彼らは 18,000 人が死んだ。生きた者が埋葬するには死者が多すぎて、彼らは虫や鳥の餌食になった。多くの人々は自分の棺を教会の庭に持ってきて、その中に横たわり、最後の息を引き取った。長い間、彼らの食

べ物は、彼らが豊かだった頃には身震いするようなものであった。さらには人の肉、内臓、排泄物と最も忌まわしいものが、真実と自由のために戦う闘士たちの唯一の食べ物となった。しかし、世界は真実と自由の価値がなかった。攻撃のたびに、包囲者たちは勇敢な歓を受け、132 人の将軍とそれに見合った数の部下を野原に死んだままにしておいた。最終的にこの包囲は、王の兄弟であるアンジュ公爵の提案で終わった。彼はポーランド王と宣言され、疲弊した王は簡単に承諾し、良い条件が彼らに与えられました。

この恐ろしい大虐殺の中で、せいぜい 2 人の福音の働き手が関与したことは、驚くべき神の祝福であった。

プロテスタントの悲劇的な苦しみは、詳しく説明するにはあまりにも膨大なものである。フィリップ・ドゥクスがどのように扱われたかが、残りのことを明らかにしてくれるだろう。悪党がこの殉教者を寝室で殺害した後、彼らは彼の妻に向かった。 彼女は助産師の助けを借りて、すぐに子供を出産する予定だった。助産師は彼らに少なくとも子供が生まれるまで待ってほしいと懇願したが、彼らは剣の柄をこの可哀想な女性に押し込んだ。分娩に苦労しながら、彼女は穀倉に逃げ込

んだ。 しかし、彼らは彼女を追いかけてそこにたどり着き、彼女の腹を刺し、通りに投げ出した。

落ちながら、子供は死にかけている母親から出てきた。カトリックの浮浪者の一人がこの子を拾い上げ、刺し、川に投げ捨てた。

(4) 勅令の廃止とプロテスタントたちの死

ナント勅令の廃止によって引き起こされた迫害がルイ 14 世の治世下で発生した。この勅令は 1598 年にフランス王ヘンリーが制定したもので、市民権であれ、宗教的なものであれ、他の様々な領域の問題と共に全ての領域でプロテスタントに平等な権利を保障するものだった。ニームス勅令によってルイ 14 世がプロテスタントに保証したこのようなすべての特権は、彼の統治期間中に忠実に守られた。

ルイ 14 世の即 時に王国は内乱でほとんど破壊されていました。この重要な時点で、プロテスタントは「剣を使う者は剣で滅びる」という主の警告を無視し、王の好意を受け、実質的な役割を担い、王に彼が王 に就いたのは彼の軍隊の力であることを認めさせた。 しかし、王は彼のために戦った彼らに慈悲を与え、保証する代わりに、彼のために戦ったその勢力が彼を倒すかもしれないと考え、教皇の策略に耳を傾けながら、彼の最終決定を示す規制と法的な保護の剥奪を出し始めた。ロッチェルは激しい非難を受け、すぐに投獄された。モントーベンとミロは兵士によって略奪された。教皇の使節団がプロテスタントの問題を処理するために任命され、王の議会を除いて、彼らの命令に対する抗議もなかった。これは一般的で宗教的な行動の根底を打ち砕き、プロテスタントであることを理由にカトリック教徒をいかなる理由でも訴えることを禁じた。 その後、別の禁止令が続き、全教区でプロテスタントが過去 20 年間に行った言動がすべて調査された。こうして、刑務所は無実の犠牲者でいっぱいになり、他の人々は奴隷船に連れて行かれたり、追放されたりした。

プロテスタントは彼らの公職、商売、特権、雇用から追放され、それによって彼らは彼らの生計を維持する手段を奪われた。彼らは残酷なことに助産師にまで自分の仕事をさせず、出産の危機にある女性たちを残酷なカトリック教徒である彼らの敵に差し出すように強制した。 彼らの子供たちはカトリック教徒に教育させるために連れて行かれ、7 歳になるとローマ・カトリック教徒を受け入れるようにした

。改革派は彼らの病人や貧しい人々の苦痛を和らげることが禁止され、個人的な礼拝も禁止された。聖なる礼拝はローマ・カトリックの司祭の前でのみ行われるようにした。不幸な犠牲者が王国を離れることができないように、辺境のすべての道は厳重に警備された。 しかし、神の良き御手によって、約 15 万人が彼らの夜間警備を避けて逃げ出し、この悲惨な物語を伝えるために他の国に移住した。

これまで述べたこれらすべては、既存の許可証のようなナント勅令の単なる違反に過ぎなかった。1685 年 10 月 18 日、ついにその勅令の悪魔的な廃止が可決され、あらゆる形態の法律に対して 22 番目に登録された。 即座に騎兵連隊の兵士が全地域でプロテスタントを探し回り、王は彼の王国にいかなるユグノーも許可しないので、彼らは自分の宗教を変えなければならないというニュースがフランス全土に広まった。このニュースに、全教区の監督官(ローマ・カトリック行政官とプ

ロテスタントを監視するスパイ)は改革派住民を集め、彼らに、自発的であろうと強制であろうと、遅滞なくカトリックにならなければならないと言った。プロテスタントたちは彼らの命と土地を王に犠牲にする準備はできているが、彼らの良心は神のものであるため、勝手にすることはできないと言った。

すぐに軍隊が街の門と通りを包囲し、手に剣を持った警備員がすべての道に配置され、「死かローマ・カトリック教徒か」と叫び、すぐに彼らの宗教を変えさせるために、彼らが思いつく限りの邪悪さと恐ろしいことを行った。

彼らは男女ともに頭と足を吊るし、彼らがほとんど死ぬまで干し草で煙を出し、もし彼らが信仰を撤回することを拒否すれば、再び吊るし、殺すこともなく、彼らが拷問で疲れ果てるまで残虐行為を行い、そうして多くの人々を強制的に屈服させた。他の人々は頭とひげをピンセットで引き裂かれた。彼らは他の人々を大きな火の中に投げ込み、再び引き抜いたと言いながら、彼らが自分の信仰を撤回すると約束するまでこのようなことを繰り返した。

彼らはある人々を裸にして最も屈辱的な侮辱を与え、頭から足までピンで刺し、ポケットナイフで彼らを切り開いた。 時には熱く熱したピンセットで鼻を刺し、彼らが回ることを約束するまで鼻を刺した。 時には父親と夫を縛り、彼らの目の前で彼らの妻と娘をレイプした。数多くの人々を有害な地下監獄に監禁し、あらゆる種類の拷問を秘密裏に行った。妻と子供たちは修道院に監禁させた。

逃げようとする人々は森で追跡され、野原で狩られ、野獣のように撃たれた。どんな状況も才能も、この地獄の軍団の凶暴さから彼らを守ることはできなかった。議会議員や軍将校でさえ、実際の仕事中に仕事をやめ、自分の荷物をこの嵐に耐えられるように自分で修理するよう命じられた。

王に文句を言う者はバスティーユ刑務所に送られ、そこで彼らも同じ杯を飲まなければならなかった。司教と司教たちは、宣教師、僧侶、その他の聖職者と共に、軍隊の先頭を行進し、彼らの「聖なる」教会が非常に喜んで、彼らの神である悪魔と専制君主に非常に栄光のある仕事を遂行するように兵士たちを励ました。

ナント勅令を廃止しようとする法律を制定するにあたり、議会は二分された。一部の人々は、

平信徒だけでなく、すべての聖職者を監禁し、強制的にローマ・カトリックに改宗させようとした。

ある人々は、聖職者たちの存在がプロテスタントに力を供給するので、彼らを追放すべきだと言った。 そしてもし彼らがローマ・カトリックに仕方なく改宗したとしても、争点となる問題において彼らの膨大な知識と経験により、教会内で潜在的で強力な敵になると言った。この主張が優勢であったため、彼らは追放刑を宣告され、王国を離れるまで 15 日間の期限が許された。

プロテスタントの自由を破棄する勅令が公布されたその日、彼らは教会を破壊し、聖職者を追

放した。 また、パリを離れるのに 24 時間の余裕を与えただけだった。ローマ・カトリック教徒は、彼らの逃亡を遅らせるために行く道を妨害することで、限られた時間が満了し、プロテスタントが一生を奴隷として生きるという呪いを受けさせようとした。 港には警備兵が倍増し、刑務所は犠牲者で溢れかえった。 彼らは人間が本能的に震えるような拷問を受けなければならなかった。

奴隷船に送られた牧師やその他の人々が受けた苦難は極限まで達した。櫓に縛られたまま、彼らは昼夜を問わず、天候や季節に関係なく外気にさらされた。体が弱くなり、櫓の下で気絶したとき、彼らを蘇生させるための強壮剤や新しい力を与える食べ物の代わりに、彼らが受けるのは鞭や棒、棍棒で殴られることだけだった。十分な衣服と必要な清潔さの欠如のために、彼らは害虫にひどく嫌がらせを受け、寒さにひどく悩まされた。 この寒さで昼間に殴られ、拷問された人々が夜に死んだ。彼らには、ベッドの代わりに、病気でも健康でも、硬い 8 インチの段ボールが許可された。覆うものは彼らのぼろぼろの服だけだった。 せめてその服は、最も太くて荒い帆の赤いセルのベストであるシャツで、両側が腕の振動まですべて破れ、肘まで届かない襟のない袖だった。3 年に一度、彼らは厚手の作業服と頭を覆う帽子を受け取った。彼らの頭は常に彼らの虚弱さの証として、かろうじて保たれていた。

糧は彼らをそのような惨状に陥れた人々の同情と同じくらい少なく、病気の時に彼らをどう扱うかはあまりにも驚くべきことで、言葉も出ないほどだった。 彼らは暗いホールの板張りの上に横たわって死を待ち、全身が害虫にまみれたままでなければならなかった。 キリストの働き者と正直な人々として、彼らが耐えなければならなかったのは、重罪人と最も厄介な悪党の隣に並んで鎖につながれたまま、神

を呪う音を延々と聞かなければならないことだった。このような恐怖は、最も小さなものにも属さないものであった。もし彼らがミサを聞くことを拒否した場合、彼らは鞭打ち刑を宣告され、その後、恐ろしい罰が続いた。その罰の準備として、まず鎖が外され、犠牲者はイスラム教徒の水中に引き渡される。彼らは櫓を管轄する者たちで、裸にして大きな大砲の軸砲に乗せて動けないようにする。その間、奴隷船には恐ろしい沈黙だけが流れる。死刑執行人に指定されたイスラム教徒は、その犠牲が彼の預言者マホメットが喜ぶものだと考え、粗い棍棒や結び目のある鞭でこの可哀想な犠牲者を最も残酷に鞭打ち、肉が骨から引き裂かれ、ほとんど死にそうになる。 そして、非常に苦痛を与える酢と塩の混合物を使用して、彼らの残酷さの下で何千人もの人々を死なせた最も無慈悲な病院に彼らを引き渡す。

第 5 章 -宗教裁判の説明

ローマ教会の異端審問は、それが権力を振るう上で、人間がこれまでに作り出した最も恐ろしい暴力構造の一つであった。 それが始まったのは、おそらく 1200 年頃と言える。 つまり、ローマ教皇イノセント 3 世は、ローマ教会と他のワルド派や他の宗派の数が急増したことを知り、彼らに裁判官や教会の仕事に献身することで知られている修道士を送った。名前が提示されると、彼らは異端を発見するすべてのものを調査するように任命された。 彼らはローマ教会に反対する見解を持つと疑われる人々を尋問し、拷問し、投獄した。年が経つにつれ、この教徒に対する罰はさらに厳しく厳しくなり、裁判官たちはほぼ絶対的な力を持つようになった。彼らの教訓や規則の中には、次のようなものがある。異教徒が住んでいると言われる家はどんな家であっても破壊されなければならない。

異教徒を隠匿した者は、彼が王であろうと領主であろうと司教であろうと、彼の住居と土地と地 を失う。異教徒は、たとえ重病に苦しんでいても、医者に見せてはならない。委員会は、このような 42 もの規則に同意し、採用した。ドミニカ修道院の修道士が特別に異端審問官として選ばれた。彼らは、彼らが属する共同体の憂鬱で厳格な規則から訓練されたためか、憐れんだり同情したりすることについては、一般的に冷静な人々であった。宗教裁判所の法廷は暗く、復讐心に満ちていた。そしてそれらはイタリア、ドイツ、フランス、スペイン、その他多くの国に散在していた。スペインでは 1480 年にフェルディナンドとイザベラの同意で設立され、さらに強化され、この世に今まであったどの法廷よりも恐ろしいものであった。スペインの異端審問の暗く重厚な扉に強制的に入ることになった男と女に腹が立つ。なぜなら、死よりも悪い運命が彼らを待っていたからである。スペインの王たちでさえ、たとえ彼らが暴君であったとしても、その名を聞くだけで震え上がり、その命令のうち小さなもの一

つでも敢えて不服従しなかった。 それは教会の法廷であり、国の法廷であった。 そしてその影響はその国に 300 年以上も及んだ。p278

宗教裁判所の本部

スペイン南部のセビレ市に異端審問所が設立された。 その目的は、犠牲者のほとんどが異教徒という罪名で苦しめられたが、単に異教徒を弾圧することだけではなかった。 彼らが本当に望んでいたのは、時にはお金であり、したがって、金持ちは異端審問所の鉄拳が捕まえるのに最適な格好の餌食であった。教会や国家の高官や尊敬される人、芸術や科学の分野で活躍した名士、生活の純潔な人など、誰も異端審問の突然の秘密の攻撃から救われることはなかった。犠牲者から掻き集められた利益や奪取物は毎年多量に達し、これは王やローマにある教会にも分配された。異端審問と呼ばれる聖職の聖職者たちも、告訴された者たちから没収した財産から給料を受け取った。だから彼らの関心は、掻き集める犠牲者がなく、お金が枯渇しないようにすることであった。異端審問は 1481 年の初めにスヴィレでその仕事を始め、その年が終わる前に 298 人もの人々を生きたまま焼き殺した。 p279

火が燃える場所：トルクマダの残酷さ

セビレ市場は当時、多くの人々を火で焼き殺すのに便利なように、クエマダロと呼ばれる焼却場を設けた。それは市からそれほど遠くない平地の上に建てられ、四角形の石段になっていて、この醜悪な石の祭壇の上でほぼ毎日犠牲者の命が炎と煙で消えた。その聖職者の活動が増加すると、すぐにもっと効果的な実務者組織が必要になったので、ドミニコ派の修道士であり、歴史に永遠に不謹慎な名前として残るトルクスマダのト

ーマスは、教皇シクストゥス 4 世によって異端審問所長に任命された。トルクマダは正規幹事、裁判官、秘書、偵察者、刑執行者、会計などを任命した。セビレにある中央事務所のほか、同様の 4 つの地方裁判所が設置され、時間が経つにつれて他の人々はスペインの支配下にある国々、特にオランダ内の国々に送られ、そこでアルバ公爵が血

なまぐさい征服を行う間、その犠牲者は数千人に達した。トルクマダは彼が死ぬまで異端審問所長として 18 年間聖職を務め、その任期中に 10220 人もの人を生きたまま焼き殺し、97322 人の財産を没収し、投獄した。 その数は信じられないほど多いように見える。しかし、その数字は正確と定評のあるスペインの歴史家ロゼンテが明らかにしたものである。そのような宗教弾圧はスペインで新教を完全に撃破してしまった。他の国へ逃げることができなかったプロテスタントは皆焼かれ、一人も残らなかった。1808 年に異端審問が破壊されるまで、前述の歴史家によると、犠牲者の数は、生きたまま焼かれた人が 31912 人、地下室に投獄された人が 291,4 50 人にもなった。p280

異端審問のルールと習慣

異端審問で働くすべての人は、それに関連するあらゆること（内部で起こったことであれ、外部で起こったことであれ）を秘密にすることを誓った。投獄された人々に課せられた一般的な罪名は異教徒であった。宗教裁判が認めない本を読んだり、そのような本を他の人に読ませたり、それを告白するために聖職者に行かずに 1 年以上経過したり、断食日に肉を食べるような切り離せない些細な行為も異教徒と呼ばれ、宿命的な判断が一度下された人はそれを避ける道はほとんどなかった。実際、宗教裁判所の囚人は弁護がほとんど不可能

だった。疑惑さえあれば、訴えられ、非難される十分な理由となった。それは特に富裕層に特にそうであった。

異端審問官たちは日々、無実の人々からありもしない告白を引き出すために彼らを尋問し、拷問し、無邪気に連れてこられた者たちは悪魔のような彼らに服従しなければならなかった。 p281

異端審問の囚人たち

異端審問は通常、夜に囚人を捕らえた。実際に捕まえるその瞬間まで、わずかな危険の兆候も彼には知られていない。彼が夜中に最も安全に眠っているとき、覆面をした人々が静かに彼の家の前に集まり、ドアを開けろという。彼らは「誰の名で要求するのか」と問われると、躊躇なく「聖職者事務所」から来たと答える。スペインの歴史学者はこう言う。"黒く怒った雲から始まった雷鳴も、異端審問に関する耐え難い不安感を与えることはできない" その不幸な人は驚き、すぐに最も驚いた恐怖の餌食になる。彼は自分の命が危険であることを知り、おそらく永遠に彼の運命を知らずに捨てられるであろう妻と子供たちのことを考える。燃えるような涙が彼の目に浮かび、彼の唇には悲嘆の言葉が結ばれる。その時、彼の家族は困惑して絶望し、彼の隣人は同情の意を表する。 その時、彼は洞窟の中に連れて行かれ、彼の悩みは湿った裸の洞窟の壁だけが証明してくれる。p282

いったん宗教裁判所の壁の中に入ると、囚人たちは分離された独房に監禁され、その部屋は小さいだけでなく、木製のベッドとテーブル、そして時々椅子が置かれているが、それ以外の家具はない。上の列は小さな窓から日光が入るが、下の部屋は完全に暗かった。囚人たちはその地 によって扱いも様々だったが、監房の下段は異端者のためだけに使われ、孤独で静かな中、看守を除いては人の姿を見ることができなかった。父と息子、または母と娘が一緒の独房に監禁されているにもかかわらず、お互いを知らないことが多く、無慈悲な看守たちは秘密が漏れないように、何か音が出るのを恐れて執拗に監視した。もしある人が彼の不幸を悲しんで声を出して聞こえるような声で神に祈るなら、彼はすぐに調庸するように命令され、人々が彼らのうめき声やため息で、また彼の独特な音でお互いを知るようになる場合には、宗教裁判所の地下室の中でこのような彼の惨めな境遇を表現できないように強制される。ある囚人が風邪をひいて咳をするようになったが、彼がそのような困難を被ることは考えもせず、看守が彼に来て静かにするように注意を与えた。

なぜなら、その獄舎の中で音を出すことは違法だったからである。その囚人は、咳は自分の意志で止めることができないと言った。 しかし、看守たちは彼に二度目の注意を与え、咳を止めるように言った。 しかし、彼は咳を止めることができなかったので、彼らは彼を裸にして残酷に殴った。その結果、彼はさらに咳をするようになった。その後、彼らは彼が鞭で打たれ、苦痛と苦悩で死ぬまで殴り続けた。囚人たちは独房から引きずり出され、異端審問の裁判官や拷問官に尋問され、彼らは彼らが知っているすべてのことを告白した時でも、このような言葉を聞き続けた。"お前は不誠実だ、お前はすべてを話さない、お前は多くのことを隠している。だからお前は自分の地下室に戻らなければならない」 答えを拒否した者たちは再検査に呼ばれ、もし彼らが黙秘権を行使するならば、話すことがあってもなくても、話すまで拷問を受けた。p283

異端審問の拷問、建物、卑劣な方法たち

異端審問で最も一般的に執行された拷問は、ロープと滑車で行う拷問と、拷問台の上に乗せて拷問するものであった。前者は囚人の手を後ろに縛り、天井にある滑車についた縄で縛り、ウインチで巻いて空中に上昇させる拷問である。彼の腕と肩に痛みをより強く与えるために足を縛って吊るす。その犠牲者は空中に吊るされ、裁判官に慎重に尋問される。 その裁判官は、彼の記憶を助けるために、時々ロープを遅くし、苦しんでいる者が数フィート下がるようにし、彼が地面に着く前に突然停止させる。ロープとウインチは、囚人の骨や手足を伸ばしてずらすために使用されました。拷問台と滑車以外にも、不幸な犠牲者から告白を得るために異端審問が使用した殺人器具はたくさんある。

その犠牲者たちは、自分たちがどんな罪を犯した容疑でそこに来たのか、どんな告白をしなければならないのか全くわからないことが多かった。宗教裁判所の建物は多くの石で建てられた建物で、そこには会議室、地下室、拷問室などがあった。全体の構造はかなり大きいので、初めて来た人はその中で迷子になりやすいほ どである。裁判長た

ちのアパートは広くて豪華で、主通路は法廷に通じる大きな扉から入るようになっていた。

この法廷に面した外にはバルコニーのある屋根裏部屋があり、これらのバルコニーは、王やその家族が望むなら、ある囚人の処罰を見下ろすことができるように彼らのために作られた。 p285 フィリップ 2 世の治世中、宗教裁判官の権力と傲慢さは日々増大し、スペイン王国は文字通りプロテスタント信徒を抑圧するヨークの下でうめき声に満ちていた。フィリップ 3 世は彼の父と同様に頑固で、迷信的で、残酷であった。100 年間、彼の後を継ぐ王たちも、もはや覚醒していない、あるいは人道的でない人々であった。 p309

殉教を恐れなかった信仰の勇士ウィリアム・ガーディナー

ウィリアム・ガーディナーはイギリスのブリストル生まれで、商人パジェット(Paget)の下で商売を学んだ青年だった。 彼の主人は彼が二十六歳になると、取引仲買人として働くためにポルトガルのリスボン(Lisbon)に送った。ガーディナーはそこで熱心派プロテスタントとプライベートな交わりを持ち、ローマ・カトリック教徒の機嫌を損ねないように細心の注意を払った。

そんな中、ポルトガル王子とスペイン王女の結婚の誓いの日がやってきた。式が行われる大聖 堂は、各界の人々で賑わいを見せており、ガーディナーも大聖堂に足を踏み入れたことはなかったが、好奇心から式を覗き込んだ。

結婚式を最初からじっと見守っていたガーディナーは、目の前で繰り広げられる迷信的な行為に衝撃を受けた。 その日に見た誤った崇拝の残像が彼の胸を打つように走った。手の届くところに真の福音があるのに、国全体が偶像崇拝に陥っているのを見て、悲惨な思いを禁じ得なかった。

ガーディナーは、途中で死んででもポルトガルに宗教改革を起こすという野心的な抱負を抱いていた。 その大いなる目的を達成するために、すべての世間体を整理し、借

金を返済した。 また、帳簿を整理し、物品を他の事業者に引き渡した。そして次の日曜日、新約聖書を手に再びその聖堂を訪れ、祭壇の近くに陣取って座った。

王と王妃が姿を現し、枢機卿がミサを執り行い始めた。全体の儀式のうち、この部分で会衆は祭屏（祭屏、聖餐用パン）を崇拝するが、ガーディナーは耐えられなくなり、枢機卿に飛びつき、聖体をつかんで足で押しつぶした。

驚いた会衆の間から誰かが 剣を抜いて出てきて、ガーディナーの肩を刺した。国王がやめろと叫ばなかったら、もう一回振り回して彼を完全に終わらせていただろう。

ガーディナーは王の前に連れて行かれた。王は彼の出身地を尋ねた。

"私はもともとイギリス生まれで、プロテスタントであり、生計を立てるために物を売っています。私がやったことは、たとえ天が崩れても、決して陛下の御体を軽蔑したわけではありません。ただ、ここで行われているとんでもない迷信や偶像崇拝を見て、憤りを禁じ得なかったのです。

彼が突発的な行為をしたのは、きっと誰かに刺激を受けたからだろうと考え、王は彼を扇動した張本人を問い詰めた。 すると、ガーディナーはこう答えた。

"私の良心以外には誰もいません。 私は生きている誰のためにも、私がしたような危険なことはしません。 その仕事と他のすべての奉仕は、すべて神に対する私の義務なのです。" ガーディナーは刑務所に送られ、リスボンのすべてのイギリス人を捕らえる命令が下った。逃亡した数人を除いて、多くの無実の人々が、その問題について些細なことでも知っているかどうかを告白させるために、異端審問で拷問を受けた。ガーディナーと同じ家に住んでいた人は、事件の糸口を解く何かを吐露させようと野蛮な扱いを受けた。

ガーディナー自身は、肉を切り刻むような拷問を受けた。毎回拷問が行われる中、自らの行為を誇りに思っていた。

そして死刑が宣告され、絞首台の近くに大きな火がつけられた。彼は滑車で引き上げられ、絞首台の方へ引っ張られた後、火の近く、しかしそれに触れない程度の間隔を置いて下に降ろされた。彼は焼かれて死んだが、むしろ少しずつ焼かれて死んだと言ったほうがいいだろう。彼は自分に迫った苦難を歯を食いしばって耐え、自分の魂を喜びで主に委ねた。

ガーディナーを燃やした炎から出た火の粉が港の方に飛んで、王の戦艦一隻を燃やし、その他にもかなりの被害を与えたという事実に私たちは目を向けざるを得ません。主は彼の殉教を最初から最後まで見守られていた。これは決して偶然ではないようだ。

この事件で逮捕されたイギリス人は、ガーディナーの死後すぐに釈放された。しかし、彼と同じ家に住んでいた人は、自由を得るまでさらに 2 年間刑務所に入れられた。

異端審問の概要

世界中で宗教裁判によって殺された多くの人々について、信頼できる記録を見つけることができないのが現状である。しかし、ローマ・カトリックが権力を握ったところには、どこまでもその法廷も一緒に立っていた。地下監獄で拷問され、そこに監禁され心が崩壊した数多くの人々、そして完全に無力化され、自分でもどうしようもなくなってしまい、犠牲者の死を見て急いで墓に駆け込んでしまった、自分たちの命が命のように思えなかった何百万人もの人々がどれほど多いかは計り知れないが、それは「捕虜にする者は彼も捕虜になり、剣で殺す者は彼も剣で死ぬであろう...」(黙示録 13:10)と明らかに言われた神様の前に記録されているだろう。

教皇制度の子分である異端審問、その親分であるローマカトリックの力を感じるには、私たちはその時代に目を向けなければならない。13 世紀には、死を彷彿とさせる教皇制の支配が極に達した。 それはすべての王国から独立しており、戦後のいかなる人間の王権も決して振るったことのな

い影響力で統治したことはもちろん、それが人間の体と魂に対して主権を行使できることが認められ、地上で意図されたすべてのことにおいて、その力は善であれ悪であれ、計り知れないものであった。ローマカトリックは文学、平和、自由、そして自称「キリスト教」をヨーロッパの果てまで広めたかもしれないが、その本質は敵対的であったから、その勝利の杯が満たされれば満たされるほど、その悪辣さもまた、それだけ溢れ出ることが明らかになるだけだった。

ローマ、それは人間の理性に恥を、人間の美徳に恐怖と苦痛を与えようとするかのように、その雄大さが最高潮に達した時期に、その奇怪で恐ろしい異端審問機関で溢れかえっていたのである！？

ポルトガルとスペインでの迫害

ウィリアム・ガーディナーはブリストルで生まれ、26 歳の時に委託販売員としてリスボンにいた。そこで彼は救われた。彼はローマ・カトリックや教皇に最小限の不快感を与えるようなことは

慎重に避けていた。 そんな中、ポルトガル王子とスペイン王女の結婚式に出席することになった。

大聖堂で行われたこの結婚式には、数多くの高官と王室全体が出席した。そこで彼は、彼が見た迷信的な行為によって、あまりにも大きな衝撃を受けることになった。度を超えた崇拝と国全体が極端な偶像崇拝に陥るのを見て、彼は自分が殉教してでもポルトガルに改革を起こすか、それとも軽蔑の中で死ぬか、彼の慎重さを熱意に変えることを決意した。

彼は自分の世俗的なことをすべて処理し、借金を清算し、本を整理し、彼のすべての商品を引き渡し、翌週の初日、新約聖書を手に聖堂に行きました。王と王室の人々が登場

し、枢機卿がミサを始め、ミサの途中で人々が聖餐用のパンを崇拝した。ガーディナーは我慢できなくなり、枢機卿のところに行ってそれを奪い、足で踏み潰した。

会衆全体がこの行動に驚き、一人が 剣を取り出し、彼の肩を刺した。王がやめろと言わなければ、彼はおそらくそこで死んでいただろう。

ガーディナーが王の前に連れてこられたとき、君主は彼にどこの国の人間か尋ねた。彼は「私はイギリス人であり、プロテスタントであり、職業は商人です」と答えた。私がした行動は、決して陛下の人格を軽蔑したのではなく、ばかげた迷信と途方もない偶像崇拝がここで行われているのを見た正直な怒りから生じたものです」と答えた。

王は他の人の勧めで彼がこのような行動をしたと考え、扇動者が誰であるかを尋ねました。この質問に彼は「私自身の良心だけです。私の行動で他の人の命を脅かしたくありません。 このすべては神様のおかげです」と答えました。

彼は刑務所に送られ、リスボンにいるすべてのイギリス人を逮捕する命令が下った。多くの無

実の人々が、自分たちの知らないところで拷問を受け、自白を強要された。ガーディナーにも激しい苦痛を与える拷問が加えられたが、彼は自分の行動を誇りに思っていた。彼は死刑を宣告され、絞首台のそばに大きな火が焚かれ、滑車でそこに運ばれた。 そして火が届かないほどの距離に彼を置き、ゆっくりとした速度で彼を焼いた。彼は辛抱強く苦痛に耐え、自分の魂を喜んで神に委ねた。

ガーディナーを殺した火の粉が港に向かい、王の戦艦の一つを燃やし、他のかなりの損害を与えたという事実は特異である。ガーディナーが死んだ後、この事件で捕まったイギリス人は解放されたが、ガーディナーと同じ家に住んでいた人は自由を得るまで 2 年間監禁された。

スコットランド生まれのウィリアム・リードゴウの生涯と苦悩

リドゴウは旅行好きでヨーロッパ各地を旅していたところ、スペインのマラガにたどり着き、そこからアレクサンドリアに向かうフランス船に乗船しようとしたところ、小さな事件でしばらくそこに滞在することになった。イギリス軍艦がトルコの船と間違えられ、その街の人々を恐怖に陥れたが、結局誤解が解けたことがあった。

そのイギリス軍艦にはリードゴウがよく知っている人が何人かいて、リードゴウを軍艦に招待した。 数日間彼らと一緒に過ごした後、浜辺に降りて彼の宿舎に向かう途中、彼は突然 9 人の将校に囲まれ、司令官の家に拉致された。 つまりスパイと間違えられたのである。このすべてのことは、市内の英国商人に知られないように極秘に行われた。特に司令官は彼を裏切り者、スパイだと言いながら、彼がイギリスに利益をもたらし、スペインに悪影響を与える計画を手伝っており、スペイン艦隊がインドから戻る時期を知るためにセビルに 9 ヶ月間滞在したのだと言った。 そして彼が船の将校たちを知っており、過度に彼らが礼儀正しいことにひっかかった。

彼は密かに司令官の家に連れて行かれた。彼らは彼に鉄を消し、1 ヤードの長さの鉄棒で彼の足を伸ばした。 それがあまりにも重く、彼は立つこともできず、ずっと仰向けで横になっていなければならなかった。 そして彼らは何度も尋問を繰り返し、自白を強要した。ついに彼は拷問室に連行され、言葉では言い表せないほどのひどい拷問を受けることになった。そして再び地下監獄に移された。

数日後、司令官と一人の尋問官と教会法に基づく司祭が二人のイエズス会会員と一緒にダンジョンにやって来て質問した。尋問者は、彼がローマ・カトリック教徒であるか、教皇の最高権威を認めるかどうか尋ねた。 彼は両方ともないと答え、イギリスとスペインの平和条約によって、イギリス国民は誰でも尋問を受けてはならないと明確に規定されていることを強調した。彼は苦しみの中でも、彼の環境には似つかわしくない温かい表現を使った。"あなた方は、虚偽に装った反逆という理由で、ほとんど私を殺害するところ

まで追い込み、今度は私の信仰を理由に私を殉教者にするつもりか。"また、1588 年にスペインの無敵艦隊がスコットランドの海岸に座礁したとき、スペインの人々に本当に高貴な人間愛が実践され、彼らが安全を得たことを思い出させた。 そうでなければ、彼らは惨めに死んでいただろう。

司令官はリードゴウの言ったことは事実であることを認めたが、傲慢な態度で、当時スコットランド湾を支配していた王は愛よりも恐怖のためにそう行動したのであり、したがって感謝する価値はないと言った。そしてイエズス会のメンバーの一人が彼に言った、「あなたはスパイとして捕らえられ、反逆罪で訴えられ、私たちも認めますが、無罪で拷問を受けました。しかし、このような裁きをあなたにもたらしたのは神の摂理であった。なぜなら、あなたは傲慢に、ロレットの祝福された奇跡を笑いものにして、地上でキリストの大使であり、偉大な代理人である聖なる教皇を不当に表現したからである」と言った。

その後、彼らはこの囚人に 8 日間の考える時間を与え、彼の宗教を改宗するかどうかを決めるように言った。イエズス会の会員が十字架の聖☧☧描きながら言った。"私の息子よ、見よ、お前

は生きたまま火に焼かれるべきであるが、お前が神性を冒涜した私たちのロレットの恵みによって、お前の魂と体を生かしておく。"

翌日、他の三人の聖職者が来て、彼の良心に何があるのか尋ねた。 彼は答えた、「私は私の心に何の疑いもない。キリストがなされた約束を信頼し、福音の中に現れた彼の啓示された御心を確実に信じ、改革されたカトリック教会で公言するように、恵みによって確実化されたキリスト者の信仰を絶対に確信している」と答えた。この言葉に尋問官は「あなたはキリスト教徒ではない。ただ不条理な異端者であるだけだ」と言った。リードゴウは、無礼な言葉と拷問台と拷問で心を変えることは宗教の本質と本質に反し、聖書に

表出された議論による以外のいかなる他の方法でも彼は全く影響を受けないだろうと言った。

尋問官はリードゴウの答えに激怒し、彼の顔を殴り、悪口を言いながらナイフで刺そうとした。イエズス会会員が彼を止めなかったら、彼はきっとそうしていただろう。

翌日、2 人のイエズス会会員が来て、彼がどのように決めたのか尋ねた。リードゴウは、彼らが自分の意見を変えるべき実質的な理由を示すことができないなら、彼の決定はすでに確定していると言った。最も古参者が彼らの七つの秘跡を見せ、聖人の執り成しと聖綿化（聖餐のパンとワインがキリストの体と血に変わること）、そして彼らの教会の伝統と確固たる普遍性を自慢した。リードゴウはこのすべてを拒否した。「なぜなら、（彼が言うように）私が持っている信仰の表現は使徒の時代から続いてきたものであり、キリストはあなたがたの最大の暗闇の時代にも自分の教会を（しかし見えない）持っておられるからである。彼らの議論が期待したほどの効果がないことを知り、また拷問でも彼の態度を変えることができず、残酷な刑を宣告することへの恐怖もどうしようもないことを知って、彼らは激しい悪意を表明して彼を去った。しかし、刑が宣告される日、彼らは再び来て、今度は言葉と行動で全く違う態度を示し、目には涙まで浮かべ、彼が恐ろしい死を経験しなければならないことを彼らの心の底から残念がるように、そして最も貴重な魂を失うことを嘆くように膝をついて叫んだ。"ああ、愛する兄弟よ、改宗せよ。"これに対し、リードゴウは"私は死も火も怖くない。両方とも準備ができている」と答えた。

彼が受けるべき刑は、4 つの異なる拷問であった。もし彼がその後も生き延びた場合、彼はイースター後にグレナダに移送され、火刑に処されることになった。その夜、この宣告の最初の部分が非常に野蛮なやり方で行われた。神は彼の体と心に力を与え、真理に固く立つようにされ、彼に与えられた恐ろしい刑罰の中でも生き延びることができた。

このような悲惨な状況の中、あるトルコ人の奴隷が彼にレーズンとイチジクを密かに持ってきてくれた。リドゴウが生き延びることができたのは、その奴隷がリドゴウの悲惨な状況に心を動かされ、40 日以上も食べ物を運び続け、彼の世話をしたからだというのは特筆に値する。

そんな中、あるスペイン人紳士がグレナダからマラガにやって来たが、司令官に招かれ、リドゴウが受けたすべてのことを聞くことになった。 つまり、スパイと間違えられたリドゴウが無実であることが判明したとき、彼は自分のお金と書類と怪我に対するある程度の対価を受け取って解放されることができた。 しかし、彼の著作を調査するうちに、彼らの宗教に照らして冒涜的な著作が発見され、このような異端的な意見を変えることを拒否したため、異端審問にかけられ、ついに死刑が決定されたということである。

司令官がこの悲劇的な話をする間、食卓で配膳をしていたフランダースの若者は、知らない人の苦痛に驚き、同情して、その主人の宿舎に戻り、その夜をその囚人のことを思いながら過ごし、翌日、市へ行き、イギリスの商人ウィルドを探し、その話をすべて話してくれた。

すぐにウィルドは他のイギリス商人にこの事実を知らせ、イギリス大使を通じてスペイン王に事件全体を知らせた。 こうして王とスペイン議会にリードゴウの記録が送られ、最終的に彼は釈放された。リチャード・ホウキン卿がリードゴウの書類とお金と本を返すように要求したが、満足できる答えを得ることができなかった。リードゴーは左腕を失い、いくつかの小さな骨が砕けて折れ、それ以来不自由な身になってしまった。 彼はイギリスがヨーロッパの国々や王に奴隷の屈服状態になる危険にさらされていたその平和統治期間中、イギリス議会で実に大きな影響を与えた。

第 6 章 - 教皇庁下のイタリアにおける迫害についての記述

第六章 教皇庁下のイタリアにおける迫害についての記述

イタリアでの迫害について説明しよう：

1. 教皇庁の中心地。

2. 教皇の座。

3. 諸外国に蔓延し、何千もの人々の心を惑わし、人間の理解に迷信と偏見の雲を拡散させた様々な誤謬の源。

この物語を進めるにあたり、私たちは、これまでに起こった最も顕著な迫害や、行われた残酷な行為を含めることにする、

1. ローマ教皇の権能によって

2. 異端審問の力によって。

3. イタリア諸侯の偏屈さによって。

12 世紀、英国人アドリアヌスが教皇となった頃、イタリアで教皇権下の最初の迫害が始まった：

ブレシアの学者で優れた弁士であったアーノルドという人物がローマにやって来て、教会に忍び込んだ腐敗と革新に対して大胆に説教した。彼の説教は非常に明瞭で一貫しており、純粋な敬虔の精神が息づいていたため、元老院議員や多くの民衆は彼の教義を高く評価し、賞賛した。

これにはアドリアヌスも激怒し、異端者としてアーノルドに即刻退去を命じた。しかし、アーノルドはこれに応じなかった。元老院議員や主要な民衆の何人かがアーノルドに味方し、教皇の権威に抵抗したからである。

アドリアヌスはローマ市内に勅令を敷き、聖職者全員を介入させた。アドリアヌスは元老院議員や民衆を説得し、アーノルドを追放することに同意させた。アーノルドは追放の処分を受け、ドイツに退き、教皇に反対する説教を続け、ローマ教会の重大な誤りを暴露した。

そのため、アドリアンは彼の血を渇望し、何度も彼の手に渡そうとした。しかし、アーノルドは長い間、あらゆる罠を避け続けた。やがてフレデリク・バルバロッサが皇帝の威厳を手に入れると、教皇は自らの手で彼に王冠を授けるよう要請した。アドリアンはこれに応じ、同時に皇帝に、アーノルドを彼の手に渡すよう頼み込んだ。皇帝はこの不運な伝道師を容易に引き渡したが、すぐにアドリアンの復讐のために殉教者となった。彼の古い友人や仲間も同じ運命をたどった。

スペイン人のエンセナスはローマに送られ、ローマ・カトリックの信仰に育てられた。しかし、何人かの改革派と話をし、彼らが彼の手に渡したいくつかの論説を読んで、彼はプロテスタントになった。やがてこのことが知れ渡り、身内の一人が彼に不利なことを告げると、彼は教皇と枢機卿会議の命令によって火刑に処せられた。同じ頃、エンセナスの弟もスペイン語の新約聖書を所持していたため、処刑された。しかし、処刑の時刻が来る前に、彼は牢獄から脱出する手段を見つけ、ドイツに引きこもった。

学識のある信徒であったファニヌスは、論争の的となる書物を読み、改革派の信徒となった。ローマ教皇に不利な情報が提出されたため、彼は逮捕され、牢獄に入れられた。ファニヌスの妻、子供、親戚、友人たちは監禁中の彼を訪ね、彼の心を揺さぶり、彼は信仰を捨てて釈放された。しかし、監禁から解放されるやいなや、彼の心は最も重い鎖を感じた。その恐怖は、彼が背教から立ち戻り、ローマ教会の誤りを完全に確信するまでは、耐え難いものであった。棄教の償いをするために、彼はプロテスタントへの改宗者を作るために、公然と、そして激しく、できる限りのことを行い、その努力はかなり成功した。このような活動により、彼は 2 度目の投獄を受けたが、再び棄教するならば命を捧げるという申し出があった。この提案を彼は軽蔑して拒否し、そのような条件では命を軽んじる

と言った。なぜ頑なに自分の意見に固執し、妻子を苦境に立たせるのかと問われ、彼はこう答えた；

私は、彼らを優れた管財人に預けるよう勧めました」。「ファニヌスは答えた。イエス・キリストこそ、私が言うところの管理人であり、これ以上の管理人はいないでしょう"。処刑の日、彼は非常に陽気な様子であったので、それを見ていた者が言った。"イエス・キリスト自身が死の直前に血と水の汗を流すほど苦悶していたのに、このような機会に陽気な様子を見せるのはおかしい"。ファニヌスは答えた：「キリストは、私たちのために、地獄や死とのあらゆる苦悩と葛藤を耐え忍ばれた。こうして、その苦しみによって、キリストを本当に信じる者は、その苦しみへの恐れから解放されたのである"。その後、キリストは絞殺され、遺体は焼かれて灰となり、風に吹き飛ばされた

学問のある軍人であったドミニクスは、いくつかの論争的な著作を読んだ後、熱心なプロテスタントとなり、プラセンティアに退き、非常に多くの信徒に純真な福音を宣べ伝えた。ある日、彼は説教の終わりに言った。"もし明日、信徒が出席してくれるなら、反キリストについて説明し、彼の適切な色で塗り潰そう"。

翌日、大勢の聴衆が集まったが、ドミニクスが説教を始めようとしたとき、民政判事が説教壇に上がり、彼を拘束した。ドミニクスは容易に服従した。しかし、奉行と一緒に行くとき、彼はこんな表現を使った："悪魔がこんなに長い間、私を一人にしておいてくれたことが不思議だ"。彼が尋問にかけられたとき、こんな質問が投げかけられた：「あなたは自分の教義を捨てますか？彼はこう答えた：「私の教義です！私が宣べ伝えているのはキリストの教義であり、その教義のためなら、私は血も贖うし、贖い主のために苦しむことも幸せだとさえ思っている」。彼に信仰を撤回させ、ローマ教会の誤りを受け入れさせるために、あらゆる方法がとられた。しかし、説得も脅迫も効果がないことがわかると、彼は死刑を宣告され、市場で絞首刑に処せられた。

サン・アンジェロ城の近くに住んでいたプロテスタントの紳士ガレアキウスは、その信仰を理由に逮捕された。友人たちの多大な努力の結果、彼は信仰を撤回し、ローマ教会

が提唱する迷信的な教義のいくつかを支持した。しかし、自分の誤りを自覚した彼は、公に撤回を放棄した。そのため逮捕されたガレアキウスは火刑に処せられ、命令に従って杭に鎖でつながれ、火刑が執行されるまで数時間放置された。しかし、ガレアキウスは心を堅く保ち、自分を焼く薪に火をつけるよう死刑執行人に懇願した。炎は驚くほどの速さで燃え上がり、ガレアキウスは数分で感覚を失った。

この紳士の死後間もなく、イタリア各地で多くのプロテスタント信者がその信仰を理由に死刑に処され、彼らの殉教の誠意が確実に証明された。

カラブリア迫害の記録

14 世紀、プラゲラとドーフィニーに住んでいた多くのワルデン派の人々がカラブリアに移住し、同国の貴族の許可を得て荒れ地を開拓した。

カラブリアの領主たちは、新しい臣下や借家人たちが正直で物静かで勤勉であったため、大いに喜んだ。しかし、この国の司祭たちは、彼らに対していくつかの否定的な不満を示した。彼らが行った悪いことを非難することができず、彼らが行わなかったことを非難し、ローマ・カトリック教徒ではないこと。男子を司祭にしなかったこと。女子を修道女にしなかった。

ミサに行かない蝋燭の火を司祭に捧げなかった。巡礼に行かないこと像にお辞儀をしないしかし、カラブリアの領主たちは司祭たちに、この人たちは極めて無害であり、ローマ・カトリック教徒に何の不快感も与えないこと、そして、この人たちがこの国に入ってきたことで収入が大幅に増えた司祭たちに喜んで什分の一を納めていることを告げ、司祭たちを宥めた。

この後、数年間は比較的順調であったが、その間にワルデン派は 2 つの町を形成し、いくつかの村をその管轄に加えた。やがて彼らはジュネーヴに 2 人の聖職者を派遣し、1 人はそれぞれの町で説教し、1 人は自分たちの信仰を公言することを決意した。この情報が教皇ピウス 4 世に伝えられ、教皇はカラブリアから彼らを絶滅させることを決定した

。この目的のために、アレクサンドリーノ枢機卿は、非常に気性が激しく、猛烈な偏屈者であったが、2 人の修道士とともにカラブリアに派遣され、そこで審問官として行動することになった。これらの権限を与えられた者たちは、ワルデン派が建設した町のひとつである聖キシストにやってきて、人々を集め、教皇によって任命された説教師を受け入れるのであれば、彼らが傷つくことはないと告げた。しかし、そうしないならば、財産も命も奪われる。そして、彼らの意向が知られるように、その日の午後、ミサが公に行われ、彼らはそれに出席するように命じられた。

聖キシストの人々はミサに出席するどころか、家族を連れて森に逃げ込み、枢機卿とその共同執政官たちを失望させた。枢機卿は次に、ワルデン派に属するもう一つの町ラ・ガルドに向かい、サン・クシストで受けたような仕打ちを受けるまいと、門に鍵をかけ、すべての道を警備するよう命じた。枢機卿は、ラ・ガルドの住民に、先にサン・クシストの住民に提案したのと同じ提案を行ったが、さらにこんな策略を加えた。サン・クシストの住民はすぐに自分の提案に賛同し、教皇が説教師を任命することに同意したと枢機卿は断言した。ラ・ガルドの人々は枢機卿の話を真実だと思い、聖キシストの兄弟たちの例に倣うと言った。

枢機卿は、一方の町の住民を騙して得点を得たので、もう一方の町の住民を殺害する目的で兵士の部隊を派遣した。そこで枢機卿は兵士たちを森に派遣し、聖キシストの住民を野獣のように狩らせ、老若男女を問わず近寄った者は皆殺しにするよう厳命した。兵士たちは森に入り、その獰猛さの餌食となった。しかし、やがて彼らは、自分たちの命をできるだけ高く売ろうと決意した。そのとき、いくつかの衝突が起こり、半武装のワルデン派が驚異的な武勇を発揮し、双方で多くの者が殺された。そのため、枢機卿は激怒し、ナポリ総督に援軍を要請した。

総督は直ちにナポリ全領土に布告を出し、すべての無法者、脱走兵、その他の禁固刑に処せられた者は、聖キシストの住民に対する遠征を行い、それらの人々を絶滅させるまで武装を続けることを条件に、それぞれの罪を必ず赦免するよう命じた。

この布告を受け、絶望的な運命を背負った多くの人々がやってきて、軽装の中隊に編成され、森を捜索し、改宗派に出会える者は皆殺しにするために派遣された。総督も正規軍を率いて枢機卿に加わった。総督は正規軍を率いて枢機卿と合流し、森にいる貧しい人々にできる限りの嫌がらせをした。捕らえて木に吊るしたり、枝を切り倒して燃やしたり、体を切り裂いて野獣や猛禽類に食わせるために放置したりした。遠距離から射殺したものも多かったが、スポーツとして狩ったものが最も多かった。何人かは洞窟に身を隠したが、飢饉のためにその隠れ家は破壊された。こうして哀れな人々は、無慈悲な迫害者たちの偏狭な悪意を満たすために、さまざまな手段で滅びた。

サン・クシストの住民が絶滅するやいなや、ラ・ガルドの住民が枢機卿と総督の注意を引いた。もし彼らがローマ・カトリックの説得を受け入れるならば、彼ら自身と家族は傷つけられることなく、彼らの家と財産は回復され、誰も彼らを妨害することは許されないという申し出があった。しかし逆に、もし彼らがこの慈悲を拒否するならば、最大限の手段を用い、最も残酷な死が彼らの不服従の確実な帰結となるであろう。

一方では約束し、他方では脅迫したにもかかわらず、これらの立派な人々は一致して、自分たちの宗教を放棄することも、教派の誤りを受け入れることも拒否した。そのため、枢機卿と総督は激怒し、彼らのうち 30 人を恐怖の対象として、直ちに絞首刑に処するよう命じた。

絞首刑に処された者は非常に過酷な扱いを受け、拷問で何人も死んだ。特にシャルランという人物は、あまりに残酷に扱われたため、腹が破裂し、腸が出て、最大の苦しみの中で息を引き取った。しかし、このような蛮行は、それが意図した目的には適わなかった。というのも、絞首刑後も生きていた人々も、絞首刑を感じなかった人々も、等しく信仰を堅持し、肉体的な拷問や精神的な恐怖によって、自分たちの神を捨てたり、像を拝んだりするようなことがあってはならないと、大胆に宣言したからである。

枢機卿の命令で、何人かは裸にされ、鞭で打たれて死んだ。また、ある者は大きなナイフで切り刻まれ、ある者は大きな塔の上から投げ落とされ、多くの者はピッチで覆われ、生きたまま焼かれた。

枢機卿に付き添っていた修道士の一人は、生来野蛮で残酷な性格であったため、これらの貧しい人々の血を自分の手で流したいと枢機卿に願い出た。その願いが許可されると、野蛮な男は大きな鋭利なナイフを手に取り、肉屋が多くの羊を殺すのと同じようにほとんど後悔することなく、4 コアの男、女、子供の喉を切り裂いた。そして、これらの遺体の 1 つ 1 つを四つ割りにするよう命じ、その四つ割りを杭の上に置き、30 マイル圏内の各地に固定した。

ラ・ガルドの主要人物 4 人は絞首刑に処され、聖職者は教会の尖塔のてっぺんから投げ落とされた。その時、通りかかった総督が「犬はまだ生きているか？この判決は残酷に見えるかもしれないが、その通りに実行された。

60 人の女性が、手足が骨に突き刺さるほど激しく拷問された。他にも多くの人々が、さまざまな残酷な手段で死刑にされた。また、他のカトリック教徒よりも憐れみ深いローマ・カトリック教徒が、改宗者たちのために執り成しを行ったとしても、直ちに逮捕され、異端を支持する者と同じ運命をたどった。

枢機卿がローマに呼び戻されたため、ブタン侯爵は、彼らが始めたことにとどめを刺すよう命じられた。

こうして、無害で無害な多くの人々が、他人の迷信に良心を犠牲にしたり、忌み嫌う偶像崇拝の教義を受け入れたり、信じることのできない教師を受け入れたりしないために、財産を奪われ、家を追われ、ついにはさまざまな手段で殺害された。

専制政治には 3 つの種類がある。すなわち、人を奴隷にするもの、財産を差し押さえるもの、心を規定し指図するものである。最初の 2 種類は市民的専制政治と呼ばれ、いつの時代にも独裁的な君主によって行われてきた。彼らは、不幸な臣民の人物を苦しめ、

財産を奪うことに喜びを感じてきた。ローマ教皇の聖職者たちは、迫害する者たちの肉体を拷問し、財産を奪うだけでなく、生命を奪い、精神を苦しめ、できることなら不幸な犠牲者の魂を支配しようとするからである。

ピエモンテの谷における迫害の記録

ワルデン派の多くは、フランスで受け続けた迫害を避けるために、ピエモンテの渓谷に住み着いた。

彼らは無害で、会話も無邪気で、ローマ聖職者に什分の一を納めていたが、ローマ聖職者は満足することができず、彼らに憂さ晴らしを与えたがった：

1. 彼らはローマ教会の教義を信じていなかった。

2. 彼らは死者のために供え物も祈りも捧げなかった。

3. 彼らはミサに行かなかった。

4. 彼らは告白せず、赦しを受けなかった。

5.彼らは煉獄を信じなかったし、友人の魂を煉獄から出すために金を払うこともなかった。

大司教はこの告発を受けて迫害を開始するよう命じ、司祭や修道士たちの迷信的な怒りのために多くの殉教者が出た。

トリノでは、改革派の一人が腸を引き裂かれ、顔の前に置かれた洗面器に入れられ、死ぬまで視界に入ったままだった。ルヴェルでは、火あぶりの刑に処されたカテリン・ジラールが、死刑執行人に石をくれるように頼んだ。しかし、ジラールはそのような意図はないと断言し、処刑人はそれに応じた。ジラールはその石を真剣に見つめながら、こう言った。そして石を地面に投げつけ、炎に身を任せた。さらに多くの改革派がさまざまな手段で弾圧されたり、死刑に処せられたりしたが、ワルデン派の忍耐が尽きると、自分たちを守るために武装し、正規の団体を結成した。

これに憤慨したトリノの司教は、多くの軍隊を調達し、彼らに対して出兵した。しかし、小競り合いや交戦のほとんどで、ワルデン派は勝利を収めた。これは、彼らが敵よりもピエモンテの渓谷の峠道に精通していたことと、彼らが必死になって戦ったことに起因する。

やがて、サヴォワ公でありピエモンテの最高領主であったフィリップ 7 世は、自らの権威を介入させ、自領を大いに混乱させるこの血なまぐさい戦争を止めさせようと決意した。ローマ教皇を侮蔑し、トリノの大司教を侮辱することは望まなかったが、それでも彼は両者にメッセージを送り、将校の代わりに司祭が指揮し、将軍の代わりに聖職者が指揮する軍隊で自分の領土が蹂躙されるのをこれ以上黙って見ていることはできない、また、自分自身は相談すらされていないのに、自分の国が過疎化するのをこれ以上苦しむことはできない、と伝えた。

公爵の決意を知った司祭たちは、公爵の心をワルデン派に向けさせようとあらゆる手を尽くした。しかし公爵は彼らに、自分はこの人々の宗教的信条を知らなかったが、彼らがいつも静かで忠実で従順であることを知ったので、もはや迫害されるべきではないと決心したと告げた。

彼らは公爵に、ワルデン派は邪悪な人々であり、不摂生、不潔、冒涜、姦淫、近親相姦、その他多くの忌まわしい犯罪に溺れる人々であると断言した。彼らの子供たちは、のどが黒く、歯が 4 本並び、体中が毛むくじゃらであった。

公爵は、司祭たちが最も厳粛な態度でその主張の真偽を述べていたにもかかわらず、司祭たちの言葉を信用するほど常識に欠けてはいなかった。しかし公爵は、ピエモンテの渓谷に 12 人の非常に学識と分別のある紳士を派遣し、住民の実際の性格を調査させた。

この紳士たちは、すべての町や村を巡り、ワルデン派のあらゆる身分の人々と会話した後、公爵のもとに戻り、公爵にこの人々について最も好意的な説明をした。彼らを中傷する司祭たちの面前で、彼らは無害で、無邪気で、忠実で、友好的で、勤勉で、敬虔であ

り、非難されているような犯罪を忌み嫌っていると断言した。そして、万一、堕落した個人がこれらの犯罪に陥った場合、彼らの法律により、最も模範的な方法で処罰されるであろう、と。"子供たちについては、"司祭たちは、最も重大で滑稽な虚偽を語っていた。彼らは、生まれつき喉が黒いわけでも、口に歯が生えているわけでも、体に毛が生えているわけでもなく、見るからに立派な子供たちであった。私たちが言ったことを殿下に納得していただくために、（紳士の一人が続けて）主要な男性住民のうち 12 人を連れてきました。彼らは殿下の許可なく、自分たちを守るためとはいえ、無慈悲な敵から命を守るために武器を取ったので、他の住民の名において許しを請いに来たのです。また、さまざまな年齢の子供を連れた女性も数人連れてきました。

公爵は 12 人の代表の謝罪を受け入れ、女性たちと話をし、子供たちを調べた後、彼らを丁重に罷免した。そして、公爵を惑わそうとした司祭たちに、直ちに宮廷を去るよう命じた。そして、領内全域で迫害を停止するよう厳命した。

第 7 代サヴォワ公フィリップが死去したとき、ワルデン派は長い間平和を享受していたが、彼の後継者がたまたま非常に偏屈な教皇主義者であった。同じ頃、ワルデン派の有力者たちが、自分たちの聖職者が公の場で説教を行い、自分たちの教義の純粋さを皆に知らせようと提案した。

これを聞いた新公は大いに憤慨し、かなりの数の軍隊を谷に送り込み、もし人々が改宗しないなら、生きたまま皮を剥ぐと誓った。軍隊の指揮官はすぐに、自分の連れている兵力では彼らを征服するのは現実的でないことに気づいた。そこで彼は公爵に、これほど少ない兵力でワルデン派を征服しようという考えは馬鹿げている、彼らは自分のところにいた誰よりもこの国に精通している、彼らはすべての峠を確保し、武装し、断固として自分たちを守る決意を固めている、と伝えた。また、生きたまま皮を剥ぐことについては、その皮 1 枚につき、12 人の臣下の命を犠牲にすることになると述べた。

この情報に怯えた公爵は軍隊を撤退させ、武力ではなく策略によって行動することを決意した。そこで公爵は、安全な場所からはぐれたワルデン派の者を捕らえるよう命じた。そして、捕らえられた者は生きたまま皮を剥がされるか、焼かれた。

それまでワルデン派は、新約聖書と数冊の旧約聖書をワルデン派の言葉で持っていただけだった。しかし、彼らは今、自分たちの言語で聖典を完全なものにすることを決意した。そこで、彼らはスイス人の印刷工を雇い、旧約聖書と新約聖書をワルデン派の言葉で完全なものにさせた。

教皇パウロ 3 世は偏狭な教皇主義者であったが、教皇の座に就くと、すぐにトリノの議会に、あらゆる異端の中で最も悪質なものとしてワルデン派を迫害するよう要請した。

議会は容易に同意したが、突然、数人が逮捕され、彼らの命令で焼かれた。彼はローマ・カトリック教徒として育ったが、改革派の聖職者が書いたいくつかの論文を読み、ローマ教会の誤りを確信した。しかし、しばらくの間、彼の心は揺れ動き、どのような説得を受け入れるべきかほとんどわからなかった。

しかし、やがて彼は改革派の宗教を完全に受け入れ、すでに述べたように逮捕され、トリノ議会の命令によって焼却された。

トリノ議会で会議が開かれ、ピエモンテの渓谷に代議員を派遣することが合意された

1.もしワルデン派がローマ教会の懐に入り、ローマ・カトリックの宗教を受け入れるならば、彼らはその家屋、財産、土地を享受し、家族とともに、いささかの妨害も受けることなく生活できるはずである。

2.服従を証明するために、12 人の主要人物とすべての聖職者、校長たちをトリノに派遣し、自由裁量で処分を受けること。

3.教皇、フランス国王、サヴォイ公爵は、この機会にトリノ議会の議事を承認し、認可した。

4.ピエモンテの渓谷に住むワルデン派の人々がこれらの提案に従うことを拒否した場合、迫害が起こり、確実に死に至るであろう。

これらの各命題に対して、ワルデン派はそれぞれ次のように気高く答えた：

1.いかなる考慮も、彼らに自分たちの宗教を放棄させてはならない。

2.彼らは、最良の、最も尊敬に値する友人を、最悪の、最も執拗な敵の保護と裁量に委ねることには決して同意しないだろう。

3.彼らは、天に君臨する王の承認を、どんな一時的な権威よりも重んじた。

4.彼らの魂は肉体よりも尊い。

トリノ議会は、この的を射た気骨のある反論に大いに憤慨した。彼らは、これまで以上に熱心に、適切な用心深さで行動しないワルデン派の人々を誘拐し続け、最も残酷な死に見舞われることになった。不運なことに、そのうちの一人、アングローニュ公使ジェフェリー・ヴァルナグル（ ）を捕らえ、異端者として火刑に処した。

そして、ピエモンテの渓谷から改革派を完全に駆逐するために、フランス国王にかなりの軍隊を要請した。しかし、軍隊が進軍しようとした矢先、ドイツのプロテスタント諸侯が割って入り、ワルデン派が攻撃された場合は軍隊を派遣して支援すると脅した。フランス国王は戦争に突入することを望まず、軍隊を差し戻し、トリノ議会にピエモンテで活動するための兵力は今のところ確保できないと通告した。議会の議員たちはこの失望に大いに腹を立てたが、迫害は次第に収まった。というのも、彼らは偶然捕らえた改宗者たちを死刑にするしかなく、ワルデン派の人々も日に日に警戒心を強めていったため、彼らの残虐な行為は、それを行使する対象がないために沈静化せざるを得なかったからである。

教皇のヌンシオが仕事でサヴォイ公爵のもとを訪れ、サヴォイ公爵がピエモンテの渓谷からワルデン派を完全に根絶やしにすることも、ローマ教会の懐に入らせることもまだしていないことに驚いていると告げた。彼はそのような行為を疑いの目で見ずにはいられず、彼は本当に異端者たちに好意を抱いていると考えており、教皇聖下にこの件を報告すべきであると述べた。

この反省に心を痛め、教皇に誤解を与えたくない公爵は、自分の熱意を示すため、また以前の怠慢を今後の残酷さで償うために、最大限の厳しさで行動することを決意した。そこで公爵は、すべてのワルデン派に対し、死罪に処すれば定期的にミサに出席するよう、明確な命令を出した。彼らはこれを絶対に拒否した。これを受け、彼は手ごわい軍隊を引き連れてピエモンテの渓谷に入り、猛烈な迫害を開始し、多数の人々が絞首刑にされ、溺死させられ、裂かれ、木に縛りつけられ、突起で刺され、断崖から投げ落とされ、焼かれ、刺され、むち打たれ、頭を下にして磔にされ、犬に苦しめられるなどした。

逃げた者は財物を略奪され、家を焼き払われた。彼らは、牧師や学校長を捕らえたときは特に残酷で、想像もできないような絶妙な拷問を加えた。捕らえた者の中に信仰が揺らいでいる者がいたとしても、死刑にはせず、ガレー船に送り、苦難の末に改宗させた。

この時、公爵に付き添っていた最も残酷な迫害者は 3 人であった。1.トマス・インコメル、背教者。彼は改革派の宗教で育ったが、信仰を捨て、教派の誤りを受け入れ、修道士になった。彼は大の放蕩者で、不自然な犯罪に手を染め、ワルデン派の略奪に貪欲であった。2.2.コルビス、非常に凶暴で残酷な性格の男で、囚人を調べるのが仕事だった。3.3.司法長官。ワルデン派の処刑を強く望み、処刑されるたびに懐に金が入るからである。

この 3 人はどこまでも無慈悲だった。そして、彼らが来るところでは、罪のない人々の血が必ず流れた。公爵、この 3 人、軍隊がそれぞれの行軍で行った残虐行為以外にも、地方では多くの蛮行が行われた。渓谷にある町ピニュロールには修道院があり、修道院の修道士たちは、改宗者たちを平気で傷つけることができると知り、ワルデン派の家々を

略奪し、教会を取り壊し始めた。修道士たちは、この修道院に入れば、改宗者たちを平気で傷つけることができると考え、ワルデン派の家々を略奪し、教会を取り壊した。

教会を破壊し、家々を焼き払い、財産を奪い、家畜を盗み、土地を自分たちのものに変え、聖職者を炎に捧げ、ワルデン派の人々を森に追いやった。

ローマ・カトリックの暴漢たちが、説教に行こうとした牧師を捕まえ、都合のいい場所に連れて行き、焼き殺そうと決めた。このことを知った教区の人々は、武装して暴徒を追跡し、牧師を救い出す決意を固めたようであったが、暴徒はそれを察知するやいなや、哀れな紳士を刺し、血まみれで苦しんでいる彼を残して、足早に退却していった。驚いた教区の人々は、牧師を助け出そうと手を尽くしたが無駄だった。

ピニュロールの修道士たちは、サンジェルマンと呼ばれる渓谷の町の牧師を自分たちの権力に引き入れたいと強く思い、彼を逮捕するために荒くれ者の一団を雇った。この一団は、以前その聖職者に仕えていた裏切り者によって指揮されていた。彼はその家への秘密の道をよく知っており、近隣を警戒させることなく案内することができた。案内人はドアをノックし、そこに誰がいるのかと尋ねられ、自分の名前で答えた。聖職者は、自分が好意を寄せている人物から危害を加えられるとは思っていなかったので、すぐにドアを開けた。しかし、暴漢たちに気づき、彼は後ずさりして裏口に逃げた。しかし、暴漢たちは駆け込んできて後を追い、彼を捕らえた。家族を皆殺しにした彼らは、彼をピニェロールの方へと進ませ、矛、槍、剣などで彼を追い立てた。彼はかなりの時間牢獄に入れられ、その後、火あぶりにされるために火あぶりにされた。その時、命を守るために信仰を捨てていたワルデン派の 2 人の女性が、彼を火あぶりにするために薪を火あぶりに運ぶように命じられた。そして、彼女たちが薪を置くと、"邪悪な異端者よ、あなたが私たちに教えた邪悪な教義の代償として、これを受け取りなさい

"と言った。この言葉を二人は彼に繰り返したが、彼は冷静に答えた。"私は以前、あなた方によく教えたが、あなた方はその後、悪いことを学んだ"。そのとき、火は薪にくべられ、彼は声が許す限り主の御名を呼び続けながら、たちまち焼き尽くされた。

ルツェルンとアングローニュの改革派は、サンジェルマンの兄弟たちを助けるために、武装した軍隊を送った。この武装集団はしばしば暴徒を攻撃し、しばしば全滅させたので、修道士たちは非常に恐れ、彼らを守る正規軍を調達できるようになるまで、しばらくの間ピニュロール修道院を離れた。

公爵は、当初想像していたほどの成功を収めたとは考えず、軍勢を大幅に増強した。修道士に属する暴徒の一団に加勢するよう命じ、釈放された者が武器を持ち、軽装の中隊を作ってワルデン派退治に協力することを条件に、一般的な牢獄の釈放を行うよう命じた。

ピエモンテの渓谷は、アルプス山脈と呼ばれる巨大な山々の麓に位置している。

軍勢は、来る先々で町や村を略奪し、焼き払った。しかし、軍隊はアルプス山脈への峠を越えることはできなかった。峠は、常に敵を撃退してきたワルデン派の人々によって勇敢に守られていた。

ある兵士がワルデン派の一人を捕らえ、その右耳を噛みちぎった。そして、その男を刺し、溝に投げ込んだ。軍隊の一団が、洞窟の中で 100 歳を超える老人とその孫娘（18 歳くらいの乙女）を見つけた。彼らは哀れな老人を最も非人道的な方法で屠り、それから少女を犯そうとした。しかし彼らは彼女を追いかけ、彼女は断崖絶壁から身を投げて死んだ。

ワルデン派は、力による力への対抗をより効果的にするため、ドイツのプロテスタント勢力、およびドーフィニーとプラゲラの改革派と同盟を結んだ。これらはそれぞれ兵力を提供することになっていた。こうして強化されたワルデン派は、アルプス山脈の山々を去り（冬が近づいていたため、すぐに滅びるに違いなかった）、公爵の軍を自分たちの生まれ故郷の谷から退去させることを決意した。

サヴォワ公爵は今、戦争に疲れ果てていた。戦争には多大な疲労と不安、膨大な数の兵士と多額の資金が費やされた。予想以上に退屈で血なまぐさい戦いであっただけでなく

、当初の想像以上に費用がかかった。教皇のヌンシオ、軍隊に同行して戦争を奨励した司教、修道士、その他の教会関係者が、さまざまな口実で奪った富の大部分を沈めてしまったからである。このような理由と、公爵夫人が亡くなったという知らせを受けたばかりであったこと、また、ワルデン派が結んだ条約によって、これまで以上に強大になることを恐れたため、彼は軍を率いてトリノに戻り、ワルデン派と和平を結ぶことを決意した。

公爵はこの決意を実行に移したが、教会関係者の意向には大きく反していた。教会関係者は最大の利益者であり、復讐を最も喜んだ人物であった。和平協定が批准される前に、公爵はトリノに戻ってすぐに亡くなった。しかし、死の床で公爵は息子に、公爵が意図したことを実行し、ワルデン派にできる限り好意的であるよう厳しく命じた。

公爵の息子であるシャルル・エマニュエルがサヴォワの領地を継承し、父の遺訓に従ってワルデン派との和平を全面的に承認した。

ヴェネツィアにおける迫害の記録

ヴェネチアに異端審問官がいなかった頃、多くのプロテスタント信徒がこの地に住み着き、彼らが公言する教義の純粋さと会話の無邪気さによって、多くの改宗者が生まれた。

1542 年、教皇は、プロテスタントが大幅に増加していることを知らされ、審問官をヴェネツィアに派遣した。それゆえ、厳しい迫害が始まり、多くの立派な人々が、純粋さをもって神に仕え、偶像崇拝の装いを軽んじたために殉教した。

プロテスタントが生命を奪われる方法はさまざまであったが、この機会に初めて考案されたある特別な方法について説明しよう。刑が言い渡されるとすぐに、囚人は大きな石に通した鉄の鎖を体に固定された。その後、囚人は顔を上に向けて板の上に横たえられ、2 隻のボートの間に挟まれて海上のある距離まで漕がされた。

ヴェニスの審問官の管轄権を否定する者がいれば、彼らはローマに送られ、そこでわざと湿った牢獄に入れられ、審問に呼ばれることもなかった。

ヴェネツィア市民のアンソニー・リチェッティはプロテスタントとして逮捕され、すでに述べた方法で溺死刑を宣告された。死刑が執行される数日前、リチェッティの息子がリチェッティに会いに行き、自分の命が助かり、父親がいなくならないように、罪を撤回してほしいと懇願した。それに対して父親はこう答えた。"善良なキリスト教徒は、贖い主の栄光のために、財産や子供だけでなく、命そのものを放棄しなければなりません。"

"ですから私は、永遠に続く世界の救いのために、この世のあらゆるものを犠牲にすることを決意しています"

ヴェニスの領主たちも同様に、もし彼がローマ・カトリックの宗教を受け入れるなら、命を与えるだけでなく、彼が抵当に入れていたかなりの財産を取り戻し、それを自由に贈与するという言葉を彼に送った。しかし、彼はこれを絶対に拒否し、自分の魂は他のどんなことよりも大切だと貴族たちに伝えた。そして、フランシス・セガという囚人仲間が改宗したと聞かされ、彼は答えた。しかし、私は自分の義務を堅く守り続けます」と答えた。彼に信仰を捨てるよう説得しようとしても効果がなかったため、彼は刑期通りに処刑された。

リチェッティがフランシス・セガの背教について聞かされていたことは全くの虚偽で、彼は一度も撤回を申し出ることなく、堅く信仰を守り続け、リチェッティの数日後にまったく同じ方法で処刑された。フランシス・スピノラは、非常に学識のあるプロテスタントの紳士であったが、審問官の命令によって逮捕され、法廷に連行された。そして、主の晩餐に関する論文が彼の手に渡され、その著者を知っているかどうか尋ねられた。それに対して彼は、"私は自分自身がこの論文の著者であることを告白すると同時に、この論文には聖典によって承認され、聖典に合致する

もの以外は一行も含まれていないことを厳粛に断言します "と答えた。この告白により、彼は数日間、地下牢に幽閉された。

二度目の審問にかけられた彼は、教皇の公使と審問官たちを無慈悲な野蛮人だと非難し、ローマ教会が行っている迷信と偶像崇拝をまざまざと見せつけた。

3 回目の尋問で、彼らは彼に誤りを撤回するかどうか尋ねた。それに対して彼は、彼が主張している教義は間違っておらず、キリストとその使徒たちが教え、聖典の中で私たちに伝えられている教義とまったく同じであると答えた。その後、審問官たちは彼に溺死刑を宣告し、それはすでに述べた方法で執行された。彼は至って平静を装って死を迎え、死を望んでいるように見え、自分の命を長らえることは、来るべき世においてのみ期待できる真の幸福を遅らせることにしかならないと宣言した。

イタリアで殉教した数人の著名人の記録

ジョン・モリウスは、評判の良い両親のもとローマで生まれた。12 歳のときにグレイ修道会の修道院に預けられ、そこで芸術、科学、語学の分野でめざましい成長を遂げ、18 歳のときに司祭になることを許された。

その後、フェラーラに送られ、6 年間研究を続けた後、フェラーラの大学で神学を教えることになった。その後、不幸にも、福音の真理を偽り、ローマ教会の誤りを覆い隠すために、その優れた才能を発揮した。何年かフェラーラに滞在した後、ベホニア大学に移り、そこで教授となった。改革派の牧師が書いたいくつかの論説を読んだ彼は、教皇の誤りを十分に認識し、すぐに熱心なプロテスタントになった。

そこで彼は、福音の純粋さに従って、聖パウロのローマ人への手紙を定期的に説教することにした。彼の説教に絶えず参加する人々の多さには驚かされたが、司祭たちは彼の教義の趣向を知ると、そのことをローマに報告し、教皇はコルネリウスという修道士をボノニアに派遣して、ローマ教会の教義に従って同じ手紙を説かせた。しかし、人々は 2 人の説教者の間にあまりに不公平があることに気づき、モッリウスの聴衆は増え、コルネリウスは空席のベンチで説教をせざるを得なくなった。

コルネリウスはローマ教皇に自分の成功の顛末を報告し、教皇は直ちにモッリウスを逮捕するよう命じた。ボノニアの司教は、モッリウスに撤回しなければ火刑に処すと通告した。しかし、彼はローマに上訴し、ローマに移された。

ローマで彼は公開裁判を受けたいと懇願したが、教皇はこれを絶対に拒否し、自分の意見を文書で説明するよう命じた：

原罪。自由意志ローマ教会の無謬性教皇の無謬性信仰による義認煉獄実体のないものミサ耳介告解死者のための祈り聖体聖人への祈り。巡礼に行く。極度の不浄未知の言語で礼拝を行うこと、などなど。

彼はこれらすべてを聖書の権威から確認した。ローマ教皇はこの時、政治的な理由から、当面の間は彼を赦したが、すぐに彼を逮捕し、死刑に処した。

その翌年、プロテスタント信者のロンバルド人フランシス・ガンバが逮捕され、ミラノ元老院によって死刑が宣告された

。処刑場で修道士が彼に十字架を差し出し、彼はこう言った。"私の心はキリストの真の功徳と善意で満たされているので、キリストを思い浮かべるための無意味な棒切れはいらない"。この表現のために、彼の舌は穴を開けられ、その後、彼は焼かれた。

西暦 1555 年、パドヴァ大学の学生であったアルゲリウスは、偉大な学識の持ち主であったが、改革派の宗教を受け入れ、他の人々を改宗させるために全力を尽くした。このような活動により、彼は教皇に異端として告発され、逮捕されてヴェネツィアの牢獄に収監された。

教皇は、アルゲリウスの偉大な学識と驚くべき天賦の才能を知り、プロテスタントの大義を捨てるよう彼を説得できれば、ローマ教会にとって無限の有益になると考えた。そこで彼は彼をローマに呼び寄せ、最も不敬な約束によって、彼を自分の目的に引き入れようとした。しかし、その努力もむなしく、ローマ教皇は彼に火刑を命じた。

西暦 1559 年、カラブリアで宣教するためにジュネーヴから派遣されたジョン・アロイシウスは、そこでプロテスタントとして逮捕され、ローマに運ばれ、教皇の命令によって焼かれた。ジェームズ・ボヴェリウスも同じ理由でメッシーナで焼かれた。

A.D. 1560 年、ローマ教皇ピウス 4 世は、イタリア全土でプロテスタントを厳しく迫害するよう命じた。この時に行われた残酷な行為について、学識があり人道的なローマ・カトリック教徒は、ある貴族に宛てた手紙の中でこのように語っている：「閣下、私は現在行われている迫害について、私の感情を開示することを禁じ得ません：私は、この迫害は残酷で不必要なものであり、死刑の方法は人間の処刑というよりも、子牛や羊の屠殺に似ていることに戦慄を覚えます。閣下には、私自身が目撃した恐ろしい光景をお話ししましょう：70 人のプロテスタントが一緒に一つの不潔な牢獄に閉じこめられていました。死刑執行人がその中に入り、残りの中から一人を選び出し、目隠しをし、牢獄の前の開けた場所に連れ出し、極めて冷静に喉を切り裂きました。そして、血まみれになりながら再び牢屋に入り、ナイフを手に別の者を選び、同じように処刑した。閣下、彼はこれを全員が死刑になるまで繰り返しました。このときの私の感覚については、閣下のご感想にお任せいたします。もうひとつ申し上げなければならないのは、彼らが死に直面したときの忍耐強さである。彼らは諦観と敬虔さに満ち、熱心に神に祈り、明るく運命に立ち向かっているように見えた。死刑執行人が血まみれのナイフを歯で挟み、血まみれになりながら、なんと恐ろしい姿をしていたことか。

ローマに滞在していた若いイギリス人がある日、教会の前を通りかかった。司教が聖体を運んでいるのを見た若者は、それを奪い取って地面に投げつけ、足の下に踏みつけた。この行為は民衆をひどく怒らせ、その場で彼を八つ裂きにしようとした。しかし司祭たちは、教皇の判決に従うよう説得した。

このことが教皇に報告されると、教皇は非常に憤慨し、囚人を直ちに火刑に処すよう命じた。しかし、枢機卿は、ゆっくりと段階を踏んで処罰し、拷問して、彼が特定の人物

にそそのかされてこのような残虐な行為を行ったかどうかを突き止めた方がよいと言って、この早急な判決を思いとどまらせた。

このことが承認されると、彼は最も模範的な厳しさで拷問された。にもかかわらず、彼らは彼から

"私がしたようにすることは神の意志だった "という言葉しか聞き出せなかった。

教皇は彼にこう宣告した。

1.彼は処刑人によって、裸のままローマの通りを歩かされた。

2.悪魔の像を頭にかぶること。

3.彼のズボンに炎の絵が描かれていること。

4.右手を切り落とされる。

5.こうして行列をなして運ばれた後、彼は焼かれた。

この宣告を聞いたとき、彼は神に、それをやり遂げる力と不屈の精神を与えてくださいと願った。街路を通り過ぎるとき、彼は人々から大いに嘲笑され、ローマ人の迷信について厳しいことを言われた。しかし、行列に加わっていた枢機卿が彼の言葉を耳にし、猿ぐつわをするよう命じた。

彼が教会のドアの前まで来て、司祭を踏みつけると、絞首刑執行人が彼の右手を切り落とし、棒に固定した。その後、2 人の拷問者が炎の松明を持って、彼の肉を焼き尽くした。処刑場で、彼は自分を杭に縛り付ける鎖に接吻した。修道士が聖人の像を差し出すと、彼はそれを脇に打ち捨て、杭に鎖でつながれたまま、薪に火がつけられ、彼はすぐに灰燼に帰した。

前述の処刑の少し後、長い間異端審問の囚人であった由緒ある老人が火あぶりの刑を宣告され、処刑のために引き出された。杭に固定されたとき、司祭が彼に十字架を突きつ

けた。司祭はこれを厳しく叱責した。しかし祭司は、彼に第一戒と第二戒を思い出し、神ご自身が命じられたように、偶像崇拝を慎むように命じた。そして、これ以上話してはいけないと猿ぐつわをされ、薪に火をつけられて炎の中で殉教した。

サルーセス侯国における迫害の記録

西暦 1561 年、ピエモンテの渓谷の南側に位置するサルーセス侯爵領には、主にプロテスタント信者が住んでいた。侯爵はまず聖職者を追放し、群れを離れることを拒んだ者は必ず投獄され、ひどい拷問を受けた。

間もなく、侯領はサヴォワ公の所有となり、公はすべての町や村に宛てて、ミサに参加するようにとの回状を送った。この書簡を受け取ったサリュースの住民は、一般的な書簡を返信した。

公爵は手紙を読んだ後、しばらくプロテスタントの邪魔をしなかった。しかし、やがて公爵は、ミサに従うか、15 日以内に公爵の領地を去るかのいずれかを迫った。この予期せぬ勅令に、プロテスタントは代理を公爵に送り、勅令の撤回、あるいは少なくとも緩和を求めた。しかし、彼らの諫言もむなしく、勅令は絶対的なものであると理解された。

ある者は追放を免れ、財産を守るためにミサに行くほど弱く、またある者はすべての所持品とともにさまざまな国に追放された。そして、多くの者は、長い間、その時を怠り、価値のあるものをすべて捨てて、急いで侯爵領を去らざるを得なかった。不幸にも残ってしまった者たちは、捕らえられ、略奪され、死刑に処せられた。

17th 世紀におけるピエモンテの渓谷における迫害の記述

ローマ教皇クレメンス 8 世は、プロテスタントに信仰を放棄させるため、ピエモンテの渓谷に宣教師を派遣した。この宣教師たちは、渓谷のいくつかの場所に修道院を建てたが、改革派にとっては非常に厄介な存在となり、修道院は、自分たちを抑制するための要塞としてだけでなく、自分たちを害するあらゆる者が逃げ込む聖域として現れた。

プロテスタントはサヴォワ公爵に、この宣教師たちの横柄な態度と悪行に反対するよう請願した。公爵は、プロテスタントに不利な法廷での証人は 1 人で十分であり、プロテスタントにいかなる罪でも有罪判決を下した証人は 100 クラウンを得る権利があると宣言した。

このような勅令が公布されると、多くのプロテスタントが偽証と貪欲に殉じたことは容易に想像できる。何人かの悪徳教皇は、報酬のためならプロテスタントに対してどんなことでも誓い、その偽誓の赦しを求めて自分たちの司祭のところへ飛んで行ったからである。もしローマ・カトリック教徒の中に、他の者よりも良心のある者がいて、彼らの残虐な犯罪を咎めたなら、彼ら自身が異端者の幇助者として密告され、処罰される危険があった。

宣教師たちは、プロテスタントの書物を燃やすために、彼らの手に渡そうと全力を尽くした。プロテスタントが書物を隠すために最大限の努力をしたとき、宣教師たちはサヴォワ公爵に手紙を書いた。サヴォワ公爵は、彼らの聖書、祈祷書、宗教書を引き渡さなかったという凶悪な罪のために、彼らを駐屯させるために多くの軍隊を送った。これらの軍属はプロテスタントの家々で大きな災いを起こし、大量の食料を破壊したため、多くの家庭が破滅した。

サヴォワ公は、プロテスタントの棄教をできるだけ奨励するため、「異端者がカトリックに改宗するよう奨励することは、われわれの意志であり、喜びである。サヴォワ公も同様に、異端者撲滅評議会と呼ばれる裁判所を設置した。この法廷は、プロテスタント教会の古くからの特権と、プロテスタントに有利になるように時折出されていた法令について調査することになっていた。しかし、これらの調査は、最も明白な偏愛のもとに行われ、古い憲章は間違った意味にこじつけられ、改革派に有利になるようなあらゆるものの意味を曲げるために詭弁が用いられた。

このような厳しさだけでは十分でないかのように、公爵はまもなく別の勅令を公布し、プロテスタントは公私を問わず、校長や家庭教師として働いてはならないと厳しく命じた。プロテスタントは、公私を問わず、いかなる芸術、科学、言語も教えてはならない。

この勅令の直後には、プロテスタントはいかなる利益、信頼、名誉のある場所にも就いてはならないという別の勅令が出された。そして、迫害が近づいていることを示す確かな徴候は、最終的な勅令で示された。この勅令では、すべてのプロテスタントはミサに熱心に出席するよう、はっきりと命じられていた。

このような命令を含む勅令の公布は、血塗られた旗を広げることに例えられるかもしれない。教皇派が最初に注目したのは、熱心なプロテスタントであったセバスチャン・バサン氏であった。彼は宣教師たちに捕らえられ、監禁され、15 ヶ月間苦しめられ、その後焼かれた。

迫害が始まる前、宣教師たちは誘拐犯を使ってプロテスタントの子供たちを連れ去り、私的にローマ・カトリック教徒として育てさせた。しかし今では、彼らは公然と力ずくで子供たちを連れ去り、抵抗があれば親を殺害した。

迫害をより強力なものにするため、サヴォワ公はローマ・カトリックの貴族と属領の総会を招集し、改革派に対する厳粛な勅令が発表された：

1.ローマ教皇の権威維持のため。

2.教会の生活が、すべて一つの統治形態の下に置かれるように。

3.全当事者間の結束を図る。

4.すべての聖人とローマ教会の儀式に敬意を表して。

この厳しい勅令に続いて、西暦 1655 年 1 月 25 日、公爵の認可の下、民法博士アンドリュー・ガスタル

ドによって発表された最も残酷な命令が出された。この命令は、改革派のプロテスタント一家のすべての当主と、その一家の個人（地位、程度、条件の如何を問わず、例外なく）.... ルツェルン、サン・ジョヴァンニ、ビビアナ、カンピリオーネ、サン・セコンド、ルツェルネッタ、ラ・トッレ、フェニーレ、ブリチェラッシオに居住する者、または領地を所有する者...に居住し、所領を所有する者は、その公表後 3 日以内に、これらの場所から退去し、出発し、殿下がお好きな間に容認される場所と範囲、特に Bobbio、Angrogne、Vilario、Rorata、Bonetti 郡に移されるべきである。

「限られた時間内にローマ・カトリックに改宗しない限り、死と家財没収を覚悟しなければならない」。冬のさなかにこのようなスピードで逃亡することは、特に山に囲まれたこの国では、好ましい仕事とは思われないかもしれない。突然の秩序はすべての人に影響を与え、他の時期ならほとんど気づかれなかったようなことが、今では最も目立つ形で現れた。子連れの女性も、寝かされて間もない女性も、この突然の撤収命令には同情の対象にはならなかった。そして不幸なことに、その冬は著しく厳しく、厳しかった。しかし、教皇派は約束の時刻になると、十分な衣服も持たせることなく、民衆を居住地から追い出した。そして、天候の厳しさや食料不足のために、多くの者が山中で命を落とした。しかし、勅令が公布された後に残った何人かは、最も過酷な扱いを受け、教皇派の住民に殺害されたり、谷間に駐屯していた軍隊に射殺されたりした。このような残酷な仕打ちについては、現地にいたプロテスタント信者が書いた手紙に特に詳しく書かれている。「軍隊は足場を固め、近隣の教派の住民も加わって非常に多くなり、私たちが略奪者たちの運命の獲物であることを知って、猛烈な勢いで私たちに襲いかかった。サヴォイ公爵の軍隊と教皇派の住民のほかに、フランス軍の補助部隊数個連隊、アイルランド旅団に属する数個中隊、無法者、密輸業者、囚人で構成された数個の一団がおり、彼らはピエモンテからプロテスタントを絶滅させるのに協力したことで、現世での恩赦と自由、来世での赦免を約束されていた。

「この武装した大群は、ローマ・カトリックの司教と修道士に励まされ、最も激しい方法でプロテスタントに襲いかかった。家々の床は血に染まり、通りには死体が散乱し、あちこちからうめき声や叫び声が聞こえてきた。ある者は武装し、軍隊と小競り合いをした。そして多くの者が家族を連れて山へ逃げた。ある村では、男たちが逃げ去った後、150 人の女と子供たちを残酷に苦しめ、女たちは首をはね、子供たちは脳みそをぶちまけた。ヴィラリオとボッビオの町では、ミサに行くことを拒んだ 15 歳以上の者のほとんどが、頭を下にして磔にされた。そして、それ以下の年齢の者たちの最も多くが絞殺された。

サラ・ラティニョール・デ・ヴィーニュは 60 歳の女性で、兵士たちに捕らえられ、聖人に祈りを捧げるよう命じられた。

マーサ・コンスタンティンはハンサムな若い女性だったが、数人の軍隊に非常に卑猥で残酷な扱いを受け、まず彼女を犯し、次に乳房を切り落として殺した。それを揚げて何人かの仲間の前に出したが、仲間はそれが何であるかも知らずに食べた。彼らが食べ終わると、他の者たちが自分たちが何を食べたかを告げ、その結果、喧嘩が起こり、剣が抜かれ、戦いが起こった。その争いで何人かが殺されたが、その大部分は、女の恐ろしい虐殺に関与し、仲間にあのような非人道的な欺瞞を働いた者たちだった。

何人かの兵士がスラシニエールの男を捕らえ、剣の切っ先を耳と足に突き刺した。そして、赤熱したペンチで彼の手足の指の爪を引きちぎり、ろばの尻尾に縛り付けて通りを引きずり回した。

プロテスタントのピーター・シンモンズ（80 歳くらい）は、首とかかとを縛られ、断崖絶壁から投げ落とされた。落下中、木の枝が彼を縛っていたロープに引っかかり、中腹に吊り下げられたため、彼は数日間苦しみ、やがて空腹で惨めに息を引き取った。

エセイ・ガルシーノは宗教を捨てることを拒否し、細かく切り刻まれた。兵士たちは嘲笑して、彼をミンチにしたと言った。アルマンという名の女性は、四肢を切り離され、

それぞれの部位が垣根に吊るされた。二人の老女は切り裂かれ、野原の雪の上に放置されて死んだ。奇形の老女は鼻と両手を切り落とされ、そのまま放置され、血を流して死んだ。

多くの男、女、子供が岩から投げ落とされ、粉々になった。ラ・トーレのプロテスタント女性マグダレン・ベルティノは、全裸にされ、頭を股の間に縛られ、断崖絶壁のひとつに投げ落とされた。同じ町のマリア・レイモンデは、死ぬまで骨から肉を切り取られた。

ヴィラリオのマグダレン・パイロットはカストルスの洞窟で切り刻まれ、アン・シャルボニエールは杭の一端を体に突き立てられた。アン・シャルボニエールは杭の一端を体に突き刺され、もう一端は地面に突き刺さったまま放置され、ヴィラリオ教会の長老ジェイコブ・ペリンとその弟ダビデは生きたまま皮を剥がされた。ラ・トーレの住民でジョヴァンニ・アンドレア・ミチアルムという男が 4 人の子供を連れて逮捕され、そのうちの 3 人が目の前で切り刻まれた。兵士たちは子供が死ぬたびに、宗教を捨てるかどうか尋ねたが、彼は常にこれを拒否した。兵士の一人が、最後の一人の末っ子を両足で抱え上げ、父親に同じ質問をしたところ、父親は前と同じように答えた。兵士たちは父親を追って発砲したが、命中しなかった。兵士たちは彼を追って発砲したが、外れた。彼は咄嗟に逃げ出し、アルプス山脈に身を隠した。

17 世紀、ピエモンテの谷間でのさらなる迫害

ジョヴァンニ・ペランキオンは、教皇派に転向することを拒否したため、片足を口バの尾に縛られ、ルツェルンの通りを引きずられた。非人間的な暴徒の喝采の中、彼は石を投げつけられ続け、「悪魔に取り憑かれているのだから、石を投げつけても、通りを引きずっても死ぬことはない。そして彼らは彼を川辺に連れて行き、首を切り落とし、その首と胴体を埋葬せずに川岸に放置した。

ピーター・フォンテーヌの娘マグダレンは 10 歳の美しい子供だったが、兵士たちに犯され殺された。もう一人の同じ年頃の少女は、ノヴァ荘で生きたまま焼き殺された。また、ある貧しい女性は、兵士たちが自分の家に向かってくると聞き、幼い息子が眠っていたゆりかごを奪い取って森のほうへ逃げた。しかし、兵士たちは彼女を見て追いかけた。彼女がゆりかごを下ろして身軽になると、兵士たちはすぐにそこに来て、幼子を殺害し、さらに追跡を続けて、母親を洞窟の中に見つけ、そこでまず犯し、次に切り刻んだ。

ボッビオ教会の長老ヤコブ・ミケリーノと他のプロテスタント数名は、腹に固定された鉤で吊るされ、耐え難い拷問の中で息絶えるに任された。

ジョヴァンニ・ロスタグナルは、プロテスタントの由緒ある信徒で、四十数歳であったが、鼻と耳を切り落とされ、体の肉質の部分を切り刻まれ、出血多量で死に至った。

ダニエル・セレジオとその妻、ジョヴァンニ・デュラント、ロドウィッチ・デュラント、バーソロミュー・デュラント、ダニエル・ルヴェル、ポール・レイノーの 7 人が、口に火薬を詰められ、火をつけられて頭を吹き飛ばされた。

ロラタの校長ヤコブ・ビローネは、改宗を拒んだために全裸にされた。赤熱したペンチで足の指と指の爪を剥がされ、短剣の先で手に穴を開けられた。その後、彼は真ん中に紐を巻かれ、両脇に兵士を従えて通りを歩かされた。曲がるたびに、右手の兵士は彼の肉に傷をつけ、左手の兵士は殴打銃で彼を殴った。それでも彼はこれらの質問に否定的な返事をし、やがて橋に連れて行かれ、手すりの上で首を切り落とされ、その首と胴体の両方を川に投げ込まれた。

非常に敬虔なプロテスタントであったポール・ガルニエは、目を摘出され、生きたまま皮を剥がされた。彼はすべての苦しみを最も模範的な忍耐で耐え忍び、話すことができる限り神を賛美し、善良な良心がどのような信頼と諦めを抱かせるかを端的に示した。

ロカピアータのダニエル・カルドンは兵士たちに逮捕され、首を切り落とされ、脳みそを炒めて食べられた。サン・ジョヴァンニの貧しい盲目の老女 2 人は生きたまま焼かれ

た。また、ラ・トーレの未亡人が娘とともに川に突き落とされ、そこで石打ちの刑に処された。ポール・ジャイルズは兵士たちから逃げようとして首を撃たれ、鼻を切られ、あごを切られて刺され、死骸は犬に与えられた。アイルランド軍の何人かがガルジリアーナの11 人を捕虜にすると、炉を真っ赤に熱し、最後の 1 人になるまで押し込むよう強要した。

ミヒャエル・ゴネ（90 歳）は焼き殺され、バプティスタ・ウドリ（もう一人の老人）は刺された。バルトロメウ・フラスケは、かかとに穴を開けられ、そこにロープを通され、ロープに引きずられて牢獄に運ばれ、その傷がもとで死んだ。

マグダレーヌ・ド・ラ・ピエールは兵士たちに追われて捕らえられ、絶壁から投げ落とされて粉々になった。マーガレット・レヴェラとマリア・プラヴィレリン、2 人の老女は生きたまま焼かれた。ミカエル・ベリーノとアン・ボシャルドノは斬首された。

ジョバンニの相談役の息子と娘が、一緒に急な坂を転げ落ち、底の深い穴の中で死んだ。ある商人の家族、すなわち自分、妻、妻の腕に抱かれた幼児は、岩から投げ落とされ、粉々に打ち砕かれた。ジョセフ・シャイレとポール・カルニエロは生きたまま皮を剥がされた。

シプリアニア・ブスティアは、宗教を捨ててローマ・カトリックに改宗するかどうか尋ねられ、「命を捨てるか、犬になるか、どちらかです」と答えた。そこで司祭たちは彼を牢獄に引きずり込み、そこで彼が飢え死にするまで、かなりの時間食事をとらずに過ごした。

マーガレット・サレッタは石打ちの刑に処され、川に投げ込まれた。

アントニオ・バルティナは頭を切り裂かれた。そしてジョセフ・ポンは体の真ん中を切り裂かれた。

ダニエル・マリアとその家族全員が熱病にかかったとき、数人の教皇派の暴漢が彼の家に押し入り、自分たちは実際的な医者であり、全員を楽にしてやると言い、家族全員の頭を叩いてそれを実行した。

ピーター・ファインというプロテスタントの 3 人の幼児は雪に覆われ、窒息死させられ、ユディトという年老いた未亡人は斬首され、美しい若い女性は裸にされ、体に杭を打たれて息絶えた。

ピーター・ベッソンの妻ルーシーは、ピエモンテの渓谷の村のひとつに住んでいた。そこで彼女は、2 人の幼い子供を両手に 1 人ずつ連れて、アルプスに向かって出発した。しかし、旅の 3 日目に、彼女は山の中で出産し、幼子を産んだが、その幼子は、他の 2 人の子供と同様に、天候の極端な悪化によって死んでしまった。

聖職者の息子フランシス・グロは、自分の肉体をゆっくりと細かく切り刻まれ、目の前で皿に盛られた

。彼の妻は柱に固定され、夫と子孫に加えられたこのような残酷な仕打ちを目の当たりにすることになった。苦しめる者たちは、その残酷な仕打ちに飽き飽きし、夫と妻の首を切り落とし、家族全員の肉を犬に与えた。

トマス・マルジェール伯爵は洞窟に逃げ込んだが、兵士たちが洞窟の口を塞いだため、飢饉で命を落とした。ジュディス・ルヴェランと 7 人の子供たちは寝床で惨殺された。また、40 歳近い未亡人が兵士たちに切り刻まれた。

ヤコブ・ローゼノは聖人に祈るように命じられたが、彼は絶対にそれを拒否した。何人かの兵士が彼を殴打銃で激しく殴打して従わせようとしたが、それでも拒否したので、何人かの兵士が彼に発砲し、彼の体に多くの玉が刺さった。彼が息絶えそうになったとき、兵士たちは彼に叫んだ。聖人に祈るのか？ と叫んだ。それに対して彼が「ノー！ノー！ノー！」と答えると、兵士の一人が鉞（まさかり）で彼の頭を切り裂き、現世での苦しみに終止符を打った。

ある兵士がスザンナ・ガキンという若い女性を略奪しようとしたところ、彼女は頑強に抵抗し、格闘の末に彼を断崖絶壁から突き落とした。彼の仲間たちは、若い女性の美徳を賞賛し、貞操を守った彼女を賞賛するどころか、剣で彼女に襲いかかり、彼女を切り刻んだ。

ラ・トーレの貧しい農民ジョヴァンニ・プルフスは、プロテスタントとして兵士に逮捕され、ピアネスタ侯爵によって、修道院の近くで処刑されるよう命じられた。彼が絞首台まで来ると、何人かの修道士が付き添い、彼に信仰を捨てるようできる限りの説得をした。しかし彼は、偶像崇拝を受け入れるつもりはなく、キリストの名のために苦しみを受けるに値すると思われたことを喜んでいると告げた。そして、彼の労苦に頼っている妻や子供たちが、彼の死後、どのような苦しみを味わうことになるかを考えさせ、彼は答えた。そして、私が彼らを残していくかもしれない苦難については、神は慈悲深く、彼らが神の保護に値する間は、彼らを養ってくださるでしょう」。この哀れな男の融通の利かなさに気づいた修道士たちは、「彼を引き離せ！引き離せ！」と叫んだ。

ロッサーナ教会の長老パウロ・クレメントは、近隣の修道院の修道士たちに逮捕され、その町の市場に連れて行かれた。彼はその死体を見せられて、その光景に脅かされた。その衝撃的な死体を見て、彼は冷静に言った。「肉体は殺してもいいが、真の信者の魂を傷つけることはできない。しかし、あなたが私に見せてくれた恐ろしい光景に関しては、神の復讐が哀れな人々を殺した犯人を襲い、彼らが流した罪のない血のために彼らを罰するだろうから、安心してほしい と言った。修道士たちはこの返答に憤慨し、彼に直接絞首刑を命じた。彼が首を吊っている間、兵士たちは離れた場所に立ち、死体を標的にするように撃って楽しんだ。

ヴィラリオのダニエル・ランボーは多くの家族の父親であったが、逮捕され、他の数人とともにパイサナの牢獄に入れられた。ここで彼は数人の司祭に面会され、絶え間ない懇願によって、プロテスタントの宗教を捨てて教皇派に転向するよう、できる限りの説得

を行った。しかし、彼はこれを断固として拒否した。司祭たちは彼の決意を知り、彼の多数の家族を憐れむふりをして、次の条項を信じるなら、まだ命はある、と告げた：

1.ホストの真の存在感。

2.実体のないもの。

3.煉獄。

4.教皇の無謬性

5.死者のために捧げるミサは、魂を煉獄から解き放つ。

6.聖人に祈ることは罪の赦しをもたらす。

ムッシュー・ランボーは神父たちに、自分の宗教、理解力、良心のどれをとっても、次のような理由から、どの条項にも同意することはできないと言った：

1. ホストの中に本物の存在があると信じることは、冒涜と偶像崇拝の衝撃的な結合である。

2. ウェハースと葡萄酒を、十字架にかけられ、その後天に昇ったキリストの肉体と血に変えるという、教皇派が言うところのトランスサブスタンティフィケーションを、奉献の言葉によって行うように見せかけることは、理性の片鱗さえ感じられるようになった子供でさえ信じることができない、あまりにも重大な不条理である。そして、最も盲目的な迷信以外の何ものでもなく、ローマ・カトリック信者にこれほど完全に馬鹿げたものを信じさせることはできないのである。

3. 煉獄の教義はおとぎ話よりも矛盾しており、不条理である。

4. 法王が無謬であることは不可能であり、法王は完全な存在である神にのみ属するものを傲慢にも主張した。

5.　　死者のためにミサを捧げることは馬鹿げており、魂が肉体から離れるときにすべての運命が最終的に決まるという煉獄の寓話を信じ続けることを意味しているにすぎない。

6.　　罪の赦しのために聖人に祈ることは、崇敬をはき違えることである。それゆえ、私たちの過ちを赦すことができるのは神だけであるから、私たちは神だけに赦しを求めるべきである。

司祭たちは、ランボーM.が自分たちが同意させようとした条項に対する答えに非常に腹を立てたので、想像しうる限り最も残酷な方法で彼の決意を揺さぶろうと決意した。しかし、彼がその苦しみを最も立派な忍耐で耐え忍び、不屈の精神と諦観を強め、確固たる決意と揺るぎない堅忍で信仰を維持したことがわかると、彼らは彼の心臓を刺し、その死体を犬に食わせるために与えた。

ピーター・ガブリオラはプロテスタントの紳士で、かなりの高名な人物であったが、兵士の一団に取り押さえられ、信仰を捨てることを拒否したため、彼らは火薬の入った小さな袋を大量に体にぶら下げ、火をつけて彼を吹き飛ばした。

サミュエル・カティエリスの息子アンソニーは、非常に無愛想で、口のきけない哀れな若者だったが、軍隊の一団に切り刻まれた。その直後、同じ暴漢たちがピーター・モニリアットの家に侵入し、家族全員の足を切り落とし、血を流して死ぬに任せた。

逮捕されたダニエル・ベネチは鼻を切られ、耳を切り落とされ、４分の１に分けられ、それぞれの４分の

１は木に吊るされた。

ヴィラリオの町に住むハンサムな未亡人、メアリー・ペランシオンは、アイルランド旅団の一団に捕らえられ、無残に殴打され、凌辱された後、川に架かる高い橋まで引きずり込まれ、最も卑猥な方法で裸にされ、橋に脚を吊るされ、頭を水面に向けて下向きにされた後、ボートに乗り込み、息絶えるまで発砲された。

メアリ・ニグリーノとその娘は馬鹿であったが、森の中で切り刻まれ、死体は野獣に食い荒らされるにまかせた：ヴィラリオの未亡人スザンナ・バレスは、飢えで死ぬまで監禁された。また、スザンナ・カルヴィオは兵士たちから逃れて納屋に身を隠したが、兵士たちは藁に火をつけて彼女を焼いた。

パウロ・アルマンは切り刻まれ、ダニエル・ベルティーノという名の子供は焼かれ、ダニエル・ミチアリーノは舌を抜かれ、そのままの状態で絶命した。アンドレオ・ベルティーノは、足の不自由な老人で、非常に衝撃的な方法で切り刻まれ、ついには腹を裂かれ、腸がハルバートの先で運ばれた。

プロテスタントの女性コンスタンティア・ベリオーネは、信仰を理由に逮捕されたとき、司祭から悪魔を捨ててミサに行かないかと尋ねられた。でも、あなたの望みに従ってミサに行けば、そこで悪魔にいろいろな形で会うことになるでしょう

と答えた。司祭は彼女の言葉に激しく憤慨し、撤回するように言った。しかし婦人は、司祭が与えるどんな苦しみもいとわないと大胆に答え、司祭が考えつくどんな苦しみにもかかわらず、自分の良心を清く保ち、信仰を揺るぎないものにすると言った。司祭は次に、彼女の体のいくつかの部分から肉を切り取るように命じたが、彼女はこの残酷な仕打ちに耐え、司祭にこう言った。この表現に憤慨し、彼女の舌を止めようとした司祭は、マスケット銃の銃隊を引き寄せて彼女に発砲するよう命じた。

ジュディス・マンドンという若い女性が、宗教を変えて教義を受け入れることを拒否したため、杭に固定され、遠くから棒を投げつけられた。これは、かつて Shrove-Tuesday に行われていた、石にしがみつくという野蛮な風習とまったく同じ方法であった。この非人間的なやり方によって、哀れな生き物の手足はひどいやり方で殴られ、切り刻まれ、最後には脳みそが棒の一本で打ち抜かれた。

ダヴィッド・パリアとポール・ジャンルは、それぞれ息子を連れてアルプスへ逃れようとしたが、兵士たちに追われ、広い平原で追いつかれた。ここで兵士たちは、剣で彼ら

を煽り、疲労で倒れるまで走り回らせた。兵士たちは、彼らの気力がすっかり尽き、これ以上走って野蛮な遊びをさせるわけにはいかないとわかると、彼らを切り刻み、その場に無残な遺体を放置した。

ボッビオのミヒャエル・グレーベという若者がラ・トーレの町で逮捕され、橋まで連れて行かれて川に投げ込まれた。彼は泳ぎが得意だったので、逃げようと思って川を泳いで下ったが、兵士と暴徒が川の両岸を追いかけてきて、彼を石で打ち続けた。

ダヴィド・アルマンはブロックの上に頭を伏せるよう命じられ、兵士が大きなハンマーで彼の脳を打ち抜いた。ダヴィド・バリドナはヴィラリオで逮捕され、ラ・トーレに運ばれたが、そこで信仰を捨てることを拒否したため、指と足の指の間に硫黄のマッチをくくりつけられ、火をつけられるという拷問を受けた。その後、赤熱したペンチで肉をむしり取られ、息絶えるまで苦しめられた。ジョバンニ・バロリーナとその妻は、淀んだ水の池に投げ込まれ、投石器と石で、窒息するまで頭を下げさせられた。

数人の兵士がジョセフ・ガルニエロの家に行き、中に入る前に窓から発砲し、彼らの接近を知らせた。マスケット銃の弾丸がガルニエーロ夫人の乳房に命中した。彼らの意図を知った夫人は、乳児の命を助けてくれるよう強く懇願した。その後、彼らは夫を連れ去り、自分の家の戸口で絞首刑にし、妻の頭を撃ち抜くと、血まみれの妻の遺体を放置し、夫は絞首台に吊るした。

老人で敬虔なプロテスタントであったイザヤ・モンドンは、情け容赦のない迫害者たちから岩の裂け目に逃げ込んだ。唯一の飲み物は、雪が溶けるまで口に含むことだった。しかし、ここで非人道的な兵士たちが彼を見つけ、容赦なく殴った後、剣の先で彼を煽りながらルツェルン方面に追いやった。彼の生き方は非常に弱っており、受けた打撃で気力も尽きていたため、彼は道で倒れてしまった。跪いたネルヌは、ネルヌを追放してこの惨めな状況から解放してくれるよう懇願した。ひざまずいた彼は、「彼を殺して、この惨めな状況から解放してください」と懇願した。そして、彼らの一人が彼に近づき、ピストルで彼の頭を撃ち抜いた。

立派なプロテスタントのメアリー・レヴォルは、通りを歩いているときに背中に銃弾を受けた。彼女はその傷で倒れたが、十分な力を取り戻し、膝をついて身を起こし、両手を天に向かって上げ、全能の神に熱烈に祈った。そのとき、すぐ近くにいた数人の兵士が、彼女に向かって銃弾の嵐を放ち、その多くが効果を発揮して、彼女の不幸を即座に終わらせた 。

数人の男、女、子供たちは大きな洞窟に身を隠し、そこで何週間か安全に過ごした。男たちのうち 2 人が、必要なときに行って、こっそり食料を調達するのが習慣だった。しかし、ある日、これらの食料が見張られたため、洞窟が発見され、ほどなくしてローマ・カトリック教徒の一団が洞窟の前に現れた。このとき集まった教皇派は、洞窟にいたプロテスタントの隣人であり、親しい知人であった。そして何人かは互いに親戚関係にあった。そのため、プロテスタントは外に出てきて、もてなしの絆によって、血の絆によって、古い知り合いや隣人として、彼らを殺さないように懇願した。しかし、迷信は自然と人間性のあらゆる感覚に打ち勝つものであった。そのため、教皇派は偏狭さに目がくらみ、異端者に慈悲を示すことはできないと告げ、死を覚悟するよう彼らに命じた。これを聞き、ローマ・カトリックの致命的な頑固さを知っていたプロテスタントは、皆、前立腺に倒れ込み、両手と心臓を天に掲げ、誠心誠意、熱心に祈り、それからひれ伏して地面に顔を近づけ、忍耐強く運命を待った。

ジョヴァンニ・サルヴァギオがローマ・カトリック教会の前を通りかかり、帽子を脱がなかったところ、信徒たちに追いかけられ、殴りかかって殺害された。ヤコブ・バレルとその妻は、サヴォワ公爵の将校の一人であるサン・セコンド伯爵に捕らえられ、兵士たちに引き渡された。

プロテスタントのアンソニー・ギーゴは、自分の宗教を捨て、教派を受け入れるつもりでペリエロに向かった。アンソニー・グイゴはペリエロのもとへ行き、宗教を捨てて教義を受け入れることを決意した。その間に、アンソニーは自分の背信行為に気づき、夜も昼も良心の呵責に苛まれた。しかし、彼はすぐに逃げ遅れ、追跡を受け、捕らえられた。

途中の隊員たちは、彼が悔い改める決意を固めるよう、あらゆる手を尽くした。しかし、その努力もむなしく、彼らは道中で彼を激しく打ちのめした。崖にさしかかったとき、彼はその崖から飛び降り、粉々に打ち砕かれた。

ボビオのあるプロテスタントの大富豪は、ある司祭の横柄な態度に夜な夜な挑発され、非常に厳しく言い返した。そしてとりわけ、教皇は反キリストであり、ミサは偶像崇拝であり、煉獄は茶番であり、赦免はイカサマであると言った。その復讐のために、司祭は5人の荒くれ者を雇い、同じ日の夕方、紳士の家に押し入り、乱暴に取り押さえた。紳士はひどく怯え、ひざまずいて慈悲を乞うた。しかし、暴漢たちは躊躇することなく紳士を殺してしまった。

ピエモンテ戦争の物語

ピエモンテの渓谷で行われた虐殺と殺人は、ほとんどの町や村をほぼ壊滅させた。唯一襲撃を受けなかったのは、岩の上にあるロラスの小さな村落だけであった。

サヴォワ公爵の部下の一人であったクリストープル伯爵は、可能であれば征服しようと決心した。そして、300人の兵を投入し、密かに町々を奇襲した。

勇敢なプロテスタント士官であったジョシュア・ギアナベル大尉は、市民の小集団の先頭に立ち、小さな峡谷で敵を攻撃するために待ち伏せしていた。

軍隊が現れ、町に近づくことができる唯一の場所である隘路に入ったとき、プロテスタントは彼らに対し、巧みで的を射た砲撃を続け、なおも敵の視界から茂みの後ろに身を隠していた。多くの兵士が戦死し、残りの兵士は砲火を受け続けたが、応戦できそうな相手も見当たらなかったため、退却を決意した。

この小さな共同体のメンバーは、公爵の将校の一人であるピアネッサ侯爵に宛てて、「いかなる場合であれ、武器を取る必要に迫られるのは残念である。しかし、何の理由も告げず、事前に来訪の目的を知らせることもなく、軍隊の一団が密かに接近してきたため、非常に警戒していたこと、自分たちの小さな共同体に軍隊が侵入するのを決して許さな

いのが自分たちの習慣であったため、武力によって撃退してきたが、今回もそうするはずであること。しかし、他のすべての点では、彼らは自分たちの主権者であるサヴォワ公爵に忠実で、従順で、忠実な臣民であることを公言した」。

ピアネッサ侯爵は、ロラスのプロテスタントを欺き、驚かせる絶好の機会を得ようと、「彼らの行動には完全に満足している。彼らは正しい行いをし、国に奉仕さえしていたのだ。そして、彼の裏切りをより際立たせるために、住民に好意的に見える曖昧な布告を発表した。

しかし、このもっともらしい宣言とまやかしの行動の翌日、侯爵は 500 人の兵をロラスの占領に向かわせた。

しかし、ギアナベル大尉はそう簡単には欺けなかった。そこで彼は、先の部隊と同様にこの部隊にも待ち伏せを仕掛け、かなりの損害を与えて撤退させた。

この 2 つの試みは失敗に終わったが、ピアネッサ侯爵はさらに手ごわい 3 度目の試みを決意した。しかし、その前に彼は軽率にも、2 回目の企てを一切知らぬとする別の布告を発表した。

ほどなくして、選ばれた 700 人の兵士が遠征に駆り出され、プロテスタントからの砲火にもかかわらず、隘路を突破してロラスに入り、老若男女の区別なく、出会う者すべてを殺害し始めた。プロテスタントの隊長ギアナベルは、少数部隊を率いて、隘路は失ったものの、町の最も豊かで最良の場所に通じる要塞化された峠を通り、彼らの通行に異議を唱えようと決心した。ここで彼は、絶え間なく砲火を浴びせ続け、部下全員が完全な射撃の名手であったことから、成功を収めた。ローマ・カトリックの指揮官は、あらゆる困難を乗り越えたと思い込んでいただけに、この反対には大いによろめいた。しかし、彼は峠を越えようとしたが、一度に 12 人しか前線に上げることができず、プロテスタント側は胸壁で守られていたため、一握りの敵兵に阻まれた。

多くの兵を失ったことに憤慨し、このような非現実的な試みを続ければ名誉を傷つけられると恐れた彼は、退却するのが最も賢明だと考えた。しかし、困難と危険のため、兵を入城した隘路から撤退させることはできず、ヴィラリオ方面へ退却することを決意した。しかし、ギアナベル大尉がここに小隊を配置したため、隊が通過する際に大迷惑をかけ、開けた土地に入るまで隊員の背後を追った。

ピアネッサ侯爵は、自分の企てがことごとく挫折し、あらゆる策略がロラスの住民に警鐘を鳴らすだけであることを知ったため、公然と行動することを決意し、ロラスの頑迷な異端者と呼ばれる者たちに対して武器を持つ者には、十分な報酬を与えると宣言した。そして、彼らを退治する将校には、莫大な報酬を与えると宣言した。

このため、マリオ大尉は、偏屈なローマ・カトリック教徒で、無鉄砲な暴れん坊であったが、この事業を引き受けることにした。そこで彼は、以下の 6 つの町で連隊を編成する許可を得た：ルツェルン、ボルヘス、ファモラス、ボビオ、ベグナル、カヴォスである。

千人規模の連隊を完成させた彼は、峠や渓谷を通らない計画を立てた。その代わりに、彼は岩の頂上に到達することを試み、そこからなら、さほど困難もなく、反対もなく、軍隊を町に注ぎ込むことができると考えた。

プロテスタントは、ローマ・カトリックの軍隊が岩の頂上近くまで到達しても、何ら異議を唱えることもなく、彼らの視界に入ることもなかったが、頂上近くまで到達すると、猛烈な攻撃を仕掛けてきた。

多くの者がマスケット銃で殺され、さらに多くの者が石に打ち付けられ、断崖絶壁に叩き落とされた。慌てて退却しようとしたために、何人もの兵士が犠牲になった。マリオ大尉は、岩場から岩のふもとを流れる川に転落し、辛うじて命拾いをした。彼は意識を失って運ばれたが、その後、長い間打撲のために病気だったが回復した。やがてルツェルンで衰弱し、そこで亡くなった。

ヴィラリオの宿営地からは、ロラスを攻撃するため、別の部隊の編成が命じられた。しかし、この部隊もプロテスタント軍の待ち伏せ戦闘に敗れ、再びヴィラリオの宿営地に撤退せざるを得なかった。

このような勝利のたびに、ギアナベル大尉は部下たちに適切な談話を述べ、ひざまずかせ、全能の神の摂理による保護に感謝の意を表した。そして、神に信頼を置くことを主題とする詩篇第 11 篇で締めくくるのが常であった。

ピアネッサ侯爵は、ロラスの数少ない住民にこれほどまでに困惑させられたことに大いに憤慨し、そのため、ほとんど成功しないような方法で彼らを追放しようと決意した。

このような考えのもと、彼はピエモンテのすべてのローマ・カトリックの民兵を集め、訓練するよう命じた。これらの命令が完了すると、彼は民兵に 8000 人の正規軍を加え、全体を 3 つに分けて、3 つの手ごわい攻撃を同時に行うことを計画した：

(1).武器を取ることを許してもらうこと。

(2).彼らに対して派遣されたすべての遠征隊の費用を支払うこと。

(3).教皇の無謬性を認めること。

(4).ミサに行くこと。

(5).聖人に祈ること。

(6).ヒゲをつけること。

(7).彼らの大臣を引き渡すこと。

(8).校長先生を引き渡すこと。

(9).告解に行くこと。

(10).煉獄から魂を引き渡すためのローンを支払う。

(11).キャプテンの判断でギアナベルを手放すこと。

(12).自分たちの教会の長老を自由に譲ること。

ロラスの住民は、これらの条件を知るや、素直な憤りを覚え、それに答えて侯爵に、これらに従うくらいなら、すぐにでも 3 つの苦しみを味わうという言葉を送った。

＊ 1.財産は没収される。

＊ 2.彼らの家は焼かれる。

＊ 3.自分たちが殺される。

このメッセージに苛立った侯爵は、彼らに次のような簡潔な手紙を送った：

ロラスに住む頑固な異端者たちへ

あなたがたの要求は聞き入れられるでしょう。あなたがたに対して派遣された軍隊は、略奪、焼き討ち、殺戮を厳命されているのですから。ピアニサ.

そして、三軍が動き出し、攻撃は次のように命じられた：第一はヴィラリオの岩、第二はバニョールの峠。第三はルツェルンの隘路である。

兵は数の優勢を利用して強行突破し、岩場、峠、渓谷を制覇すると、最も恐ろしい略奪を開始し、最大の残虐行為を行った。男は絞首刑、火刑、絞め殺し、切り刻み、女は切り裂き、磔にし、溺れさせ、断崖から投げ落とした。子供たちは槍に投げつけられ、ミンチにされ、喉を切られ、脳みそを打ち抜かれた。彼らが町を占領した最初の日に、百二十六人がこのような苦しみを受けた。

ピアネッサ侯爵の命令に従い、彼らは同様に領地を略奪し、民家を焼き払った。しかし、何人かのプロテスタント信者は、ギアナベル大尉の指揮の下、逃亡を図ったが、その妻と子供たちは不幸にも捕虜となり、厳重な警備の下、トリノに送られた。

ピアネッサ侯爵はギアナベル大尉に手紙を書き、プロテスタントの捕虜を釈放した。その内容は、もし大尉がローマ・カトリックの宗教を受け入れるならば、開戦以来のすべての損失を補償するというものだった。彼の妻子は直ちに釈放され、彼はサヴォワ公爵の軍隊で名誉ある昇進を果たす。しかし、もし彼がこの提案に応じない場合は、妻子は死刑とする。また、生死を問わず、彼を捕らえた者には多額の報奨金を与え、その額の大きさに、彼の内通者さえも裏切る誘惑に駆られるようにする。

この手紙に対して、勇敢なギアナベルは次のような返事を送った。

侯爵閣下、これほど大きな苦痛も、これほど残酷な死もありませんが、私が信仰を棄てることよりはましです。私の妻と子供たちに関しては、閣下、監禁されることほど私を苦しめ、暴力的で残酷な死を受けることほど、私の想像にとって恐ろしいことはありません。私は夫と親としてのあらゆる優しい感覚を痛感し、私の心はあらゆる人間的感情で満たされています。彼らを危険から救い出すためなら、どんな苦難にも耐え、彼らを守るためなら死んでも構いません。

しかし、ここまで言っておいてなんですが、閣下、彼らの命を買うことが私の救いの代償であってはならないと断言します。あなたは彼らの命を手中に収めておられる……それは事実です。しかし、私の慰めは、あなたの権力は彼らの肉体に対する一時的な権威に過ぎないということです。あなたは死すべき部分を破壊することができますが、彼らの不滅の魂はあなたの手の届かないところにあり、あなたの残虐行為についてあなたに不利な証言をするために、今後も生きていくでしょう。したがって、私は彼らと私自身を神に推薦し、あなたの心の改革を祈る。-- ジョシュア・ギアナベルこの勇敢なプロテスタント士官は、上記の手紙を書いた後、従者を連れてアルプス山脈に退却した。そして、他の大勢の逃亡プロテスタントと合流し、小競り合いを続けて敵を苦しめた。

ある日、ビビアナの近くで教皇派の軍隊と遭遇した彼は、数では劣っていたものの、猛烈な勢いで彼らを攻撃し、一人の犠牲者も出さずに撃退した。しかしギアナベルは、その銃声がどこから聞こえてきたかを察知し、銃をその場所に向け、彼に傷を負わせた者を

射殺した。ジャヒエ大尉がかなりの数のプロテスタントを集めていると聞いたギアナヴェル大尉は、両軍の合流を提案する手紙を彼に書いた。ジャヒエ大尉はすぐにその提案に同意し、ギアナベルに会うために直接進軍した。

合流地点が形成され、ガルチリアーナという町（ローマ・カトリック教徒が居住）を攻撃することが提案された。突撃は意気揚々と行われたが、プロテスタント側は何も知らなかったが、最近になって馬と徒歩の増援が町に入ったため、撃退された。

プロテスタント軍の次の攻撃はサン・セコンドで、彼らは勢いよく攻め込んだが、ローマ・カトリック軍の強力な抵抗に遭った。彼らは通りを要塞化し、家々に陣取り、そこから大量のマスケット銃の弾を浴びせた。しかし、プロテスタント軍は、多数の板を頭上に掲げ、家屋からの敵の銃撃から身を守りながら前進し、また、他の兵士たちは、的確な砲火を放ち続けた。

町の中には、さまざまな時期、さまざまな場所でプロテスタントから奪われ、倉庫、教会、住居などに保管されていた膨大な量の略奪品があった。彼らはこれを安全な場所に運び、できるだけ公正に、被害を受けた人々に分配した。

この攻撃は非常に巧みで気迫に満ちたものであったため、征服側の犠牲はほとんどなく、プロテスタント側の死者はわずか 17 人、負傷者は 26 人であった。

プロテスタントの 5 人の将校、すなわちジアナベル、ジャイエ、ローレンティオ、ジェノレ、ベネは、ビケラスを奇襲する計画を立てた。この目的のために、彼らは 5 つの部隊に分かれて進軍し、合意によって同時に攻撃を行うことになった。隊長のジャヒエとローレンティオは、森の中の 2 つの柵を通り抜け、隠れて安全にその場所に到着した。しかし、他の 3 隊は開けた土地を通って接近したため、攻撃によりさらされることになった。

警戒にあたったローマ・カトリックは、ビケラスを救援するため、カヴォルス、ビビアナ、フェリーヌ、カンピリオーネなど近隣の地から多数の軍隊を派遣した。これらの軍

隊が集結すると、彼らは開けた土地を行進していたプロテスタント 3 党を攻撃することを決意した。

プロテスタントの将校たちは敵の意図を察知し、互いにそれほど離れていなかったため、最大限の迅速さで力を合わせ、戦闘態勢を整えた。

その間に、ジャヒエとローレンティオの隊長たちは、ビケラスの町を襲撃し、すべての家屋を焼き払った。しかし、プロテスタントの他の 3 人の隊長が期待したような援軍を得られなかったため、彼らはその理由を尋ねるために、使者を馬に乗せ、開けた国へ向かわせた。使者はすぐに戻り、プロテスタントの 3 人の隊長には彼らの行動を支援する力はないことを告げた。なぜなら、彼ら自身も平原で非常に優勢な軍隊に攻撃されており、不平等な争いに耐えることはほとんどできなかったからである。

この知らせを受けたジャヒエとローレンティオの両隊長は、ビケラスへの攻撃を中止し、可能な限りの遠征を行い、平原にいる友軍の救援に向かうことを決意した。というのも、両軍が交戦する地点に到着した直後、教皇派の軍隊が優勢になり始め、ギアナベル大尉が指揮する左翼を側面攻撃するところだったからである。この部隊の到着により、戦局はプロテスタント側に傾き、教皇派軍は非常に頑強に戦ったものの、完全に敗北した。両軍とも多数の死傷者を出し、プロテスタント側が奪った荷物や軍用品などはかなりの数に上った。

ギアナベル大尉は、300 人の敵がラ・トーレからミラバック城まで大量の貯蔵品や食料などを輸送するという情報を入手し、その途中で彼らを攻撃することを決意した。そして、非常に不十分な兵力ではあったが、マルベックで攻撃を開始した。

戦いは長く血なまぐさいものであったが、プロテスタントは数の優勢に屈し、退却を余儀なくされた。

ギアナベル大尉は、ヴィラリオの町の近くに位置する有利な持ち場まで前進し、次のような情報と命令を住民に送った。

1.24 時間以内に町を攻撃すること。

2.軍隊に属しているか否かにかかわらず、武器を所持していたローマ・カトリック教徒については、報復の法によって行動し、彼らが犯した多数の略奪と多くの残酷な殺人に対して死刑に処すべきである。

3.すべての女性と子どもは、その宗教が何であろうと、安全でなければならない。

4.プロテスタントの男子は全員、町を出て自分に加われと命じたこと。

5.弱さゆえに宗教を棄てたすべての棄教者は、棄教を放棄しない限り、敵とみなされるべきである。

6.神と自分自身に対する義務に立ち戻った者はすべて、友として迎えられるべきである。

プロテスタント信者は大満足ですぐに町を出て、ギアナベル大尉に合流し、弱さや恐れから信仰を棄てた少数の信者は棄教を撤回し、教会の懐に受け入れられた。ピアネッサ侯爵は軍を撤収させ、まったく別の場所に陣を敷いたので、ヴィラリオのカトリック信者は、わずかな兵力でこの地を守ろうとするのは愚かなことだと考えた。そのため、彼らは町と財産のほとんどをプロテスタントの判断に任せ、細心の注意を払って逃走した。

プロテスタントの指揮官たちは作戦会議を招集し、ラ・トーレの町を襲撃することを決定した。

教皇派はこの作戦を察知し、プロテスタント派が進入しなければならない隘路を守るため、何人かの軍隊を派遣した。しかし、この部隊は敗北し、峠を放棄せざるを得なくなり、ラ・トーレへの撤退を余儀なくされた。

プロテスタントは進軍を続け、ラ・トーレの軍隊が接近して猛攻撃を仕掛けたが、大損害を被って撃退され、町に避難することを余儀なくされた。総督は、プロテスタントが攻撃し始めたこの場所を守ることだけを考えた。しかし、多くの勇敢な試みと激しい襲撃

の後、指揮官たちは、いくつかの理由、特に、この場所自体が強すぎること、自分たちの数が少なすぎること、大砲が城壁を打ち壊すのに十分でないことから、この事業を断念することを決定した。

この決意を受け、プロテスタントの指揮官たちは見事な退却を開始し、規則正しく退却した。

翌日、彼らは兵を招集し、軍勢を確認した。この地には、最も偏狭なローマ・カトリック教徒が多数住んでおり、迫害の間、プロテスタントに対して前代未聞の残虐行為を働いていた。

クリュソルの人々は、自分たちに対する企てを聞き、プロテスタントが近寄れない岩の上にある近隣の要塞に逃げ込んだ。その財産の大部分は、プロテスタントから略奪されたものであったが、幸運にも再び正当な所有者のものとなった。その財産は、多くの豊かで貴重な品々と、当時はもっと重要なもの、すなわち大量の軍用品から成っていた。

プロテスタントが戦利品を持って去った翌日、ルツェルン、ビケラス、カヴォールなどから派遣された 800 人の軍隊がクリュソルの人々を助けに到着した。ルツェルン、ビケラス、カヴォールなどから派遣された 800 人の軍隊が、クリュソルの人々の救援のために到着したが、到着が遅すぎたため、追撃も虚しく、手ぶらで帰ることもできず、近隣の村々から略奪を開始した。それなりの戦利品を集めた後、彼らはそれを分け始めたが、それぞれの分け前について意見が合わず、彼らは言葉から殴り合いに発展し、大きな災いをもたらし、そして互いに略奪し合った。

プロテスタントがクリュソールで大成功を収めたまさにその日、教皇派の数人がロカッピアッタという小さなプロテスタントの村を略奪して焼き払おうと進軍したが、その途中で、アングローニュの丘に陣取っていたジャヒエとローレンティオという隊長のプロテスタント軍と遭遇した。

ローマ・カトリックは最初の攻撃で大混乱のうちに退却し、多くの犠牲者を出して追撃された。追撃が終わった後、はぐれた教皇派の軍隊がプロテスタントの貧しい農民と出会い、彼の頭に紐を結びつけ、頭蓋骨が完全に潰れるまで縛り上げた。

ギアナベル大尉とジャヒエ大尉は、ルツェルンへの攻撃を共に計画した。しかし、ジャヒエ大尉は約束の時間に軍を引き上げなかったので、ギアナベル大尉は自分自身でこの事業を試みようと決心した。

そのため、彼は強行軍によって、日中その場所に向かって進み、夜明けまでにはその場所に近づいた。彼はまず、町に水を運ぶパイプを切断し、田舎からの食料が入る橋の破壊に努めた。その後、町を襲撃し、すぐに前哨部隊の 2 つを占領した。

しかし、この場所を自分のものにすることができないことがわかると、彼は慎重に撤退し、損失はほとんどなかった。教皇派は、ギアナベル大尉が自分の部隊だけでアングローニュにいることを知らされ、できれば奇襲をかけようと考えた。このため、ラ・トーレなどから多数の兵が派遣され、そのうちの一隊が山の上に登り、その下に配置された。もう一隊は、聖バルトロメオの門を占拠するつもりだった。

教皇派は、ギアナベル大尉とその部下一人一人を確実に捕らえることができると考えていた。しかし、教皇派の兵士の一人が攻撃の合図が出される前に軽率にもラッパを吹き鳴らしたため、ギアナベル大尉は警戒を怠らず、聖バルトロメオの門と敵が山から下らなければならない隘路に小隊を配置したため、ローマ・カトリックの軍隊はいずれの攻撃にも失敗し、かなりの損害を被って撃退された。

間もなく、ジャヒエ大尉はアングローニュにやって来て、彼の軍をギアナベル大尉の軍と合流させ、前述した彼の失敗を弁解するのに十分な理由を与えた。キャプテン・ジャヒエルは今、大きな成功を収めたいくつかの秘密の遠出をしました。ある日、彼は自分自身を 44 人の兵隊の先頭に立たせ、遠征に進むために、オサックの近くの平野に入ったとき、彼は突然馬の大きな体に囲まれました。キャプテン・ジャヒエと彼の部下は、不利な

状況にもかかわらず、必死に戦って、敵の司令官、3 人のキャプテン、および 57 人の私兵を殺しました。しかし、Jahier 大尉自身は、彼の部下の 35 人と共に殺され、残りは降伏しました。兵士の 1 人がジャヒエ大尉の首を切り落とし、それをトリノに運び、それをサヴォイ公爵に贈り、彼は彼に 600 ドゥカトンを褒美として与えました。

この紳士の死は、プロテスタントにとって重大な損失であった。彼は改革派教会の真の友であり、仲間であったからである。彼は最も臆することのない精神の持ち主であったため、いかなる困難も、またいかなる危険も、彼が事業に着手するのを躊躇させることはできなかった。彼は、気取ることなく敬虔であり、弱音を吐くことなく人間的であった。戦場では大胆であり、家庭生活では柔和であり、鋭敏な才能を持ち、精神的に活動的で、すべての事業において断固としていた。

プロテスタント側の苦悩をさらに深めることになったのは、その直後、ギアナベル大尉が負傷し、寝たきりにならざるを得なくなったことだった。しかし、彼らは不幸から新たな勇気を得て、意気消沈することなく、勇敢に教皇派の部隊を攻撃した。プロテスタントは数ではるかに劣っていたが、教皇派よりも決意をもって戦い、最終的にかなりの犠牲者を出して彼らを撃退した。この戦いの最中、ミヒャエル・ベルティーノという軍曹が戦死した。彼のすぐ後ろにいた彼の息子が、その場に飛び込んできて言った。しかし、勇気ある兵士たちよ、神は我々全員の父なのだ。

また、ラ・トーレとタグリアレットの軍隊とプロテスタント軍との間でも、いくつかの小競り合いが起こったが、総じて後者に軍配が上がった。

アンドリオンというプロテスタントの紳士が馬の連隊を立ち上げ、自ら指揮を執った。ジョン・レジェ伯爵は、多くのプロテスタント信者を説得し、義勇軍を結成させた。また、ミシュランという優秀な士官が、いくつかの軽兵団を創設した。これらの部隊は、プロテスタントのベテラン部隊の残党と合流し、（様々な戦闘、小競り合い、包囲などで多数の兵士が失われたため）立派な軍隊を構成した。

ローマ・カトリックの指揮官たちは、プロテスタント軍の手ごわい姿と増大した戦力を警戒し、可能であれば彼らを野営地から追い出すことを決意した。このため、ローマ・カトリックの町の守備隊の大部分、アイルランド軍旅団からの徴兵、ピアネッサ侯爵が派遣した多数の正規軍、補助部隊、独立中隊からなる大軍を集めた。

そして、プロテスタントの近くに宿営し、数日間かけて作戦会議を開き、最も適切な方法について議論した。ある者は、プロテスタントをキャンプから引き離すために略奪を行い、ある者は、自分たちが攻撃されるまで辛抱強く待つことを主張した。また、プロテスタントの陣営を襲撃し、その陣営のすべてを自分たちのものにしようとする者もいた。

このうち最後の意見が優勢となり、決議が行われた翌朝、その実行が指定された。その結果、ローマ・カトリック軍は 4 個師団に分けられ、そのうち 3 個師団は別々の場所で攻撃を行うことになった。そして、4 つめの師団は、必要に応じて行動するための予備部隊として残ることになった。ローマ・カトリックの将校の一人は、攻撃に先立ち、部下にこう訓示した：「諸君は今、名声と富をもたらす偉大な行動に入ろうとしている。すなわち、君主への忠誠を示す名誉、異端者の血を流す喜び、プロテスタントの陣営から略奪する展望である。だから、勇敢な諸君、倒れこめ、退路を断って、出会う者すべてを殺し、近づく者すべてを奪え」。この非人道的な演説の後、交戦が始まり、プロテスタント陣営は 3 箇所で想像を絶する猛攻撃を受けた。戦闘は双方とも非常に頑強かつ忍耐強く続けられ、4 時間もの間、中断することなく続いた。両陣営の中隊は交互に救援し合い、その結果、戦闘の間中、絶え間なく砲火を浴び続けた。

もし教皇派がこのポストを占領すれば、ペローサ、サンマルティーノ、ルツェルンの谷の指揮権を得ることができた。しかし、大敗を喫し、予備隊に戻らざるを得なかった。

この分遣隊が帰還した直後、ローマ・カトリック軍は本戦で苦戦を強いられ、予備隊に援軍を要請した。この予備隊は直ちに救援に向かい、しばらくの間、勝敗が危ぶまれたが、やがてプロテスタントの武勇が優勢となり、教皇派は 300 人以上の死者と多数の負傷者を出して完敗した。

ルツェルンのシンジックは、教皇主義者ではあったが、偏見を持っていたわけではなかった。しかし、ルツェルンに運び込まれた多数の負傷者を見たとき、こう叫んだ。この表現はルツェルンのローマ・カトリック総司令官マロールに報告され、マロールはシンジックに非常に厳しい脅迫状を送った。

この偉大な戦いは、収穫が始まる直前に行われた。教皇派は、自分たちの不名誉に憤慨し、あらゆる復讐を決意して、プロテスタント派の最も素晴らしいトウモロコシ畑に、夜な夜な離散した一団を広げ、あちこちに火を放った。プロテスタントは、夜中にトウモロコシ畑に火が燃え移るのを警戒し、早朝に逃亡者を追跡し、多くの逃亡者を取り押さえて死刑にした。プロテスタントのベラン隊長も報復のため、軽装の部隊を率いてラ・トーレ郊外を焼き払い、その後、ほとんど損害を被ることなく撤退した。

数日後、ベラン大尉はより強力な部隊を率いてラ・トーレの町そのものを攻撃し、修道院の城壁に裂け目を作って侵入し、守備隊を城塞に追い込んで町と修道院の両方を焼き払った。大砲がないために城塞を破壊することができなかったため、この作戦を成功させた後、彼らは正規の撤退を行った。

スペイン人ミヒャエル・デ・モリノスの迫害に関する記述

ミヒャエル・デ・モリノスは、裕福で立派な家柄のスペイン人で、若い頃に司祭の職に就いたが、教会での優遇は受けようとしなかった。彼は素晴らしい天賦の才を持っていたが、自分の名誉のためではなく、同胞のために尽くした。また、ローマ教会の修道会では一般的な禁欲的な生活もしなかった。

瞑想的な心の持ち主であった彼は、神秘主義的な神学者の道を追求し、スペインで高い評判を得ると、彼の崇高な信仰様式を広めたいと願い、自国を離れてローマに定住した。ここで彼はすぐに、文人たちの中で最も著名な者たちと知り合いになり、彼らは彼の宗教的な格言を非常に高く評価し、その布教に協力した。そして間もなく、彼は多くの信者

を得、彼らはその宗教の崇高な様式から、静寂主義者という名で区別されるようになった。

1675 年、モリノスは "Il Guida Spirituale

"というタイトルの本を出版した。そのうちの一通はレッジョ大司教によるもので、二通目はフランシスコ会総長によるものだった。そして 3 通目は、サラマンカとローマの両方で神学教授を務めていたイエズス会のマルティン・デ・エスパルサ神父によるものだった。

この本が出版されるやいなや、イタリアでもスペインでも大いに読まれ、高く評価された。このため著者の名声は高まり、彼の知己は最も高名な人物たちから熱望されるようになった。多くの人々から彼宛に手紙が届き、彼とヨーロッパ各地の彼の方法を認める人々との間で文通が成立した。ローマでもナポリでも、世俗的な司祭の何人かは公然とその支持を表明し、一種の神託として何度も彼に相談した。特にカロレディ、チチェリ、ペトルッチの 3 人が最も著名であった。枢機卿の多くも彼の知己を求め、彼の友人の一人に数えられることを幸福に思っていた。その中で最も傑出していたのは、非常に学識のあるデストリース枢機卿で、彼はモリノスの格言を非常に高く評価し、彼と親密な関係を結んだ。彼らは毎日会話を交わし、スペイン人がフランス人に対して抱く不信感にもかかわらず、自分の信条に誠実なモリノスは枢機卿に遠慮なく心を開いた。こうして、モリノスとフランスの著名人との間で文通が始まった。こうしてモリノスが自分の宗教様式を広めようと努力している間に、ペトルッチ神父は観想的生活に関するいくつかの論文を書いた。しかしペトルッチ神父は、その中にローマ教会の信心に関する規則を多く織り交ぜたため、本来であれば非難を受ける可能性があったにもかかわらず、それを軽減することができた。これらは主に修道女たちのために書かれたものであり、そのため最も簡単で親しみやすい文体で意味が表現されている。

モリノスは今や評判となり、イエズス会とドミニコ会は大いに憂慮し、この方法の進行を止めようと決意した。そのためには、その作者を批判する必要があった。異端はロー

マで最も強い印象を与える非難であるため、モリノスとその信奉者たちは異端であるとされた。また、イエズス会の何人かが、モリノスと彼の方法に対して本を書いた。しかし、それらはすべてモリノスによって気迫をもって答えられた。

このような論争はローマを騒然とさせ、異端審問はこの一件に注目した。モリノス神父とその著書、そしてペトルッチ神父の論文と書簡は厳しい尋問を受けた。イエズス会は告発者とみなされた。イエズス会の一人は、確かにモリノスの著書を認めていたが、他の者たちは、モリノスが二度とローマで姿を見せないように注意した。検査の結果、モリノスもペトルッチも非常に良い結果を出したので、彼らの著書は再び承認され、イエズス会の書いた答案はスキャンダラスなものとして非難された。

この時のペトルッチの行動は非常に高く評価され、イエズス会の信用を高めただけでなく、ペトルッチ自身の名誉も高めた。イエズス会の著書はこれまで以上に尊重され、その方法はより多くの人に支持され、その斬新さと、イエズス会からあれほど激しく非難された後に与えられた新たな承認は、すべてイエズス会の信用を高め、党員数を増やすのに貢献した。

ペトルッチ神父の新しい地位での振る舞いは、彼の名声を高めることに大いに貢献した。実際、ペトルッチ神父の著作は、モリノス神父の著作ほど非難されるようなものではなかった。一方、ペトルッチは、彼の手紙のいくつかの部分に対する異論を簡単に取り除くことができるほど、自分自身を十分に説明した。

モリノスやペトルッチが大きな評判を得たことで、静寂主義者は日々増加した。心から敬虔であると思われる者、少なくともそのような評判がある者はすべて、その数に含まれていた。これらの人々は、生活や精神的な献身がより厳格になったことが観察されたとしても、教会の儀式の外面的な部分では、彼らの全行動にあまり熱心さが見られなかった。ミサに熱心に参加することもなく、友人のためにミサを行うよう熱心に勧めることもなく、告解や行列に頻繁に参加することもなかった。

異端審問によってモリノスの著書に新たな承認が与えられたことで、彼の敵の行動は抑制されたものの、彼らは心の中では依然として彼を憎み、できることなら彼を破滅させようと決心していた。彼らは、彼が邪悪な意図を持っており、心の中ではキリスト教の敵であり、人々を崇高な献身へと導くと見せかけて、キリスト教の神秘に対する感覚を人々の心から消し去ろうとしていると仄めかした。また、彼がスペイン人であったことから、ユダヤ教やマホメット教の血を引いており、その血や最初の教育の中に、彼がそれ以来、熱意だけでなく、芸術でもって培ってきたこれらの宗教の種を受け継いでいる可能性があるとも言われた。この最後の誹謗中傷はローマではほとんど信用されなかったが、モリノスが洗礼を受けた場所の戸籍を調査するよう命令が出されたという。

モリノスは、自分自身が非常に激しく、容赦のない悪意を持って攻撃されていることを知り、これらの非難が信用されるのを防ぐために必要なあらゆる予防措置を講じた。彼は「毎日の頻繁な聖体拝領」と題する論考を執筆し、これはローマ人の最も学識ある聖職者たちにも承認された。これは 1675 年に『霊的手引き』と一緒に印刷された。その序文で彼は、論争に身を投じるつもりで書いたのではなく、多くの敬虔な人々の切実な懇願によって引き出されたものであると宣言した。

イエズス会士たちは、ローマでのモリノスの権力を打ち砕く試みに失敗したため、フランス宮廷に申請したところ、短期間で成功し、デストリース枢機卿に、可能な限りの厳正さでモリノスを起訴するよう命じる命令が送られた。枢機卿はモリノスに強い愛着を抱いていたが、主人の意思のためには友情の神聖なものをすべて犠牲にすることを決意した。しかし、モリノスを告発するには十分な材料がないと判断した枢機卿は、自らその欠点を補うことにした。そのため、彼は異端審問官のもとを訪れ、モリノスだけでなくペトルッチに関するいくつかの事実を告げた。

彼らが審問官の前に引き出されたとき（1684 年の初めであった）、ペトルッチは投げかけられたそれぞれの質問に対して、非常に的確な判断と気性で答えたので、彼はすぐに罷免された。モリノスの尋問はもっと長かったが、一般には彼も同様に退けられただろ

うと予想されていた。異端審問官たちは、彼に対する正当な告発はなかったにもかかわらず、あらゆる神経を働かせて異端の罪を認めようとした。彼らはまず、彼がヨーロッパ各地で文通をしていることに異議を唱えた。しかし、その文通の内容を犯罪とすることはできないとして、無罪となった。彼らは次に、彼の寝室で発見されたいくつかの怪文書に注目した。しかし、モリノスはその意味を明確に説明したため、彼の不利益になるようなことは何もなかった。やがてデストリース枢機卿は、フランス国王から送られたモリノス起訴の命令を提出した後、モリノスが異端であることを確信させるために必要な以上のことを証明できると述べた。そのために、彼はモリノスの書物や論文のいくつかの箇所を曲解し、モリノスに関する多くの虚偽の事実を述べた。彼は、友好的に見えるように彼と同居していたことを認めたが、それは彼の主義主張と意図を探るためであり、それが悪い性質のものであり、危険な結果を招きそうであることを発見したにすぎなかった。しかし、それを明らかにするために、彼は心の中で嫌悪していたいくつかのことを承諾した。そして、これらの手段によって、モリノスの秘密を見抜いていたが、彼とその従者たちを潰す適切な機会が訪れるまでは、何も気に留めないことにしていた。

デストリーの証拠の結果、モリノスは異端審問によって厳重に監禁され、そこでしばらく過ごした。しかし突然、イエズス会は彼らを根絶やしにすることを決意し、激しい嵐が吹き荒れた。

ヴェスピニアー二伯爵とその夫人、ボルゲーゼ公爵の侍医ドン・パウロ・ロッキとその家族、その他数名（総勢 70 名）が異端審問にかけられたが、その中には学識と信心深さで高く評価されていた者も少なくなかった。聖職者に対する告発は、彼らがブレヴィアリーを唱えることを怠ったというものであった。他の聖職者たちは、告解を受けずに聖体拝領に行ったことを非難された。一言で言えば、彼らは宗教の外面的な部分をすべて無視し、孤独と内なる祈りにすべてを捧げていたのである

。

ヴェスピニアー二伯爵夫人は、審問官を前にした尋問の際、非常に特別な方法で自らを奮い立たせた。ヴェスピニアー二伯爵夫人は、懺悔の方法を告白者以外の人間に明かしたことはなく、その秘密を告白者に知られることなく知ることは不可能であると言った。そして、今後は神にのみ告白することにした。

この気迫のこもった演説と、伯爵夫人の様子から大騒ぎになったことから、審問官たちは、民衆が激怒し、伯爵夫人の発言が自白の信用を落とすことにならないよう、伯爵夫人と伯爵夫人をともに罷免するのが最も賢明だと考えた。そのため、二人は釈放されたが、呼び出しがあればいつでも出頭する義務があった。

すでに述べたもののほかに、静寂主義者に対するイエズス会の執念はすさまじく、1ヶ月のうちに 200 人以上が異端審問にかけられた。そして、イタリアでは人間が志すことのできる最も高尚なものとして受け入れられていたその帰依の方法は異端視され、その主唱者たちは惨めな地下牢に幽閉された。

可能であれば静寂主義を根絶するために、審問官たちは、イタリア全土に静寂主義を広めるよう、最高責任者であるチボ枢機卿に回状を送った。それはすべての司祭に宛てたもので、イタリアのいくつかの地域で多くの学校や友愛会が設立され、そこでは人々を霊の道や静寂の祈りに導くかのように見せかけて、多くの忌まわしい異端を植え付けている者がいるため、それらの団体をすべて解散させ、霊的な導き手には既知の道を歩むことを義務づけるよう厳命した。特に、そのような者が尼僧院を指揮することがないように注意するように。また、このような忌まわしい誤りを犯した者に対しては、正義の裁きを下すよう命じた。

この後、ローマのすべての修道女院に厳しい調査が行われ、院長や告白者のほとんどがこの新しい方法に従事していることが判明した。カルメル会修道女、コンセプション修道女、および他のいくつかの修道院の修道女たちは、完全に祈りと観想に専念しており、数珠や聖人や聖像への奉納の代わりに、一人で、しばしば精神的な祈りに励んでいた。この情報が異端審問官に伝えられると、異端審問官はモリノスやペトルッチの書物と同じ系

統で書かれたすべての書物を彼らから取り上げ、元の信心形態に戻るよう強制する命令を下した。

チボ枢機卿に送られた回状は、イタリアの司教たちのほとんどがモリノスのやり方に傾倒していたため、ほとんど効果をもたらさなかった。審問官からの他のすべての命令と同様に、この書簡も秘密にされることが意図されていた。しかし、すべての配慮にもかかわらず、そのコピーは印刷され、イタリアの主要な町のほとんどに散布された。このことは奉行たちに大きな不安を与え、奉行たちは自分たちの手続きを世間に知られないようにするため、あらゆる手段を用いた。彼らは枢機卿を非難し、彼がその原因であると非難した。しかし、枢機卿は彼らに反論し、彼の秘書官も両者に責任を負わせた。

この間、モリノスは異端審問官から大変な侮辱を受けた。唯一の慰めは、ペトルッチ神父の訪問を受けることだった。何年かローマで最高の評判を得ていたが、今では賞賛されるのと同じくらい軽蔑され、一般的には最悪の異端者の一人とみなされている。

異端審問にかけられていたモリノスの信奉者たちの大部分は、モリノスのモードを放棄したため、解雇された。しかし、彼らのリーダーであるモリノスには困難な運命が待ち受けていた。

しばらく牢獄につながれていたが、やがて再び審問官たちの前に引き出され、彼の著作に書かれた数々の告発文に答えることになった。出廷するや否や、彼の体には鎖がかけられ、手には蝋燭が握られた。2 人の修道士が告発文を読み上げると、モリノスは、そのどれに対しても、非常に堅固かつ決然とした態度で答えた。そして、彼の主張がすべて論破されたにもかかわらず、彼は異端として有罪とされ、終身禁固刑に処せられた。

宮廷を出るときには、彼に最大の敬意を払っていた司祭が付き添った。牢獄に到着すると、牢獄の独房に静かに入った。そして、司祭と別れるとき、司祭にこう言った：「さようなら、父よ。審判の日にまた会いましょう。そのとき、真実が私の側にあるのか、それともあなたの側にあるのか、どちらにあるのかが明らかになるでしょう」。

監禁中、彼は何度も残酷な拷問を受け、ついにはその厳しさに耐えられなくなり、この世を去った。

モリノスの死は、彼の信奉者たちに大きな衝撃を与え、信奉者たちの大部分は、すぐに彼の流儀を棄てた。イエズス会の熱心な活動により、静寂主義は国中から完全に駆逐された。

第 7 章 -ジョン・ウィクリフの生涯と迫害に関する記事

"宗教改革の旭日旗"と呼ばれるジョン・ウィクリフ(John Wycliffe)は、グレートブリテン[Great Britain:イングランド(England)、スコットランド(Scotland)、ウェールズ(Wales)を総称する英本国] のエドワード 2 世(Edward II)が統治していた 1324 年頃に生まれました。彼を教会の働き手として育てるつもりだった両親は、フィリピ女王(Philippi)の告白者ロバート・イーグルスフィールド (Robert Eaglesfield)がオックスフォード(Oxford)に設立した王立大学(Queen's college)に彼を入学させた。 しかし、学問的な利益が期待に及ばなかったため、当時ヨーロッパ最高の学術組織として定評があったマートン大学(Merton College)に移った。

ウィクリフが初めて世人の注目を浴びるようになったのは、学校にお金をくれと懇願する修道士たちに対して大学を弁護したことであった。修道士たちは、キリストはよく見かける乞食であり、キリストの弟子たちも乞食であったため、乞食することを福音が規定しているという教義を説教台と機会あるごとに逆説した。 彼らと大学の反目は絶えなかった。この怠惰な者たちを軽蔑の眼差しで見ていたウィクリフは、その乞食の群れに対抗する論文を出版し、彼らが宗教はもちろん、

人類社会に恥をもたらす存在であることを証明した。このことで、彼は大学の第一人者とされ、すぐにバリオール大学(Baliol College)の学寮長の座に就くことになった。

後に神学教授の座に選出されたウィクリフは、ローマ教会の誤りと修道院の手先の卑劣さを確信し、彼らの正体を赤裸々に暴いた。大衆講演を通じて彼らの不道徳を激しく非難し、迷信の闇に覆われた脚色悪習を披露した。大衆が被っていた偏見から脱皮し、ローマ法廷の横領行為を暴露した。このため、聖職者たちの抗議が殺到し、彼らはカンタベリー大司教の力を借りて彼の地 を剥奪した。 しかし、ウィクリフは後に以前の地 を回復すると、講義を通じて教皇の横領、彼の無謬性、彼の傲慢、彼の貪欲、彼の専制政治に対して激しい攻撃を加えた。ウィクリフは教皇を反キリストと呼んだ最初の人

物であった。 また、司教たちの虚飾、贅沢、装飾付きの礼服に話題を向け、それらを初期の司教たちの素朴さと比較した。 彼らの迷信と欺瞞は、彼が全身の力を尽くして論理的な正確さで逆説したテーマであった。

ランカスター公爵の後援により、ウィクリフは聖職録を手厚く与えられた。しかし、彼が彼の教区に定住するやいなや、彼の敵と司教たちは彼を厳しく迫害し始めた。しかし、ランカスター公爵が迫害の時の友となり、パーシー(Percy)卿、英国紋章院(紋章院)総裁が一緒にいたため、その試練は彼の前で歯が立たなかった。

エドワード 3 世の死後、孫のリチャード 2 世(Richard II)が 11 歳で王 を継承した。期待した独占的摂政の座を手に入れられなかったランカスター公爵は、彼の権威が下降曲線を描き始めた。時を得たウィックリフの大敵たちは、彼に対する告訴項目を新たに磨き上げた。教皇の権威に支えられた司教たちはウィックリフの裁判回付を主張し、彼は実際にランベス(Lambeth)で調査を受けている最中だった。しかし、その時間外では民衆がすぐにでも暴動を起こすように騒がしく、法廷でもいかなる最終的な判決を下してはならないとルイス・クリフォード(Lewis Clifford)卿が威圧的な命令を下したため、裁判官たちは怯え、ウィクリフに教皇の嫌われる教義を説教しないようにと禁

止令を下すだけで、全体の事件を結びつけた。しかしウィクリフはこれに反発し、裸足で歩き回り、厚いウールのフリーズガウン(frieze gown)を着て、以前よりも熱心に説教した。

1378 年に 2 人の教皇、すなわちウルバン 6 世(Urban VI)と合法的な教皇クレメント 7 世 (Clement VII)の間で競演が行われた。ウィクリフはこの好機を逃さず、すぐに教皇制度に反対する小冊子を発行し、それを各界各層の人々が真剣に読むようにした。 ところが、その年が終わる頃、ウィクリフが心身機能に重度の異常を起こし、死ぬかもしれないという恐怖が人々の間に広がっていった。オックスフォードで最も著名な市民 4 人を横目に乞食をしていた修道士たちは彼を訪ね、彼らに逆説してい

た内容を彼の魂のためにも撤回してほしいと懇願した。 しかしウィクリフはベッドから体を起こし、厳しい顔で応えた。「私は死なない。必ず生き延び、修道士たちの悪行を万天下に暴露する！」。

病床から起き上がると、ウィクリフは聖書を英語に翻訳する非常に重大な作業に入った。まず小冊子を発刊して聖書翻訳の必要性を提示したが、これに聖書発売を禁止させようとする司教たちの発作があった。しかし、それはむしろ聖書の販売量を急増させる結果をもたらし、印刷物を確保できない人々は特定の福音書や手紙のコピーでも手に入れようとした。

この仕事が終わると、ウィクリフはさらに火体説の教義を標的にした。1381年、オックスフォード大学の講演でこの教義を攻撃し、論文を発表した。オックスフォードの副学長だったバートン博士(Dr. Barton)は、その大学の首脳を招集し、ウィクリフの教義を異端として非難し、破門を言いながら脅迫した。ウィックリフは今やランカスター公爵から何の支援も受けられない上に、当時カンタベリー大司教となった以前の敵であるウィリアム・コートニー(William Courteney)の前に出頭するよう法廷召喚命令まで下され、困難にぶつかった。 そのため、自分がその大学の職員として司教の管轄権から免除されることを口実に自分を保護し、この嘆願は大学当局が自分の職員を支持することを決定したため受け入れられた。 指定された時間に召集された法廷は、少なくとも彼の見解について判決だけでも下そうという結論を出し、あるものは誤り、あるものは異端と断罪した。ウィクリフは火体説の主題を文書で出版し、裁判の結果に対して即座に反応を示した。大司教はすべての異端の社説とウィクリフが出版した冊子を徹底的に調査するようオックスフォード総長に与える指示書簡を王から受け取り、ウ

ィクリフは検閲の嵐の中で撤退し、ある奥まった場所に身を隠した。 しかし、すでに彼の見解は、道を歩いていて二人に会えば、そのうちの一人がウィクリフ派だと確信してもいいほど広く受け入れられていた。

この期間に二人の教皇間の争いは続き、教書を発表したウルヴァンは、宗教の大義名分のために、そして教皇庁を守るためにクレメントとその支持者たちに対して武器を持ち上げようと、宗教に関心のあるすべての人に呼びかけた。宗教の名を売ったその卑劣な戦争は、衰退の一途をたどっていたウィクリフに再びペンを握らせた。妥協を知らない辛辣な文章のためにウルヴァンの怒りを買い、前代未聞の大問題を引き起こしたようだが、ウィクリフは神の摂理によって彼らの手から救出された。しばらくの間、中風にかかった彼を敵は怒りを注ぐ価値もない存在と見なしたからだ。

再び戻ったウィクリフは自分の教区であるラターワース(Lutterworth)に行き、教区牧師を務めた。そして 1384 年末、シルベスターの日(Silvester's day)に主の腕の中で安らかに眠りについた。

ウィクリフの迫害者たちは、彼が死んで 41 年後、土になった遺体を墓から取り出して灰にし、その灰を拾って川に投げ捨てた。 そうして彼は 3 つの要素、すなわち土と火と水に分解されたわけだが、これはウィクリフの名前と教義の両方を完全に消滅させて消し去ろうとする発想から出たものだった。たとえ彼の死体を掘り出して骨を燃やし、灰を水に沈めさせたとしても、彼らは神の御言葉とその御言葉から得られた実と彼の教義に含まれる真理は燃やすことができなかった。

第 8 章 - 教皇権下で行われたボヘミアの迫害の数々

永遠に忘れられない「火刑場のジョン・ハス」(John Huss)

教会の権力を強奪してきたローマの聖職者の横暴がボヘミアでは特にひどかった。 そこで彼らは A.D.977 年に教皇に是正を求め、2 人の牧師と 4 人の兄弟をローマに送った。しばらくして彼らの要求は受け入れられ、不満の原因は是正された。特に彼らは 2 つのことを許されたのだが、それは自分たちの言葉で礼拝を捧げることと、聖餐の時に平信徒にも杯を与えることであった。

しかし、これらの論争は再び再開された。後任の教皇たちは自分の権力をボヘミア人に行使しようとし、ボヘミア人は自分たちの宗教的自由を守るために努力した。

A.D.1375 年、福音に熱心な人々がボヘミアのチャールズ王に教会議会を招集するよう要求したが、その理由は教会に浸透した弊害を調査して完全な改革を行おうというものだった。この仕事をどう処理すべきかわからなかった王は、教皇に人を送って指示を得ようとしたが、教皇はこの事件にあまりにも憤慨し、むしろ「この凶暴で邪悪な異端者たちを厳しく処罰せよ」と指示を出した。したがって、その君主はこの事件に関わったすべての人を処罰し、教皇を喜ばせるために人々の宗教的自由を制限する多数の付加的な措置を取った。

迫害の犠牲者は、ジョン・ハス（John Huss）とフラッグのジェローム（Jerome）が火刑に処されるまではそれほどひどくなかった。この二人の優れた改革者は、教皇とその使節の煽りによって非難され、死刑に処せられた。

ジョン・ハス (John Huss)

ヨハン・フースは 1380 年頃、ボヘミアのフッセンニッツという村で生まれた。 彼の両親は環境が許す限り、彼に最高の教育を施した。私立学校で古典に関する知識を習得した後、彼はフラッグの大学で知的能力を磨いた。

1398 年にフースは神学士（B.D.）の課程を開始し、後にフラッグのベツレヘム教会の牧師、大

学総長に任命された。その仕事を彼は誠実に遂行し、ついに説教者として頭角を現すようになった。

彼の説教はウィクリフの教義と一致していたため、教皇とその信者たちは彼を注目するようになった。 なぜなら、フースは少しの躊躇もなく彼らを猛烈に非難したからである。

イギリスの改革主義者であるウィクリフが改革に火をつけ、教皇権の最も暗い部分と無知に光を当て始めた。 彼の教義はボヘミアまで広がり、多くの人々が受け入れた。その中に欠かせないのがジョン・フースと彼の熱心な友人であり、殉教者の仲間であるフラッグのジェロームである。

改革派が日に日に増加するのを見て、フラッグ大司教はウィクリフの著書が広まらないようにする勅令を公布した。 しかし、これは彼が期待したものとは全く異なる影響を及ぼした。なぜなら、それはこの教義に従う人々をさらに刺激し、彼らがむしろこの教義を広く広めたからである。

ウィクリフの教義を強く擁護していたフースは大司教の勅令を拒否したが、大司教はついに教皇の教書を手に入れた。 その教書で大司教はその地域でウィクリフの教義を出版することを禁止する権限を委任された。大司教はまた、ウィックリフのコピーを配布していなかった 4 人の博士に訴訟を起こし、彼らの特権にもかかわらず、会衆への説教を禁じた。フース博士は大学の他の数人のメンバーと共にこのような手続きに抗議し、大司教の判決に控訴することになった。

この事件が教皇に知られ、教皇はコロナ枢機卿に権限を委任し、ジョン・フスをローマ法廷に直接出頭させ、彼が虚偽と異端を説いたと訴え、フスをそのような訴えに対

して弁護させた。しかし、フースは直接出頭しないことを望み、また、ボヘミアで彼を大いに愛していたウィンセロス王と、女王、貴族、大学当局は、教皇がそのような出頭命令を撤回することを望んだ。 彼らはまた、ボヘミアが異端という告発を受けないことを望み、彼らの礼拝場所で自由に福音を説くことを許されることを望んだ。

3 人の事務弁護人がフース博士の代わりにコロナ枢機卿の前に出てきた。 彼らは彼が出頭しなかったことを弁護しようとし、フース博士の代わりに答える用意があることを伝えた。 しかし、枢機卿はフースが傲慢であると宣言し、彼を破門した。弁護人たちは教皇に上訴し、4 人の枢機卿がこの問題を調査するために任命された。しかし、この委員会はこの前の判決をさらに裏付けるだけで、フースだけでなく、彼の友人や信者もすべて破門することになった。

このような不当な判決にフースは委員会に訴えたが、無駄であった。このような厳しい判決を受け、フラッグにある彼の教会から追放されたにもかかわらず、彼は故郷のフッセンニッツに行き、彼の新しい教義を講壇で、そして文章で発表し続けた。この時期に彼が書いた文章はかなり多い。プロテスタントの本を読むことは絶対に禁じられな

いという論文を編纂したこともある。彼は三 一体に関するウィクリフの本を擁護する文章を書き、腐敗した教皇と枢機卿と聖職者の悪行を大胆に語った。彼はまた、強力な議論が収録された他の多くの本を書いた。これは彼の教義が広がることに大きく貢献した。

1414 年 11 月、ドイツのコンスタンツで全体委員会が召集されたが、この委員会は外見上は教皇権に対抗する 3 人の間で未決定の論争を決定するためであったが、実際には改革の進展を踏みにじるためであった。

ジョン・フースはこの委員会に出頭するよう召喚された。彼に勇気を与えるために、皇帝は彼に安全通行証を送った。フースが旅行中に人々から受けた賞賛と尊敬は計り

知れないほどだった。通りや小道でさえ、人々は彼が通り過ぎるのを見るために列をなしていたが、それは好奇心というよりは敬意の表れであった。

彼は大きな歓声とともに各都市に案内され、ある種の勝利感の中でドイツを通過したと言えるでしょう。彼はこう言った。「私は追放者であった。しかし今、私は私の最悪の友人がボヘミアにいることを知っています。"

フースがコンスタンツに到着すると、彼は市から遠く離れた場所に宿をとった。彼が到着してからしばらくして、ステファン・パレッツという男が来た。 彼はフースに意図的な迫害を加えるためにフラッグの聖職者に雇われた人物で、後に彼はローマ法廷から送られたミカエル・デ・カシスと合流した。彼らは自分たちを彼の告発者を自称し、フースに対して一連の条項を作り、教皇と委員会の高 聖職者に提出した。

フスがその都市にいることが知られると、彼はすぐに逮捕され、宮廷の役人に引き渡された。このような一般的な法と正義の違反に対して、フスの友人の一人が特に注意を払い、君主の安全通行権を要求したが、教皇はこれを拒否し、君主の安全通行権も拒否された。

フスが監禁されている間、委員会が異端審問官の役割を担った。彼らはウィクリフの教義を呪い、さらには彼の遺骨を掘り起こして燃やし、灰にするよう命じたが、これらの命令は快く許可された。その間、ボヘミアとポーランドの貴族たちはフースのために強力に仲裁に乗り出し、彼を非難させないようにしたが、彼を裁判するために任命された委員たちは彼に有罪を宣告した。

彼が委員会の前に立ったとき、彼に訴えられた条項が朗読されたが、40 以上の条項は主に彼の著作から抜粋されたものであった。ジョン・フースの答えは次のようなものだった。"私は教皇に訴えましたが、彼は亡くなり、決定されないまま残っているこの問題の名分を、彼の後継者であるジョン 13 世に訴えます。私の支持者たちが 2 年ほど、

教皇の前で私の名分を弁明する機会を与えてくれなかったので、私は大裁判長であるキリストに訴えたのです。

ジョン・フスがこの言葉を終えると、彼らは彼に教皇の決定を受け入れたかどうか尋ねたが、彼はそうではないと答えた。再び彼らは、彼がキリストに訴えたことが正当かどうか尋ねたが、ジョン・フースは「真に私がここにいる皆さんに断言するのは、キリストに訴えることよりも、より正義で効果的な訴えはないということです。キリストより高い裁判官が誰であるか。 誰がこの問題をより正義で、より公平に知り、判断することができるだろうか。 キリストには欺瞞もなく、彼は欺かれることもない。誰が彼よりも惨めで抑圧された人々をよりよく助けることができるでしょうか。"

ジョン・フースが敬虔で立派な顔をしてこの言葉を言ったとき、全委員会は彼を嘲笑し、笑った。

このような素晴らしい言葉は反逆の言葉とみなされ、彼の敵対者たちを激怒させた。 そのため、委員会が指定した司教たちが彼の聖職者の衣服を脱ぎ、彼を侮辱し、紙の司教冠を彼の頭にかぶせた。そこには悪魔が描かれ、「異端の首謀者」と書かれていた。 彼はこれを見て言った、「私の主イエス・キリストは私のために茨の冠をかぶった。それなら、たとえ屈辱的ではあるが、彼のために私がこの軽い冠をかぶるのは当然ではないか。 本当に私は喜んでこれをかぶる」と言った。

彼の頭にこれがかぶせられたとき、司教は言った、「今、私たちはあなたの魂を悪魔に引き渡す」と。

すると、ジョン・フースは目を上げて天を見上げ、「しかし、主イエス・キリストよ、私の霊を贖いなさい！主が贖われた私の霊を主の手に委ねます」と言った。

火刑台の鎖に縛られたとき、彼は笑いながら「私の主イエス・キリストは私のためにこれよりもっとひどい鎖に縛られたのに、なぜ私はこの錆びた鎖を恥じるのか」と言った。

薪が首まで積まれたとき、ババリア公爵は彼に信仰を捨てるように言った。 しかしフースは「私は決して悪を目指す教義を説いたことはない。私が私の口で教えたことを、今や私の血で償うことになった。 そして彼は死刑執行人に言った。「あなたは一羽のガチョウを焼き殺そうとしている（ボヘミア語でハス(Huss)はガチョウを表す）。しかし 1 世紀後には、焼くことも煮ることもできない白鳥が現れるだろう」と言った。 彼が未来を予見したのであれば、彼はマーティン・ルーサーを意味していたに違いない。 彼は約 100 年後に輝きを放ち、白鳥を紋章として持っていた。木に火がつき、私たちの殉教者フースは大きく陽気な声で讃美歌を歌いました。その音は木々が燃える音を突き抜けて聞こえたが、やがて激しい炎に隠れて聞こえなくなった。

人々は彼の灰をすべて集めてライン川に撒き、地上に彼の痕跡は何も残らなくなった。しかし、聖書通りに信じる人々の心の中にある彼の記憶は、水でも、火でも、どんな種類の拷問でも消すことはできないだろう。

プラハのジェロームに対する迫害 (Jerome)

ジョン・フースの友人であり、彼と一緒に殉教したと言えるこの改革者は、プラハで生まれ、プラハの大学で学び、またヨーロッパのいくつかの神学校、特にパリ、ハイデルベルク (Heidelberg)、ケルン(Cologne)、オックスフォード(Oxford)大学で勉強した。ジェロームはオックスフォード大学でウィクリフの著作に精通するようになり、並外れた勤勉さを持ち、鋭意努力した結果、英語に精通した後、そのうちのいくつかの作品を母国語に翻訳した。

ジェロームはプラハに戻るとすぐにウィクリフの支持者であることを公言した。ウィックリフの教義がボヘミアで大きな進歩を遂げ、フースがその主な促進者であることに気づいた彼は、偉大な改革の課題を遂行していく上で彼の助力者となった。

1415 年 4 月 4 日、ジェロームはフースが死ぬ約 3 ヶ月前にコンスタンツに到着した。 彼の到着が世間に知られ、公会が捕まえようとしていることを知り、翌日、コンスタンツから 1 マイル離れた皇帝の都市イベルリング(Iberling)に移動した。彼はそこで皇帝に手紙を書き、安全通行権を与えることを条件に公会の前に立つことを申し出たが断られ、公会にも依頼してみたが、ハルソーに戻ってボヘミアに足を向けた。 しかし、ジェロームはハルソーでシュルツバッハ(Sultsbach)公爵の一将校に逮捕された。ジェロームを手に入れたシュルツバッハ公爵は、今後すべきことを手紙に書いて公会に送った。公会は公爵に感謝の意を表した後、ジェロームを直ちにコンスタンツに送るよう要求した。ジェロームは長い鎖の束縛に縛られて連行され、到着するとすぐに忌まわしい地下監獄に引き渡されてしまった。

ついに公会の前に連れてこられた彼は、自分の大義名分を弁明して罪を晴らすことを望んだが、拒否されると、突然次のように絶叫し始めた。「私は 340 日間、刑務所を転々としながら監禁され、惨めとは惨めなこと、困窮とは困窮なことをすべて味わった。私の敵にはあらゆる告訴の機会を提供しておきながら、肝心の私に

は最低限の防御の機会すら与えないとは、このような行為は何ということか！ あなた方は、私が私の裁判を準備できるように一時間も与えようとせず、私に注がれた誹謗中傷はそのまま信じました。私の教理も知らずに私を異端者として提示し、どんな信仰を所有しているのか知る前に信仰の敵とみなし、迫害に対する私の考えを知ろうともせず、あらかじめ私を司祭を迫害する者と決めつけてしまった。君たちは今、総公会を開いているので、君たちが中枢となり、この全世界が威厳と知恵と神聖さを論じるかもしれないが、それでも君たちは人間であり、人間は外見に惹かれるものである。 したがって、君たちがより高潔な知恵を追求すればするほど、より多くの注意を払い、愚かな道を歩まないようにしなければならないだろう。私が今抗弁する大義名分は私だけの名分ではない。 それは人類の大義名分であり、キリスト教徒の大義名分であり、後世の権利に影響を与える大義名分である。しかし、それに対する実験が私の中で直接行われようとしている。"

しかし、このような発言は何の役にも立たなかった。ジェロームは自分の罪状が読み上げられるのを黙って聞くしかなかった。 それは次のような項目に要約された。彼は教皇の威厳を嘲笑した者である。彼は教皇に反対する者である。彼は枢機卿たちの敵である。彼は高 聖職者を迫害する者である。彼はキリスト教を憎む者である。

ジェロームに対する裁判は、彼が告発されてから 3 日目に行われ、ジェロームの容疑を支持する証人たちが尋問された。囚人は自分を弁護する準備ができたというが、彼が 340 日間、光も入らない忌まわしい地下監獄にいて、その一般的な一日三食も食べられず飢えに苦しんでいたことを考えると、その準備ができたという言葉が信じられない。しかし、活力が少しでも不足すれば絶望の奈落の底に沈んでしまうような不利な立場にもかかわらず、彼の気概は天を突くようで、また、まるですべての蔵書が揃った図書館でも持ってきたかのように、教父たちと古代著者の文章を引用して自分を弁護した。彼が胸を打つような雄弁をどのように意気揚々と

繰り広げるか、頑固な熱意を持った胸が溶けるようで、迷信にとらわれた心もそれが間違っていることを認める気配を見せるほどだった。 彼は事実に基づく証拠と、脅迫と中傷が支持する証拠を見事に区別した。また、彼の人生と行動の方向性を一つも欠かすことなく提示し、最も偉大で聖なる人々が異なる視点で思索するのは、真理を隠すためではなく、それを識別することに目的があることを誰もが知っていると話した。 彼は自分のすべての大敵を堂々と軽蔑したが、もし彼が少しでも抜け穴を見せたら、彼らは彼に徳と真理の大義名分を撤回させただろう。彼はフースに賛辞を送り始め、自分も彼の栄光の殉教の足跡をたどる準備ができていると宣言した。その後、ウィクリフを最もよく表してくれる教理を簡単に言及し、次のような声明で締めくくった。すなわち、彼の意図は決して神の教会に逆らって何かを改進しようとするのではなく、彼が不満を吐き出した聖職者の堕落に反対することであること、またこれに加えて、彼が言わずにはいられないのは、もともと広く善行を行い、慈善を施す意図であった教会の財産が、目の満足、盛大な宴会、派手な祭衣、そしてキリスト教の名前と信仰告白に他の恥辱をもたらすために下品に使われるのは明らかに不敬虔なことであるということである。

裁判が終わり、ジェロームは仲間の殉教者フースに下されたのと同じ刑を宣告された。 その結果、彼は教皇がいつも行っていたように市民の手に渡されたが、彼自身が信徒であったため、降格の儀式を行う必要はなかった。準備された赤い悪魔が描かれた紙帽子が頭にかぶせられると、彼はこう言った。「本当に私たちの主イエス・キリストは、最も惨めな罪人である私のために殺されたとき、その頭に茨の冠をかぶったのだから、私も主のためにこの帽子をかぶる。 彼が信仰を否認することを期待して二日間の猶予期間が与えられ、この間、フィレンツェ枢機卿は彼を自分の味方に引き込もうと懸命な努力を尽くしたが、ジェロームは自分の血でその教義に印を押すことを決意し、あまりにも大胆に死を えた。

ジェロームは刑場に向かう途中、賛美歌を何曲か歌った。フスが焼かれ、自分もそのように処刑されるその地点に着くと、彼はひざまずき、熱い祈りを捧げた。 そしてとても気持ちよく火刑台を抱きしめた。彼らが木の棒に火をつけようと背後に近づくと、こう言った。"こっちに来て、私の目の前で火をつけなさい。 それを恐れていたら、私はここに来なかっただろう！"

ついに火がついた。ジェロームは賛美歌を歌い始めたが、大きく口を開いた蛇のように飲み込んでくる炎の痛みに賛美を止めなければならなかった。 そして炎の中で最後にこのような叫びが聞こえた。"炎に包まれた私の魂をキリストに捧げます！"

第９章 - マーティン・ルーサーの生涯と迫害に関する記事

著名なドイツの聖職者であり、教会改革者であったマーティン・ルターは、鉱山労働者であったジョン・ルター(John Luther)の息子として、マンスフェルト(Mansfield)州に所在するザクセン(Saxony)のイスレベン(Isleben)で 1483 年 11 月 10 日に生まれた。ルターは

1501 年にエルフルト(Erfurt)大学で論理学と哲学一般過程を履修し、20 歳になると修士号を取得し、アリストテレスの物理学と倫理学、その他の他の分野の哲学を講義した。 その後、両親の勧めで弁護士になる目的で民法を勉強しようとしたが、ある日、友人と野原を歩いているときに突然降った雷に打たれ、ルター自身はその場で倒れ、隣の友人が死ぬ事件に大きな衝撃を受け、その道で世界を背負い、聖アウグスティヌス(St. Augustine)修道会に入ってしまった。ルターはそこでアウグスティヌスとスコラ哲学者たちの著書を探読し、書物を渉猟する中で、今まで見たことのないラテン語聖書の写本を発見することになった。大きな好奇心を持ってそれを読み、読み返すうちに、その数多くの聖書の節の中で人々に伝えられる内容は氷山の一角に過ぎないという事実に驚きを禁じ得なかった。

ルターは 1 年間の修練修道過程を経た後、エル平ニ巨修道院で聖職者になることを宣誓し、司祭就任式を行い、1507 年に初めてミサを直接執り行った。翌年、ヴィッテンベルク大学 (University of Wittenberg)に移ったが、この大学にアウグスティヌス会修道院に属する年配の教授がいた。当時同じ修道院の修道士だったルターは教授と特に罪の赦しについて話し合ったが、老神父はルターに「すべての人の罪がキリストの中で赦されることを優先的に信じることが神の明白な命令であり、信仰によって無償で義とされることが使徒パウロの教義である」と教えた。これにより、ルターは「私たちは信仰によって義とされた」という言葉を繰り返した

使徒パウロの意図を完全に悟るようになり、以前に読んだスコラ哲学者たちの解釈が無駄であることを知った。

1512　年、ルターが所属していた修道会のいくつかの修道院が彼らの司教総代理と争い、ルターはローマに行き、彼らの大義名分を主張する者として選ばれた。ローマに行った彼は、教皇と彼の宮廷を見たことはもちろん、そこの聖職者の慣習を観察し、彼らがミサを執り行う際に見せた早急で、表面的で不敬虔な姿を一つも欠かさずメモしておいた。その後、ヴィッテンベルクに戻り、ヴィッテンベルク大学に滞在し、神学教授としての召命に専念した。 すなわち、ローマ書と詩篇を以前の注釈家とは全く異なる方法で説明し、私たちの罪は神の御子の愛によって無償で赦されるので、私たちはこの豊かな贈り物を信仰で受け入れるべきであることを明らかにすることによって、人々の心を神の御子に熱心に戻したのである。

1513　年 3 月、ユリウス 2 世(Julius II)の後を継いだレオ 10 世(Leo X)は、ユリウス 2 世が始めた聖パウロ大聖堂(the Church of St. Paul)の建築計画を完成させるために必要な膨大な資金を集めようと免罪符を売り始めました。1517 年、大聖堂の建築に一円でも寄付する者のために、全ヨーロッパに及ぶ総括的な免罪を発表し、各国に代表を任命して免罪を称賛し、人々を免罪してお金をかき集めさせた。この奇怪な行為でヴィッテンベルク全域に怒りの声が響き渡り、特にルターの敬虔な熱意を一気に燃え上がらせた。

1517　年萬聖節(All Saints' Day)の前日(10 月 31 日)の夜、ルターはヴィッテンベルク市の城の横にある教会の門に免罪に関する論文を公開的に貼り付け、その文章の冒頭でそれに反対するすべての人に、文章でも議論でもいいから一度貼ってみようという挑戦状を出した。これに対して教皇レオ 10 世はルターを異端として訴え、皇帝マクシミリアン(Maximilian)もザクセンで炎のように燃え上がるルターの主張を阻止することに悩んだ。ルターの主張は、ローマ・カトリックと皇帝の

両方に頭痛の種だったのだ。ルターの大敵がルターの主張を撤回させようとルターと交渉を繰り広げている間、ルターの教義は大きく優勢になり、故郷と海外から励ましの声が寄せられた。ボヘミアンたちは、改革作業中に殉教したジョン・フースの本や手紙を送り、どんなことがあっても意志を曲げず、よく耐えて忍耐するようにと励ましを惜しまなかった。多くの偉大な学者たちもルターに加わった。

レオ 10 世はルターの大敵たちの粘り強い懇願に負け、1520 年 6 月 15 日付の教書でルターを正式に非難することを発表しました。三足の木曜日[Maunday Thursday、イースター前の木曜日で、キリストが最後の晩餐の時に使徒たちの足を洗ったことを記念し、また聖体と聖品の聖事をキリストが定めたことを記念するローマカトリックの日]に教皇の叱責を受けて初めて訴えられたマーティン・ルーサーは、イースターが過ぎた後、ヴォルムス(Worms)への旅に拍車をかけ、そこで皇帝とドイツのすべての国の前に姿を現し、絶えず真理に固執し、自分を守り、大敵たちに答えてくれた。

シャルル 5 世は自分自身も教皇の判決により、ルターをローマ・カトリックから分離した教会分離主義者であり、悪名高い異端者とみなすと宣言したが、これに対してルターは教皇と司教たちに対して露骨に戦い始めた。 彼はできるだけ多くの人々が教皇勢力の権威を軽蔑するように、教皇の教書に対抗する本と「司教の 階」と呼ばれる聖職者の 階に対抗する本を 1522 年にそれぞれ 1 冊ずつ執筆した。また、ドイツ語で翻訳された新約聖書を出版したが、後にルター自身とメランヒトン(Melanchthon)によって校閲された。

1527　年、ルターは心臓部分の血液が突然凝固し、息絶えそうになった。1533 年にはアウグスブルク信仰告白(1530 年にルターがアウグスブルクで発表した信条)を守ったゆえに苦難を受けたオシャッツ(Oschatz)市民に慰めの手紙を送った。1534 年には彼がドイツ語で翻訳した聖書が初めて印刷され、それから 1 年後

に世に出るようになり、同じ年に「ミサと司祭の化身説に対する反論」という本を出版した。1537 年 2 月、シュマルカルド(Smalkald)で宗教問題をめぐる会議が開かれた時、メランヒトンと一緒に召されたが、集会に出席したルターはひどく重い病気にかかり、回復の兆しが見えず、病院に移される間に残した遺言でローマ・カトリックに対する自分の憎しみを彼の友人や兄弟たちに伝えた。このように生を終えるまで神の偉大な業に専念したルターは 1546 年 2 月 18 日、70 歳の日記で生を終え、息を引き取る前に自分を取り巻く人々に福音伝道のために神様に祈るように頼みました。 "なぜなら、二、三回開かれたことのあるトレント公会議と教皇が福音に逆らって奇妙なことを考案するだろうからだ。"午前 9 時になる前に、自分の臨終の時間が近づいていることを感じたルターは、敬虔な祈りで自分を神に委ねた。

"天におられる私の父、永遠の憐れみ深い神よ！ あなたはあなたの愛する御子、私たちの主イエス・キリストを私に明らかに示してくださいました。私は主を知り、主を私の命と健康と贖いとして愛しましたが、邪悪な者は主を迫害し、罵倒し、傷つけ、苦しめました。私の魂を主に導いてください。" その後、彼は次のように 3 回続けて言った後、彼を救ってくださった主の腕に安らかに抱かれるようになった。「私の霊を主の手に委ねます。真理の神よ、主は私を贖われました。神がこの世をこれほど愛し、独り子を与えたのは、彼を信じる者は誰でも滅びることなく、永遠の命を得るためである」。

第 10 章 -ドイツの一般的な迫害

ドイツにおける迫害は、主としてマルティン・ルターの教義と宣教によって扇動された。実際、教皇はこの勇気ある改革者の成功に恐れおののき、皇帝シャルル 5 世を巻き込んで彼らを絶滅させようと画策した。

そのために

1. 彼は皇帝に 20 万クローネを用意させた。

2. 彼は 1 万 2,000 人の歩兵と 5,000 人の馬を 6 ヶ月間、あるいは遠征中維持することを約束した。

3. 彼は戦争中、帝国の聖職者の収入の半分を皇帝が受け取ることを許可した。

4. 皇帝は、プロテスタントに対する敵対行為を支援するために、修道院の土地を 50 万クローナで担保に入れることを許可した。

こうして、皇帝はプロテスタントの殲滅に乗り出した。この目的のために、ドイツ、スペイン、イタリアで強大な軍隊が投入された。

一方、プロテスタント諸侯は、迫り来る打撃に対抗するため、強力な連合軍を結成した。大軍が挙兵され、指揮権はザクセン選帝侯とヘッセン州に与えられた。帝国軍はドイツ皇帝が直接指揮を執り、全ヨーロッパの目がこの戦争に向けられた。

やがて両軍は激突し、絶望的な戦闘が続いたが、プロテスタントは敗れ、ザクセン選帝侯とヘッセン国王はともに捕虜となった。この致命的な打撃は、恐ろしい迫害に引き継がれた。その厳しさは、追放が軽い運命とみなされ、陰惨な森の中に隠れることが幸福とみなされるほどのものだった。このような時代には、洞窟は宮殿であり、岩は羽毛のベッドであり、野生の根は珍味である。

捕らえられた者たちは、地獄の想像力が生み出しうる最も残酷な拷問を経験した。彼らの不屈の精神は、真のキリスト教徒があらゆる困難を乗り越え、あらゆる危険にもかかわらず、殉教の栄冠を手に入れることができることを示していた。

ヘンリー・ヴォーズとジョン・エッシュはプロテスタントとして逮捕され、尋問に付された。ヴォエスは自分自身ともう一人のために答え、司祭の質問に対して次のように答えた。

司祭お二人とも、何年か前にオーギュスティーヌ修道士だったのではありませんか？　ヴォーズ。はい。

司祭どうしてローマの教会の懐を離れることになったのですか？　ヴォーズ。彼女の忌まわしい行為を理由に司祭あなたは何を信じますか？ヴォーズ。旧約聖書と新約聖書の中で。

司祭父祖の書物や公会議の教令を信じますか？　ヴォーズ。そう、聖典と一致していればね。

司祭マルティン・ルターがあなた方を誘惑したのではないですか？

ヴォーズ。キリストが使徒たちを誘惑したのとまったく同じやり方で、彼は私たちを誘惑した。つまり、彼は私たちの肉体の弱さと魂の価値を私たちに認識させたのだ。

この検査で十分であった。二人は炎に処され、まもなく、殉教の栄冠を受けるときにキリスト教徒になるような男らしい不屈の精神で苦しんだ。

雄弁で敬虔な説教者であったヘンリー・サトフェンは、真夜中にベッドから降ろされ、かなりの距離を裸足で歩かされた。彼は馬を欲しがったが、車掌たちは嘲笑して言った！いやいや、異端者は裸足で歩いてもいいのだ」。目的地に着くと、彼は火刑に処せられた。しかし、処刑の間、捕虜たちは彼が炎の中で苦しむことに満足し

なかったため、多くの侮辱が彼に加えられた。捕虜たちは、彼が炎の中で苦しんだだけでは飽き足らず、彼を切り刻んだ。

ハレでは多くの者が殺害され、ミドルブルクは嵐に襲われ、すべてのプロテスタントは剣にかけられ、ウィーンでは多数の者が焼かれた。

ある牧師を死刑にするために派遣された将校が、牧師の家に来たとき、その目的は牧師を訪問することだけだと偽った。その牧師は、残酷なことを意図しているとは疑わず、その客と思われる人物を非常に丁重にもてなした。夕食が終わるやいなや、警官は数人の従者に言った。侍従たちは、それまで礼節を尽くしてきただけにショックを受け、主人の命令を実行するのをためらった。聖職者は言った。「このようにもてなしの掟を破ったことで、あなた方の良心にどんな呵責が残るか考えてみなさい」。侍従たちはしぶしぶながら、処刑人としての忌まわしい仕事を行った。

シャレの町の敬虔な神父、ペーター・シュペングラーが川に投げ込まれ、溺死した。墓場となる川のほとりに連れて行かれる前に、ミサに行かなかったこと、告解をしなかったこと、超聖体を信じなかったことなど、彼の罪が公表されるように、彼らは彼を市場に連れて行った。この儀式が終わると、彼は人々に素晴らしい説教を行い、感動的な賛美歌で締めくくった。

あるプロテスタントの紳士が、信仰を捨てないことを理由に斬首を命じられ、処刑場に快く向かった。修道士が彼のところにやってきて、低い声でこう言った。「あなたは公に信仰を捨てることを非常に嫌がっているので、私の耳元で懺悔の言葉をささやいてください。これに対し、紳士は大声で答えた。「ご心配なく、修道士様。私は神に罪を告白し、イエス・キリストの功徳によって赦しを得ました」。そして、処刑人に向かって言った。「このような男たちに煩わされることなく、あなたの職務を全うしてください。

立派な牧師であったヴォルフガング・スクッフとジョン・ユグリンは火刑に処され、ヴェルテンベルク大学の学生であったレナード・カイザーも火刑に処された。バイエルン人のジョージ・カーペンターはプロテスタントを撤回することを拒否したため絞首刑に処された。

ドイツでの迫害は長い間収まっていたが、1630 年、皇帝とスウェーデン王との間で再び戦争が勃発した。スウェーデン王はプロテスタントの皇太子であったため、ドイツのプロテスタントはスウェーデン王の大義を支持した。帝国主義者たちはパセウォークの町を包囲し、（スウェーデン人たちが防衛していた）嵐に巻き込み、その際に最も恐ろしい残虐行為を行った。彼らは教会を取り壊し、家々を焼き払い、財産を略奪し、聖職者を虐殺し、守備隊を剣にかけ、町民を絞首刑にし、女性を犯し、子供を窒息させるなどした。

1631 年、マグデブルクで最も血なまぐさい悲劇が起こった。ティリー将軍とパッペンハイム将軍がこのプロテスタントの都市を包囲し、嵐によって征服したのだが、その大虐殺の間に、階級、性別、年齢の区別なく 2 万人以上が殺され、6 千人がエルベ川を越えて逃げようとして溺死した。この猛威がおさまった後、残った住民は裸にされ、ひどい鞭打ちを受け、耳を切られ、牛のように鎖でつながれて漂流した。

ホクスターの町はローマ教皇庁軍に征服され、占領された。住民全員と守備隊は剣で処刑され、家々にも火が放たれ、遺体は炎に焼かれた。

グリッフェンベルクでは、帝国軍が優勢になると、元老院議員を元老院議室に閉じこめ、火をつけた藁で囲んで窒息させた。

フランヘンダルは降伏文書に基づいて降伏したが、住民は他の場所と同様に残酷に酷使され、ハイデルベルクでは多くの者が牢獄に閉じ込められ、飢え死にした。

ザクセンにおけるティリー伯爵率いる帝国軍の残虐行為は、こうして列挙される：

半分首を絞め、また元に戻すことを繰り返す。鋭利な車輪を指やつま先に転がす。親指を万力で挟む。不潔なものを無理やりのどに押し込む。目、鼻、耳、口から血が噴き出すほどきつく頭を縛る。指、つま先、耳、腕、脚、そして舌にまで、燃えるマッチをつける。口の中に火薬を入れて火をつけ、頭を粉々にする。火薬の入った袋を体のあちこちに結びつけ、吹き飛ばした。肉のある部分に紐を通して前後に引く。ボドキンやナイフで皮膚に切り込みを入れる。鼻、耳、唇などにワイヤーを通す。プロテスタントの人たちを足で吊るし、頭を火にくべ、その火で煙乾燥させる。片腕を脱臼するまで吊るす。肋骨をフックで吊るす。破裂するまで酒を飲ませる高温のオーブンで多くの人を焼く足に重りを固定し、滑車で何人も引き上げる。吊るす、窒息させる、焙る、刺す、揚げる、裂く、裂く、骨を折る、肉を裂く、野生の馬で引き裂く、溺れさせる、絞め殺す、焼く、礫にする、没にする、毒殺する、舌、鼻、耳などを切り落とす、手足を鋸で切り落とす、切り刻む、踵で引き寄せて通りを歩く。

ティリー伯爵は、このような残虐な行為を行っただけでなく、軍隊に命じて実行させた。ティリー伯爵はどこに行っても、最も恐ろしい蛮行と残酷な略奪を繰り返した。飢饉と大火がティリー伯爵の歩みを際立たせ、ティリー伯爵が持ち出せなかった食料はすべて破壊し、町を去る前にすべて焼き払った。

年老いた敬虔な男を裸にし、テーブルの上に仰向けに縛りつけ、その腹に大きな獰猛な猫を固定した。そして

、その猫を刺し、苦しめた。その猫は怒りに燃えて彼の腹を裂き、腸をかじった。

また別の大臣とその家族が、この非人間的な怪物たちに捕らえられた。彼らは彼の目の前で妻と娘を強姦し、幼い息子を槍の先に突き刺し、彼の蔵書全部を取り囲んだ。彼らはそれらに火を放ち、彼は炎の中で焼き尽くされた

。

ヘッセン＝カッセルでは、軍隊の何人かが、主に狂った女性たちが入院していた病院に入り、哀れな女性たちを裸にして、気晴らしに通りを走り回らせた後、全員死刑にした。

ポメラニアで、帝国軍の数人が小さな町に入り、若い女性と 10 歳以上の少女をすべて捕らえ、その両親を輪にして、詩篇を歌いながら子供を犯すように命じた。そして、幼い子供を持つすべての人妻を連れ去り、欲望を満たすことに同意しないなら、そのために燃やした大きな火で、子供たちを目の前で焼くと脅した。ティリー伯爵の兵士の一団が、ストラスブルクの大市場から戻ってきたバーゼルの商人たちに出会い、彼らを取り囲もうとした。捕らえられた 10 人は懸命に命乞いをしたが、兵士たちは彼らを殺害した。

同じ兵士が、2 人の伯爵夫人に出会った。伯爵夫人は、そのうちの 1 人の娘である数人の若い女性とともに、馬車で外の空気を吸っていた。兵士たちは彼女たちの命は助けたが、最大級の下品な扱いをし、全員を一糸まとわぬ姿にすると、馬車を走らせた。

英国の仲介により、ドイツはようやく平和を取り戻し、プロテスタントは数年間無抵抗であった：

プロテスタントは身廊で礼拝を行い、ローマ・カトリックは聖歌隊でミサを行った。しかし、プファルツ選帝侯は、これ以上このような慣習を許さないと考えた。ハイデルベルクは彼の居住地であり、聖霊教会は彼の主要都市の大聖堂であるため、

礼拝は彼が会員であるカトリック教会の儀式に従ってのみ行われるべきであると宣言した。その後、プロテスタントが教会に入ることを禁じ、教皇派が教会全体を所有するようになった。

不満を抱いた民衆はプロテスタント諸国に救済を求めたが、これに対して選帝侯は激怒し、ハイデルベルクのカテキズムを弾圧した。しかしプロテスタント勢力は、選帝侯がこの行為によってウェストファリア条約の条項を破ったとして、全会一致で満足を要求することに同意した。イギリス、プロイセン、オランダなどの裁判所は選帝侯のもとに代理を送り、選帝侯の行為の不当性を訴え、選帝侯がプファルツのプロテスタントに対する態度を改めない限り、ローマ・カトリックの臣民に対して最大限の厳しさをもって接すると脅迫した。プロテスタントの勢力と選帝侯の勢力との間で多くの激しい論争が起こったが、次のような出来事によって、論争はさらに大きくなった：オランダ公使の馬車が、ヘッセン公が派遣した駐在員の玄関前に停車していた。オランダ公使の馬車は、ヘッセン公が派遣した駐在官の玄関前に停車していた。公使は偶然にも病人のもとへ運ばれていたのだが、馬車はそれに気づかず、公使に付き添っていた者たちがそれを見て、公使を箱から引きずり出し、ひざまずかせた。公使の家事に対するこの暴力は、プロテスタントのすべての代議員から強い反感を買い、プロテスタントはさらに 3 つの苦情を代議員に提出した

。

1. 聖クリスピンのミサへの寄付を拒否するプロテスタントの靴職人全員に対し、軍事処刑が命じられたこと

。

2. プロテスタントはローマ教皇の聖日に働くことを禁じられており、収穫時期であっても、非常に重い罰則が課せられていた。

3. 何人かのプロテスタントの牧師が、その教会がもともとローマ・カトリックによって設立・建設されたものであるかのように装って、その教会を取り上げられたこと。

プロテスタントの代議員たちは、ついにこの問題を深刻に受け止め、選帝侯に、彼らが拒否した正義を実行するよう、武力で強制することをほのめかした。この脅しによって、選帝侯は理性を取り戻した。そこで彼は、聖霊教会の本体をプロテスタントに回復させることに同意した。彼はハイデルベルク・カテキズムを復活させ、プロテスタントの聖職者たちに、彼らが奪われていた教会を再び所有させ、プロテスタントが教皇庁の聖日に働くことを許可し

、聖霊が通り過ぎるときにひざまずかなかったからといって、何人も妨害されないように命じた。

これらのことを彼は恐れて行った。しかし、プロテスタントの臣民への恨みを示すために、プロテスタントの国家が干渉する権利のない他の状況において、彼はハイデルベルクを完全に放棄し、すべての司法裁判所をローマ・カトリック教徒が完全に居住していたマンハイムに移した。ハイデルベルクのローマ・カトリック教徒に追随して、マンハイムは繁栄した。その間に、ハイデルベルクのプロテスタントは貧困に陥り、彼らの多くは祖国を離れてプロテスタントの国に亡命するほど困窮した。このようなプロテスタントの多くは、アン女王の時代にイングランドに移住し、そこで心から迎えられた。公的にも私的にも、人道的な援助が行われた。

1732 年、3 万人以上のプロテスタントが、ウェストファリア条約に反してザルツブルクの大司教座から追放された。彼らは真冬に、着る物もほとんどなく、食料も持たずに逃げ出した。これらの貧しい人々の大義は、彼らの救済を得られるような国家によって公に支持されなかったため、彼らはさまざまなプロテスタント諸国に移住

し、良心を痛めることなく宗教の自由な行使を享受でき、ローマ教皇の迷信や 暴政の束縛から解放された場所に定住した。

第 11 章 - オランダの迫害についての説明

福音の光はオランダ全土に広がった。そしてローマ教皇は皇帝を扇動し、プロテスタントに対する迫害を開始した。その結果、何千人もの人々が迷信的な悪意と野蛮な偏見のために殉教者として倒れた：

敬虔なプロテスタントの未亡人ウェンデリヌタは、その宗教を理由に逮捕された。何人かの修道士が彼女を説得したが、うまくいかなかった。しかし、説得がうまくいかなかったため、彼女の知人のローマ・カトリックの女性が、彼女が監禁されている地下牢への入室を希望した。彼女は、囚人が改宗するよう最大限努力すると約束した。地下牢に入ることが許可されると、彼女は最善を尽くしたが、その努力は実らなかった。親愛なるヴェンデリヌータ、もしあなたが私たちの信仰を受け入れるつもりがないのなら、せめてあなたが公言していることを自分の胸に秘め、命を長らえる努力をしてください」。それに対して、やもめはこう答えた。"奥様、あなたは自分が何を言っているのかご存じないのです。"私たちは心で義を信じますが、舌で告白すれば救われるのです。しかし、彼女は断固として撤回を拒否したため、彼女の財産は没収され、彼女は火刑に処せられた。処刑場で修道士が彼女に十字架を突きつけ、それに接吻して神を礼拝するよう命じた。それに対して彼女は、"私は木製の神ではなく、天におられる永遠の神を崇拝します

"と答えた。その後、彼女は処刑されたが、前述のローマ・カトリックの女性によって、薪で焼かれる前に首を絞められるという恩恵が与えられた。

二人のプロテスタントの聖職者がコレンで焼かれ、ニコラスというアントワープの商人が袋に縛られて川に投げ込まれ、溺死した。ピストリウスという学識のある学生は、オランダの村の市場に馬鹿者用のコートで運ばれ、火刑に処された。

16 人のプロテスタント信者が斬首刑を宣告され、プロテスタントの牧師が処刑に立ち会うよう命じられた。この牧師は実に適切に職務を遂行し、彼らに悔い改めを勧め、贖

い主の慈悲に慰めを与えた。16 人が斬首されるとすぐに、判事は死刑執行人に叫んだ。ローマ・カトリック教徒の多くも、この背信的で不必要な残虐行為を非難したが、彼はその通りに斬首された。

ザルツブルクの牧師ジョージ・シェルターは、自分の群れに福音の知識を教えたために逮捕され、牢獄に入れられた。獄中で彼は信仰告白を書いたが、その直後、彼はまず斬首刑に処せられ、その後、灰燼に帰すよう宣告された。処刑場に向かう途中、彼は見物人に言った。"私が真のクリスチャンであることを分かってもらうために、あなたがたにしるしをあげよう"。彼の首が切り落とされた後、遺体は腹ばいになってしばらく横たわっていたが、突然仰向けになり、右足が左足の上を横切り、右腕も左腕の上を横切った。

ルーヴィアナでは、パーシナルという学者が獄中で殺害された。ルターの説教集を所持していたユストゥス・インスパルクが斬首された。

ブリュッセルの刃物職人ジャイルズ・ティルマンは、人道的で信心深い人物であった。彼はプロテスタントとして逮捕され、修道士たちは彼に改宗するよう何度も説得した。彼は偶然にも牢獄から脱出する機会を得たことがあった。と聞かれ、「私が逃げ出したら、留守番の人たちが私の留守を詫びるに違いないからです」と答えた。焼かれることを宣告されたとき、彼は、殉教によって神の御名をあがめる機会を与えてくださった神に熱烈に感謝した。処刑場に大量の薪があるのを見て、彼はその主要な部分を貧しい人々に与えたいと願った。処刑人は、火をつける前に彼の首を絞めてやろうと申し出た。しかし、彼は炎に逆らったのだと言って承諾せず、その効果をほとんど感じさせないほど平然と息を引き取った。

1543 年と 1544 年、迫害はフランドル全土で激しく、残酷な方法で行われた。ある者は永久投獄、ある者は永久追放の宣告を受けたが、ほとんどの者は絞首刑、溺死、監禁、火あぶり、生き埋め、拷問による死刑に処せられた。

熱心なプロテスタントであったジョン・ド・ボスケーンは、アントワープでその信仰を理由に逮捕された。裁判の際、彼は自分が改革派であることを堅く主張したため、即座に死刑が宣告された。しかし、彼は非常に寛大な性格で人気があり、その穏やかな生活と模範的な信心深さからほとんどすべての人に愛されていたため、判事は彼を公開処刑することを恐れた。私刑が決定され、獄中で溺死させるよう命令が下された。処刑人は彼を大きな桶に入れたが、ボスケーヌはもがき苦しみ、頭を水面上に出したため、処刑人は短剣で数カ所を刺し、息絶えた。

同じ頃、同じくプロテスタントのジョン・ド・ビュイソンが密かに逮捕され、アントワープで私刑に処された。アントワープにはプロテスタントの信者が大勢いた。この囚人は人望が厚かったため、治安当局は反乱を恐れ、獄中で斬首するよう命じた。

西暦 1568 年、アントワープでスコブラント、ヒュース、クーマンスという 3 人が逮捕された。監禁中、彼らは非常に不屈の精神で明るく振る舞い、自分たちに降りかかった出来事には神の御手が現れていると告白し、神の摂理の御座の前にひれ伏した。何人かの立派なプロテスタントに宛てた手紙の中で、彼らは次のように表現している：「私たちが神の御名のために苦しみ、神の福音のために迫害されることは全能者の御心であるので、私たちは忍耐強く従います。たとえ肉体が霊に反抗し、古い蛇の言うことに耳を傾けることがあっても、福音の真理がそのような忠告を妨げるであろう。キリストは蛇の頭を打ち砕かれる。私たちには信仰があるからだ。苦難を恐れないのは希望があるからであり、敵を赦すのは慈愛があるからである。神の約束によって、私たちは監禁されていても幸せなのだから。キリストのために苦しみを受けるにふさわしい者であることを喜びとする。私たちが願うのは、解放されることではなく、不屈の精神によって祝福されることです。私たちは、自由を求めるのではなく、忍耐の力を求めるのである。"

"私たちの頭上に殉教の冠を載せること以外には、私たちの状態の変化を望まない。

スコブラントはまず裁判に召喚され、信仰の告白を続けたため、死刑の判決を受けた。牢獄に戻ると、彼は看守に、修道士が自分に近づくことを許さないよう懇願した。私の救いはすでに天で封印されており、私が固く信頼を置いているキリストの血潮が私を咎から洗い流してくれることを願っています。今、私はこの土のマントを脱ぎ捨て、永遠の栄光の衣をまとい、その天の輝きによって、すべての過ちから解放されようとしている。私が教皇の専制政治に対する最後の殉教者となり、すでに流された血が教皇の残虐な渇きを癒すのに十分であることを望みます。処刑の日、彼は仲間の囚人たちと哀れな別れを惜しんだ。火あぶりの中で、彼は熱心に主の祈りを唱え、詩篇第 40 篇を歌った。そして最後に、彼は自分の魂を神に委ねた。彼は生きたまま焼かれた。

その際、クーマンスは友人たちにこう書き送っている：「スコブラントは殉教し、ヒュースは死んだ。スコブラントは殉教し、ヒュースは死んだ。主の訪れによって、私は孤独ではない。彼は私の慰めであり、私の報酬となるであろう。"この土の住みかから解放されることを刻々と期待している私を、最後まで強めてくださるよう、神に祈りなさい。

裁判では、彼は改革派の宗教であることを自由に告白し、自分に対するあらゆる罪状に男らしく不屈の精神で答え、自分の答えの聖書的な部分を福音書から証明した。裁判官は彼に、選択肢は撤回か死しかないと告げ、最後にこう尋ねた。その後、私の魂は永遠の栄光の中で、神ご自身からその確認を受けるでしょう」。そして、私の魂は、永遠の栄光の中で、神ご自身から確証を受けるでしょう」。死刑を宣告された彼は、快く刑場に赴き、最も男らしい不屈の精神とキリスト教的諦観をもって息を引き取った。

ナッソー公ウィリアムは、ブルゴーニュ地方のランシュ・コンプト出身のベルタザール・ジェラールによって、その 51 歳の時に暗殺され、裏切りの犠牲となった。この殺人犯は、スペイン王の敵でありカトリックの敵である人物を殺すことで、ここでも将来でも報酬を得ようと考え、オランジュ公を滅ぼそうとした。銃器を手に入れた彼は、王子が晩餐のために宮殿の大広間を通るのを見張り、パスポートを要求した。オレンジ公妃は、暗

殺者が虚ろで混乱した声で話すのを見て、その顔立ちが気に入らないと言い、身分を尋ねた。王子は、パスポートを要求する者だと答えた。

夕食の前にそれ以上のことは起こらなかったが、夕食が終わった後、王子と王女が同じ広間を通って戻ってくると、暗殺者は柱の一本でできるだけ身を隠して立ち、王子に発砲した。その傷を受けた王子は

、「主よ、私の魂とこの哀れな人々に憐れみを」とだけ言い残し、すぐに息を引き取った。

オレンジ公の死を悼み、連合州全土で嘆き悲しみが広がっていた。しかし、彼の熱意というか愚行というか、赤熱したペンチで肉を引き裂かれたとき、彼は冷静にこう言った。

オレンジ公の葬儀は、低地諸国でこれまでに見られた中で最も盛大なものであったが、その死に対する悲しみは、おそらく最も深いものであったろう。

特にヴァランスでは、ローマの迷信を受け入れることを拒否したために、主要な住民57 人が一日で虐殺された。特にヴァランスの町では、ローマの迷信を受け入れることを拒否したために、主要な住民のうち 57 人が 1 日に虐殺された。

第 12 章 - 神様の真のしもべであり、殉教者である。

ウィリアム・ティンデールの人生と物語

殉教者ウィリアム・ティンデールは、教皇のような傲慢な聖職者の根と基盤を揺るがすために使われた神の道具であり、主が選ばれた特別な支柱だった。闇の支配者はティンデールを罠に陥れるためにあらゆる狡猾な方法を使い、彼を裏切り、彼の命の血を不当に流した。

キリストの忠実な働き者であるウィリアム・ティンデールは、ウォレス地方の近くで生まれ、幼い頃からオックスフォード大学で教育を受けた。そこで彼は語学と他の教養科目を学び、特に聖書を学びました。聖書に没頭していた彼は、いくつかの学生とマグダレン大学の同僚たちに個人的に聖書の真理を提示してくれた。彼の行動は彼の言葉と一致していたため、彼を知るすべての人たち は、彼が本当に徳のある人であり、非の打ちどころのない人生を送ったことを認めた。

オックスフォード大学で学を取得した彼は、ケンブリッジ大学に行き、神の御言葉の知識をより深く深めていった。自分の子供たちの校長であるウォルチの家で交わりを持つ中で、多くの執事たちと、いくつかの

博士、そして有名な聖職者と一緒に聖餐式に参加し、ルターとエラスムスについて話し、聖書について多くの論争の的となる点や疑問点について話し合うことができました。

ティンデールは自分の判断を彼らに簡単かつ明確に提示した。 彼らの意見が自分と異なるとき、彼はいつも聖書から自分の意見を示し、聖書に明確に記載されている事実を提示することで彼らの誤りを論駁し、自分の言葉を確証した。 こうしてティンデールとの何度もにわたる議論を経験した彼らは、ついにティンデールを妬み、憎む心を抱くようになった。

司祭たちは居酒屋などで集まり、彼が異端だと非難し、密かにティンデールを教会法顧問や他の司教の役人に訴えた。

この出来事の直後、司教の教会法顧問が任命され、司祭たちに出頭警告が出され、ティンデールも同じ命令を受けた。彼が教会法拷問官の前に立つと、彼はティンデールをひどく脅し、告発者もいない多くのことで彼を非難した。こうしてティンデールは彼らの勢力から逃れるために家を出て、彼の師匠のもとに戻った。

そこからそれほど遠くないところにある医者がいて、彼は司教の拷問官だった人で、ティンデールとは昔からの知り合いで、彼に多くの好意を寄せていた。ティンデールは彼に行き、聖書の諸問題に関する自分の考えを打ち明けた。 その医者は彼に言った、「教皇がまさに反キリストであることを知らないのか。 聖書が彼について語っているのではないか。 しかし、言葉に気をつけろ。そのような意見を持つことが知られると、命が危うくなるだろう」と言った。

ほどなくして、ティンデールは偶然ある神学者と交わることになり、会話は議論に発展することになった。彼の「教皇の法なしで生きるよりは、むしろ神の法なしで生きる方がいい」という冒涜的な発言に、ティンデールは神の熱意に満ちて我慢できず、次のように言った。"私は教皇と彼のすべての法律を無視するものであり、むしろ鋤を引く少年が彼より聖書についてもっと知っていると思う。"

ティンデールに対する不満はどんどん増えていき、彼らは絶えずティンデールを異端だと言い、多くのことで彼を訴えた。 多くの悩みや嫌がらせを受け、彼はその地域を離れて他の地域に行くよう圧力を受けるようになった。それで彼はロンドンに出発することになり、そこで説教するようになった。

ロンドンのハンフリー・ムームスの家に住み、昼夜を問わず研究に没頭した。ほぼ 1 年ほどロンドンに滞在し、彼は説教者たちの実像を見るようになった。彼らは傲慢であり、自分たちの権威を立て、上級聖職者たちは豪華な生活を享受していた。ロンドンだけで

なく、イギリスのどこにも新約聖書を翻訳するところがないことを知り、彼はいくつかの人々の助けを借りてドイツに出発した。そこでティンデールは自分の祖国に対する熱意と関心に燃えて、どんな努力や労力も惜しまず、可能なあらゆる手段を動員して、故郷の兄弟たちも神の聖なる御言葉と真理を理解させようとした。

そのうちに、聖書が一般言語に翻訳され、貧しい人々が神の御言葉を読むより良い方法がないことを考えるようになった。彼は聖書が普通の人々の目の前に彼らの母国語で提示され、彼らが自ら本文の意味を理解しない限り、平民を真理の上に立てる道がないことを知った。 なぜなら、いくら真理を彼らに教えても、真理に反対する者たちが聖書に基づかない詭弁と自分たちの伝統で真理を覆い隠してしまったり、本文を騙して違う説明をするからである。

ティンデールは、神の御言葉が人々の目から隠されたことが、教会内のすべての不幸の原因であることに気づいた。 なぜなら、あまりにも長い間、パリサイ派の聖職者たちが行った忌まわしい行為と偶像崇拝が識別不可能な境地に達したからである。 彼らは詭弁で正しい判断を曇らせ、本文の内容とは違って聖書を自分たちの目的に合わせ、彼らの行為を軽蔑する者たちを縛り付けた。

彼らは学んでいない普通の人々を惑わし、彼らが心の中ではすべてが偽りであることを感じながらも、彼らの微妙な謎を解くことができないようにしたのである。

そんなことを考えながら、ティンデールは聖書を自分の母国語に翻訳したいという神の情熱に満たされた。まず新約聖書に手をつけ、A.D.1525 年頃に出版されることになった。ロンドンの司教であるグスバート・トンストールとトーマス・モオ卿はあまりにも憤慨し、この"嘘と間違いだらけの"翻訳を破棄させるための方法を模索した。パッキントンはそのような司教の言葉を聞いて、残っているすべての聖書を手に入れると言った。司教は費用がいくらかかろうともそれを全部入手して燃やすと言いながらその仕事を頼んだ。オーガスティン・パッキントンはこのすべてのことをウィリアム・ティンデールと相談し

た。 こうして、パッキントンとティンデールの間で行われた協約を知らなかったロンドン司教は、残りのすべての聖書を入手し、パッキントンに感謝を表し、結果としてティンデールはお金を得ることになった。

この後、ティンデールは新約聖書を再度修正し、新たに印刷して初版の 3 倍の量の聖書をイギリスに送った。司教がこの事実を知ると、彼はパッキントンに人を送り、「これはどうしたことなのか、そんなに多くの新約聖書が海外に出たのか。君が聖書すべてを私に買ってくれると約束したのではなかったのか。これに対してパッキントンは、「確かに私は購入できるすべての聖書を購入しました。 しかし、彼らはその後、もっと多くの聖書を印刷しました。 彼らが活字と押印機を持っている限り、このことは止められません。 ですから、押印機まで購入するのが最善の方法だと思います」と答えました。この言葉に司教は笑ったので、その問題はそこで一段落した。

しばらくしてジョージ・コンスタンティンが、当時イギリスの教会法顧問であったトーマス・モア卿に異端の疑いで逮捕された。モア卿は彼に尋ねた。 コンスタンティン！ 私が尋ねる一つのことに正直に答えてほしい。そうすれば、君が告訴された他のすべての事柄については、好意的に扱うことを約束する。海の向こうにティンデール一味がいるが、ここからの誰かの支援がなければ、彼らは生きていけないことは知っている。彼らに資金を提供している者がいるのは確かだが、君はその一人であるから、お金の出所を知っているはずだ。彼らを支援する者は誰なのか？" コンスタンティンは答えた。「あなたに真実を話そう。 私たちを助けてくれたのはロンドンの司教だ。 彼は新約聖書を燃やすために、その代償として私たちに莫大なお金をくれた。 過去にも現在も、彼は私たちの唯一の支援者であり、慰問者だ。「私もそうだと思ったよ、司教がそのことをする前に私が司教にそう言ったから」とモアは言った。その後、ティンデールは旧約聖書の翻訳に着手し、モーセ五書を終え、すべてのクリスチャンが繰り返し読む価値のある序文を書いた。この本がイギ

リスに送られ、それが暗闇の中に閉じ込められていたイギリス国民にどれほど大きな光となったかは言葉では言い表せない。

ティンデールは、ルターや他の学識ある人々とドイツで会談した後、再びオランダに向かった。

ティンデールの神学書物、特に新約聖書の翻訳は人々の手を通して海外にまで広がっていき、敬虔な人々に多くの恩恵をもたらした。しかし、不敬虔な人々は(大衆が自分たちより賢くなることを羨ましがり、真理の輝かしい光で自分たちの闇のことが明らかになることを恐れ、)少なからぬ騒ぎを起こした。

ティンデールは申命記を翻訳し、ハンブルクで印刷することを計画し、船に乗ってそこに行くことになった。オランダの海岸で船が難破したため、彼はすべての本、著作、写本、お金、時間をすべて失い、すべてをやり直さなければならない状況に陥った。彼は別の船でハンバーグに行き、そこで約束通りカバーデールが彼を待っていて、モーセ五書の翻訳を手伝った。 その仕事はイースターから 12 月まで続き、A.D.1529 年にマーガレット・ヴァン・エマソン夫人の家で行われた。

一方、聖職者たちはその本が普及してはならないと主張し、その聖書は数千に及ぶ異端的な教義を含んでいるため、単にある程度修正されるべきだけでなく、完全に破棄されるべきであると主張した。聖書を英語に翻訳することは不可能だと言う人もいれば、平民が母国語で聖書を持つことは違法だと言う人もいれば、聖書が彼ら全員を異端にするだろうと言う人もいました。支配者たちを彼らの目的に引き込むために、彼らはまた、聖書が人々を王に反逆させるだろうと言いました。

人々から聖書を奪おうとする英国の聖職者たちの卑劣な策略はあまりにも巨大であった。 (人々を光に導くことが彼らの任務であるにもかかわらず、彼らはそうしなかった。)彼らは自分たち自身で聖書を翻訳しなかっただけでなく、他の人々によって聖書が翻訳されることにも耐えられなかった。 (ティンデールが言ったように)これは世界を闇に閉じ込

め、無駄な迷信と偽の教義で自分たちの欲望と飽くなき貪欲を満足させ、自分たちの名誉を高めようとする醜い意図から出たものだった。

司教と高 聖職者たちは、王の同意をようやく得、急いで宣言文を作成して公布し、ティンデールの翻訳聖書を禁止させた。これに満足せず、彼らはさらに進んで彼の命まで奪おうとする陰謀を企て始めた。

ロンドンの登記所で、司教とトーマス・モア卿は、ティンデールに属するすべてのものを熱心に探して調査した。ティンデールがどこで誰と集まったか、その家がどこにあるか、彼の身長はどれくらいか、外出時はどんな服を着ているかなどを調査した。調査した資料を持って、彼らはティンデールを破滅させるための網を一つ一つ編んでいったのである。

ウィリアム・ティンデールはアントワープ市に滞在し、トーマス・ポンツの家に約 1 年間滞在した。そこにヘンリー・フィリップという男が現れ、彼が何らかの隠れた目的を持ってそこに来たという事実は誰も知らなかった。

その時、ティンデールは何度か商人たちと一緒に夕食に来るように頼まれた。このような手段を通じてヘンリー・フィリップは彼と顔見知りになり、すぐにティンデールは彼を大いに信頼するようになり、彼と一度や二度夕食を共にするようになった。こうしてティンデールは彼とより深い友情を持ち、彼をポンツの家に滞在するように手配し、彼に自分の本やその他の重要な研究物を見せた。ティンデールはこの反逆者を全く疑わなかった。

しかしポンツはこの友人をあまり信用していなかったので、ティンデールにフィリップと知り合った経緯を尋ねた。ティンデールは、彼は正直な人であり、かなり学識があり、非常に従順な人だと言った。ポンツはティンデールが彼に好意を持っていることを知り、彼の友人の一人の紹介で親しくなったのだろうと思い、それ以上は言わなかった。

そんなある日、ポンツはアントワープから 18 マイル離れたバロイス市に行くことになった。そこで彼は 1 ヶ月か 6 週間ほど仕事を見ることになった。彼がいない間、ヘンリー・フィリップはポンツの家に行き、彼の妻にティンデールがいるかどうか尋ねた。その後、彼は再びブルッセルに行き、彼が連れてきた将校たちを家の近くと通りに配置した。正午頃、彼はティンデールに行き、一緒に夕食をとるように言った。

夕食の時間になると、ティンデールはフィリップと一緒に出かけた。ポンツの家を出る道は長く、入り口が狭く、二人が並んで行くことができなかった。ティンデールはフィリップを自分の前に行かせたが、フィリップは謙遜を装ってティンデールを自分の前に行かせた。ティンデールはそれほど背が高くないので前に行き、背の高いフィリップがその後ろに続いた。彼はドアの両側に将校たちを配置させていたのである。後ろに立ったフィリップは、ティンデールの頭を指で指して、将校たちに連れて行くべき人が誰であるかを知らせた。将校たちは彼を監獄に入れた後、ポンツにティンデールの素朴さに同情の意を表すと言った。彼らは彼を皇帝の弁護士に連れて行き、次に行政顧問官がポンツの家にやって来て、本を含むすべてのものを持ち帰った。ティンデールはアントワープから 18 マイル離れた場所にある ビルボデ城に閉じ込められてしまった。刑務所で、ティンデールは弁護士をつけるという申し出を受けたが、自分が答えると言って断った。 彼は自分を訴えた人々にむしろ説教し、城内でそのような彼の姿を見た人々は、彼が立派なクリスチャンであったと言った。

ついに多くの議論の末、何の理由もなく皇帝の勅令により、オグスブルグの集会で彼は有罪判決を受け、西暦 1536 年にビルボレ市で火刑に処されました。火刑台で彼は大声で叫んだ。"主よ！イギリス王の目を開かせ給え！」。

彼の教義と生活の誠実さは、彼が監禁されている間（1 年半の期間）、彼が看守と看守の娘と彼の他の家族を改宗させたことからもよくわかる。

彼の敵は、彼の翻訳が異端的な教義に満ちていると激しく非難した。ティンデールはジョン・プリンスに次のような手紙を送った。

"私たちが主イエス・キリストの前に現われるその日に、神様が語ってくださることを願っています。私は決して私の良心に照らして、神の御言葉を一字も変節させなかったし、地上のすべてのもの、すなわち名誉と快楽と富を私に与えても、これからもそうしない。" ウィリアム・ティンデールの人生と物語

ティンデール卿は、聖書が人々の目から隠されたというこの事実だけを、つまりほとんどこの事実だけを、教会内のすべての害悪の原因とみなした。なぜなら、あまりにも長い間、偽善的な聖職者たちの忌まわしい行為と偶像崇拝を見つけることができず、その結果、彼らが手足を惜しまず、死力を尽くして聖書を抑圧し、全く読まれないようにしたり、あるいはそれが仮に読まれたとしても、彼らの詭弁が発する霧でその正しい意味を曇らせ、嫌悪するものを非難したり、軽蔑する当事者をひどく困惑させたからである、彼らが聖書の意味とは別に自分たちの目的に合わせて聖書を歪曲し、学識のない素人をひどく惑わせるので、たとえあなたが彼らの言うことがすべて間違っていることを心に感じ、確信したとしても、彼らの巧妙な謎を解くことができなかったからである。

これらとそのような他の熟考によって、この善良な人は神から力を得て、聖書を彼の母国語に翻訳し、故郷の無知な人々に利益をもたらした。つまり、新約聖書を刷るために準備された最初の植字が A.D.1525 年頃に印刷され、世界に初めて姿を現したのである。これに対して怒りに燃えたロンドンの司教クスバート・トンストールとトーマス・ムーア(Thomas Moore)卿は、彼らがその「誤りだらけの偽訳物」と呼ぶものを破壊する方法を考え出した。

当時、その司教がいたアントワープには、オーガスティン・パッキントン(Augustine Packington)という織物商が住んでいた。この人はティンデールには好意を持っていたが、その司教には正反対だった。自分の目的を達成したいと思っていた司教は

、どうすれば彼がその新約聖書を満足に買うことができるかを話した。 彼がそう言うのを聞いたパッキントンは次のように言った。「閣下！私は閣下の喜びとなるのであれば、ここにいる大多数の商人よりもこの問題をうまく処理することができます。 なぜなら、私はティンデールからそれらを買ったオランダ人や外国人がここでそれらを売っていることを知っているからです。 ですから、閣下の意向がそうであれば、私はそれらを購入するためにお金を払わなければなりません。

ご存じのように、お金がなければそれらを所有することはできません。 ですから、言ってください。印刷されて売れないものは、すべて閣下にお渡しいたします。司教は自分が神の"つま先"をつかんだと思い、こう言いました。「穏やかなパットン卿、急いで仕事を進めなさい！ 早く私にそれらを買ってきてください。費用がいくらかかろうとも、私がすべて支払う。私はそれらをすべてパウロの十字架(Paul's Cross)で燃やすつもりである。" この人、オーガスティン・パッキントンは、すぐにウィリアム・ティンデールに行き、仕事の全貌を詳しく説明し、こうして二人の間に結ばれた条約により、ロンドン司教は聖書を手に入れ、パッキントンは感謝の言葉を聞き、ティンデールはお金を手に入れることになった。

このことがあった後、ティンデールは同じ新約聖書を再度校正し、新たに印刷し、その結果、それらは三倍の厚さの英語聖書となった。 それに気づいた司教はパットン氏に人を送り、こう言った。"新約聖書がものすごく広まっているのに、これはいったいどういうことだ。 それらを全部買い取ると私に約束したはずだ。" するとパッカントンは答えた。「もちろん、私は手に入るものはすべて買いましたが、一つ以来、彼らがもっとたくさん刷ったような気がしますね。 今思えば、彼らが活字と版木を持っている限り、良いことは一つもないようです。 ですから、閣下はむしろ版木も買って、仕事を確実にした方がよさそうです。 この答えに、司教は満面の笑みを浮かべて、それで問題は終わりました。

しばらくして、ちょうどその頃、ジョージ・コンスタンティン(George Constantine)が異端者として疑われ、当時イギリスの宗教法顧問であったトーマス・モア卿によって逮捕される事件が発生した。モア卿は彼に次のように尋ねた。 "コンスタンティン！ 私が今あなたに尋ねる一つのことについて、あなたが私に正直になってほしい。従順に応じれば、あなたを告訴した他のすべての事柄について、あなたに好意を示すことを約束します。あの海の向こうにはティンデール、ジョイエ、そしてあなたの仲間がたくさんいて、私は彼らが誰かの助けなしには生きていけないことを知っている。つまり、彼らにお金を貸している誰かがいるということだが、そのうちの一人であるあなたは、そこ

であなたの分担を担っているのだから、そのお金がどこから流れているのか、よく知っているはずだ。

願わくば、教えてくれ。このように彼らを助けているのは一体誰ですか？" 「閣下、」コンスタンティンは言った、「本当のことを言いますが、私たちを助けているのはロンドン司教です。彼は新約聖書を買って燃やすように私たちの中に莫大なお金をばらまきましたが、それが私たちの唯一の援助と慰めとなり、そのことは今もなお続いているからです」 するとモアは言った。「さすがに誓うよ、私の考えはまさにそれだった、司教がその仕事に手を出す前に何度も警告したのに、あの野郎の頑固さのせいで来るものが来てしまったのだ。

その後、ティンデールは旧約聖書の翻訳に着手し、モーセ五書を完成させ、そこに学識に富み、敬虔なキリスト教徒であれば誰でも読み返すのに足りないほど、非常に優れた様々な序文をつけた。これらの聖書がイギリスに送られた時、それらが以前に暗闇の中に閉じ込められていた全英国人の目に開かれたその光の扉がどのようなものであったかは言葉では言い表せないだろう。

初めて故郷を離れたとき、彼はドイツに旅立ち、そこでルターや他の学者と意見を交換した。

彼はそこで一定期間を引き続き滞在し、後にオランダに下り、アントワープでほとんどの居住地を定めた。

ティンデールの敬虔な書物、特に彼が翻訳した新約聖書が人々の手に渡され、広く普及すると、それは聖徒たちにかつてないほど素晴らしい利益をもたらした。しかし、不信心者たちは(その人々が自分たちより少しでも賢くなることを嫉妬し、軽蔑するだけでなく、眩しく降り注ぐ真理の光線に彼らの暗黒の事柄がバレることを恐れ、)様々な法석을振るって動揺し始めた。

ティンデールが申命記を翻訳し、それをハンブルク(Hamburg)で出版するつもりでそこに向かって航海していた時、彼が乗った船がオランダ沿岸で座礁してしまった。彼はこれによって彼のすべての本と著作集、印刷原稿、そして持っていたお金と時間を失い、したがってすべてを最初からやり直すしかなかった。 彼は船を乗り換えてハンブルクに到着し、そこには約束通りカバーデール (Coverdale)卿が彼を待っていた。カバーデールは彼がモーセ五書全巻を翻訳するのを手伝ったが、この仕事はイースターから 12 月まで信仰深い未亡人マーガレット・ヴァン・エマーソン(Margaret Van Emmerson)夫人の家で A.D.1529 年に行われた。 同じ時期にその都市ではすごい発汗性疾患が流行していたので、彼はハンブルクでの自分の仕事を迅速に処理してアントワープに戻った。

神様が普通の言葉で書かれた新約聖書を広く普及させようとされたとき、その翻訳者であるティンデールは聖書の一番後ろにある書簡を付け加えたが、その中には、何か間違ったことが発見されたら学識のある人々が修正してほしいという彼の願いが書かれていた。 そのため、もし修正を加えるべき間違いがあり、知識と分別力のある人々が彼らの学識を利用してその中で修正すべき部分を修正したなら、それは礼儀正しく親切な行為

と見なされただろう。しかし、その聖書が広く普及することを嫌っていた聖職者たちは、その中に数え切れないほどの異端の教義が含まれているので、それを修正するのではなく、発売を全く禁止させるべきだと、それに対して反対の声を上げた。ある者は、聖書を英語に翻訳することは不可能だと言い、またある者は、平信徒が彼らの母国語で書かれた

聖書を持つことは違法だと言い、他の者は、それが彼ら全員を異端者にしてしまうだろうと主張した。

そして彼らは彼らの目的に世俗の支配者たちを巻き込むつもりで、そのために民衆が王に反逆を起こすという暴言も躊躇しなかった。

このすべてのことをティンデールはモーセの最初の本である創世記の前の彼の序文に直接天命し、次の事実も加えて示している。すなわち、彼らがその翻訳を検討し、それを彼らの想像と比較するために費やした労力を考えると、気が遠くなるようなもので、彼の推測ではあるが、もし彼らが聖書を翻訳しようとしたら、その仕事に費やした労力の一部だけでも聖書の大部分を翻訳したかもしれないということである、また、彼らがすべてのタイトルと句読点を漢字一字一句のように丹念に調べて検討し、そこには'i'一字も誤って入らなかったが、もし彼の理解力を超えて翻訳が不完全だと思うものがあれば、それを余すことなく記録しておき、無知な人々にそれは異端だといちいち告発したということである。

(民衆に光の案内者であるべき)イギリスの聖職者たちが聖書の知識から民衆を遠ざけるために考案した当時の不機嫌な策略は、その程度がひどくてもそれほどひどいものではなかったが、その聖書で言えば、彼らはそれを翻訳しようとするどころか、それが他の人々によって翻訳されることにも耐えられなかった。ここには、世界をまだ暗闇の中に閉じ込めたまま、無駄な迷信と偽りの教義で民衆の良心の上に君臨し、自分たちの野望と飽くなき貪欲を満足させ、王と皇帝の上に自分たちの名誉を高めようとする彼らの陰湿な意図があったのだ。

司教や高 の聖職者たちは、王が彼らに同意するまでは一刻も足を伸ばすことができなかったので、声明があっという間に作成され、国の承認のもとに公布された。その内容は、ティンデールが翻訳した聖書を禁じるというもので、これは西暦1537 年頃のことである。しかしこれでは満足できなかった彼らは、どうすれば彼を彼らの網に引っ掛けて彼の命を奪うことができるかと思案に思案を重ねたが、彼らがこれをどのように実行したかは、これから明らかに語られるだろう。

第 13 章 - ジョン・カルバンの生涯に関する記事

カルバンの生涯と思想

カルバンの生涯

カルヴァン(John Calvin, 1509. 7. 10-1564. 5. 27)は、ルターより 20 年後にフランスのノヨン (Noyon)で書記官だったジェラルド・カルヴァン(Gerard Calvin)の息子として生まれた。カルバンはカルバンの英語音訳に由来する。彼は幼い頃は教皇制度に無条件に献身し、教職者になるためにパリ、

ラミッシュール、モンテーグ大学などで神学を研究した。 しかし、父ノヨンが聖職会に不満を抱き、カルバンが法律を勉強するように強勧し、3 年間法学を学んだが、父が他界した後は再び神学に戻った。1522 年にセネカの著書《寛容論》(De Clementia)を注釈出版し、一躍学者として認められる。彼は 1533 年、パリ大学のジャン・ニコラス・コップ(N.Cop)の就任演説文を起草してくれたが、その演説文で聖職者を非難したことが火種となり、パリを脱出、放浪生活に入る。放浪期間中、ルイ・ド・ティレット(Louis de Tillet)の家で教父たちに関する幅広い読書をすることができた。

1536 年に《キリスト教の強制》（Institutio Christianae Religionis）を出版した。この年の夏、ストラスブールに留学する途中、ジュネーブでファレル(Farel)と出会い、宗教改革に参加することになった。最初はサン・ピエール(St. Rierre)教会でパウロの手紙を講義することから出発し、10 月初めにローザンヌでローマ・カトリックの神学者たちと公開討論をした後、名声を得、すぐに教会改革を始めた。カルバンは特に子供の宗教教育、道徳的訓練、信仰告白の制定などに力を注いだが、信仰告白に従わない者たちの強力な反抗と反対派が市議会の政権を騒がせたため、1538 年に追放され、ストラスブールで 3 年間滞在することになった。

この間、カルバンはブーサーやドイツの宗教改革者たちと接触する機会を持ち、様々な場所で宗教討論会に参加し、「ローマ書注解」を出版し、神学教授および説教者として幅広い活動をした。

また、1540 年にブーレ(Idelette de Bure)夫人と結婚した。 カルバンがストラスブールで幸せな生活を送っている間、ジュネーブはローマ・カトリック教皇サドレト(Jacopo Cardinal Sadoleto)がジュネーブに手紙を送り、ローマ教皇に服従することを強要したため、困境に陥っていた。 結局、カルバンが長文の手紙でこれに答えてジュネーブを困難から救い出し(1939)、様々な困難と変化を経たジュネーブでは再びカルバンを招聘することになった。 カルバンは 1541 年にジュネーブに来ると、すぐに礼拝の模範を基礎にして教会法規制定委員を置き、11 月 20 日に草案を 200 人議会に提出して可決させた。これを施行監督する委員会を「コンシストリアム」(Consistorium)というが、教職会から 12 人、小議会から 2 人、60 人議会から 4 人、200 人議会から 6 人ずつ、計 24 人の委員で構成された。

教会法規の目的は、「教会に徳を立て、個人を正しくし、懲戒対象者を訓戒して彼が罪から離れるようにし、教会が決して罪を軽視しないことを示すことが要緊要である」とされている。これにより、信仰と生活の純潔を守り、ダンスや演劇などの享楽生活を排斥し、特に聖徳の純潔を守るために並々ならぬ努力を払ったのである。

教会法規の強行の徹底によって反対を誘発させ、10 年間苦闘が始まったが、信仰と生活の厳格主義に対する反対、信仰思想、すなわち異端との苦闘である。セルヴェトゥス(Michael Servetus) の汎神論的異端思想により、彼を火刑に処するという市議会の決定にカルバンは同意せざるを得なかった。こうしてジュネーブは教会都市となり、長い間ヨーロッパにおけるプロテスタントの聖地として君臨した。また、学校を設立し、各地から集まった多くの学生を改革主義の精神で訓練した。

カルバンの業績を宗教改革者、神学者、著述家として評価することができる。彼は神の御言葉の権威以外に他のいかなる体制を利用することを極力控えたし、彼の清廉な生活はあまりにもよく知られている。カルバンは学生時代に過度の勉強のために消化器系の慢性疾患を獲得し、扁桃腺、欠席症で 1 日 1 食の苦痛を受けながらも学問研究を休まなかった。これは「神の御言葉の働き人」であることを重んじ、聖書を主観的に解釈せず、歴代聖書学者の見解を調べて正確に伝えようとする真剣で熱烈な意図からだった。

1564 年 5 月 17 日、偉大な宗教改革者カルバンはジュネーブで逝去した。

2.カルバンの神学

カルヴァン主義は、カルバンが聖書から神学体系を確立したもので、宗教改革の完成された思想といえる。カルヴァン主義は教父たちの伝統に基づく。自由主義者やアルミニウス主義者がアウグスティヌスとカルバンはキリスト教主義の思想に加え、新しい教理を創案した者であり、彼らが言う神の主権、選択、予定教理は聖書に基づくものではないと主張するのは、教父たちの文献を十分に研究していないために犯す誤謬である。

アウグスティヌスとカルバンはただ聖書に基づいただけでなく、同時に初代教会の神学に根ざしている。初期 4 世紀以降の教父たちを研究してみると、程度の差はあるが、彼らもカルバンの業績に帰する教理を聖書から発見したことが分かる。初代教父たちが教理を大成させなかったのは、5 世紀のペラギウスの出現時まで、これといった異教の挑戦を受けなかったからだと言える。4 世紀以降の神学的結実がアウグスティヌスであり、カルバンの主流はアウグスティヌスから見出すことができるだけに、アウグスティヌス-カルバンの神学は独特なものではなく、聖書と伝統的な路線を継承したと見るのが妥当である。

カルバンの神学は宗教改革神学の頂上である。カルヴァン神学は宗教改革が約束したことの最終的な達成である。ルターの偉大な力は同時に弱点でもあった。ルターはドイツ人には強く訴えることができたが、より汎世界的な改革を要請する他の国々には大きな

魅力がなかった。神の計画の面で見ると、ルターはカルバンの必要な先駆者であり、カルバンの宗教改革の完成のために必要な実際の人物だった。カルヴァン主義はその範囲と訴求力が国際的であっただけでなく、ルター、ブーサー、ツヴィングリ(Zwingli)の努力の総決算であった。カルバンは彼らが築いた土台の上に、より明晰で正確な聖書に基づいた教理的体系を確立した。

カルバンは「注釈の王子」と呼ばれるほど聖書注釈に卓越しており、実際、カルヴァン以降の神学が多少なりともカルバンの影響を受けていないものはない。他の改革者たちが聖書を依存する心が希薄に見えるのに対し、カルバンは聖書中心の完熟した境地に達した。カルバンはツヴィングリーとは異なり、哲学を完成させようとする動機もなく、ルターのように霊的難題を解決するために聖書を抜粋したのではなく、聖書を組織的に研究する神学体系を発展させた。 こうして宗教改革はカルバンのおかげで実を結び、教会は聖書の伝統を取り戻すことができ、中世スコラ哲学の蓄積された危険から解放されることができた。

第 14 章 - 1641 年のアイルランド人虐殺事件の全貌

イギリスとアイルランドの迫害に関する記録

メアリー1 世の治世以前

現存する最も古いイギリスの作家であるギルダスは、サクソン人がグレートブリテン島を去った頃に生きていたが、その人々の蛮行について最も衝撃的な例を描いている。

サクソン人はスコット族やピクト族と同じ異教徒であり、到着した先々で教会を破壊し、聖職者を殺害した。しかし、キリスト教を滅ぼすことはできなかった。サクソン人のくびきに服従しない人々は、セヴァーン川を越えて行き、そこに住んだからである。キリスト教に苦しめられた人々の名前も、特に聖職者の名前は伝わっていない。

サクソン政権下で最も恐ろしい蛮行の例は、西暦 586 年に起こったバンゴールの修道士たちの虐殺である。この修道士たちは、現在の同じ名前を持つ者たちとはあらゆる点で異なっていた。

8 世紀、イングランドとスコットランドのブリテン各地に、放浪の蛮族デーン人が上陸した。

最初は撃退されたが、西暦 857 年、彼らの一団がサウサンプトン近郊に上陸し、民衆から略奪を働いただけでなく、教会を焼き払い、聖職者を殺害した。

西暦 868 年、この蛮族はイングランドの中央部に侵入し、ノッティンガム地方を占領した。しかし、イングランド市民は国王エセルレッドの下、彼らを持ち場から追い出し、ノーサンバーランドに退去させた。

西暦 870 年、この蛮族の別の一団がノーフォークに上陸し、ハートフォードでイングランド軍と交戦した。異教徒の勝利が宣言され、東アングルの王エドマンドが幽閉され、千差万別の侮辱を受けた後、矢で体を貫かれ、斬首された。

スコットランドのフィフシャーでは多くの教会を焼き、中でもセント・アンドリュースのカルデア人の教会を焼いた。これらの人々の信心深さは、デンマーク人にとって憎悪の対象となった。デンマークの部族はどこへ行っても、キリスト教の司祭を破壊の対象とし、そのうちの 200 人以上がスコットランドで虐殺された。

アイルランドの現在レンスターと呼ばれる地域でも同じで、デーン人は自分たちの教会で司祭を殺害し、生きたまま焼き殺した。彼らは行く先々で破滅をもたらした。彼らは年齢も性別も惜しまなかった。偶像崇拝を嘲笑し、民衆に彼らと関わりを持たないよう説得したからだ。

エドワード 3 世の治世において、イングランド国教会は誤謬と迷信によって極度に堕落し、キリストの福音の光は、人間的な発明、負担の大きい儀式、偶像崇拝によって大きく逸脱し、暗くなっていた。当時ロラードと呼ばれていたウィクリフの信者は非常に多くなっており、聖職者たちは彼らが増えていくのを目の当たりにして非常に心を痛めていた。聖職者たちは、裏から彼らを妨害する力や影響力があったとしても、彼らを死刑にする権限は法律上なかった。しかし、聖職者たちは好機を捉え、頑迷なロラードはすべて世俗権力に引き渡され、異端として焼かれるべきであるという法令を議会に提出することを許可するよう、国王を説得した。この法律は、宗教的感情によって人々を火刑に処すことを定めたイギリス初のもので、1401 年に可決され、間もなく施行された。

この残酷な行為によって最初に苦しめられたのは、スミスフィールドで焼き殺された司祭のウィリアム・サントリー（ソーツリー）だった。

その直後、コブハム卿ジョン・オールドキャッスル卿は、ウィクリフの教義に傾倒していたため、異端の罪に問われ、絞首刑と火刑の宣告を受け、西暦 1419 年、リンカーンズ・イン・フィールズで処刑された。コブハム卿は弁明書の中で次のように述べている：

「画像については、私はそれが信仰の対象ではないことを理解している。しかし、キリスト教が教えられて以来、教会の許可によって、私たちの主イエス・キリストの受難や

殉教、他の聖人の善行を表し、心に思い起こさせるために、像が定められたのである。そして、死んだ像を神への崇敬の念をもって拝む者、あるいは、神に対するのと同じように、像の助けに希望や信頼を寄せる者、あるいは、他のものよりも像に愛情を注ぐ者は、この行為において、偶像礼拝の最大の罪を犯すのである。

「この地上のすべての人は、至福に向かう巡礼者であり、あるいは苦痛に向かう巡礼者である。しかし、この世で神の聖なる戒めを守る者は（この世を巡礼し、そうして死ぬとはいえ）、呪われるであろう。しかし、神の聖なる戒めを知り、それを最後まで守る者は救われるであろう。

指定された日、コブハム卿は両腕を後ろに縛られ、非常に明るい表情で塔から移送された。そして、まるで王室に対する極悪非道の裏切り者であるかのように、ハードルの上に寝かされ、聖ジャイルズの野原に引きずり出された。処刑場まで来ると、彼は高台から降ろされた。彼は敬虔な気持ちで膝をつき、全能の神が敵を赦してくださるよう願った。そして立ち上がって群衆を見渡し、聖書に書かれている神の掟に従うように、また、その会話や生活様式においてキリストに反するような教師たちに注意するようにと、最も神々しい方法で諭した。それから、彼は鉄の鎖で真ん中を吊るされ、命の続く限り、神の御名を賛美しながら、火の中で生きたまま焼き尽くされた。見物人は大変な苦しみを示した。そして、これは西暦 1418 年に行われた。

その時の司祭たちがどのように戦い、神を冒涜し、呪い、民衆に彼のために祈ることを求めず、彼が教皇に従わずに旅立ったことを理由に、地獄で呪われた者と裁くことを求めたかは、書き出すと長くなる。

こうして、この勇敢なキリスト教騎士ジョン・オールドキャッスル卿は、イエス・キリストである神の祭壇の下で、忍耐の王国で、神の忠実な言葉と証しのために、肉体の死という大きな苦難を被った神々しい仲間たちの中に安置された。

1473 年 8 月、トーマス・グランターがロンドンで逮捕された。彼はウィクリフの教義を公言しているとして告発され、頑迷な異端者として断罪された。この敬虔な男は、保安官の家で罪状認否を受けた。刑の執行が予定されていた日の朝、彼は少し軽食をとりたいと願い、食べ物を食べて、その場にいた人々に言った。食事を終えると、彼は神の慈悲深い摂理の恩恵に感謝し、自分が公言した原則が真実であることを証言するために、即座に処刑場に案内してくれるように頼んだ。その結果、彼はタワー・ヒルの杭に鎖でつながれ、そこで生きたまま焼かれた。

1499 年、敬虔なバドラムという男が、ウィクリフの教義を信奉していると司祭たちから告発され、ノリッチの司教の前に引き出された。彼は、反論されたことをすべて信じていると告白した。そのため、彼は強情な異端者として断罪され、処刑の令状が出された。こうして彼はノリッジの火あぶりにかけられ、そこで激しい苦しみを受けた。

1506 年、信心深いウィリアム・ティルフリーが、アメーシャムのストーニープラットという場所で生きたまま火刑に処された。

この年、リンカーンの司教の前でロバーツ神父がロラードの有罪判決を受け、バッキンガムで生きたまま焼かれた。

1507 年、ノリッチでトマス・ノリスが福音の真理を証言したために生きたまま焼かれた。この男は貧しく、無邪気で、無害な人物であったが、ある日、教区司祭が彼と話しているうちに、彼がロラードであると推測した。この推測の結果、彼は司教に情報を提供し、ノリスは逮捕された。

1508 年、2 年間投獄されていたローレンス・ゴールが、聖餐における真の臨在を否定したため、ソールズベリーで生きたまま火刑に処せられた。この男はソールズベリーで店を経営しており、ロラードを自宅に招いていたようだ。このため、ある者が司教に不利なことを告げたが、彼は最初の証言に従ったため、異端者として苦しむよう宣告された。

チッペン・サドバーンで、ウィッテンハム議長の命令により、敬虔な女性が焼かれた。彼女が炎に焼かれ、人々が家に帰ろうとしたとき、一頭の雄牛が肉屋から逃げ出した。その雄牛は、他のすべての仲間から大法官を選び出し、彼の体を貫き、その角に内臓を乗せた。この様子は民衆全員に目撃されたが、その雄牛が他の誰にも手を出さなかったのは驚くべきことであった。

1511 年 10 月 18 日、かつて信仰を撤回したウィリアム・サックリングとジョン・バニスターが再び信仰を告白し、スミスフィールドで生きたまま焼き殺された。

1517 年、ジョン・ブラウン（以前、ヘンリー7 世の治世に改宗し、聖ポール天主堂の周りを薪を背負って回ったことがある）が、カンタベリー大司教ウォンハマン博士によって断罪され、アシュフォードで生きたまま火あぶりにされた。火あぶりにされる前に、ウォンハマン大司教とロチェスターのイエスター司教は、彼の足を火で焼いた。これは彼に再び信仰を撤回させるためであったが、彼は最後まで真実への執着に固執した。

この頃、ロンドン市内の商人の仕立屋リチャード・フンが、子供の葬儀のために司祭に料金を支払うことを拒否して逮捕された。彼はランベスの宮殿にあるロラーズの塔に運ばれ、大司教の使用人たちによって私的に殺害された。 1518 年 9 月 24 日、ジョン・スティリンセンは、以前から信仰を撤回していたが、逮捕され、ロンドンの司教リチャード・フィッツ＝ジェームズの前に引き出され、10 月 25 日、異端者として断罪された。大勢の観衆が見守る中、彼はスミスフィールドの火あぶりに鎖でつながれ、真理への証言を血で封印した。彼は、自分はロラード教徒であり、ウィクリフの意見をずっと信じてきたと宣言し、自分の意見を撤回するほど弱っていたにもかかわらず、今は真理のために死ぬ覚悟があることを世間に確信させようとした。

1519 年、トーマス・マンはロンドンで火刑に処され、ロバート・セリンもまた、像崇拝と巡礼に反対する発言をしたため、平凡で正直な男だった。

この頃、ジェームズ・ブリュースターはロンドンのスミスフィールドで処刑された。彼はコルチェスター出身。彼の心情は、他のロラード派、つまりウィクリフの教義に従う人々と同じであった。彼の生き方が潔白で、規則正しいものであったにもかかわらず、彼はローマ教皇の復讐に従わざるを得なかった。

この年、バークシャーのニューベリーで、靴職人のクリストファーが、前述のローマ教皇の記事を否定した罪で生きたまま焼かれた。この男は英語で書かれた書物を何冊か手に入れていたが、それはローマ教皇の聖職者たちに不都合とされるに十分なものであった。

異端者として司教座で断罪されたロバート・シルクスは、牢獄から脱獄した。彼は 2 年後に再び捕らえられ、コヴェントリーに連れ戻され、そこで生きたまま焼かれた。保安官は常に殉教者の財産を没収して自分たちのものにしたため、彼らの妻や子供たちは飢えに苦しむことになった。

1532 年、トーマス・ハーディングは妻とともに異端として告発され、リンカーンの司教の前に召喚され、聖餐における真の臨在を否定したとして断罪された。彼は、ボテリーに近いペルのチェシャムで、そのために建てられた杭に鎖でつながれた。薪に火を放つと、見物人の一人が彼の脳をビレットで打ち抜いた。司祭たちは人々に、異端者を焼くための焚き木を持ってきた者は、40 日間罪を犯しても許されると告げた。

この年の暮れ、カンタベリー大司教ウォーラムは、メイドストンの司祭ヒッテンを逮捕し、獄中で長い拷問を受けた後、大司教に何度も尋問された。ロチェスター司教フィッシャーは異端者として断罪され、教区教会の扉の前で生きたまま火刑に処せられた。

ケンブリッジ大学の民法教授であるトーマス・ビルニーは、ウェストミンスターのチャプター・ハウスで、ロンドン司教と数人の司教の前に召喚された。彼は何度も火あぶりの刑に処せられると脅された。その後、彼は激しく悔い改めた。

この悔い改めのために、彼は司教の前に二度目に召喚され、死刑を宣告された。火あぶりになる前に、彼はマルティン・ルターの意見を信奉していることを告白した。懺悔の最中、彼は微笑みながら言った。"私はこの世で何度も嵐に遭いましたが、今、私の船はすぐに天国の岸に着きます"

。彼は炎の中で微動だにせず、"イエスよ、私は信じます "と叫んだ。ビルニーが苦しんだ数週間後、リチャード・バイフィールドがルターの教義を信奉していたために牢獄に入れられ、鞭打ちに耐えた。このバイフィールドは、サリー州のバーンズでしばらく修道士をしていたが、ティンデール版の新約聖書を読んで改宗した。この男が真理のために受けた苦しみは、一冊の本が必要なほど大きかった。時には地下牢に閉じ込められ、汚物と淀んだ水の不快で恐ろしい臭いに窒息しそうになった。またあるときは、両腕を縛られ、関節が脱臼するほどだった。背中の肉がほとんどなくなるまで、何度も鞭で打たれた。そして、ランベス宮殿のロラードの塔に連れて行かれ、首を鎖で壁につながれた。そして毎日、大司教の召使いたちによって最も残酷な方法で殴られた。そしてついに、彼は断罪され、品位を落とされ、スミスフィールドで焼かれた

。

次に苦しんだのはジョン・テュークスベリーだった。彼は平凡で単純な男で、聖なる母なる教会と呼ばれるものに対して、ティンデールの新約聖書の翻訳を読んだこと以外に罪を犯したことはなかった。当初、彼は弱音を吐いていたが、後に悔い改め、真理を認めた。真理を告白したため、彼はロンドンの司教の前に召喚され、頑固な異端者として断罪された。投獄されている間、彼は非常に苦しんだ。彼はスミスフィールドの火刑台に運ばれ、そこで火あぶりにされ、教皇教を徹底的に憎むことを宣言し、自分の主張が神の目に正しいと固く信じていることを公言した。

テンプル寺院の紳士の未亡人と結婚していた。杭につながれたとき、彼は薪を抱きしめて言った！あなた方は奇跡を求める。この火の中にいても、ベッドの中にいるよりも苦痛を感じない。こうして、彼は自分の魂を贖い主の手に委ねた。

この殉教者の死の直後、ウィルトシャーのブラッドフォードで、罪のない同郷のトラクスナルが生きたまま火刑に処せられた。

1533 年、著名な殉教者ジョン・フリスが真理のために死んだ。スミスフィールドの火炙り場に連れて行かれたとき、彼は薪を抱き、一緒に苦しんでいたアンドリュー・ヒューイットという若者に、魂を贖った神に魂を託すよう勧めた。この 2 人は、炎が風に吹き飛ばされ、息絶えるまで 2 時間以上苦しみ続けた。

1538 年、スミスフィールドで狂人のコリンズが飼い犬とともに死んだ。その時の状況は次のようなものだった：司祭が聖体を捧げたとき、コリンズはたまたま教会にいたが、ミサの犠牲を嘲笑して、自分の犬を頭の上に持ち上げた。この罪でコリンズは精神病院に送られるか、荷車の尾で鞭打たれるべきだったが、ロンドンの司教の前に召喚された。彼は正真正銘の狂人であったが、ローマ教皇の権力が強く、教会と国家の腐敗が激しかったため、哀れな狂人とその犬はスミスフィールドの火あぶりに運ばれ、大勢の見物人が見守る中、灰になるまで焼かれた。

同じ年に苦しみを味わった人が他にも何人かいた。

彼は狂人だと言われていたが、火あぶりにされたときも、炎が燃え盛ったあとも、信心深さを示していた。

同じ頃、パーダーブという人物が、葡萄酒を飲んだ後、司祭に

"彼は空の聖杯で飢えた人々を祝福した "と内緒で言ったために死刑になった。

同じ頃、サフォーク州の老修道士ウィリアム・レトンは、行列を組んで昇る偶像を糾弾し、聖餐は両方の種類で行われるべきであると主張したため、ノリッジで火刑に処せられた。

この人たちが焼かれる少し前に、ニコラス・ペケはノリッチで処刑された。火が点けられると、彼は真っ黒になるほど焦げた。レディング博士は、ハーン博士とスプラグウェル博士とともに彼の前に立ち、手に白い長ぐつを持ち、彼の右肩を叩いて言った。これに対して彼は、「私はあなたと（秘跡を）軽んじています」と答え、苦しみの苦しみから血を吐きながら激しく暴れた。レディング博士は、彼が自分の意見を撤回するよう、40 日間の免償を与えた。しかし、彼は敵の悪意など気にすることなく、真理を堅持し続けた。彼は生きたまま火刑に処せられ、キリストが彼を御名のために苦しむに値する者と見なしてくださったことを喜んだ。

1540 年 7 月 28 日、あるいは 1541 年（年代が異なるため）、エセックス伯爵トーマス・クロムウェルはタワーヒルの足場に運ばれ、そこで驚くべき残酷な例とともに処刑された。彼は人々に短い演説をした後、おとなしく斧に身を任せた。

この貴族が殉教者に列せられるのは、非常に妥当なことだと思う。なぜなら、彼に対する非難は宗教に関するものではなかったにもかかわらず、教皇教を打ち壊そうとする彼の熱意がなければ、彼は最後まで国王の寵愛を保っていたかもしれないからである。これに加えて、教皇派が彼の破滅を画策したことも挙げられる。彼は、善良なクランマー博士を除けば、その時代の誰よりも宗教改革の推進に貢献したからである。

クロムウェルが処刑された直後、カスバート・バーンズ博士、トーマス・ガーネット、ウィリアム・ジェロームの 3 人は、ロンドン司教の教会裁判所に召喚され、異端として告発された。ロンドン司教の面前で、バーンズ博士は「聖人は私たちのために執り成しをしてくれたか」と問われた。

それに対して博士は、「それは神に任せるが、私はあなたがたのために祈ろう」と答えた。

1541 年 7 月 13 日、この男たちは塔からスミスフィールドに連れて行かれ、そこで全員が一つの杭に鎖でつながれた。

誠実な商人トマス・ソマーズが他の 3 人とともに、ルターの著書を読んだという理由で牢獄に入れられた。彼らはその本をチープサイドの火事場まで運ぶよう宣告された。チープサイドで、彼らはルターの本を炎の中に投げ入れなければならなかったが、ソマーズは自分の本を投げ捨て、そのために彼は塔に送り返され、そこで石打ちの刑に処された。

この頃、リンカーンでは、同教区の司教ロングランド博士のもとで、恐ろしい迫害が行われていた。バッキンガムでは、トマス・ベイナードとジェームズ・モートンが、前者の重罪は「主の祈りを英語で読むこと」、後者の軽罪は「聖ヤコブの書簡を英語で読むこと」であった。二人とも断罪され、生きたまま焼かれた。

アンソニー・パーソンズ司祭は、他の 2 人とともに、異端について調べられるためにウィンザーに送られた。いくつかの論文が提出され、彼らはそれを拒否した。これらの手続きは、ボナーを除けば当時最も激しい迫害者であったソールズベリーの司教によって行われた。パーソンズは、彼らが火あぶりに連れて行かれたとき、飲み物を所望し、持ってこられた飲み物を仲間の苦しんでいる者たちに飲ませた。この言葉を聞いて、被災者の一人であるイーストウッドは、目と手を天に上げ、自分の霊を受け取ってくださるよう主に願った。パーソンズは藁を自分の近くに引き寄せると、観衆に向かって言った。キリストは私の唯一の救い主であり、私はキリストに救いを託します」そしてすぐに火が点けられ、体は焼かれたが、貴重で不滅の魂を傷つけることはできなかった。彼らの不屈の精神は残酷さに打ち勝ち、その苦しみは永遠に記憶されるであろう。

このように、キリストの民はあらゆる方法で裏切られ、命を売り買いされた。というのも、同議会において、王はこの最も冒涜的で残酷な行為を永久に法律として定めたから

である。母国語で聖書を読む者（当時は「ウィクリフの学問」と呼ばれていた）は、その相続人から土地、家畜、身体、生命、財物を永久に没収されるべきである。従って、彼らは神に対する異端者、王室に対する敵、そしてこの国の最も極端な反逆者として断罪されることになる。

第 15 章 -フランスとユグノー

何世紀にもわたってフランスはローマ教会の戦場となり、小宗派はそれに反対してきた。私たちは、ワルド派とアルビゲンス派がローマ・カトリックと闘いながらどれほど苦しみを受けたかを知った。 彼らが住んでいた都市は奪われ、彼らの家は破壊され、数千人が殺された。かつてあれほど数が多く繁栄していた彼らには、散らばった少数しか残っていなかった。しかし、教会は戦場では勝利したが、良心と心を完全に征服することはできなかった。ブジェール市が奪われてから 300 年の間、南フランスは偉大なユグノーが現れるまで宗教改革に参加した。1530 年にしばらくの間、フランシス 1 世の宮廷にまで広がったようなフランスのプロテスタニズムは、ローマ教会の悪行に反抗するマルティン・ルターによる小冊子とドイツ、スイス、イギリスの改革者たちの説教から大きな影響を受けた。

北フランスにあるピカルディア出身のジョン・カルバンは、聖書を学ぶ学徒であり、有力な知識人であったが、宗教改革に志願し、パリに行き、優れた雄弁で多くの一般人たちにローマ教会の権威に対する疑問を抱かせた。 しかし、王はカルバンの信者が多くなることに恨みを抱き、教皇庁に連絡した。王は一方、教皇が選んで送った人々の巧妙な説得に感動し、カルヴァン にフランスでの宗教改革は政府の許可なしには起こらないことを確信させた。カルヴァンには迫害が続き、改革を支援していた他の人々は命を守るためにフランスから逃げなければならなかった。p336

ユグノーの数と富が増加すると、フランスの有力な貴族と大領主たちは彼らを破壊することに合意するようになった。ヘンリー2 世の統治期間中、ユグノーの大きな力になってくれた人々が登場し、代表的に彼らはナヴァルの王と彼の弟のコント公爵、その他フランス王家の一部の人々、シャティ・ヨンやコリーニのような多くの貴族が宗教改革に好意を示した。フランシス 2 世の統治期間中、ユグノーは迫

害を受けた。王だったフランシス 2 世は 1560 年に亡くなり、彼の弟が当時 10 歳の少年としてチャールズ 9 世という称号で即 した。彼が幼い少年であったため、母親のキャサリン・デ・メディチが摂政となった。その女性が統治する中で、プロテスタントは再び残酷な迫害を受けることになった。その迫害の証拠は、頻繁に行われた大虐殺や暗殺が示している。彼女はユグノーを一斉に殲滅する計略を立て、奇抜なアイデアを思いついた。それは、王の妹とユグノー軍の司令官であるナヴァルのヘンリー（ナント勅令のヘンリー4 世）が結婚するように手配したのである。 キャサリンは、盛大に行われるその指導者の結婚式に、何千人ものユグノーがパリにやってくることをよく知っていた。 そこで彼女は彼らを一網打尽にしようと計画を立てた。そのような恐ろしい殺人劇を繰り広げるために、キャサリンは助けが必要であったため、彼女は彼女を助けてくれる数人の指導者にその秘密を打ち明けた。何の罪もない人々を攻撃するために決定された日は、 1572 年 8 月 24 日、聖バドロマエの祝日の前夜であった。 だからその恐ろしい事件は、歴史では

「聖バドロマエ祝日の大虐殺事件」として知られている。p338

大虐殺の準備：コリーニが最初に病床に寝たのはなぜ？

その血なまぐさい作業は静かに準備され始め、いくつかの連隊の兵力がパリに召集され、武器が供給され、その噂はユグノーにも知られるようになった。そして結婚式が正しくないという疑惑が生じ始めたが、殺害計画が具体的に見つからなかったため、恐怖は次第に沈静化し始めた。自分の母親と同じように虚偽で反逆的だったチャールズ 9 世は、ユグノーの優れた指導者の中で最も愛されているコリーニ提督を自分の宮殿に招待し、最も丁寧で礼儀正しく接待した。王はコリーニに兵士たちをパリに連れてきて、反対派が起こす暴動を阻止するように言った。自分が最初の犠牲者に選ばれたコッリーニは、王の言葉が本当だと思い、何の疑いもせずに市中を歩き続けた。

8 月 22 日、コリーニがある教会を通りかかったとき、隠れた暗殺者によって発砲された 2 発の銃弾を浴びて倒れた。 その暗殺者を追跡するのは無駄なことであった。 なぜなら、彼はローマ派のギズ公爵が彼のために家に用意した隠れ家に身を隠したからである。銃弾のうち 1 発はコリーニの肩を貫通し、もう 1 発は指を折った。この卑怯な犯罪はパリで大騒ぎになった。負傷したコリーニ提督はホテルに運ばれ、その傷は王の医者が診察し、王も親しく訪問した。王は傷ついた彼を見て大いに残念がり、暗殺者を必ず見つけて罰することを約束した。 その名目で皇室ではコリーニが横たわっているホテルの周りに 50 人の兵士で構成された守備隊を配置し、鉄条網で通りを封鎖した。コリーニの友人であるユグノーの指導者たちは、宿舎をその提督の宿舎の近くに移すように言われた。 その理由は、市内で起こるかもしれない騒動から保護されなければならないからであった。王は彼らを保護するため、周囲に守備隊を配置し、2 か所を除くすべての城門を閉ざした。このようにした本当の目的は、ユグノーの高 指導者たちが逃げるのを防ぐためであった。 なぜなら、彼らがたくさん集まった時に監視が容易によく行われるからである。王は殺人計画を実行するにあたり、心の中でアラリックの言葉を思い出したようだ。"草が茂れば茂るほど、より早く刈り取られる" p339

聖バドローマ祝祭の大虐殺：コリーニ提督の殺害

計画はすぐに立てられた。ギュズ公爵は朝の鐘が鳴った瞬間にコリーニを殺害することで虐殺を開始した。ギュズ公爵は軍隊に命令を出し、夜中にド・ヴィルホテルに行進させた。 p340 最後の瞬間まで秘密は守られた。ユグノーたちは誰もその内容を把握していなかった。真夜中が近づくと、武装した軍隊はド・ヴィルホテルの前に集結した。大虐殺に胸を躍らせながら合図を待っていたギュズ公は、すぐに弟と多くの人々を連れてコリーニの家に向かった。そこにいる軍隊を担当していたコサンと彼の部下は、王の名の下に扉を壊して開き、階段の下で守っていたスイスの守備兵を殺害した。 その時、彼らは提督を探しながら家に駆け込み、多くの人々がその後に続いた。コリーニは大きな音で目を覚

まし、介添人の一人に何事かと尋ねると、その人は「私の主よ、神が私たちを彼に呼んでいます」と答えた。コリーニはその時、一緒にいたすべての人にこう言った。"私の友人たちよ、あなたの命を救いなさい。私にとってはすべてが終わったのだ。私は長い間、死を準備してきた。

すると、彼らは皆去り、その提督一人だけが残った。その提督は自分を殺そうとする人々を待ち、ひざまずきながら祈った。ついにすべてのドアが壊され、暗殺者が彼の部屋に入り、その殺し屋は「あなたがコリーニか」と尋ねた。提督はこう言った。「私がその人だ、若者よ、君は私の白髪を尊敬すべきだが、君がやろうとしていることをやれ。おそらく、あなたは私の命をあと数日 くすることができるだけだ」 その暗殺者はベスムという男で、彼の剣をコリーニの体に突き刺すことで答えを代えた。その時、彼の仲間が瀕死の人に素早く駆け寄り、大剣を突き刺した。ベスムはその時、窓を開けてギズに「我々はそれをやった」と叫んだ。 彼は「よくやった。しかし、私たちが足で歩いて彼を見なければ信じられない」と答えた。 すると、死体が窓から前庭に投げ出された。そのように惨めに暗殺された人の血は、殺害者の顔や服に飛び散った。ギズはそれが本物の提督かどうかを確かめるために、死者の顔から血を拭き取り、首を切るように命じた。 p344

聖バドローマの日に虐殺されるプロテスタントの人々 p34 5 フランスのバシーで兵士に撃たれるユグノー p3 56 この絵についての記事は、別のフォックスの殉教者化ポストである

フランス・サン＝パニュ、ヴェシーで起きた大虐殺の簡単な全貌：ギュズ公爵指揮』を参照してください。

聖バドローマ大虐殺の始まり

ローマ派は神の名のもとに、何の事情もなく殺せと扇動した。日光が差し込むと(つまり日が明るくなると)、パリには不気味な殺人劇が現れた。首のない死体が窓に掛けら

れており、正門には死んだ死体や死にゆく人々でふさがれていた。 そしてすべての通りは手足が切断された請求書

でいっぱいだった。ルーブル美術館まで大量虐殺の光景が現れた。守備兵はその宮殿の周りを回り、宮殿の中にいた不運なユグノーたちは次々と呼び出され、兵士たちの斧槍で殺された。ほとんどの人は何の非難もせず、あるいは平凡な言葉を発しながら死んだが、一部の人々は神の聖なる約束に訴えた。 彼らはこう言った。

"偉大なる神よ！ 抑圧された者を守ってください！正しい裁判長よ、この邪悪な者たちに復讐してください」 その宮殿に住んでいたナヴァルの王のしもべたちまで、妻と一緒にベッドに横たわっているときに殺された。ギュズ公爵と彼の友人であるタヴァンヌ・モンパンシエ、アン グレムなどは馬に乗って通りに出て、殺人者たちを激励した。ギュズは彼らに、異教徒を最後の一人まで殺し、毒蛇の子をすべて破滅させるのは王の命令だと言った。 タヴァンヌは凶暴にこう叫んだ。"血を流せ!血を流せ！医者は私たちに、5 月と同じように 8 月にも血を流すことは有益なことだと言っている」 この凶暴な言葉は兵士たちに大きな効果をもたらした。 そのため、すべての仲間も互いに競争するように暴言を使い、ある鍛冶屋は自分の手で 100 人を殺したと自慢した。大虐殺は一週間ずっと続いた。p346

ナヴァルのヘンリーの治世

ナヴァルのヘンリーは後にフランスの王ヘンリー4 世となり、歴史上最も優れた人物の一人であった。 彼はローマ派とユグノー派が戦う戦争の最中に生まれ、当時最も高貴な女性の一人であった母親（ジャンヌ・ダルブレ）によってユグノーとして育てられた。彼女はその少年を健康に育てるために、山が多い場所でシンプルで健全な生活を送るようにした。そこで彼は困難に慣れ、強靭な男らしい気質で訓練された。聖バドローマ祝祭の大虐殺事件が起こったとき、ヘンリーはパリにいた。 彼のたくましく、勇敢で、陽気で、寛容な気質は、彼がアルクとイヴリーで勝利

し、フランスの王になるまで、士気が低下していたユグノー軍に勇気を与えた。イヴリーの戦いの後、ヘンリーはパリに進軍したが、その城壁が非常に強く塞がっていたため奪うことができなかった。

彼はフランス各地で行われた戦争に何度か勝利したが、連合された国家として争いのない絶対権を持つ王になるという彼の希望が実現するにはまだ遠いように見えた。 その時、ヘンリーは希望を失い落胆していたが、もし彼がユグノー信仰を放棄するだけで、彼がパリに入るのを阻止するすべての反対行為は中止されるという提案が来た。 その誘惑はあまりにも大きかったので、抵抗することができなかった。 彼は躊躇した後、最終的に同意した。ヘンリーは「パリはミサを捧げるに値する場所だ」という記憶に残る歴史的な言葉を残し、自らローマ教会に改宗した。すべてのカトリック教徒は喜んで彼を王として受け入れ、パリは城門を開いてくれた。このような反逆的な行為は確かに言い訳できないが、ヘンリーは貪欲な権力を手に入れた後、ユグノーの迫害を終わらせることで告発する良心を鎮めた。 彼は長い間フランスを荒廃させた内乱を終わらせ、欲望のために卑劣に捨てたユグノーの信仰を再び魔の中に収めて保護した。

ヘンリーはその時、その有名なナント勅令（王がその勅令に署名した都市にちなんで名付けられた）に署名した。 その勅令はユグノーに市民権を与え、法的な保護を受けるようにした。 また、ユグノーは自分たちの好きな方法で神を礼拝することができるようになった。しかし、彼らは依然としてローマ教会の聖職を支援するために什分の一を納めることを余儀なくされ、少なくとも外見上はローマ教会の祝日を守らなければならなかった。このように依然としてローマ派に有利なナント勅令は、今思えばくだらない改革のように見えるかもしれないが、これまでローマ・カトリックから攻撃を受け、何の目的のために集まることもできず、迫害と虐待を受けていたユグノーにとっては大いに歓すべき出来事だった。ナント勅令がもたらしたユグノーの改善された地 は、ユグノーの数を増やし、繁栄させた。常にフランス人の中で最も勤勉で

あった彼らの中には、芸術的で美しいものを作る職人も多く含まれていた。ユグノーは絹織物を織る人たちであり、宝石や時計や眼鏡やポスリン製品を作る熟練した芸術家や技術者であった。フランスはまさにそのユグノーの製品で有名になり、豊かになったのである。外国に自分たちの製品を送るフランスの商人や貿易業者のほとんどはユグノーに属していた。ヘンリー4 世の後を継いで、彼の息子ルイ 13 世が即 した。彼の統治期間中も、ユグノーは穏健な扱いを受けた。1640 年までに彼らは 700 の教会を持っており、これは彼らが最も強く繁栄した時期であった。 しかし、政治的な領域は依然としてユグノーにとって閉鎖的であった。 そのため、むしろユグノーは政治に没頭することなく、敬虔で純粋に成長した。ナントシク令が署名されてから 60 余年、彼らは勤勉と有徳でフランスの福祉を促進し続けた。 p3 67

カトリック教徒のルイ 14 世時代のフランス

ルイ 14 世は、父ルイ 13 世を継いでフランスの王 に就いた。彼は 1638 年に生まれ、わずか 5 歳で王になった。そのため、彼の幼少期は母親とマララン枢機卿を首相として政府を率いていた。

その王は 23 歳になると王権を正式に手に入れ、半世紀にわたってフランスを専制君主の鉄拳で支配した。当時、彼の傲慢さと生意気さに追随する他の君主はいなかった。彼の言葉「私が国だ」という有名な答えは、彼自身が最高に重要であるという信念と、フランスと国民を支配する絶対的な力であることをよく表している。ルイ 14 世の統治が始まった時から、フランスのユグノーの平和と繁栄は崩れた。彼らは最初に集会を禁止された。その後、彼らの教会も違法と宣言された。王室はすぐにさらに厳しくなった。ルイ 14 世はカトリックの聖職者をユグノーに送り、ローマ教会のカトリック信仰に戻らせようと必死に努力した。ユグノーは都市で礼拝することがほとんど不可能になったので、彼らは再び納屋や畑を探さなければならなかった。 p367

ナント勅令が無効となる

ルイ 14 世の治世 20 年の間に 520 のユグノー教会が閉鎖され、ユグノーは残酷な悪意を企てる乱暴なカトリック教徒に襲われた。数千人のユグノーが、そのような残酷な暴行を繰り返す自分の国から脱出を試みた。フランスのユグノーを扱う上で最も宿命的なきっかけは、何よりもナント勅令の廃止といえる。この大罪は 1685 年にルイ 14 世が犯したものである。この時、多くのユグノーがフランスを脱出した。ここから彼らの財産と命は、それを持つことを選んだ人のものであった。このような暴君的な犯罪行為は、後にフランス各地で内乱を引き起こすことになった。正確な数字を知る術はないが、ルイ 14 世が国政を掌握した時、フランスに住んでいたユグノーの数は約 200 万人で、そのうち約 100 万人は彼の統治期間中に海外に逃げたと言われている。

あらゆる犯罪行為と暴力がユグノーたちに自由に行われた。もし彼らがローマ教会の礼拝方式を選ばず、ユグノーのやり方で礼拝をすると、彼らはすぐに武力で弾圧された。王の軍隊の中で最も凶暴な人々が自分の「勝手にできる」特権を持ち、彼らの家や村に居住するようになった。ユグノ

ーの処女がレイプされても法的に保護される道がなかった。したがって、不幸なユグノーの人々は、いかなる統制もなく自由に行動し、最も悪い欲望さえも自由に満たすことができた残酷で無知な兵士たちが彼らに加えることができたすべての恥辱に従わなければならなかった。 彼らのすべての牧師と重要な人々はフランスを去るように命じられ、去る日も 2-3 日しかなかった。 '

多くの人々は、彼らの敵によって故意に拘束されたり、旅行する手段を見つけることができず、ギャレー船に乗る奴隷になってしまった。彼らは監獄に閉じ込められ、パンと水しか食べられず、しばらくして大群になると手錠をかけられ、鎖に縛られて海辺に行進していった。このように旅行中に彼らの苦しみは非常に大きく、激しい天候の変化にもほとんど覆うものがなく、厳しい寒さが重なった冬季にも何日も裸の

地で夜を過ごさなければならず、空腹と喉の渇きで倒れ、病気で衰弱していった。その結果、港に到着した時にはその数はほぼ半分に減っていた。 その不気味な旅を生き延びた人々は、すぐに新しい苦痛に直面した。 なぜなら、彼らは再びガリー船に乗船することになり、非人間的で野蛮な船主たちの絶対的な支配を受けなければならなかったからだ。ガリー船を漕ぐこと自体が最も過酷な重労働である上に、その野蛮な監督官たちが頻繁に殴る鷹のために、その可哀想な奴隷たちの苦しみは百倍も増した。結局、彼らの残酷な悪行はヨーロッパのプロテスタント諸国で多くの怒りを引き起こした。イギリスのアンブリン女王は彼らの惨状に同情し、フランス皇室にいる大使に彼らのために真剣な抗議をするよう命じた。 それに対して、すでにドイツとの戦争に入っていたルイは、注意したほうが賢明なことだと考えた。 そこで彼は、宗教のために有罪判決を受け、ギャレー船の奴隷になった人々をすべて解放するようすべての港に命令した。 p 370

しかし、ルイは別の残虐行為の機会を逃したことに不満を持っていたので、釈放されたユグノーがフランスを経由して避難所を提供する国に旅行することを禁じた。 そこでルイは、彼らが監禁されていた港から直接航海させた。 彼らの航海のための船がなく、それを手に入れるのに長い間遅れたので、その可哀想な囚人たちは「彼らの心を病気にした遅れた希望」のために苦しみ、まだ何かが彼らの避難を禁じていることを恐れるようになった。 しかし、結局、悪意と頑固さが作り出すことができたすべての障害は取り除かれ、苦しんでいた囚人たちは彼らの釈放を喜びながら進むことになった。彼らがイギリスに到着した時、彼らは数人を代表として選び、彼らを保護してくれた深い感謝を伝えるためにアン・ブリン女王がいるロンドンに送った。女王は彼らを非常に丁重に え入れ、自分の統治期間の中で最も優れた業績というよりは、むしろ仲間のプロテスタントの悲惨な苦痛を和らげることに喜びを得たと言った。その亡命者たちはすぐにイギリスで快適に定住し、その国は彼らの勤勉さと才覚を通じて大きな利益を得た。一方、フランスはそのような有能で

善良な市民を失うことで、商工と貿易の利益から決して回復できない打撃を受けた。オランダ、ドイツ、スイスなども彼らの国境で避難を求める亡命者たちを歓した。それから彼らはそこに定住し、そのような国々は、以前はフランスでしか作られなかった高貴な品々を溢れさせるように加工し始めた。 p370 ホーゲン：アン・ブーリンはその時代の真のエステルだった。次のポストに続く....

彼らの支援により、ジョン・デイは殉教者たちの本を出版し、最も人気のある基本書や小教理文の答案、英語に翻訳された詩篇などの本の出版を独占する栄誉を得た。優れたビジネスセンスと技巧が融合したジョン・デイを、人々は「英国宗教改革の巨匠 the master 印刷業者」と呼んだ。

第 16 章 ヘンリー8 世時代のスコットランド迫害の記録

ヘンリー8 世

ドイツでも、イタリアでも、フランスでも、ルターの最も実り豊かな根から芽生えた枝がないところはなかったように、ブリテン島でもルターの実と枝がないところはなかった。その中には、パトリック・ハミルトンというスコットランドの高貴な家系に生まれ、国王の血を引き、優れた品性を備えた 23 歳のフェルン大修道院長がいた。彼は 3 人の仲間とともに国を離れ、神学を求めてドイツのマールブルク大学に向かった。

ドイツに滞在している間に、マルティン・ルターやフィリップ・メランクトンという福音を伝える著名な人物と親しくなり、彼らの著作や教義からプロテスタントの宗教に強く傾倒した。

ハミルトン氏の行動を知ったセント・アンドリュース大司教（厳格なカトリック教徒）は、彼を拘束し、彼の前に引き出させた。彼の宗教的信条に関する短い尋問の後、大司教は彼を囚人として城に収容し、同時に牢獄の中でも最も嫌悪すべき場所への投獄を命じた。

翌朝、ハミルトン氏は司教と他の数名の者の前に召喚され、尋問を受けた。その際、ハミルトン氏に対する主な反論は、巡礼、煉獄、聖人への祈り、死者への祈りなどを公に否定したことであった。

ハミルトン氏はこれらの記事が真実であることを認め、その結果、彼は直ちに火刑に処せられた。彼の断罪がより大きな権威を持つように、彼らはその場に居合わせた有力者全員にこの断罪文を署名させ、その数をできるだけ多くするために、貴族の子息である少年の署名も認めた。

この偏屈で迫害的な教皇は、ハミルトン氏の破滅を切望していたため、宣告当日の午後に刑を執行するよう命じた。従って、彼は恐ろしい悲劇のために指定された場所に指示

され、おびただしい数の観衆に見送られた。大勢の観衆の大部分は、彼が死刑になることが意図されていたとは信じようとしなかった。彼らは、この判決は彼を怖がらせ、それによってローマ宗教の原則を受け入れさせるために宣告されただけだと考えた。

火あぶりに着くと、ひざまずき、しばらく熱心に祈った。その後、彼は杭に固定され、薪が彼の周りに置かれた。大量の火薬が両腕の下に置かれ、左手と顔の側面が焦げるほど燃え上がった。火薬は彼の左手と顔の側面を焦がしたが、火傷には至らず、薪にも燃え移らなかった。その結果、さらに火薬と可燃物が進められた。火薬に火がつけられ、効果を発揮した。主イエスよ、私の霊をお受け取りください！主イエスよ、私の霊魂をお受け取りください。主イエスよ、私の霊をお受け取りください。

じりじりと燃えさかる炎は彼を大きな苦しみに陥れたが、彼はキリスト教徒としての寛大さでそれに耐えた。彼に最も苦痛を与えたのは、修道士たちに扇動された邪悪な者たちの騒ぎであった。それに対して、修道士は、"私から離れよ、私を悩ますな、サタンの使者たちよ

"と答えた。あるキャンベル修道士は、その首謀者であったが、侮蔑的な言葉で彼の邪魔をし続けた。若きパトリック・ハミルトンは彼に言った。その後、煙の激しさと炎の速さによってそれ以上話すことができなくなった彼は、魂を与えてくださった方の御手に自分の魂を委ねた。

キリストを信じるこの堅固な信者は、1527 年に殉教した。

ヘンリー・フォレストという若い無害なベネディクト会士が、上記のパトリック・ハミルトンを尊敬して発言したことを非難され、牢獄に入れられた。そして修道士に自白する中で、ハミルトンは善人であり、彼が死刑を宣告された記事は弁護されるかもしれないと告白した。修道士が自分の考えを明かしたため、それは証拠として採用され、哀れなベネディクトは火刑に処せられた。

大司教の紳士の一人であるジョン・リンゼイは、彼の処刑方法について協議が行われている間、修道士の森をどこかの地下室で焼却するよう助言を与えた。

この忠告は受け入れられ、かわいそうな犠牲者は焼かれるよりもむしろ窒息死させられた。

次に福音の真理を公言したために犠牲になったのは、デビッド・ストラットンとノーマン・ゴーレイだった。

致命的な場所に到着すると、二人はひざまずき、しばらく熱心に祈った。ストラットンが観衆に向かって、迷信的で偶像崇拝的な観念を捨て、福音の真の光を求めて時を過ごすよう勧めた。ストラットンはもっと多くのことを言おうとしたが、参列していた役員たちに阻まれた。

そして、偉大な贖い主の功徳によって、不滅の命への栄光の復活を望みながら、魂を与えてくださった神に、快くその魂を委ねた。彼らは 1534 年に苦しんだ。

前述の 2 人の殉教に続いて、かなりの期間、ローマ教会の学部長を務めていたトーマス・フォレ氏、2 人の鍛冶屋のキラーとビバレッジ、司祭のダンカン・シムソン、紳士のロバート・フォレスターが殉教した。1538 年 2 月最終日、エディンバラのキャッスル・ヒルで、これら全員が一緒に焼却された。

すなわち、ジェローム・ラッセルとアレクサンダー・ケネディ（18 歳前後の若者）である。

この 2 人は牢獄に収監された後、大司教の前に召喚され、尋問を受けた。裁判の間、ラッセルは分別のある男として、告発者たちに対して理路整然と反論した。

審査が終わり、二人とも異端と宣告され、大司教は恐ろしい死刑宣告を下した。二人は直ちに世俗権力に引き渡され、処刑された。

翌日、二人は拷問に指定された場所に連れて行かれた。そこへ向かう途中、ラッセルは、臆病そうな顔をしている同胞を見て、こう話しかけた：「兄弟よ、恐れることはない。私たちのうちにおられる方は、この世におられる方よりも偉大である。私たちが受ける痛みは短く、軽いものです。しかし、私たちの喜びと慰めに終わりはない。だから私たちは、師であり救い主であるイエスが私たちの前に歩まれたのと同じまっすぐな道を通って、その喜びの中に入るよう努めよう。死は私たちを傷つけることはできない。 死はすでに、私たちがこれから苦しみを受けようとしている方のために、主によって滅ぼされたのだから…

運命の場所に着くと、二人はひざまずいてしばらく祈った。その後、杭に固定され、薪に火が灯されると、彼らは天の大邸宅での永遠の報酬を期待して、魂を与えてくださった方の手に自分の魂を快く委ねた。

福音の真理を受け入れたために絞殺され、火刑に処せられたジョージ・ウィシャート氏の生涯、苦難、死についての記述。.

私たちの主である 1543 年頃、ケンブリッジ大学に、ベネッツ・カレッジのマスター・ジョージ・ウィシャート、通称マスター・ジョージという人物がいた。彼は最高級の円形のフランス製帽子をかぶり、人相から憂鬱な顔色をしていると判断された。黒髪で、髭が長く、容姿端麗で、スコットランドの国に倣ってよく話し、礼儀正しく、腰が低く、愛らしく、喜んで教え、学ぼうとし、よく旅をしていた。彼はまた、靴までフリーズ・ガウン、黒いミリアン・フュスティアンのダブレット、無地の黒いホーズン、シャツには粗い新しいキャンバス地、手には白いバンドとカフスを身に着けていた。

彼は慎み深く、節制し、神を畏れ、貪欲を憎む男だった。彼は藁と粗く新しい帆布のシーツを敷き、それを着替えると手放した。枕元には水の入った桶が置いてあり、その中で（彼の家族はベッドにおり、ろうそくを消して静かにしていた）自分の体を洗っていた。彼は私を優しく愛し、私も彼を愛した。彼は非常に慎み深く、重々しく教えたので、民の中には彼を厳しいと思い、殺そうとする者もいたが、主が彼を守ってくださった。彼は

、彼らの悪意を正した後、良い勧めによって彼らを改め、自分の道を歩んだ。ああ、主が彼を、彼の哀れな息子である私に残して下さり、彼が始めたことを終わらせることができたなら！彼は、ヘンリー王に条約を結びに来た多くの貴族たちと共にスコットランドに行った。

1543 年、セント・アンドリュース大司教は教区の各地を訪問し、パースで数名の者が異端であることを知らされた。その中で、ウィリアム・アンダーソン、ロバート・ラム、ジェームズ・フィンレイソン

、ジェームズ・ハンター、ジェームズ・ラヴェレソン、ヘレン・スタークに死刑が宣告された。

それぞれの人物に向けられた非難は次のようなものであった：最初の 4 人は、聖フランチェスコの像を吊るし、その頭に雄羊の角を釘で打ちつけ、その尻に牛の尻尾を固定したことで告発されたが、断食の宗教的な日にガチョウと宴会をしたことが主な告発内容であった。

ジェームズ・レベレソンは、木彫りのペテロの三冠の髪飾りを自宅に飾ったことで告発された。大司教は、この行為が枢機卿の帽子を嘲るものであると考えた。

ヘレン・スタークは、特に出産時に聖母マリアに祈る習慣がなかったことを非難された。

それぞれの告発により、全員が有罪となり、直ちに死刑が宣告された。ガチョウを食べた罪で起訴された 4 人は絞首刑、ジェームズ・ラヴェレソンは火あぶり、女は乳飲み子とともに袋に入れられ溺死させられた。

女と子供と 4 人の男たちは同時に苦しんだが、ジェームズ・ラヴェレソンが処刑されたのはその数日後だった。

殉教者たちは、大勢の武装した男たちによって処刑場まで運ばれた（彼らは、兵隊がいなければ町での反乱を恐れたからである）。この行為は、すべての盗賊に共通するものであったが、人々に犯罪をより忌まわしく思わせるために行われた。誰もが他の者を慰め、その夜、天の御国で一緒に食事をすることを約束した。彼らは自らを神に讃え、主にあって絶え間なく死んでいった。

女は夫と一緒に死にたいと切に願ったが、苦しむことはできなかった。しかし、夫の後を追って処刑場へ行き、夫に慰めを与え、キリストのために忍耐と忍耐を勧めた。夫よ、喜びなさい。私たちはこれまで何度も楽しい日々を共に過ごしてきました。しかし、私たちが死ななければならないこの日は、私たち二人にとって最も喜ばしい日となるはずです。

この発言の後、女は溺死させられる場所に運ばれ、乳房に乳を吸う子供がいたにもかかわらず、敵の無慈悲な心は何も動かされなかった。それで、彼女は神のために自分の子供たちを町の隣人たちに勧め、乳を飲ませた赤ん坊を看護婦に与えた後、死によって真実を封印した。

自国に真の福音を広めたいと願っていたジョージ・ウィシャートは、1544 年にケンブリッジを去り、スコットランドに到着すると、まずモントローズで説教し、その後ダンディーで説教した。この最後の地で、彼はローマ人への手紙の公の説教を行ったが、その説教は非常に優美で自由であり、教皇派を大いに驚かせた。

その結果、（セント・アンドリュース大司教のビートン枢機卿の勧めで）ダンディーの有力者ロバート・ミルンがウィシャートの説教する教会に出席した。彼は説教の途中で、これ以上町を騒がせるなと公に命じた。

この突然の反撃にウィシャートは大いに驚き、少し間を置いてから、演説者と聴衆を悲しげに見て言った：「神が私の証人である。ええ、あなた方の悩みは、私にとってはあなた方自身よりもつらいものです。しかし、神の御言葉を拒み、神の使いをあなた方から

追い払うことは、あなた方を悩みから守ることはできない。神があなたがたに遣わされる大臣たちは、火刑も追放も恐れず、処刑も追放も恐れないからである。私は救いの言葉をあなたがたに差し出した。命がけで、あなたがたの間にとどまりました。私の潔白は、私の神によって宣言されるに任せなければならない。もしあなたがたが長い間栄えるなら、私は真理の霊に導かれているのではありません。しかし、もし予期せぬ悩みがあなたがたに襲いかかるなら、その原因を認め、恵み深く憐れみ深い神に立ち返りなさい。しかし、もし最初の警告に立ち返らないなら

、神は火と剣をもってあなたがたに臨まれるであろう。この演説が終わると、彼は説教壇を去り、退席した。

この出来事の後、彼はスコットランドの西部に行き、神の御言葉を宣べ伝え、多くの人々に喜んで受け入れられた。

それからしばらくして、ウィシャート氏はダンディーでペストが発生したという知らせを受けた。ペストが始まったのは、彼がそこで説教することを禁じられてから 4 日後のことだった。ペストは非常に猛威を振るい、24 時間の間に何人の死者が出たか、ほとんど信用できないほどであった。この知らせが彼に伝えられると、彼は友人たちの引き止めの懇願にもかかわらず、そこに行く決心をし、こう言った：「彼らは今、悩みの中にいて、慰めを必要としている。おそらくこの神の御手によって、以前は軽んじていた神の言葉を、今こそ崇め敬うようになるだろう "と。

彼は喜びをもって、敬虔な人々に迎えられた。彼は説教の場所に東門を選んだので、健康な者は門の内に、病人は門の外にいた。イエスは御言葉を送り、彼らをいやされた。この説教の中で、彼は主に、神の言葉の利点と慰め、それを軽んじたり拒絶したりした場合に生じる裁き、神のすべての民に対する神の恵みの自由、そして、神がこの惨めな世からご自身のために選ばれた神の選民の幸福に焦点を当てた。彼の聴衆の心は、この講話の神の力によって元気づけられ、よみがえったので、死を考えなかった。しかし、召された

者たちは、再びこのような慰めを得ることができるかどうか分からないので、より幸福であると判断した。

この後、疫病はおさまったが、その最中もウィシャートは絶えず、極限状態にある人々を訪ね、励ましの言葉をかけて慰めた。

ダンディーの人々のもとを去るとき、彼は、神はその災いをほぼ終息させ、今は別の場所に召されていると言った。そこからモントローズに行き、そこで説教をすることもあったが、ほとんどの時間を個人的な黙想と祈りに費やした。

第 17 章 - 聖書の戦い、そして火薬の陰謀*

* この本のこの章は本文から引用したものです：世界を変えた本 キングジェームス聖書(1611) - 英語聖書の歴史, 鄭東洙牧師

ルネッサンス時代以降の現代聖書の歴史は、英語の聖書の歴史といっても過言ではない。聖書の白眉と呼ばれるキングジェームス聖書が出るまでには、普通の人々の手に聖書を握らせるために命を捧げるまで苦労した数多くの神*-の人々の情熱と努力と。

イギリスと英語の歴史

英語の聖書の歴史を正しく理解するには、まずイギリス民族および英語の歴史について理解する必要がある。紀元後 5 世紀にローマがイギリス南部から軍隊を撤退すると、ブリテン族はサクソン族の助けを借りてピクト族とスコット族の侵略を防いだ。サクソン族は北部地方で勝利を収めた後に戻り、その後、イギリス南部を占領しようとした。このような戦いはほぼ 150 年間続き、その間にアングロ族、サクソン族、様々な異教徒などが古代イギリスを 7 つの王国に分けて統治するようになった。その後、これらの王国は周辺のより強い王国に併合された。

ウィクリフ聖書(西暦 1382 年)

"私は最終的に真理が勝利すると信じている。" これは 1380 年にランカスター公爵にウィクリフ (John Wycliffe, 1324-1384)が書いた文章である。ウィクリフの訳本がジェロームの腐敗したラテン語版バルゲートから出てきたので、キングジェームズ欽定訳聖書の基礎となる訳本の一つではないにもかかわらず、ウィクリフの作品は、初期の英語聖書訳本についてのあらゆる調査で必ず言及されなければならない。

英語の聖書全書訳本を最初に私たちに与えたのはウィクリフである。また、自分の足跡をたどって一般の人々の言語で神の言葉を翻訳するように他の人々を励ましたのもウィクリフであった。ウィクリフは一人で新約聖書を翻訳したが、旧約聖書の翻訳はヘリフォ

ードのニコラスが彼を助けたと思われる。ウィクリフの聖書は 1382 年に紹介され、後にパーヴィー(John Purvey)が改訂した。

当時はまだ印刷機が発明されておらず、訳本のすべてのコピーを自筆で記録しなければならなかったので、実はこれは崇高な仕事でした。通常、一冊の聖書を書き写すのに十ヶ月ほどかかり、その値段も 만만치 않아서...それにもかかわらず、大量の聖書が書き写されると、ついに英国国会は法令を制定してウィクリフの聖書を普及させないようにした。今日、私たちはこうして手書きで記録された 200 冊余りのウィクリフ聖書を持っている。

1382 年にロンドンでウィクリフの多くの教えが異端思想として有罪判決を受けた後、オックスフォードにいたウィクリフの多くの信者も信仰の撤回を余儀なくされた。 しかし、ウィクリフ自身は試練を受けることも殉教することもなかった。 それでも、彼の思想と作品は依然としてカトリック主義の怒りを受けた。ウィクリフは退職を余儀なくされ、1384 年に亡くなるまでイギリスのラターワースにある自分の司祭館にとどまった。

1401 年に議会はウィクリフの教義を教え、宣言した人々に死刑を宣告した。イギリスのアランデル大司教は教皇に「あの邪悪なウィクリフ」を退治するよう要請し、その後 1408 年に彼の指揮下でオックスフォード会議が開かれ、「いかなる形式でも聖書を英語に翻訳してはならず、誰もそのような本を読んではならない」という決定を下し、これに従わない者は異端として非難されると宣言した。

その後約 100 年間には、多くのキリスト教徒がウィクリフの聖書を見たり、所持していたという理由で、ウィクリフの聖書を首から吊るされ、火刑に処され、殉教することが起こった。 それにもかかわらず、ウィクリフと彼の同業者たちの労力で多くの聖書が書き写され、現在も 2 00 冊余り残っていることを見ると、彼らがどれだけ多くの努力を払って聖書を翻訳し、書き写したかがよく分かる。英語の聖書が平民の手に入ると、大きな脅威を感じた教皇ヨハネ 23 世は、1415 年 5 月 4 日にコンスタ

ンツ公会議を開き、ウィクリフの聖書を異端として非難し、すでに死んで墓に安置されたウィクリフの遺骨を掘り出して火葬することを決議した。

宗教改革の熱い炎の後、神の御言葉は普通の聖徒のために焼入れの過程を経ながら、より強力になった。神の御言葉は、もはや教会体制の手下だけにとどまらなくなった。しかし、そのような特権を得るためには、代償を払わなければならなかった。多くの聖徒たちは、聖なる聖書の記録コピーを安全に保存するために、自分の富と名声、そして最終的には自分の命を犠牲にした。 彼らの労苦と苦難のおかげで、私たちは自ら聖書を読むことができる特権を与えられた。これに対して私たちは彼らに永遠に感謝しなければならず、彼らの努力を認めなければならない責任を負っている。

英語の聖書の歴史と君主制

英語の聖書の歴史は本当に豊かである。聖書の記録そのもののように、英語の聖書の歴史は醜い人と良い人の両方を言及している。英語聖書は、人間の表現力の美しさ、献身の純粋さ、そして犠牲の深さを示しています。歴史はまた、人間の卑劣な思考と間違った道に導かれた宗教的敬虔さ、そして人間の堕落の程度を記録している。私たち自身の言語で神の言葉を読む自由を得るために、多くの人々が汗と血でその代償を払った。英語聖書翻訳者たちの苦労を理解する前に、私たちはまず彼らが住んでいた時代を理解しなければならない。英語の聖書は 1382 年まで存在しなかった。実際、その当時は一般民衆の言語で聖書を持つことが禁止されていた。当時、権力を握っていたローマ・カトリック教会の公式聖書はジェロームのラテン語版バールゲートであり、カトリック教会はイギリスの君主政治に多大な影響を与えた。

カトリック教会は、人々が聖書の記録を理解できないだろうし、間違って翻訳すると信じていた。カトリック教会は聖書禁止令を執行する権限も持っていた。この時に出版された聖書が、先ほど説明したウィクリフ聖書である。

私たちが英語の聖書の歴史を正しく知ろうとするならば、まずイギリス君主制の歴史を知らなければならない。 特にティンデールからキングジェームス聖書が出るまでの歴史を知ることが何よりも重要である。特にこの時期にイギリスは独自の宗教改革に直面していた。

メアリー1 世（1553 年～1558 年治世）

"光は来た、去った、そしてまた来た。" しかし、この同じ絵がメアリーの統治時代に人々の心に浮かび上がる。メアリーは自分の統治期間にイギリス全土に闇をもたらした。彼女のこのような熱

心さは誤った結果をもたらし、彼女はすぐに「血のメアリー」という悪名高い異名を得ることになった。

メアリーは自分の統治期間の最後の 3 年間、なんと 300 人以上のプロテスタントを火刑台で焼き殺した。

エリザベス 1 世（1558-1603 年統治）

エリザベスの治世で再び光が訪れた。メアリーの治世が流血に満ちていたとすれば、エリザベスの治世は栄光に覆われた。私たちが現在「イギリスのエリザベス時代」と呼ぶその時代が、まさにエリザベス 1 世の治世期間だった。

エリザベスの治世期間に衝突がなかったわけではない。スコットランドの女王メアリーがスコットランドでの反乱を避けて 1568 年にイギリスに逃亡した。メアリーは強力なローマカトリック信者であったため、最終的にイギリスで起きたいくつかのカトリック教会の陰謀の軸となった。彼らはカトリック教会の教皇職を再確立しようとした。結局、エリザベスはメアリーを逮捕し、1587 年に死刑を宣告した。このメアリーの息子であるジェームズはスコットランドのキングジェームス 6 世だった。エリザベスの死により、ジェームズは 1603 年にイギリスのキングジェームス 1 世とな

った。自分の母親はカトリック信者だったが、ジェームズは強力なプロテスタント君主となり、翻訳者たちに聖書を作ることを許可し、彼が許可したその聖書は現在、一般的に彼の名前にちなんで「キングジェームズ聖書」(King James Bible)と呼ばれている。

グレート聖書(1539)

グレートバイブル(Great Bible) クランマー聖書としても知られているが、その理由は大司教クランマー(Thomas Cranmer)が第 2 版の序文を書いたからである。グレート・バイブルはウィッチチャーチ(Whitchurch)聖書とも呼ばれた。これは王室の任命を受けた二人の出版業者グラフトン(Richard Grafton)と彼と一緒に働いたウィッチチャーチ(Edward Whitchurch)の名前にちなんで名付けたものである。 そのため、キングジェームス聖書翻訳者たちはこの聖書を「ウィッチチャーチ聖書」と呼んだ。

ジュネーブ聖書(1560)

1553 年にイギリス女王になったメアリーは、プロテスタントに対して猛烈な迫害を開始した。グレート・バイブルは教会から消え、多くのキリスト教徒が彼女の宗教的狂気を避けるためにイギリスから逃げ出した。迫害を避けて逃げた多くの人々は、ジュネーブで自分たちの避難所を見つけた。 英語で神の言葉を保存する必要性を感じたため、メアリーの迫害に苦しんだ人々や彼女が引き起こした迫害のために逃げた人々は新しい聖書翻訳に着手し始め、1557 年に新約聖書を出版した。

そのほとんどは偉大な宗教改革者カルバンの実弟であるウィッティンガムの努力の結果であった。

ギルビーとサンプソンの助けを借りて、ウィッティングガムは直ちに新約聖書を改訂した。旧約聖書の場合、グレート聖書の 1550 年版を選んで改訂した。そして 1560 年にジュネーブ聖書全体が完成し、出版された。

キングジェームス聖書: 良いものをより良くしたもの

キングジェームス欽定訳聖書の翻訳目標は、以前にあった訳本より良い新しい訳本を作ることだった。私たちが見てきたように、欽定訳聖書の翻訳者たちは、以前の訳本がひどいとは思っておらず、ただ良い訳本をもっと良くするか、あるいは多数の良い訳本の中で一つの最も優れた良いものを作ろうとしたと主張した。

彼らの願いは、英語で神の御言葉を翻訳し、初期の英語プロテスタント訳本に基づいた最も優れた訳本を提供することでした。 彼らの仕事は成功しました。キングジェームス聖書は、初期の英語訳本に基礎を置いただけでなく、その後 400 年間、堂々と標準英語聖書として定着した。

一部の人々は、キングジェームス聖書がイギリスのキングジェームス 1 世(スコットランドのキングジェームス 6 世、1566-1625)が直接翻訳したものだと誤解している。 ジェームズは聖書を翻訳しなかったし、ジェームズの性格は自分の名前を持つ訳本とは何の関係もない。ジェームズはキングジェームズ聖書が完成した 1611 年にイギリスの王であり、その時、王の権威で翻訳者たちに聖書を翻訳させたこと以外は、この聖書とは何の関係もない。

ジェームズはスコットランドで生まれ、スコットランドのメアリー女王の一人っ子だった。有名なジェームズの母メアリーは厳格なローマ・カトリック教徒だったが、ジェームズは確固たるプロテスタントとして育った。

キングジェームス聖書翻訳

レイノルズが英語聖書を改訂することを王に提案したその年 1 月のあの寒い日、ジェームズは彼の提案に喜んで反応し、神の言葉を翻訳する目的で 54 人の学者を指名するようバンクロフト司教に指示した。キングジェームズ聖書翻訳に参加した何人かの人々がその仕事が完成する前に死亡したため、実際の翻訳者の数は秘密にされて

いる。それにもかかわらず、大多数の翻訳者の名前は保存されている(付録 A 参照)。これらの人々はウェストミンスターとオックスフォード、そしてケンブリッジに 置する 3 つのグループに分かれた。 また、各グループは 2 つの部分に分かれ、1 つの部分は旧約聖書を作業し、もう 1 つの部分は新約聖書を作業した。

実際、翻訳者たちは偉大な学者であり、その多くがキングジェームス聖書の出版後に言語研究の基礎を築いた。彼らは聖書の言語を学び、自分の知識を発展させるために彼らの時間のほとんどを費やした。ラテン語やギリシャ語に優れた人々の中には、しばしば母国語である英語が苦手な場合もあった。

キリスト教は、それ自体に権威を与え、信仰と実践のすべてを支配する一つの文書に完全に依存している。それは他でもない聖書全書(The Holy Bible)である。キリスト教徒が信じて行うすべてのことの絶対的かつ最終的な基礎が聖書であるため、私たちは必ず聖書というこのランドマークが確かかどうか、あるいは変更されていないかどうかを常に気にしなければならない。

過去 2,000 年余り、イエス・キリストの教会は、福音が宣布され、聖書を信じるすべての教会がほぼすべての地域で常に共通して受け入れてきたギリシャ語本文とヘブライ語本文、そしてこれらから翻訳された訳本のみを使用してきた。

このような本文は過去のほぼすべての教会が受け入れているので、通常受容本文(Received Text) と呼ばれることもあり、また、共通して認められたという意味の公認(共認)本文と呼ばれることもあ

る。過去 20 世紀の間、聖書信者たちは自分たちの時代に存在したギリシャ語/ヘブライ語写本を集め、これらの 99%はほぼすべての面で互いに一致する。このように絶対多数を占める多数の写本がまさにこの公認本文の基礎となった。

1604 年にイギリスのジェームズ王(ジェームズ 1 世)はハンプトンコート会議でジュネーブ聖書、ビショップ聖書など既存の聖書の問題を解決し、一般の人々の手に共通の聖書を聞かせなければならないという多くの人々の請願を受け入れ、新しい聖書を翻訳して出版することを許可し、その結果、1611 年 5 月 2 日に生まれたのが、まさに王の権威を与えられたキングジェームズ聖書である。

ジェームズ王は、英国教会から 50 人余りの当代最高のギリシャ語/ヘブライ語学者を選定し、翻訳委員会を構成した。彼らは、使徒の時代からその当時まで、聖書を信じるすべての聖徒がほぼすべての場所で共通して受け入れて使用してきたギリシャ語/ヘブライ語の写本と、そこからすでに翻訳された複数の訳本を熱心に比較・検討し、新しい聖書を翻訳した。

ルターの宗教改革は、とりわけ彼が公認本文を根拠に翻訳したドイツ語聖書に支えられ、ドイツだけでなく、ヨーロッパのほぼすべての国に強大な影響を与え、ローマ教皇のカトリック教会を壊滅させた。1534 年、イギリスではヘンリー8 世が首長令によってカソリックを追い出し、英国国教会を国の宗教として設立したため、カソリックは力を失うことになった。

また、1588 年には当時世界を支配していたカトリック国家スペインの無敵艦隊がイギリス海軍に大敗し、エリザベス女王以降、イギリスは全世界に勢力を拡大し、「太陽が沈まない国」として世界を支配するようになりました。

普通の人々の手に聖書が与えられると、カトリックの無知と迷信と盲信がすべて明らかになるので、教皇とその信奉者たちは中世の暗黒時代に聖書を禁書にし、普通の人々が見ることができないようにした。しかし、神さまはエラスムス、ティンデール、ルターのような神さまの人たちを用いて、普通の人々の手に聖書という、何とも比較できない強力な霊的武器を持たせてくださった。

特に聖書は 1450 年頃に発明されたグーテンベルクの印刷機を通じて、手に負えない速さで全ヨーロッパに普及しました。このように一般の人々の手に聖書を届けるための神の摂理と、これに順応して命を懸けて仕事を遂行した信心深い聖徒たちの努力の金字塔であり決定体が、1611 年に全世界の人々の共通語である英語に翻訳されて出版されたキングゼイムス聖書である。

宗教改革に続き、ルターのドイツ語聖書、ディオダッティのイタリア語聖書、オリベタンのフランス語聖書、レイナ/バレラのスペイン語聖書、そして英語のキングジェームズ聖書などがヨーロッパの大部分の国の普通の人々の手に入るようになり、カトリック内に蔓延した迷信の正体が明らかになると、ローマ・カトリック教会はほとんど回復できないほどの致命的な打撃を受けることになった。

これに対し、カトリック教会は失われた勢力を回復するために 1540 年にロヨラ(I. Loyola)を中心とするイエズス会(Jesuit)を形成し、反宗教改革運動を始めたが、過去 500 年間、イエズス会はヨーロッパで'イエスのいないイエズス会'と呼ばれるほど悪事を多く行い、世俗的な歴史家からも指弾された。

ティンデール聖書(1525)

ティンデール(William Tyndale, 1494-1536)はローマ・カトリック教会によって名誉を毀損された。

エリザベス 1 世トーマス・モーア卿は彼を「忌まわしい異端者」と非難し、20 世紀のカトリックの歴史家であるグラハムは、ティンデールが愚かに反乱を起こした聖職者だと評価しました。このような誹謗中傷にもかかわらず、神はティンデールを用いて、印刷機で発行された最初の英語聖書を私たちに提供されました。ティンデールはまた、その後に出てくる英語訳本のための事前準備をした。

ティンデールの「罪」は、一般の人々の言葉で神の言葉を出版したことだった。ティンデールは異端者として非難され、火刑を宣告された。火刑台に縛られて自分の燃えるような死を待つ間、ティンデールは永遠の世界に導かれる前に最後の祈りを捧げたが、ティンデールのその祈りは「主よ、英国王の目を開いてください！」と懇願したものであった。再び英語聖書は、この聖人の血の代償によって世界に存在するようになった。

ティンデールは伝統的なテキスト(多数のテキストまたは公認テキスト)を使用し、キングジェームズ聖書の基礎を築きました。ティンデールが旧約聖書のいくつかの本を翻訳したにもかかわらず、彼の強みは新約聖書にあり、彼の新約聖書訳本は 1525 年に初めて出版された。

カバーデールはすぐにティンデールの弟子となり、英語で聖書を翻訳する作業を行った。カバーデールの聖書に見られるように、彼の旧約聖書の初版は、彼が知らなかったヘブライ語から翻訳したものではなく、ドイツ語とラテン語から翻訳したものである。カバーデールの新約聖書はティーンデール新約聖書の改訂版だった。カバーデールが 1535 年 10 月に自分の聖書を出版したとき、その聖書は英語で出版された最初の聖書となった。

第 18 章 - 1605 年ジェームズ 1 世治世における火薬陰謀事件の発覚*

1641 年の野蛮な虐殺についての記述

ローマ教皇庁がアイルランドに設立されてからヘンリー8 世の治世になるまで、アイルランドは教皇庁の暗黒に覆われていた。福音の光は、それまでこの島では知られていなかった光を与えた。住民の絶望的な無知と、彼らが抱いていた不合理で迷信的な観念は、多くの人々にとって十分に明らかだった。司祭たちの手際の悪さは際立っており、それまで熱心な教皇派であった何人かの高名な人々は、喜んで教皇の軛を解き、プロテスタントの宗教を受け入れようとした。しかし、民衆の生来の獰猛さと、馬鹿げた教義への強い執着が、この試みを危険なものにしていた。しかし、最も恐ろしく悲惨な結果を伴いながらも、ついにこの試みは実行された。

アイルランドにプロテスタントが導入されたのは、1535 年 3 月 19 日にダブリンの大司教に任命されたイギリス人ジョージ・ブラウンの功績が大きい。彼は以前はアウグスティヌスの修道士であったが、その功績が認められて大司教に昇格した。

ヘンリー8 世がイングランドの宗教施設を弾圧していた頃、5 年ほどその威厳を保っていたが、ダブリンの 2 つの大聖堂や教区内の他の教会からすべての聖遺物や像を撤去させ、その代わりに主の祈り、信条、十戒を設置させた。

そのしばらく後、彼はトーマス・クロムウェル枢機卿から書簡を受け取り、ヘンリー8 世がイングランドにおけるローマ教皇の覇権を放棄し、アイルランドでも同様のことを行うことを決定したという知らせを受けた。そこで、ヘンリー8 世は彼（ブラウン大司教）を、この命令を確実に実行に移すための委員の一人に任命した。大司教は、アイルランドの貴族や属領にヘンリーを精神的・時間的な最高位として認めさせるため、命がけで最大限の努力を払ってきたと答えた。しかし、特にアーマーの大司教ジョージからは激しい

反対を受け、この大司教は聖職者たちに向けた演説の中で、王家の覇権を受け入れるべきすべての人々を呪うような言葉を浴びせた。アーマー大司教は、記紀ではインスラ・サクラ（聖なる島）と呼ばれるこの島はローマ司教のものであり、王の先祖はローマ教皇からこの島を譲り受けたと付け加えた。また、アーマーの大司教と聖職者がそれぞれローマに使者を派遣していることも確認した。また、アイルランドで議会を招集し、覇権に関する法律を可決する必要があること、国民は立法議会の承認なくして国王の委嘱に同意しないことを述べた。

彼は最後に、ローマ教皇は民衆を最も深い無知に陥れていること、聖職者たちは非常に文盲であること、庶民は盲目であるがゆえに、福音の始まりに聖人や殉教者たちが真理を擁護したときよりも熱心であることを述べた。島の北部で大きな権力を持つ酋長シャン・オニールは、王の委託に断固反対していた。

この助言に従い、翌年、当時大領事であったレナード・グレイの命により、ダブリンで議会が招集された。この議会でブラウン大司教は演説を行い、ローマの司教たちは古来、皇帝、王、王侯をそれぞれの領地における最高位と認めていたことを表明した。それゆえ、ヘンリー8 世を、教会的、時間的なすべての問題において最高位であるとする。彼は最後に、この行為に投票することを拒否する者は、王の真の臣民ではないと述べた。この演説は他の司教や領主たちを大いに驚かせたが、激しい議論の末、ついに国王の優越が認められた。

この２年後、大司教はクロムウェル卿に宛てて２通目の書簡を書き、聖職者の不満を述べるとともに、福音の擁護者に対する教皇の策略をほのめかした。この手紙は 1538 年 4 月にダブリンから出されたものである。この国の聖職者の多くがそうであるように、一羽の鳥にも分別のある話し方を教えることができるだろう。彼らは学者ではないが、貧しい庶民を欺き、王命に従うことを思いとどまらせるために狡猾である。この国の庶民は貴殿を非常に嫌っており、アイルランド語で貴殿を「鍛冶屋の息子」と軽蔑して呼んでいる

。私は友人として、閣下の気高いお人柄をよく見ていただきたい。ローマはノーフォーク公爵に寛大であり、この国にも大きな好意を示している。

この後しばらくして、教皇はアイルランドに（アーマーの大司教とその聖職者たちに向けて）、アイルランド国内で国王の覇権を持つ者、あるいは持つべき者すべてに対する破門状を発送した。そして、40 日以内に告解者たちに、そのようなことをしたのは罪を犯したからであると認めない者は、すべて呪いをもって糾弾された。

ブラウン大司教は、1538 年 5 月ダブリン付けの書簡でこのことを伝えた。このアイルランドの教皇派信者に伝えられた告白（誓い）の書式の一部は以下の通りである：「私はさらに、彼または彼女、父または母、兄弟または姉妹、息子または娘、夫または妻、叔父または叔母、甥または姪、近親者または近親者、主人または愛人、その他すべての者、親しい者または親密な者、友人または知人を、呪われた者とする。今後、母なる教会の権威よりも上位にある教会権力や市民権力を保持する者、あるいは、今後、母なる教会の敵対者、敵対者、あるいは、私がここに誓ったことに反する者に従う者、あるいは、従わなければならない者はだれであれ、神、聖母、聖ペテロ、聖パウロ、聖福音書記者たちが私を助けてくださいますように」。これは、ラテラノ公会議とコンスタンス公会議によって公布された教義と正確に一致している。この公会議は、異端者に好意を示すべきではなく、彼らと信仰を維持すべきではないと明確に宣言している。異端者は破門され、断罪され、その財産は没収されるべきであり、諸侯は厳粛な誓約によって、彼らをそれぞれの領地から根絶やしにする義務がある。

あらゆる権威を踏みにじるような教会は、なんと忌まわしいものだろう！そのような教会の命令を無視する人々は、なんと強迫観念にとらわれていることだろう！

1538 年 5 月付の大司教の最後の書簡では、「殿下のこの国の総督は、古くからの原住民にはほとんど何の力もない。今、イングランド人もアイルランド人も閣下の命令に反対し始め、民族間の争いを捨てようとしている。

それから間もなく、ブラウン大司教はフランシスコ会修道士のタディ・オブライアンという人物を押収した。彼は 1538 年 5 月の日付でローマから送られてきたオニール宛の紙を所持していた。この手紙には次のような言葉が書かれていた：「ローマ教皇聖パウロと教父会議は、最近ローマで、アイルランドのカシェル司教である聖ラセリアヌスの予言を発見した。それゆえ、母なる教会の栄光、聖ペテロの栄誉、そしてあなた方自身の安全のために、異端と聖ペテロの敵を弾圧せよ。

このサディ・オブライアンは、さらに調べられた後、ピロリと撃たれ、王の命令が届くまで投獄された。しかし、イングランドから届いた命令は、彼の絞首刑だった。彼はダブリンの城で自ら手を下した。その後、彼の遺体はギャローズ・グリーンに運ばれ、そこでしばらく吊るされた後、埋葬された。

エドワード 6 世がイングランド王位に就いた後、アイルランドの公使アンソニー・レジェ卿に命じられて、英語による典礼が直ちにアイルランドに設置され、いくつかの司教区、大聖堂、教区教会で遵守されるようになった。この典礼は、1551 年の復活祭の日にダブリンのクライスト・チャーチで、アンソニー卿やブラウン大司教らの前で初めて朗読された。このための勅命の一部は次のようなものであった：「慈悲深き父王ヘンリー8 世は、ローマ司教の管轄下にある、真の忠実な臣民の束縛と重いくびきを考慮した。また、その免罪符と赦免によって、利得のために諸国の罪を免除し、強盗、反乱、窃盗、淫行、冒涜、偶像崇拝など、あらゆる悪徳を意図的に助長した。それゆえ、慈愛に満ちた父は、すべての司祭館、修道院、修道院、その他の見せかけの修道院を解散させた。

共通祈祷文がダブリンのクライストチャーチで初めて使用された翌日、教皇派から次のような邪悪な計画が持ち上がった：教会には、手に葦を持ち、頭には茨の冠をかぶった大理石のキリスト像が立っていた。大領事、ダブリンの大司教、民政評議会、領主市長、そして大勢の信徒の前で、英語の礼拝（コモン・プレイヤー）が読まれていると、茨の冠の隙間から血が流れ、像の顔を伝うのが見えた。これに対して、偽計を企てた者たちが大

声で叫んだ。「救い主の像が血の汗を流しているのをご覧ください！しかし、教会に異端が入ってきた以上、こうならざるを得ない。すぐに多くの下層民が、いや、あらゆる階層の下層民が、神の不興を買う奇跡的で否定できない証拠を目の当たりにして恐怖におののいた。プロテスタンティズムの教義は地獄の源から発せられたものであり、救いは自分たちの無謬の教会の懐にしかないと確信して、彼らは教会から急いで逃げ出した。

この事件は、賢明な読者にはどんなに滑稽に見えるかもしれないが、無知なアイルランド人の心に大きな影響を与えた。この事件は、アイルランドにおける改革派の宗教の進歩を非常に重要な形で阻止するまでに、この事件を捏造した不謹慎な詐欺師たちの目的を達成した。多くの人々が、ローマ教会には多くの誤りと堕落があるという確信に抵抗することはできなかったが、偏屈で欲望にまみれた司祭団によって計り知れないほど拡大された、この神の怒りの見せかけの顕現によって、彼らは畏怖して沈黙した。

エドワード 6 世の治世の残りとメアリーの治世の大部分におけるアイルランドの宗教状態については、ほとんど詳しいことはわからない。あの容赦ない偏屈者の野蛮な治世が終わる頃、彼女はその非人道的な迫害をこの島にまで拡大しようとした。しかし、彼女の極悪非道な意図は、次のような摂理にかなった方法で幸いにも挫折した。

メアリーは、彼女の野蛮な意図を実行に移すために、（血に飢えたボナーの代理人である）ポール博士を委員の一人に任命していた。ポール博士は依頼を受けてチェスターに到着し、教皇派のチェスター市長がポール博士を出迎えた。博士が外套袋から革製のケースを取り出すと、彼に言った。この家の善良な女性はプロテスタントで、ダブリンにジョン・エドマンズという名の兄弟がいたため、この話を聞いて大いに悩んだ。しかし、市長が退席し、医師が丁重に階下に付き添っている間、彼女は機会をうかがっていた。彼女は箱を開け、手数料を取り出し、その代わり

に一枚の紙とトランプのパックを置いた。医師はトリックを疑うことなく箱を運び、1558 年 9 月にダブリンに到着した。

敬虔な」女主人の意図を達成したいと思った彼は、すぐに当時総督だったフィッツ＝ウォルター卿を訪ねた。

箱を開けると、中にはトランプの箱以外何も入っていなかった。その場にいた全員が驚いたので、閣下は言った。その間にトランプをシャッフルしよう」。

しかし、好ましい風が吹くのを待っていたところ、メアリー女王が亡くなったという知らせが届いた。これにより、プロテスタントは最も残酷な迫害を免れたのである。エリザベス女王は、このようにしてプロテスタントの臣民の命を救ったとして、上記のエリザベス・エドマンズに年額 40 ポンドの年金を支払った。

エリザベス 1 世とジェームズ 1 世の治世の間、アイルランドはほとんど常に反乱と反乱に煽られていた。この反乱は、イングランド人とアイルランド人の宗教的見解の相違に端を発しているわけではなかったが、そのことが原因で悪化し、より辛辣で和解不可能なものとなった。教皇派の司祭たちは、イギリス政府の欠点を巧みに誇張し、無知で偏見に満ちた聴衆に、プロテスタントを殺すことの合法性を訴え続けた。彼らは、この敬虔な事業の遂行中に殺害されたカトリック教徒はすべて、直ちに永遠の幸福に包まれると断言した。アイルランド人の生まれつきの節操のない性質は、このような謀略を企てる者たちに影響され、野蛮で不当な暴力行為に絶えず駆り立てられた。また、イングランド人総督が行使した権威の不安定で恣意的な性質は、アイルランド人の愛情を得るためのものではなかった。スペイン人もまた、南部に軍隊を上陸させ、不満を持つ原住民に自分たちの旗に加わるようあらゆる奨励を与えたため、島は絶えず乱気流と戦乱の状態にあった。1601 年、彼らは 4,000 人の兵をキンセールに上陸させ、"アイルランドにおける信仰を守るための聖戦

"を開始した。彼らは大勢のアイルランド人に助けられたが、ついに副官のマウントジョイ卿とその将校たちによって完敗した。

これでエリザベス治世のアイルランドに関する取引は終了し、見かけ上は平穏な日々が続いた。しかし、常に落ち着きを失い、策謀をめぐらす教皇派は、もはや表立って攻撃することもできない政府と信仰を、秘密の策略によって弱体化させようとした。ジェイムズ王の平和な治世は、彼らが勢力を拡大し、策略を熟成させる機会を与え、彼の後継者であるチャールズ 1 世のもとで、ローマ人の大司教、司教、教区長、総督、修道院長、司祭、修道士がその数を大幅に増やした。そのため、1629 年に教皇派の儀式や儀礼を公に行うことが禁止された。

しかし、こうした措置にもかかわらず、その後すぐに、ローマ教皇派の聖職者たちはダブリン市内に新しい教皇派大学を建てた。彼らはまた、王国の各地に修道院や尼僧院を建設し、そのような場所で、これらまさにローマ人の聖職者たちとアイルランド人の首長たちが頻繁に会議を開いた。そして、そこからフランス、スペイン、フランドル、ロレーヌ、ローマへと行き来し、1641 年のオニール家とその従者たちによる憎むべき陰謀を企てた。

これから述べる恐ろしい陰謀が勃発する少し前、アイルランドの教皇派は、自分たちの宗教の自由な行使と、それに反するすべての法律の廃止を要求する諫言を同国の司法卿に提出していた。これに対してイングランドの両議会は、同国の教皇派宗教にいかなる寛容も認めないと厳粛に答えた。

このことが教皇派をさらに苛立たせ、プロテスタントを壊滅させるために結ばれた極悪非道な計画を実行に移そうとした。そしてそれは、悪意と怨念に満ちた計画者たちが望んだ通り、実行に移されることはなかった。

この恐ろしい陰謀の目的は、王国全土で同時に反乱が起こることだった。プロテスタントは例外なく皆殺しにされるはずだった。この恐ろしい大虐殺のために決められた日は、1641 年 10 月 23 日、イエズス会の創立者イグナチオ・ロヨラの祝日だった。イエズス会の創始者であるイグナチオ・ロヨラの祝日であった。

この憎むべき計画をより確実に成功させるために、教皇派は最も巧妙な策略を弄した。そしてこの時、プロテスタントへの訪問における彼らの振る舞いは、それまで彼らが示していた以上に親切に見えた。これは、当時彼らに対して企んでいた非人間的で裏切り的な計画をより完全に実行するためであった。

この野蛮な陰謀の実行は冬が近づくまで延期され、イングランドから軍隊を派遣することはより困難なものとなった。フランス公使リシュリュー枢機卿は、謀議者たちにかなりの兵員と資金の供給を約束していた。また、多くのアイルランド人将校は、暴動が起こり次第、カトリックの同胞に心から賛同すると強く確約していた。

この恐ろしい計画を実行に移すと約束されたその前日がやってきた。幸運なことに、王国の首都にとってこの陰謀はアイルランド人のオーウェン・オコネリーによって発見された。この最も重要な功績に対して、英国議会は彼に 500 ポンドと、生涯 200 ポンドの年金を与えた。

ダブリンの街と城が奇襲を受けるまで、ほんの数時間しかなかった。司法卿たちには、自分たち自身とダブリン市を防衛するのに十分な時間があった。ムガイア卿は、共犯者たちとともに、ダブリン市内で同日夜に捕らえられた。彼らの宿泊所には、剣、手斧、棒斧、ハンマー、その他、王国のその地域のプロテスタントを破壊し、完全に消滅させるために用意された殺しの道具があった。

こうして大都市は幸いにも守られたが、意図された悲劇の血なまぐさい部分はもう防げなかった。謀略者たちは約束の日の早朝、王国全土で武装し、邪魔になったプロテスタント信者は即座に殺害された。年齢、性別、容態を問わず、殺されることはなかった。殺された夫のために泣き、無力な子供たちを抱きしめていた妻も、子供たちと一緒に刺し貫かれ、同じ一撃で死んだ。老いも若きも、元気な者も病弱な者も同じ運命をたどり、ひとつの共通の破滅の中に溶け込んだ。

最初の攻撃から逃れることはできなかった。いたるところで破壊が繰り広げられ、追い詰められた犠牲者たちはあらゆる場面で立ちはだかった。家族に、仲間に、友人に頼っても無駄だった。すべてのつながりは解消された。そして死は、保護が懇願され期待されていたその手によってもたらされた。挑発することもなく、反対することもなく、深い平和のうちに暮らし、完全に安全だと思っていた驚愕のイギリス人は、長い間、親切と善意の交流を続けてきた最も近い隣人によって虐殺された。いや、人間の姿をした怪物たちによって与えられた罰は、死さえもわずかなものだった。残忍な残忍さが考えつくあらゆる拷問、身体に残るあらゆる痛み、心の苦悩、絶望の苦しみは、傷つけられることなく興奮した復讐を満足させることはできず、いかなる正当な理由からも導き出されない残酷なものだった。

堕落した本性も、倒錯した宗教でさえも、最大限の許可によって奨励されたとはいえ、この無慈悲な野蛮人に見られるような獰猛さの極みに達することはできない。生まれつき自分の苦しみには優しく、他人の苦しみには思いやりのある弱い性でさえ、あらゆる残酷な行為において、屈強な仲間を模倣してきた。

子供たちは、手本を見せながら教えられ、両親の励ましによって励まされ、イギリス人の無防備な子供たちの死骸に弱々しい打撃を与えた。

アイルランド人の貪欲さは、彼らの残虐さをいささかも抑制するのに十分ではなかった。彼らの熱狂はすさまじく、彼らが奪い、反感を買って自分たちのものにした家畜は、イギリス人の名を冠していたために、無惨にも屠殺され、傷だらけになると森に放たれ、そこでじわじわと長引く苦しみの末に死んでいった。

耕作者の瀟洒な住居は灰燼に帰し、あるいは地面と水平になった。惨めな所有者たちが家に閉じこもり、防御の準備をしていたところでは、妻子とともに炎の中で死んだ。

以上が、この比類なき大虐殺の大まかな説明である。

偏屈で無慈悲な教皇派は、その手を血で染め始めるやいなや、恐ろしい悲劇を連日繰り返した。そして、王国のあらゆる場所にいたプロテスタントは、前代未聞の残酷な死によって、彼らの怒りの犠牲となった。

無知なアイルランド人は、イエズス会士、司祭、修道士たちによって、地獄のような仕事を実行するようさらに強く唆された。彼らは、陰謀の実行日が合意されると、祈りの中で、この偉大な計画への勤勉さを勧めた。彼らは、それが王国の繁栄とカトリックの大義の前進に大いに役立つと述べた。彼らは至る所で庶民に対し、プロテスタントは異端であり、これ以上庶民の間に住まわせてはならない。また、英国人を殺すことは犬を殺すことよりも罪が重いとし、彼らを扶助したり保護したりすることは、最も許されざる性質の罪であると述べた。

教皇派はロングフォードの町と城を包囲し、プロテスタントであったロングフォードの住民は、逃げる機会を与えられることを条件に降伏した。教皇派は町民が現れるやいなや、無慈悲な方法で攻撃した。彼らの司祭は、他の者が倒れる合図として、まず英国人プロテスタント牧師の腹を裂いた。その後、彼の従者たちは残りの者全員を殺害し、そのうちの何人かは首を吊り、他の者は刺されたり撃たれたりし、大勢の者はそのために用意された斧で頭を殴られた。

スライゴーの守備隊は、オコナー・スライガーによって同じように扱われた。彼はプロテスタントが彼らの砦を去ると、逃亡の機会を与え、カルー山脈を越えてロスコモンまで安全に運ぶことを約束した。しかし、彼はまず、彼らを最も悲惨な牢獄に幽閉し、食料は穀物しか与えなかった。その後、何人かの教皇派が杯を交わして歓談していた時、彼らは邪悪な彼らを祝福しに来た。彼らは邪悪な兄弟たちがこの不幸な生き物に勝利したことを祝福しに来た。生き残ったプロテスタントたちは、白人の修道士たちによって牢獄から連れ出され、殺されるか、橋の上から急流に沈められ、そこですぐに滅ぼされた。さらに、この邪悪な白修道士の一団は、その後しばらくして、聖水を手に厳粛な行列をなして川

に水を撒きに行き、異端者たちの血と死体の汚れから川を清め、清めると見せかけ、まさにこの時に非人道的に虐殺された不幸なプロテスタントたちをこう呼んだ。

キルモアでは、同地の司教であったベデル博士が、教皇派による極悪非道な残虐行為から逃れるために居住地から逃れてきた多くの困窮したプロテスタントを慈善的に定住させ、支援していた。しかし、彼らが共に暮らすという慰めを享受したのもつかの間、善良な大司教は司教館から強制的に引きずり出され、すぐにキルモアの教皇派司教であるスウィニー博士に占領された。彼は翌日の日曜日に教会でミサを執り行い、迫害されていた司教の所有物や財産をすべて押収した。その直後、教皇派はベデル博士と 2 人の息子、そして残りの家族を、博士が保護していたプロテスタントの重臣たちとともに、ロッホウォーターと呼ばれる荒れ果てた城に押し込めた。そこは海に近い湖の中にあった。ここで彼は仲間たちとともに数週間滞在し、全員が死刑に処せられることを毎日予期していた。彼らの大部分は裸にされ、季節は寒く（12 月だった）、閉じ込められていた建物は上部が開いていたため、最も厳しい苦難を味わった。1 月 7 日に全員が解放されるまで、彼らはこの状況にあった。ビショップは、イングランド国教会に改宗させた聖職者の一人

、デニス・オシェリダンの家に丁重に迎えられたが、この親切に長く耐えることはできなかった。

ここに住んでいる間、彼は宗教的な修行に明け暮れ、自分自身と悲しみに暮れる仲間たちの目の前には常に確かな死しかなかったため、その大きな変化に備え、より良い準備をしていた。彼は 71 歳で、湖畔の寒く荒涼とした住まいで激しい熱病にかかり、最も危険な性質の熱病に苦しんでいた。自分の死が間近に迫っていることを予見していた彼は、まるで栄光の栄冠へと急ぐ原始的な殉教者のように、喜びをもって死を迎えた。自分の小さな群れに語りかけ、自分たちの最後の日が近づいているとして、最も哀れな方法で忍耐を勧め、自分の人々、自分の家族、自分の子供たちを厳粛に祝福した後、1642 年 2 月 7 日、自分の宣教と生涯を共に終えた。

彼の友人や関係者は、侵入してきた司教に彼を埋葬する許可を求めたが、これを得るのは困難だった。司教は最初、教会の墓地は神聖な場所であり、異教徒によって汚されてはならないと告げたが、最終的に許可され、（アイルランドの教皇派を恐れて）教会の葬儀は厳粛に執り行われなかったものの、生前の彼を最も敬愛していた善良な人々の何人かが、彼の遺骸を墓に埋葬した。この埋葬の際、彼らは銃声を放ち、Requiescat in pace ultimus Anglorum、つまり "イギリス人の最後が安らかに眠りますように "と叫んだ。

さらに、彼は最高の司教の一人であり、イギリス人司教の中で最後の司教になるはずだと付け加えた。彼の学識は非常に広範であった。もし彼が書いたものをすべて印刷したなら、彼はそれを世にもっと証明しただろう。彼の著作はほとんど保存されていない。教皇派は彼の論文と蔵書のほとんどを破壊した。彼は膨大な数の聖典の批判的な解説書を集めていたが、それらはすべて、彼の手稿が詰まった大きなトランクに収められていた。それはアイルランド人の手に落ちた。幸いなことに、彼の偉大なヘブライ語写本は保存され、現在オックスフォードのエマニュエル・カレッジの図書館にある。

テローリー男爵領では、教皇派が修道士に扇動され、40 人以上の英国人プロテスタント（その中には女性や子供もいた）を、剣で倒れるか、海で溺死させるかという過酷な運命に追い込んだ。後者を選んだプロテスタントたちは、迫害の手が伸びる武器で深海に落とされ、子供たちを抱きかかえたまま、まず顎まで水につかり、その後沈んで一緒に死んだ。

リスゴールの城では、百五十人以上の男、女、子供がみな一緒に焼かれた。モネア城では百人以上が皆殺しにされた。トゥラーの城でも多数の者が殺害された。この城は、公平な四分の一を得ることを条件にムギールに引き渡されたが、あの卑劣な悪党がこの城を手に入れるやいなや、従者たちに命じて民衆を殺害させた。

そのほかにも、人間ではなく悪魔が考え出したとしか思えないような、おぞましい死に方をさせられた者が大勢いた。中には、背中の中心を馬車の軸木の上に寝かされ、片方

の脚を地面につけ、もう片方の腕と頭を地面につけられた者もいた。この姿勢のまま、野蛮人の一人が惨めな対象者の大腿部や脚部などを鞭で叩き、もう一人が猛犬を仕掛けて腕や上半身を切り裂いた。このような恐ろしい方法で、彼らは生存を奪われた。多くの犠牲者は馬の尾に固定され、馬は騎手によって疾走させられ、哀れな犠牲者は息絶えるまで引きずられた。また、高い桟橋に吊るされ、その下で火が焚かれ、首吊りや窒息によって命を終えた者もいた。

情け容赦のない猛烈な迫害者たちによって投影されうる、ほんのわずかな残酷さからも、より優しい性は逃れられなかった。年齢を問わず、多くの女性が最も残酷な死に追いやられた。特に何人かは、背中を強い柱に固定され、腰まで裸にされ、非人間的な怪物たちは右の乳房を鋏で切り落とした。この姿勢のまま、失血死するまで放置された。

この野蛮人の凶暴さはすさまじく、胎児でさえも子宮から引きずり出され、彼らの怒りの犠牲となった。多くの不幸な母親は裸で木の枝に吊るされ、その体は割腹された。罪のない子供たちは引き離され、犬や豚の餌にされた。そして、その恐ろしい光景をさらに際立たせるために、彼らは夫に、自分が苦しむ前に見物人になることを義務づけた。

イッセンスキースの町では、スコットランドのプロテスタント 100 人以上を絞首刑にし、イングランド人にした以上の慈悲は見せなかった。ムガイアはその町の城に行き、総督と話をすることを望み、許可されると、すぐにそこに保管されていた郡の記録を燃やした。そして、1000 ポンドを知事に要求し、それを受け取ると、すぐにミサを聞くように強要し、これからもミサを続けると誓わせた。そして、恐ろしい蛮行を完成させるために、彼は知事の妻と子供たちを彼の目の前で絞首刑にするよう命じ、さらに少なくとも 100 人の住民を虐殺した。千人以上の男、女、子供が、それぞれ別の隊に分かれ、途中で壊れたポータダウン橋まで追いやられ、そこで水中に身を投げることを強要された。岸にたどり着こうとした者は頭を殴られた。

この国の同じ地域で、少なくとも４千人がさまざまな場所で溺死した。非人道的な教皇主義者たちは、まず身ぐるみを剥いだ後、獣のように彼らを決められた場所まで追い立てた。そして、疲労や生まれつきの病気で歩みが遅い者がいれば、剣や矛で刺した。また、群衆を恐怖に陥れるために、道すがら何人かを殺害した。水に投げ込まれた哀れな者たちの多くは、岸まで泳いで助かろうとしたが、情け容赦ない迫害者たちは、彼らを水中で撃ち殺すことによって、その努力を阻止した。

ある場所では、140 人のイギリス人が、厳しい天候の中、全裸で何マイルも走らされた後、同じ場所で全員殺された。ある者は首を吊られ、ある者は焼かれ、ある者は撃たれ、多くの者は生き埋めにされた。そして、彼らを苦しめた者たちは非常に残酷で、彼らの惨めな生を奪う前に、彼らが祈ることを許さなかった。

他の一団は、安全な道案内をすると偽って連れて行き、その配慮から快活に旅を進めた。しかし、裏切り者の教皇派は、彼らを便利な場所に連れて行くと、最も残酷な方法で全員を虐殺した。

フェリム・オニール卿の命令で、115 人の男、女、子供がポータダウン橋まで連れて行かれ、そこで全員川に押し込められ、溺死させられた。キャンベルという名の 1 人の女性は、逃げ切れる見込みがないと判断し、突然、教皇派の首領の 1 人を腕に抱きかかえ、彼を強く抱きしめたため、2 人とも一緒に溺れ死んだ。

キリーマンでは 48 家族が虐殺され、そのうち 22 家族が一つの家で一緒に焼かれた。残りは絞首刑、銃殺、または溺死させられた。キルモアでは、約 200 世帯からなる住民が虐殺された。全員が彼らの怒りの犠牲になった。中には、金の隠し場所を白状するまで牢獄に入れられた者もいた。郡全体が屠殺の共同現場となり、剣、飢饉、火、水、その他、怒りと悪意が発明しうる最も残酷な死によって、短期間のうちに何千人もが死んだ。

この血なまぐさい悪党どもは、ある者には好意を示し、すぐに彼らを追放した。しかし、彼らは決して祈ることを許さなかった。他の者たちは不潔な地下牢に投獄され、脚に重い閂をかけられ、餓死するまで監禁された。

カゼルでは、プロテスタントを全員、憎むべき地下牢に入れ、そこで数週間、最大の惨めさの中に閉じ込めた。やがて彼らは解放されたが、そのうちの何人かは野蛮に切り刻まれ、自由に滅びるように街道に放置された。他の者は絞首刑にされ、何人かは頭を地上に出して地面に直立して埋められた。アントリム郡では、彼らは一朝に 954 人のプロテスタントを殺害した。その後、同郡でさらに約 1200 人が殺害された。

リスネガリーという町では、24 人のプロテスタントを無理やり家に押し込め、火をつけて一緒に燃やし、その叫び声を真似して他のプロテスタントを嘲笑した。

他の残酷な行為のなかでも、彼らはイギリス人女性の 2 人の子供を連れ去り、彼女の目の前でその脳を打ち抜いた。その後、母親を川に投げ込み、溺死させた。彼らは他にも多くの子供たちに同じような仕打ちをし、両親を大いに苦しめ、人間性を辱めた。

キルケニーでは、プロテスタントは例外なく全員死刑となった。そのうちの何人かは、おそらくかつてなかったほど残酷な方法で処刑された。

彼らはイギリス人女性を残忍な蛮行で殴打し、骨はほとんど残らなかった。しかし、これだけでは飽き足らず、彼女の子供（6 歳くらいの女の子）を連れ去り、腹を裂いた後、母親のもとに投げ捨てた。彼らは一人の男をミサに行くように強要し、その後、彼の体を切り裂き、そのようにして彼を置き去りにした。もう一人の男の胴を切り裂き、その妻の喉を切り裂き、幼子の脳みそを取り出した後、豚に投げつけ、豚は貪欲にそれを食べた。

これらの残虐な行為の後、彼らは 7 人のプロテスタントの首を刎ね、そのうちの 1 人の敬虔な牧師の首を刎ねた。彼らは牧師の口に猿ぐつわをはめ、頬を耳まで切り裂き、そ

の前に聖書の葉を置き、彼の口は十分に広かったので、彼に説教するよう命じた。彼らは嘲笑のために他にもいくつかのことを行い、こうして不運なプロテスタントを殺害し、さらし者にしたことに最大の満足感を示した。

この怪物たちが残虐な行為を行い、彼らの手に落ちた人々の不幸を増大させることに、どれほどの喜びを感じていたかは想像に難くない。屠殺するときには、「お前の魂は悪魔に捧げられた」と言うのだ。このような悪党の一人が、両手を血に染めながら家に入ってきて、それはイギリス人の血であり、自分の剣はプロテスタントの白い皮を柄まで刺したと自慢した。彼らの誰かがプロテスタントを殺すと、他の者たちがやってきて、その死体を切り刻んだり、ぐちゃぐちゃにしたりすることで満足感を得ていた。その後、彼らは犬に食い荒らされるのを放置した。そして、何人ものプロテスタントを殺すと、これだけの数の魂を地獄に送ったのだから、悪魔は自分たちのおかげだと自慢した。しかし、神と神の最も聖なる御言葉に対する冒涜を犯すことをためらわなかった彼らが、罪のないキリスト教徒をこのように扱うのは当然である。

ある場所では、プロテスタントの聖書 2 冊を燃やし、地獄の炎を燃やしたと言った。パワーズコートの教会では、説教壇、教壇、箪笥、聖書を燃やした。彼らは他の聖書も手に取り、汚れた水で濡らした後、プロテスタント信者の顔にぶつけた。明日来れば、これと同じくらい良い説教が聞けるだろう」。

プロテスタントの何人かは、頭髪を掴んで教会に引きずり込まれ、そこで最も残酷な方法で身ぐるみを剥がされ、鞭打たれ、同時に、明日も来たら同じような説教を聞くようにと言われた。

ミュンスターでは、何人かの牧師を非常に衝撃的な方法で死刑にした。特に一人は、全裸にされ、剣や矢で刺されて倒れ、息絶えた。

あるところでは、プロテスタントの目をくり抜き、手を切り落とし、野原に追いやり、惨めな生活をさまよわせた。多くの若者は、老いた両親を川に連れて行き、そこで溺れさせられた。妻は夫を絞首刑にする手助けをした。

あるところでは、若い男に父親を殺すように強要し、すぐに絞首刑にした。別の場所では、ある女性に夫を殺すよう強要し、息子に彼女を殺させた後、息子の頭を撃ち抜いた。

グラスローという場所で、ある教皇派の司祭が数人の共犯者とともに、40 人のプロテスタントにローマ教会との和解を強要した。彼らはこれを行うやいなや、自分たちは今、誠実であると告げた。彼らは、これらのプロテスタントが堕落して異端となるのを防ぐために、彼らをこの世から追い出し、すぐに喉を切り裂いてそれを実行した。

ティペラリー郡では、30 人以上のプロテスタント、男、女、子供が教皇派の手に落ち、裸にされた後、石、棒斧、剣、その他の武器で殺害された。メイヨー郡で約 60 人のプロテスタント（うち 15 人は牧師）が、エドマンド・バークとその兵士たちによってゴールウェイへの安全な旅を約束された。しかし、その非人間的な怪物は、途中で剣を抜き、残りの者たちに自分の計画を示唆した。ある者は刺し殺され、ある者は矛で体を貫かれ、ある者は溺死した。

クイーンズ郡では、大勢のプロテスタントが最も衝撃的な死に追いやられた。50～60 人が 1 軒の家に閉じ込められ、その家に火が放たれたため、全員が炎の中で死んだ。多くの者は裸にされ、馬の臀部に巻かれたロープで馬につながれ、沼地の中を死ぬまで引きずり回された。ある者は、柱に打ち込まれたテンターフックに足を吊るされた。その惨めな姿勢のまま、死ぬまで放置された。また、ある者は木の幹に固定され、その枝の先端に吊るされた。この枝には片腕がかけられ、主に体重を支えていた。片方の脚は上向きにされて幹に固定され、もう片方の脚はまっすぐぶら下がっていた。この恐ろしく不安な姿勢のまま、彼らは命が許す限り、血に飢えた迫害者たちの格好の見世物となっていた。

クローネスでは 17 人が生き埋めにされた。また、イギリス人とその妻、5 人の子供、召使いの女中が一緒に絞首刑にされ、その後、溝に投げ込まれた。彼らは多くの者を腕で木の枝に吊るし、足には重りをつけた。また、他の者は中腰にされ、その姿勢のまま死ぬまで放置された。何人かは風車に吊るされ、半分も死なないうちに蛮族が剣で切り刻んだ。他の者たちは、男も女も子供も、体のあちこちを切り裂き、切り刻み、血にまみれて死ぬにまかせた。

ある貧しい女性は、生後 12 ヶ月ほどの幼児と一緒に絞首台に吊るされ、後者は母親の頭髪で首を吊られ、短いながらも悲惨な生涯を終えた。

タイロン州では、1 日に 300 人以上のプロテスタントが溺死した。その他にも多くの者が絞首刑、火刑、その他の方法で処刑された。タイロンの牧師のマックスウェル博士は、この頃アーマグの近くに住んでおり、これらの無慈悲な野蛮人から大きな被害を受けた。この人物は、国王の委員たちの前で宣誓して行われた尋問で、アイルランドの教皇派は、アーマー郡から逃亡する際にグリンウッドで非人道的に虐殺した 1 万 2 千人のプロテスタントを、数回にわたって壊滅させたと彼に認めたと宣言した。

バン川は誰も渡ることができなかった。そして橋は壊され、アイルランド人は、丸腰で無防備な大勢のプロテスタントを、さまざまな時期に無理矢理そこに連れて行き、矛や剣で約 1000 人を激しく川に突き落とし、悲惨な死を遂げた。

アーマーの大聖堂も蛮族の怒りを免れず、彼らの指導者たちによって悪意を持って放火され、焼き払われた。

そして、アーマーやその近郊に住む不幸なプロテスタントの種族そのものを、可能な限り絶滅させようとした。アイルランド人はまず、彼らの家をすべて焼き払い、その後、老若男女を問わず、罪のない人々を何百人も集め、彼らをコールレインまで警護し安全な道を確保すると見せかけ、その道々で彼らを裏切り、非人道的に殺害した。

これまで述べてきたような恐ろしい蛮行が、王国のほとんどすべての地域で、哀れなプロテスタントに対して行われた。教皇派の極悪非道な魂を満足させるために生け贄に捧げられた人数を後に見積もったところ、15 万人に上った。しかし、その後に続く詳細については、後述する。

この絶望的な惨めな者たちは、顔を輝かせ、成功に酔いしれていたが、（おそらく他の追随を許さないほどの蛮行を伴う方法ではあったが）すぐに王の貯蔵品と弾薬が保管されていたニューリーの城を手に入れた。そして、ほとんど苦労することなく、ダンダークの城主となった。その後、彼らはアーディーの町を占領し、そこでプロテスタント全員を殺害した。ドロゲダの守備隊は包囲を維持できる状態ではなかったが、アイルランド人が攻撃を繰り返すたびに、国王の軍勢と、ムーア子爵の支援を受けたヘンリー・ティクボーン卿率いる少数の忠実なプロテスタント市民によって、力強く撃退された。ドロゲダの包囲は 1641 年 11 月 13 日に始まり、1642 年 3 月 4 日まで続いたが、フェリム・オニール卿と彼の庇護下にあったアイルランド人犯罪者たちは撤退を余儀なくされた。その間に、スコットランドから 1 万人の軍隊がアイルランドに残るプロテスタントのために派遣された。プロテスタントはしばらくの間、平穏に暮らした。

1689 年にダブリンで開かれた議会で、アイルランドのプロテスタント貴族、聖職者、属領の多くが大逆罪で告発されたからである。当時、アイルランド王国の統治は、プロテスタントにとって永遠の敵であり、偏狭な教皇主義者であったティルコネル伯爵に委ねられていた。彼の命令により、プロテスタントは王国各地で再び迫害された。ダブリン市の収入は差し押さえられ、ほとんどの教会が牢獄に変えられた。ロンドンデリー市とイニスキリンの町の守備隊の決心と並外れた勇敢さがなければ、苦境に立たされたプロテスタントが避難できる場所は王国全体で 1 つも残っていなかっただろう。しかし、すべてはジェームズ王と、ジェームズ王を支配する激烈な教派に明け渡されたに違いない。

1689 年 4 月 18 日、アイルランド軍の花形である 2 万人の教皇派によって、ロンドンデリーの驚くべき包囲戦が開始された。この都市は包囲を維持できるような状態にはなく、守備側は避難のために逃れてきた訓練を受けていないプロテスタントの未熟な集団と、マウントジョイ卿の規律正しい兵士の半連隊、それに住民の大部分からなり、総勢 7,361 人の戦闘要員しかいなかった。

当初、包囲された人々は、とうもろこしやその他の必需品の備蓄で足りるだろうと期待していた。しかし、包囲が続けば続くほど、必要なものは増えていった。ついに、これらの不足は、包囲される前のかなりの期間、1 パイントの粗い大麦、少量の青菜、スプーン 2、3 杯のデンプン、ごく適度な割合の馬肉の代金が、兵士の 1 週間分の給与に上ったほどであった。そしてついには、犬や猫やネズミを食べるほど極限状態にまで落ち込んだ。

彼らの悲惨さは包囲とともに増し、その多くは単なる飢えと欠乏だった。多くの者は、ただ飢えと欠乏のために、苦痛を感じ、衰弱し、あるいは路上で息絶えた。イングランドから待望の援助が届いたとき、彼らは、互いに食べ合って生き延びるか、アイルランド人と戦いながら生き延びるかという選択肢に迫られていた。

この援助は、デリーのマウントジョイ号とコールレインのフェニックス号によって運ばれたが、その時、彼らには 9 頭の痩せた馬と 1 人 1 パイントの食事しか残っていなかった。飢えと戦争による疲労で、7,361 人の戦闘要員は 4,300 人に減少し、その 4 分の 1 は戦闘不能となった。

包囲された人々の災難が大きかったのと同様に、プロテスタントの友人や親戚の恐怖と苦しみも大きかった。彼らは皆（女性や子供でさえも）、半径 30 マイルの国から強制的に追放され、非人道的なことに、町の城壁の前で衣食住もなく何日も過ごすという悲しい必要に迫られた。こうして彼らは、外からはアイルランド軍の絶え間ない砲火にさらされ、内からは味方の銃撃にさらされた。

しかし、イギリスからの救援が到着し、彼らの苦難は終わりを告げた。そして 7 月 31 日、3 カ月以上続いた包囲は解かれた。

ロンドンデリーの包囲が開始される前日、イニスキラー隊はニュートン、バトラー、クラウン・キャッスルで 6 ,000 人のアイルランド系ローマ・カトリック教徒と交戦し、そのうち約 5,000 人が殺害された。これとロンドンデリーでの敗北で教皇派は意気消沈し、プロテスタントへの迫害を断念した。

その翌年、すなわち 1690 年、アイルランド人は退位した王子ジェームズ 2 世を支持して武器を取ったが、彼の後継者であるウィリアム 3 世に完敗した。この国王は、アイルランドを去る前に、アイルランド人を服従させ、それ以来その状態が続いている。

しかし、彼らのあらゆる苦しみや迫害にもかかわらず、プロテスタントの大義は 1 世紀前よりもはるかに強化された。以前は、森や沼地や山の中で、隣人の略奪を糧に、不穏で放浪的な生活を送っていたアイルランド人は、朝には獲物を奪い、夜には戦利品を分け合ったが、長年にわたって、静かで文明的な生活を送るようになった。彼らは英国社交界のお菓子を味わい、民政の利点を享受している。彼らはわが国の都市で商売をし、わが国の工場で働く。彼らはまた、英国の家庭に受け入れられている。そして、プロテスタントから人道的に扱われている。

第 19 章 -アイルランドにあったプロテスタント信仰の進歩と迫害

アイルランドは当初からカトリックの勢力下にあり、福音が伝わったのはヘンリー8 世の時であった。 それまで人々は無知の中、とんでもない迷信に囚われていた。アイルランドにプロテスタントが導入されたのはイギリス人ジョージ・ブラウン(George Browne)の功績が大きい。彼はダブリン(Dublin)の司教で、それ以前はオーガスティン修道士だった。

ヘンリー8 世はイギリスで修道院の設立を禁止した。これにより、ダブリンにあった 2 つの大聖堂からも像や宗教的遺物が取り除かれた。しばらくしてブラウンは、ヘンリー8 世がイギリスとアイルランドで教皇の支配を払拭することを決め、彼を行政官に任命するという手紙をクロムウェルから受け取った。しかし、アルマ(Armagh)の司教であるジョージはこれに激しく反対し、教皇の統治権を拒否する人々に呪いをかけ、アイルランドはローマ司教の所有物であり、王の先祖も教皇から統治権を与えられたと述べた。

翌年、議会が召集され、最終的にヘンリー8 世が教会と国家の最高統治者として決定された。しばらくして、教皇はアイルランドに（おそらく彼の大司教とその聖職者に）勅令を送り、王の統治権を認めるすべての人を破門した。エドワード 6 世がイギリス王 に就いた後、彼はイギリス国教会の典礼の儀式をアイルランドでも行うよう命じた。英国国教会の公式祈祷文がダブリンの教会で初めて使われた翌日、カトリック側では邪悪な策略が計画されていた。そこには、手に葦を持ち、頭に茨の冠をかぶった大理石のキリスト像があり、英国式礼拝が会衆と聖職者の前で行われている間に、茨の冠の隙間から血が流れ、その像の顔の下に落ちたのである。これに対して、この詐欺劇を企てた人々が叫んだ。"見よ、私たちの救い主の像に流れる血を！ 教会に異端が浸透したためにこのようなことが起こったのだ。" あまりにも奇跡的で否定できな

い証拠(?)を通じて神様が不快に思っていることを見て、一般大衆は恐怖におびえ、直ちにプロテスタントの教義は地獄から発端したものであり、救いは彼ら自身の無謬的な教会だけにあるという確信を持つようになった。意識が目覚めた人々にはこの詐欺劇は不条理に見えたが、無知なアイルランド人の心にはこれが大きな影響を及ぼし、彼らはこの詐欺劇を企てた者たちの目的に合致するようになった。

ジェームズ王の平和的な治世を利用してカソリックは勢力を伸ばし、チャールズ 1 世時にはその数が大幅に増加した。 そのため、1629 年に正式なカトリックの儀式や祭祀行為が禁止された。しかし、すぐにローマの司祭はダブリン市に新しいカトリック大学を設立し、各地に修道院や修道院を設立した。そこで頻繁に集まりながら、1641 年、オニール(O'Neal)は彼の家族と彼の信者たちと一緒に恐ろしい計画を練っていた。この計画が実行される少し前に、アイルランドのカトリック教徒は彼らの宗教行事の自由を要求したが、英国上下両院は両方とも英国内のカトリックの許容を禁じた。

その計画は、王国全体の大規模な反乱とともに、すべてのプロテスタントを例外なく殺害するという陰謀だった。大虐殺の日は 1641 年 10 月 23 日に決まった。その日はイエズス会の創始者であるイグナティウス・ロヨラを記念する日だった。この計画を完璧に成し遂げるために、カトリック教徒はプロテスタントを訪問し、これまで以上に親切な態度を見せた。この陰謀は冬が来るまで延期されたが、その理由は冬はイギリスから軍隊を送るのに大きな困難があると考えたからである。

フランスの大臣であるリシュリュー(Richelieu)枢機卿は共謀者たちにかなりの物資と人的資源を約束した。多くのアイルランドの将校たちは、この反乱が起きるとすぐにカトリックの兄弟たちと連合するという強い確信を示した。この計画が実行される前日、この陰謀はアイルランド人のオーウェン・オコネリー(Owen O'Connelly)に

よって発見され、この仕事の主謀者であったマクガイレ(M'Guire)卿が逮捕された。幸いにも王国の首都は保存されたのである。

しかし、計画された悲劇は、王国中に散らばった共謀者たちによって、決まった日の朝に強行された。道行くすべてのプロテスタントは即座に殺された。年齢も、性別も、身分も問われなかった。平和の中で生きてきたイギリス人が、長い間一緒に過ごしてきた最も近い隣人に殺されたのである。死はむしろ最も小さな罰だった。あらゆる残酷な拷問、心の苦悩、絶望などは、死よりもひどいものだった。頑固で思いやりのないカトリック教徒は、彼らの手で血を流すやいなや、毎日恐ろしい悲劇を繰り返していった。イエズス会の会員、司祭、修道士たちは無知なアイルランド人をさらに煽り、この計画は王国の発展とカトリックの名分を発展させるために多大な貢献をするだろうと扇動した。プロテスタントは異端であり、これ以上生きることを許されるべきでなく、イギリス人を殺すのは犬一匹を殺す程度であると騒ぎまわった。 また、イギリス人を逃がしたり保護することが最も許されない犯罪であるとまで言った。

カトリック教徒がロングフォード城と都市を包囲した。 その都市はプロテスタントが住む場所だった。プロテスタントの人々は命を守るという条件で降伏した。街の人々が現れるやいなや、包囲者は彼らを攻撃し、彼らの司祭が英国プロテスタントの羊飼いの腹を切るのを合図に、その後に続いて人々を吊るし殺したり、ナイフ、銃、あるいは斧で多くの人を殺害した。

スリゴ(Sligo)部隊も同じ扱いを受けた。彼らも命を助けてくれるという条件で降伏した。最初に彼らは刑務所に収監され、しばらくして橋の上から急流に押し流されて全員死亡した。修道士たちが聖水を手に持って来て、その川に水を撒いた。異端者の死体と血で汚染された川を清めるというのだ。

リス洞窟では 150 人以上の人々が焼かれた。モニア城では少なくとも 100 人がナイフで殺された。トゥーラ城でも膨大な数の人々が殺害された。

悪魔だけが思いつくような恐ろしい方法で多くの人が死んでいった。馬の尻尾に人を縛り付けて、馬を全速力で走らせて殺すこともあった。高い絞首台にぶら下がったまま、下に火を焚いて、一部は窒息死、一部は絞首刑で死にました。女性だからといって、彼らの無慈悲で狂暴な迫害を免れることはできなかった。多くの女性があまりにも残酷な方法で死んでいった。ある者は丈夫な柱に縛られ、腰まで服を脱がされたまま、無慈悲に槍で胸を切り裂かれ、血を流して死ぬまで放置された。さらに、まだ生まれていない胎児が子宮から引き抜かれ、彼らの怒りの犠牲となった。多くの母親が裸のまま木にぶら下がって体を引き裂かれ、罪のない赤ちゃんが犬や豚に投げつけられた。

恐ろしい光景をさらに恐ろしいものにするために、彼らはその夫たちにこのような光景を強制的に見させた。

イセンスケアスでは、百人以上のスコットランドのプロテスタントが絞首刑に処せられた。千人以上の人々がポタダウン橋から強制的に水中に投げ込まれた。川辺に登った人々は首を切り落とされ、同じ地域で少なくとも 4 千人が溺死した。無慈悲なカトリック教徒は、まず人々を脱衣させ、殺害するために決められた場所に獣のように追いやった。疲労と衰弱で後ろに垂れ下がった人々は槍や剣で刺された。

ある場所では、140 人のイギリス人が極寒の中で完全に裸にされ、何マイルも引きずり込まれ、同じ場所で全員殺害された。ある者は絞首刑に処され、ある者は火刑に処され、ある者は生きたまま埋葬された。ある人には安全な通過を約束した後、彼らが安心して自分の道を行くと、適当な場所で最も悪質な方法で彼らを殺害した。

115 人の人々がペリム・オニール(Phelim O'Neal)卿の命令でポーターダウン橋まで来て、全員強 制的に水に落とされた。キャンベル(Campbell)という一人の女性が逃げる

可能性がないことを知り、カトリック教徒の隊長の一人を腕で抱きしめ、一緒に水に落ちて溺死した。

キリーマン(Killyman)では 48 世帯が虐殺された。そのうち 22 人は一軒の家で焼かれた。キルモア(Killmore)では約 200 世帯があったが、彼らのお金がどこにあるかを言うまで火刑台に縛られ、言った後に死刑に処された。村全体が屠殺場となり、ナイフ、火、水、飢餓、そして他の最も残酷な死で 時間で死んでいった。ある者は地下監獄に監禁され、餓死する者もいた。カゼル(Casel)では、プロテスタントを汚い地下監獄に数週間一緒に追い込み、しばらくの間解放した後、残酷に切り刻み、道で面白半分に殺すこともあった。一部の人々は頭を地面に打ち込んで埋葬されることもあった。彼らは悲惨さを増すために、苦しむ彼らを嘲笑した。アントリム(Antrim)では、ある朝 954 人が殺害され、その後 1200 人がさらに殺害された。

リスネガリー(Lisnegary)では、24 人のプロテスタントを一軒の家に追い込み、火を放った。

別の残酷な行為の一つは、イギリス人女性の 2 人の子供を奪い、その女性の前で彼らの脳を粉砕し、その女性を川に投げ捨てたことである。キルケニー(Kilkenny)では、すべてのプロテスタントが殺された。彼らはあるイギリス人女性を聖なる骨が一つもないほど殴打した後、下水道に投げ捨てた。これに満足せず、彼女の 6 歳の女の子を連れて行き、腹を割ってその母親に投げつけた。ある男性を強制的にミサに参加させた後、腹を割ってそのまま放置したこともあった。幼い子供の脳を砕いて豚に食べさせたこともあった。

七人のプロテスタントの指導者を捕まえ、そのうちの一人を市場の交差点に連れて行き、口に猿轡をはめ、頬を耳まで切り、その前に聖書一冊を置き、口が十分に大きくなったので説教をするように強制した。パウアスカウトの教会では、講壇と聖書を燃やした。聖書を汚れた水に濡らしてプロテスタントの顔に投げつけ、「君たちが

良い教訓を好むことを知っている。 ここに非常に素晴らしいものがある。 明日来てみろ、これと同じくらい素晴らしい説教を聞くことができるだろう」と嘲笑した。

あるところでは、プロテスタントの目を抜いたり、手を切って野原に送り、そこで迷いながら悲惨な最期を えることもあった。若者たちに強制的に両親を川に押し込めさせたり、妻たちに夫を吊るす作業を手伝わせたり、子供たちの首を切り裂く際に母親たちに自分の子供の首を折る作業を手伝わせた。クロニスでは 17 人が生きたまま埋葬された。数多くの人々が言葉では言い表せないような悲惨な方法で殺害された。

第 20 章 -ジョン・バンヤンの生涯と迫害に関する記事

イングランドの有名な牧師・説教者であり、清教徒の宗教観を非常にユニークに表現した〈巡礼者の歩み The Pilgrim's Progress〉(1678)の著者。 その他の著書には、教義に関する論争的な著作をはじめ、霊的な自叙伝〈溢れる恵み Grace Abounding〉(1666)、寓話集〈聖なる戦争 The Holy War〉(1682)などがある。幼い頃～若い頃 真鍮細工師、つまり放浪の便利屋の息子として生まれ、中部の奥地の農村で「多くの貧しい小作農の子供たちと一緒に」育った。田舎のグラマースクールで読み方と書き方を学んだが、家業を継ぐために早めに学校を辞めたようだ。

樊延の精神と想像力は、制度的な教育よりも、このような幼少期に受けた影響から形成された。彼は安っぽい本に書かれた冒険物語を 닥치는 대로読んだが、そのような本はケンブリッジの近くのスターブリッジで開かれる大きな市場のようなところで手に入れた(〈天路역정〉に登場する「虚栄心の市場」はここからインスピレーションを得たもの)。彼の家族は英国国教徒であったが、所属していたが、彼はまた、英国清教徒の様々な大衆文学に接した：例えば、簡単な言葉を使った説教集、日常の道徳的な会話録、神の導きに関する感傷的な判断と行為を扱った本、見苦しいエリザベス時代の木版本で印刷されたフォックスの〈殉教者列伝〉などであった。何よりも樊延は英語の聖書に夢中になった。 彼が 12 歳の時、「キング・ジェームズ領域聖書」は発行されてから 30 年しか経っていなかった。

樊延は自伝で、恐ろしい夢のために受けた苦しみを語っている。このように極度の恐怖を経験したのには病的な理由があったようで、青年期初期に宗教的な危機を経験する中で彼の罪悪感は妄想の形をとるようになった。しかし、彼を「あらゆる形態の悪と不信にとらわれさせた最大の要因」は、誇張が激しい傾向と関連した樊延自身の異常な感受性だったようだ。1644 年、何度か不幸な出来事が続き、この田舎の少年は家族と別れ、世に放り出された。6 月に母親が亡くなり、7 月に妹のマ

ーガレットが亡くなり、8 月には父親が 3 人目の妻を得た。 そして内乱（清教徒革命）が勃

発し、11 月に議会軍に徴兵され、ニューポートのパグネルにある守備隊の補充兵として配属された。

そこの司令官はサミュエル・ルーク卿で、サミュエル・バトラーの〈ヒューディブラス Hudibras〉に登場する同じ名前の長老派騎士と同じように不朽の名声を持っていた。樊延はニューポートで 1647 年 7 月までいた。ここにいる間、戦闘を経験したことはなかったようだ。 彼の軍服務は無事平穏だったが、この時、彼はクロムウェル軍内の急進的な小宗派、説教する中隊長、個人の良心を除くすべての権威に疑問を持ち始めたクエーカー教・求道派・ランター派(Ranters)の情熱的な宗教生活に触れることができた。ルークが自分の守備隊に出入りするこれらの多数の宗教的な扇動者と葛藤を経験していたのに対し、バニェンはこのような雰囲気でクロムウェルと彼のみすぼらしい騎兵たちが持っていた清教徒の分派の主要思想をよく知るようになった。彼らの信念によれば、宗教的真理のための闘争は、各自に無償で啓示された恵みに頼りながら、あらゆる形態の公的組織を断罪する粘り強い努力を意味した。

樊延は 1647 年 7 月(除隊)から 1649 年の間に結婚した。彼は自伝〈溢れる恵み〉で、自分と自分の最初の妻が「皿やスプーンのような家財道具もないほど非常に貧しい状態で出会った」と述べている。妻は結婚持参金として彼にたった 2 冊の福音書を与えた。樊延は最初の本から、信仰の小冊子であっても痛烈な表現を使うことができ、身近な格言を持っていても諭すことができることを学んだ。 この夫婦はメアリーという盲目の娘を長女として産み、1650 年 7 月に洗礼を受けさせた。バニエンの最初の妻はその後、エリザベス・ジョン・トーマスを産み、1658 年に亡

くなった。エリザベスも 1654 年にそこの教区で洗礼を受けたが、その頃、樊延はすでに洗礼を受けて「ベッドフォード分離派教会」に加入していた。

回心と牧会

樊延の回心は結婚後の数年間（1650～55）にわたって段階的に行われ、その過程が自伝に劇 的に描かれている。定期的に教会に出かけ、「司祭」と「聖職服」（ジュネーブのローブと推測される）を畏敬の念を抱く初期の国教徒時代を過ごしながら、彼は普段楽しんでいたダンス、鐘つき、田舎の野原での運動会などの娯楽をしぶしぶ徐々に放棄し、内面的な生活に集中し始めた。その後、数年にわたって信仰を捨てたくなるような苦しい試練が訪れた。 彼の表現を借りれば、試練の「台風」がほとんど物理的な暴力で彼を襲い、神を冒涜するよう強要する声が聞こえ、彼に呪いの脅威を与えるように見えた聖書のテキストが人の姿で現れ、「痛いところを突いた」。ついにある朝には、自分がこのようなサタンの声に屈し、キリストを裏切ったと信じるまでになった。"私は撃たれて木から落ちた鳥のように倒れた"と言ったりもした。精神病に近い孤立状態にあった時代、彼は環境に適応できない人々が経験する精神分裂のすべての特徴を示している。このような精神分裂の特性は 20 世紀になってから分析されたが、樊延は自分の状態を診断できるその時代なりの心理学的ツールを持っていた。

それは 17 世紀のカルヴァン主義の牧会神学であった。 この牧会神学は、魂の真の必要性と霊的成長の証拠、神の恵みの契約などの用語を通して、選択と予定という冷酷な教義を解釈する神学であった。現代の精神分析学者の技法と清教徒の説教者たちの技法は、いずれも自己を傷のない状態に回復させるということを共通の目標としていた。樊延は霊的な暗黒期から抜け出し、次第に自分の罪が「死んで当然のものではない」ことを徐々に感じ始め、恐怖を与える本文だけでなく、慰める本文もあることを次第に悟り始めた。この回復期に繁淵はベッドフォード分離派教会とこの教会の

強力な指導者ジョン・ギフォードに助けられた。彼は 1655 年頃、この教会の正式な教会員となった。

ベッドフォード共同体はバプテスマによる成人バプテスマを実践したが、厳格なバプテスト教徒とは異なり、バプテスマを教会員になる資格として主張しなかった。彼らの立場は、バプテスト教会よりも今日の会衆教会の立場に近い。この共同体は「キリストへの信仰と聖なる生活」を告白するすべての人々を受け入れる「開放的な聖餐式 open-communion」教会だった。樊延はすぐに平信徒の説教者として才能を発揮した。霊的な悩みから解放されたばかりであったため、他の人々を警告し、慰める仕事に適任であり、これは「鎖に縛られた人々に説教するために、私自身も鎖に縛られたまま彼らに行き、彼らに注意するように説得するために、私の良心から少し前に燃え上がった火を抱えて行った」という彼の文章によく表れている。 また、教徒を訪問し、勧告する活動も活発に行ったが、1655～60 年の彼の主な活動は、初期クエーカー教徒と論争を繰り広げたことであった。バニェンは長が立っているベッドフォードシャーの町を訪れ、公開討論を行っただけでなく、〈いくつかの開かれた福音の真理 Some Gospel Truths Opened〉(1656)、〈いくつかの開かれた福音の真理を擁護する A Vindication of Some Gospel Truths Opened〉(1657)という最初の著書を出した。開放的な聖餐式を行ったバプテスト教徒とクエーカー教徒は、都市と田舎にいる「織工」、つまり小規模な熟練工と技術者たちを自分の教徒にするために競争を繰り広げた。樊延はすぐに分派の中でリーダーとして認識された。

チャールズ 2 世の王政復古で分離派教会が礼拝の自由を享受し、政府政策にある程度の影響力を行使してきた 20 年の時代も幕を閉じた。バンヨンは 1660 年 11 月 12 日、サウスベドフォードシャーにあるロアサムセルで地方治安判事の前に連れて行かれ、過去エリザベス時代に公布された法令に基づいて英国国教会と一致しない礼拝を執行した容疑で起訴された。起訴された後、同じ犯罪を繰り返さないとい

う誓約をしなかったため、1661 年 1 月に巡回裁判所で有罪判決を受け、州刑務所に収監された。2 番目の妻(1659 年に再婚)が巡回裁判所に控訴するために何度も勇気を出して努力したが、樊延は 12 年間刑務所に閉じ込められていた。溢れる恵み〉の初期版本に添付された伝記によると、彼は刑務所にいる間、「長いレース」を作って売って家族を養ったという。受刑条件は寛大な方で、彼は時々友人や家族を訪ねたり、集会でスピーチをしたりすることができた。

執筆活動

刑務所に閉じ込められている間、樊延は霊的な自叙伝〈溢れる恵み〉を書いて出版した。1672 年 3 月、チャールズ 2 世が非国教徒に対する寛容宣言を公布したため、樊延は釈放された。ベッドフォード共同体は「神に祈りで多くを懇願した後」、1 月にすでに彼を牧師に選出し、新しい集会所も確保していた。5 月、樊延は 25 人の他の非国教徒派牧師と共にベッドフォードシャーと周辺の村々で説教することを許可された。 彼の別名「司教樊延」は、彼がその地域で卓越した組織力を発揮したことを示唆している。迫害が再び始まったとき、彼は違法な説教をした容疑で再び刑務所に入れられた。2 回目の監獄生活は、たとえ 6 ヶ月以上続かなかったようだが、どのような状況で彼が投獄されたのかは、1 回目の監獄生活の時よりも不明である。しかし、彼を釈放させるための 1677 年 6 月の身元保証書が幸いにも残っており、2 度目の投獄はその年の前半にあったと思われる。天路歳時記〉は 2 度目の釈放直後、つまり 1678 年 2 月に出版されたことから、樊延は最初の投獄時にこの本を書き始めていたようだ。 それは〈溢れる恵み〉を完成させた直後で、この本に込められた内面生活に対する検討がまだ真剣に進んでいた時だった。

文学形式

彼の文学的業績は、彼に対する多くの批評家の見方とは異なり、彼の洗練された作品から見る限り、決して素朴で単純な才能から生まれたものではない。 彼の言語に

対する構法は、口語体であれ聖書体であれ、完成された芸術家のものである。彼は人間の態度を鋭い認識と道徳的な繊細さで扱い、福音神学の概念に具体的な生命を与え、肉と血の用語として神学的なドラマを具現化する才能を発揮する。なぜなら、もともと彼を執筆させた衝動は、純粋に自分の信仰を知らせ、他の人々を改宗させるためであり、他の清教徒のように、彼は派手な様式を軽蔑するように、そして文学を目的のための手段として考えるように訓練されたからである。文学的装飾の向こう側に到達し、自分自身の霊的な経験についての真理を絶対に赤裸々に描写しようとするバニエンの努力は、『溢れる恵み』でかなり独創的な様式を考案することになった。この様式において、強力な実体的な具象化が豊富で、クリスチャンの内面的な生活が描かれている：肉体と魂は密接に関連しており、彼の誘惑の描写において、精神的な苦しみから肉体的なものを切り離すことは不可能である。彼は「まるで私の腸が破裂しそうなほど、私の胸骨に息苦しさと熱さを感じる」。

＜天路の書

樊延のこの偉大な寓話的物語は、1678 年にナダナエル・ポンデルが出版した。樊延自身の回心についての物語を象徴的な形として要約する中で、キリスト教徒が危険と混乱を経験しながら天の都に向かって巡礼する物語が「生きるか死ぬか」のように強烈に描写される。このような切迫感は、最初の場面で、クリスチャンが自分の本（聖書）を読みながら、「私はどうすればよいのか」と悲痛な声を叫ぶことによって提示される。旅に沿ってアポリオンや巨大な絶望のような巨人や怪物との戦いで続き、これらは霊的な恐怖を表現するものである。死の影の谷の音と悪魔たちは、樊延自身の回心期に妄想に取り憑かれ、神経衰弱的な恐怖についての直接的な文章である。このような興奮する行為の挿絵は、より固い詩と交差し、巡礼者と彼らが出会う人々の間で様々な会話が展開され、「おしゃべり(Talkative)」と「無知(Ignorance)」のような偽善者が登場し、少しは宗教的で軽い慰めを与える。「Delectable Mountains"

と"River of Life"の隣の草原のような休憩所での滞在は、この世を離れた霊的な美しさを呼び起こす。

万年の生涯と作品 樊延は引き続きベッドフォード教会および、この教会と結びついた東部の増え続ける国教会の世話をした。文学作品によってますます名声が高まり、ロンドンの会衆教会でも説教をするようになった。1672～73 年、ウィリアム・キッピンやその他のロンドン・バプテスト教徒と一緒に、彼の「開放的な聖餐式」の原則をめぐって論争を繰り広げた。

悪人の生と死 The Life and Death of Mr.Badman〉(1680)は、寓話というよりは現実的な小説に近い作品で、迫害の時代が終わった後、清教徒たちが都市の中間階級として社会的役割を探し始めた当時、お金と結婚の問題についてどのように考えていたかをよく示している。バンヨンの 2 番目の寓話である〈聖なる戦争〉は慎重な叙事詩の構造を成しており、したがって〈天路叙事詩〉で見られるような自然な内面の特徴は見当たらない。マンソルの都市は悪魔の軍隊に包囲されるが、エマニュエルの軍隊が来て救ってくれ、後に悪魔の軍隊がエマニュエルの統治に対して何度も攻撃と陰謀を加えることによって弱体化される。この比喩は、堕落の時から救贖と最後の審判に至るまでの人類の物語を再現するだけでなく、個人別の魂の悔い改めと堕落を描写する。この比喩には、チャールズ 2 世の時に非国教徒が受けた迫害を暗示する、より明確な歴史的次元まで含まれている。

続・天路歴程 The Pilgrim's Progress, Second Part〉(1684)は、クリスチャンの妻クリスティーナが子供たちを連れて巡礼する物語である。この本は概ね前編に比べ、クリスチャンの生活をより社交的でユーモラスに描いているが、巡礼者たちに「死の川」を渡るよう呼びかける内容の荘厳な結論部分は、おそらく樊延の文学において圧巻であろう。樊延は牧師としての責任が大きかったが、生涯の最後の 10 年間、時間を割いて多数の教理及び論争書を出した。また、荒々しいが信仰教訓

を内容とする優れた詩を書いたが、このうち最も興味深い晩年の作品集は、子どもたちの本である〈少年少女のための本 A Book for Boys and Girls〉(1686)で、象徴的な挿絵とともに活気ある詩で構成されている。ジェームズ 2 世の治世で非国教徒に対する迫害が再び始まったとき、バニェンは「私の愛する妻エリザベス・バニェン」にすべての財産を相続させることで家族を守った(1685. 12)。ジェームズがローマ・カトリック教徒に信仰の自由を認めるためにプロテスタント非国教徒を懐柔しようとしたとき、樊延は官職を申し出る王の代理人であるアイルズベリー卿의 감언이설을賢く退けた。同時に彼は自分の教会の教徒が再編成された、ベッドフォード法人に居場所を与えてくれた。バンヨンは 1688 年、説教のために様々な地域を訪問した後、ロンドンで亡くなった。ロンドンに来る前に彼は父と息子の間に起きた不和を紛らわせようと激しい雨を浴びながらリーディングに駆けつけ、熱病にかかったのだ。死後、非国教徒の伝統的な墓地として知られるバーンヒルフィールズに埋葬された。

評価 19 世紀に宗教的信仰が衰退し、大衆的な教訓書が大きく増える前まで、樊延の著書は聖書のようにすべてのイギリス人の家庭にあり、すべての一般読者に知られていた。 しかし、文学的には良い評価を得られず、18 世紀を通して純粋文学の仲間入りをすることができなかった。彼の偉大さを認めたのはスウィフトとジョンソンだけだった。ロマン主義運動が終わった後に初めて、先天的な才能を持った作家として認められ、ホメロスやロバート・バーンズと肩を並べるようになった。20 世紀に入ってバーンズについての研究が本格的に行われることによって、彼が文章を書き始めたときにすでに発展していた説教体散文の伝統と清教徒の文学ジャンルが彼にどれほど多くの影響を与えたかがわかった。たとえ以前思っていたほど優れているとは言えないかもしれないが、〈天路歴程〉の天才性は依然として認められている。大きく異なる文化伝統に属する読者まで翻訳書を通じて安定した反応を起こしているというこ

とは、この有名な本がいかに深遠な象徴的真理を含んでいるかを証明するものである。

さて、筆者はまず彼の生涯を簡単に見ていこうと思う。 1.ジョン・バンヤンの生涯

彼は 1628 年、イギリスのベッドフォード(Bedford)近くのエルストウ(Elstow)で生まれた。 彼 の両親は正直だったが、非常に貧しい人々であった。 彼が生まれた 17 世紀は政治的混乱期であり、彼が生まれた時はチャールズ 1 世が王にあり、彼はチャールズ 2 世とジェームズ 1 世の治世中に住んでいた。 そして彼の父親は貧しい便利屋であった。 彼は息子に釜や鍋を焚く方法を教えただけで、それ以外にはほとんど与えるものがなかった。 そして彼は学校で読み書きを教える程度の基本的な教育しか受けることができなかった。ジョン・バンヨンは自分の家を「身分が低く、考える価値すらない家であり、私の父の家はこの地にあるすべての家族の中で最も悲惨で軽蔑された」と言った。しかし、樊延はこのような貧しさと卑しさに挫折し、落胆して人生を無意味に生きたのではなく、むしろ彼の生涯を神の祝福と恵みで輝かせたと彼の著書「罪人に溢れる恵み(Grace Abounding)」で告白する。

樊淵が 16 歳の時、つまり 1644 年に彼の母と妹が亡くなった。すると彼の父はそれと同時に再婚し、樊淵にとっては反抗の時期となった。そして彼は若くして当時の議会の軍隊に入隊することになった。当時、クロムウェルの指揮下にあるこの軍隊の宗教的情熱は、ほぼ全ての軍隊に影響を及ぼしていた。彼は 1647 年半ばまで軍隊にいた後、除隊して故郷のエルストウに戻り、そこで結婚したが、彼の妻も貧しく、彼女が彼と結婚して持ってきたのはわずか 2 冊の本だけであった。しかし、彼女がブンヨンに与えた影響力は大きく、ブンヨンがついに葛藤の末、ベッドフォード・バプテスト教会の牧師ジョン・ギルフォードの導きでキリスト教信仰に帰依し、バプテス

マ(1653 年)を受けた後、彼の妻は死亡(1655 年)することになった。しかし、彼女の死は樊延が伝道の深い情熱を持つようになる動機となった。

樊延は教会に通うようになってから、彼が好きだったことをあきらめた。彼は聖書と宗教問題を話すのが好きな友人を作り、聖書を読むようになった。しかし、彼の心が本当に変化して神を知るようになったわけではなかった。 彼は外的な変化を遂げたが、自分の腐敗と自分を救うためのイエス・キリストの価値について知らなかった。彼は当時の自分の姿を「私はただ貧しいふりをする偽善者のように、自分が本当に敬虔な人であるかのように話すのが好きだった」と述べる。

しかし、彼の慢心は、彼が仕事に出かけた際に出会った貧しいが敬虔な三人の女性を通して崩れ始めた。 その恋人たちは、義のない人間の惨めな状態や衆生と悪魔の誘惑、そして彼らの勝利について語り合った。彼らの会話は樊延の心を捉え、彼は自分の救いに対する疑念と自分の心の腐敗を悟るようになった。彼は悩み続け、その解決のために聖書を読み、黙想するようになった。彼は自分が本当に信仰を持っている者なのか、自分が選ばれた者なのか、これらの問題に直面して苦しみながら、この問題を解決するために祈り、聖書を熟考した。そうして樊延は聖書の中にあるその真の秘密を発見し、1653 年に正式にベッドフォード教会の教会員となった。

彼の最初の著作「Gospel-Truths Opened」はクエーカー教徒を論駁するもので、バーンヤンはクエーカー教徒の「Inner light」に関係する教義に比べ、キリストが人類に行ったこの福音は単純なものだと説明した。1658 年に彼は再婚したが、翌年 1659 年には彼の最も重要な神学論文を発表した。

彼が発表した「The Doctrine of the Law and Grace Unfolded」は、義認とキリストの贖いに関する契約に関する理解を精緻化したもので、この作業で彼は救いを神の恵み深い約束の見地からカルヴァン的形式を全体的に基づいた基礎を確立し

た。彼が 1660 年のチャールズ 2 世の王政復古後に著作した'Grace Abounding'は彼を 6 年間投獄させ、監禁された間に著作した'A Defence of the Doctrine of Justification(1666)'は自由主義者エドワード・ピューラーに対して論駁するために書かれた。 そしてその 6 年間は彼が刑務所で 8 冊の本を書く良い時間を提供した。刑務所から出てきたバンヨンは、ベッドフォード教会の主任牧師として生涯を過ごすことになる。ベッドフォード教会は、バプテスマと主の晩餐において公開聖餐をとる分離主義の教会で、当時バプテスマ教徒との交わりの問題において論争があったが、バプテスマ的な特徴を明らかにした教会であった。樊延は当時のバプテスト教会の指導者たちと交わりにおける信者の浸水礼拝の必要性についての問題をめぐって書面で論争した。 彼は救いの道としての福音に対する彼の強い立場に照らして、教会に入る門はバプテスマよりも福音だと考え、このような立場を「Confession of My Faith, and a Reason of My Practice」で強く擁護した。樊延はこの論争で聖徒の真の印はバプテスマではなく、信仰とそれに伴う聖なる生活であることを明らかにした。 彼はバプテスマと主の晩餐を聖書で聖餐として認めたが、交わりの条件としてバプテスマを問題視することには反対し、キリスト者間の幅広い交わりを強調した。

その後、樊延は多くの著作を残し、彼の残りの人生を彼の会衆とベッドフォード地域の福音化のために捧げた。 彼の教会は福音化のための体系的な計画で、その地域の他の非国教徒教会と協力した。 そして彼は 1688 年 8 月 31 日、馬に乗ってロンドンに説教に行く途中、豪雨に襲われた熱病で彼の生涯を終えた。

2.ジョン・バンヨンの思想

樊延は自分の神学を学術的に研究して体系的に発表した人ではなかった。 彼は体系的な神学 者というよりはむしろ福音伝道者であり、聖書を愛する人であった。彼の神学の源は聖書であり、彼の神学的な勉強部屋は彼の小屋と刑務所であった。

そして彼の先生は聖霊であった。しかし、この言葉は、彼が神学について何の理解もなく、ただ舞台裏で聖書だけを持って独自の神学をしたという意味ではない。 彼もまた宗教改革の子孫であり、聖書の次にルター(Luther)のガラテヤ書注解を最も大切にしたと言われている。

そして樊延は福音主義的カルヴァン主義を彼の神学の根幹とし、それを信奉しながら、当時の聖徒の交わりの部分で当時のバプテスト指導者たちと意見の相違があったが、教会論においてバプテスト的な特徴を明らかにした人であった。

それでは、樊延の神学をいくつかの部分で述べてみよう。

1)啓示

樊延は、私たちを救うためにイエス・キリストに与えられた神の大きな働きを発見した。樊延の福音的要素は、イエス・キリストの誕生と人生、すなわち飼い葉桶から十字架までの全般的なものを含むものである。イエスの死は罪人たちの罪の代償のために支払われ、最終的には神の義の手によって復活し、昇天した。そして世界を裁くために再び来られる。一方、救いにおけるキリスト

の歴史的な働きと聖書の中の目的ある契約は、樊延の神学において根本的なダイナミズムを与えた。

また、樊延は神を恐れない人間の不敬虔を非難しながら、真の神についての知識が真の人間についての知識を知ることを主張した。これは、「人間は明らかにまず神の顔を見つめ、次に自分自身を精査しない限り、断じて自分自身についての真の知識に到達することはできない」と述べたカルバンの見解と同じといえる。

2) **福音**

彼は選択と予定を通して福音を説明した。また、彼が福音のメッセージの基本であるイエス・キリストの働きに確信したことから、彼はその教理を作り出したのでは

なく、彼はただ聖書の中でその事実を発見し、「罪」に対するキリストの働きを強調した。これを彼が神が人々を救うために清教徒を使用したという確信に起因し、彼は清教徒の説教が他の教理の複雑さとは異なり、極めて単純であることに気づいた。

彼の福音は、イエス・キリストの受肉と彼の贖罪史的性格を含んでいる。こう見ると、樊延は神の主権的な恵みが聖書に現れ、そこから歴史的なイエス事件を霊的なものとして解釈することに反対した。 また、キリストの贖罪の働きは分離されず、これは義によってなされる救いの基礎として、聖化されたキリストによって獲得されると見た。 そして、彼は福音の本質的なことを認め、確固たるものにしない人々を「神の呪われた者(anathematized of God)」と呼んだ。

3) **回心**

彼の霊的自叙伝である「Grace Abounding to the Chief of Sinner」で、樊延は悟りを開いてから回心が始まったということに基づき、救いにおいて回心は終わりではなく、すべての確信の始まりと見た。回心において彼はカルヴァン主義と聖書、そして決疑論での回心を説明しており、その中で信仰と悔い改めも一緒に扱った。樊延がカルヴァン主義を確信したにもかかわらず、彼はその教理の暗い面が自分の救いを難しくしたことを発見し、唯一の聖書だけが彼に平安をもたらすことを発見した。 また、彼は清教徒の論理で自然宗教を批判した。信仰におけるバニエンの考えは、罪人が神の前に現れた時、神の霊とキリストの義の転嫁により、人間の罪は赦され、最終的に義とされることである。 また、彼は救いにおける信仰の目的はキリストとその血であると説明した。彼にとって、悔い改めは神の恵みによって与えられる救いの必須要素であった。 つまり、悔い改めは罪と悪魔と闇から善と恵みと聖さへの変化である。したがって、神が与える悔い改めは、過去の罪を嫌う心を与えるだけでなく、心に来るべき罪に対する聖なる憎しみでいっぱいにすることだった。

4) **救済論**

樊延は彼の神学と説教の主な関心を救いの問題に集中させる。彼は正統主義的な救い観を堅持し、さらに福音伝道的であった。 彼は義認、聖化、映画の要素だけでなく、牽引と確信というキリスト教の福音の諸要素を作り出した。 そして彼は救いのすべての作業の中で、十字架で死に、復活し、再臨するキリストの出来事を最も重要なものとして扱い、彼はそれを聖書による経験として説明し、救いに関してそれぞれ要求される福音の重要な適用と見た。

5) **教会論**

ヨハネの黙示録で、彼の罪の重荷から十字架に近づくやいなや解放された荷車引きは、美しさと呼ばれるある城にたどり着く。 その城は寓意的に教会を表し、その入り口に一人の門番が守って立っている。その門番は「教会の規則」によって、入場を許可したり、拒否したりする。その城の「慰めと安全」を享受するためのクリスチャンの資質を決定するために、その門番は巡礼者をクリスチャンの経験について調査する彼の娘に送った。荷車引きが彼の娘たちを巡礼者として委任したとき、荷車引きは娘たちに武器庫から最高の鎧と兜を装備させる。 この い例話は、樊延自身の経験に基づいたもので、彼は教会の機能を説明するために利用した。 つまり、丘の上の主によって安全で安心できるように王宮が設立されるように、教会は家族的な暖かい愛を供給し、交わりがあり、教えがあり、異常な霊的脅威にもかかわらず聖なる生活を送るためにしっかりと装備されなければならないことを教えている。

結論

これまで筆者はジョン・バーンヤンの思想を少しずつ整理してきた。 彼は清教徒の信仰を模倣し、神の仕事をすることに少しも休まなかった人であった。 しかし、彼は深い清教徒の神学者ではない。 しかし、彼の神学は、彼自身の救いの体験と福音的

召命に基づいた実践的で福音的な宣言をした。そしてバーンヤンは、彼の説教よりもむしろ革命的な時期であった当時の問題点を扱う上で彼が見せた勇気と、英国文学の偉大な遺産の一部を形成した彼の秀麗で、インスピレーションのある著作によって記憶されている。

そして、バプテスト信仰における福音に対する理解、その理解に基づくバプテスマの儀式の強調、そして個人と神との霊的関係性に基づく個人の重要性の強調などは、イギリスのバプテスト教会の偉大な人物であるバーンヤンからよく見られる。私たちの神学が神を排除すれば神学になることができないように、神様の正しい義を求め、また神様の前で私たちの重要な思想を求めれば、私たちの人生は明らかに変わるだろう。人類を巨大に動かす神の摂理を樊延が見た時、彼は変わった。このように見るとき、私たちの時代の歴史が明瞭に示す神の主権と神の統治概念の中で、私たちはもう一度もう一度考えなければならないだろう。そして、「神は生きておられ、まだその契約は有効であり、いつでもその民が立ち返れば、善のように今も共におられる」という信仰を放棄してはならない。神の民の未来は彼らの未来ではなく、「神の未来」なのである。したがって、神の未来に向かって進む私たちの人生を神の前に完全に委ねることができれば、私たちの未来はジョン・バニェンのように神の仕事をすることに最善を尽くすことができるだろう。

[出典] ジョン・バニヤン(John Bunyan)の生涯と思想|作者 Nongshimgum

第 21 章 -ジョン・ウェスリーの生涯に関する記事

1) 家族的背景

ジョン・ウェズリーはメソジストの創始者として崇拝される。メソジスト(Methodist)」とは「高尚な人」または「原理原則に従う人」という意味で、福音主義と社会運動を重視するプロテスタントの重要な一派である。ジョン・ウェズリーは 1703 年 6 月 17 日、イギリスのリンカンシャー州エプワース(Epworth)で英国国教会の司祭であるサミュエル・ウェズリー(Rev.Samuel Wesley)の次男として生まれた。 彼は全 19 人の子供のうち 15 番目だった。 彼の家は 3 代にわたって英国国教会の牧師を輩出した家系である。彼の父サミュエル・ウェスリーは 40 年間教区の仕事を担当してきた誠実な聖職者であり、子供たちの教育問題にも関心が多かった。

彼は父サミュエル・ウェスリーの牧会から影響を受けた。父を見てジョン・ウェスリーが受けた影響は次の 3 つに要約することができる。1)聖書の原文に忠実な解釈、2)世界宣教に向けた牧会的確信、そして 3)小規模の集会を通じた信仰組織である。父の影響で、ジョン・ウェズリーはヘブライ語とヘブライ語はもちろん、ラテン語にも堪能であった。後に彼がアメリカをはじめとする「全世界は私の教区」という考えを持つようになったのも、メソジストの特徴である 会(class)を活性化したのも、父の牧会から学んだ方法である。

彼の母スサンナは、やはり聖公会牧師の娘である。ギリシャ語、ラテン語、フランス語に堪能なほど完璧な学問力で 19 人の兄弟を直接教え、信仰生活には非常に厳格だった。規則正しい生活と祈りはもちろん、霊的な日記を書くようにし、家庭を通じた子供たちの霊的な救いに気を配った。

英国教会史上、ジョン・ウェズリーという知的で活動的な説教者、神学者が出たのは、親の影響といえる。彼の家族の中で彼の弟であるチャールズ・ウェズリー(Charles Wesley)は彼に大きな助けとなった同役者だった。後年に弟との葛藤があったが、彼を最も大きく後援し、機会を提供してくれたのは弟のチャールズだった。

2) 挫折の初期牧会

1720 年にオックスフォードのクライストチャーチ大学に入学したジョン・ウェズリーは、様々な言語と論理学、倫理学、哲学、雄弁、そして神学など様々な学問を勉強した。1725 年に英国国教会の副祭(ordained deacon)に叙階され、1726 年にリンカーン大学の研究員(fellow)に任命された。

1927 年同大学で修士号を取得。その後、父の教会で 2 年間働き、研究員職を遂行するために再びオックスフォードに戻った。この時、18 世紀に再び流行し始めた中世の霊性家トーマス・ア・カンピスの「キリストに倣って」とジェレミー・テイラーの「聖なる生と死」の影響で、聖職者になって神のために働くことを決意し、1928 年に英国聖公会で司祭叙階を受けた。

1729 年はメソジスト(メソジズム)の始まりとして記録された年である。 彼の弟チャールズがオックスフォードに友人たちと一緒に「敬虔クラブ(The Holy Club)」を作った年だからだ。このクラブにはチャールズとジョージ・ウィンフィールドのような聖書的信仰観を持った若者たちが週に一度集まり、敬虔な生活を送るための方法を組織的に研究し始めた。この集まりを笑ったオックスフォードの大学生たちが「メソジスト」という名前で彼らを呼んだので、後に「メソジスト」という名前の起源となった。

1735 年 10 月 14 日、ジョンと弟チャールズはアメリカのジョージア州のサバンナに向けて航海に出た。 彼らは新しくできたサバンナ教区の教区牧師として知事であるジェームズ・オグレトピの招待を受けてアメリカに渡ったのである。彼は船

の中で彼は大きな経験をし、彼の初期の神学に重要な影響を与える人々に出会うことになる。航海中に気づき、モラヴィア人との交流を始める。

ジョン・ウェズリーはアメリカに到着後、大きな危機に陥る。ジョン・ウェズリーは同じ船でアメリカに渡ったソフィア・ホプキという女性とロマンスに陥る。しかし、彼女と断交し、彼女に聖餐を与えることを拒否すると、彼女と彼女の夫（ジョン・ウェズリーと別れた後に出会った）ウォリアム・ウィリアムソンが彼を告発したのである。十項目にわたって告発された彼は、裁判に立つなど大きな困難を経験するが、アメリカの地を離れてイギリスに戻ることに成功する。

3)回心 アメリカでの失敗は彼を意気消沈させた。

4)しかし、船上で出会ったモラヴィアンの集まりに参加した彼は、人生の転換期を えるという素晴らしい経験をする。1738 年 5 月 24 日、ロンドンのアルダーズゲート(Aldersgate)でモラビ アンの集まりで聞いたマーティン・ルターの「ローマ書序文(Preface to Romans)」を読んで、心が熱くなる驚くべき経験をした。経験について彼は次のように描写している。

この経験はジョン・ウェズリーに聖霊との直接的な交わりをする経験を提供してくれ、以後、彼の働きに経験的な信仰を強調するようになった。当時、英国国教会の立場では非常に過激な信仰的立場に属することであった。 彼はモラヴィアンの総本部であるドイツのハンフツに行き、勉強をして帰ってきて賛美歌を作るなど、一生懸命努力した。 それにもかかわらず、英国国教会ではあまり歓されない存在だった。教会から招待を受けなかった彼は、説教をする機会を得られなかった。ジョン・ウェスリーのオックスフォード時代の友人で「敬虔クラブ」の会員であったジョージ・ホワイトフィールドも彼と同じような境遇で英国国教会から歓されない存在であった。しかし、ジョージ・ウィンフィールドは教会で説教をする代わりに、教会に通うことができない人たちである鉱夫や農民のような人々を相手に野外で説

教をすることが多かった。 彼から影響を受けたジョン・ウェスリーは、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドなどを回り、直接人々に伝道と説教をするようになった。この伝道旅行は彼が死ぬまで続き、彼が生涯に行った伝道旅行はその距離が 40 万 km にもなったという。

5)ジョン・ウェズリー神学の発展と福音主義運動に対する提言 1739 年、彼はモラヴィアンが異端である「沈黙主義(Quietism)」を支持していると考え、モラヴィアンと決別する。自ら信仰体を組織することを決めた彼は、ブリストルとキングスウッドに「英国メソジスト協会」を結成する。

その年、アメリカで宣教をしていた副司祭たちに英国国教会が司祭叙階を与えないことに反発し、自ら司祭叙階を与えることで、事実上、英国国教会からメソジスト教会が分裂した。英国国教会はアメリカの独立戦争後、新しい組織を作るためにアメリカで司祭叙階を与えなかった。 しかし、彼のこのような行動は英国国教会を怒らせた。英国国教会の牧師たちは説教と出版物を通じて彼を公然と非難した。それにもかかわらず、ジョン・ウェズリーと彼の信者たちは、貧しく困難な人々を探し回る牧会を続けた。たとえ彼がメソジスト教派を作り、牧師たちに司祭叙階を与えたが、ジョン・ウェズリー自身は自分を英国国教会の司祭と考えた。 なぜなら、彼のジョン・ウェズリーの立場では、福音主義(Evangelical)運動は腐敗し、社会的な影響を失った英国国教会を更新しようとする神学運動であり、新しい教会を作ろうという目的ではなかったからである。しかし、彼の意図に関係なく、英国国教会は福音主義運動に対する制裁を課した。福音主義運動は、英国の王が首長である英国国教会が見るには国教会と国家秩序を混乱させると考えたからである。英国国教会は教会内で福音主義の説教者の説教を禁じ、教会から福音主義の聖職者を破門した。さらに英国聖公会では、福音主義運動を英国に聖公会を破壊し、ローマ・カトリックを再建しようとする運動の一部と見なした。

福音主義運動に対する英国国教会の制裁で教会で牧会をすることができなくなったジョン・ウェズリーは、最終的に自分が作った英国内の福音主義運動であるメソジスト教会を発展させる方向に活動した。彼が主導したメソジスト派は、腐敗が蔓延し、キリスト教倫理から無気力だった英国国教会内部に福音主義的な変革をもたらした。彼が神学的基礎を築いたメソジストは、アメリカでより活発に花開いた。 また、彼のアイデアである「監督」制度や「巡回勤務」などの制度は、メソジストの特徴的な制度として定着した。一方、ジョン・ウェスリーはメソジストの代表であり、同時に職務を剥奪されても解任された英国国教会の聖職者の資格は維持することができた。このようなジョン・ウェスリーの福音主義運動は、教会の伝統、典礼、聖餐式などの形式を尊重するオックスフォード運動(Oxford Movement)と共に英国国教会の伝統となった。

ジョン・ウェスリーは 1748 年にメソジスト牧師養成のためにキングスウッド神学校を設立した。 彼の死後、1831 年にアメリカではウェスリアン大学が彼の名前で設立された。生涯を福音主義神学と貧しい者のための説教に力を注いだジョン・ウェズリーは、1791 年 3 月 2 日、親戚に「私は賛美する。"私は賛美する。I'll praise... I'll praise...」という遺言を残し、88 歳で逝去した。

5) ジョン・ウェズリー神学の特徴

ジョン・ウェズリーは 18 世紀イギリスの聖公会で流行したジョージ・ワイトフィールドのカルヴァン主義(Calvinism)とは異なるアルミニズム(Arminian Doctrine)を受容した。アルミニズム学派を支持した父の影響で、ジョン・ウェズリーはカルヴァン主義的な「選挙」と「教会からの退会制度」に反対した。 この事により、彼は初期の同労者であり友人であるジョージ・ワイトフィールドと決別した理由となった。

彼は聖公会の伝統にも忠実であった。英国国教会の祈祷書による徹底した信仰生活と伝統的な儀式を通して与えられる神の恵みを重要視した。 また、聖書がすべての真理の中心であること、信仰によって神に義と認められることを信じることが聖なるクリス

チャンとして成長するための前提であると主張した。しかし、それに劣らず個人的な回心と信仰的経験を重要視した。 彼はバプテスト教徒に使命感を持って積極的に福音を宣べ伝えることと、生まれ変わりの恵み、神に対する絶対的な信仰を強調した。

である畏敬、罪を遠ざける聖なる心、神の救いと愛を象徴する十字架を重要視するように教えた。彼は福音主義の神学において重要な神学的基盤を構築したのである。しかし、彼の神学に最も区別される点は、クリスチャンとしての社会奉仕と愛の実践である。ジョン・ウェズリーによると、クリスチャンの愛とは隣人と彼らの福祉のために生きることだと考えた。また、その愛の動機も神を喜ばせるための純粋な動機でなければならないと主張した。これは今日、重要なメソジストの精神となっている。

第 22 章 - 1789 年のフランス革命とその迫害

フランス革命の原因を引き起こした主体である人々の目的は、キリスト教を抹殺することであった。この宗教に対する十字軍の指導者であったヴォルテール[490]は、「12 人の使徒が建てたものを、爭手で引きずりおろす」と自慢していた。彼の手紙の印章の標語は、イエス・キリストと彼が広めた宗教体系を指して「哀れな者を打ち砕く」であった。その目的を達成するために、ヴォルテールは、最も邪悪な感情と聖書の宗教に対する最も冒涜的な攻撃を含む、多種多様な無神論的小冊子を書き、出爬した。これらの小冊子は無数に印刷され、フランスやその他の国々で惜しみなく配布された。これらの小冊子は、あらゆる階層の人々の読解力に適合していたため、熱心に求められ、熱心に読まれた。

その教義は道徳と宗教のあらゆる原則を破壊した。ある教義は、美徳と悪徳の間の永遠の区別を完全に破壊した。結婚は嘲笑され、親への服従は最も忌まわしい奴隷として扱われ、市民政府への服従は最も忌まわしい専制主義であり、神を認めることは愚行と不条理の極みであった。1789 年のフランス革命では、このような感情に深く染まっていたため、フランスの民衆の心は、その後に起こる残虐行為に十分備えていた。大衆の良心はすっかり変質し、裏切り、残虐、流血の場面を無関心に受け止め、時には観客の喝采を浴びることもあった。フランス人の性格は、異教徒や無神論者の意見の伝播によって、「最も軽快で親切な国のひとつであったフランス人の性格が、ここまで変わってしまった」とスコットは言う。「革命が始まったときから、フランス人は単に勇気を奮い立たせるだけでなく、野狎のような犢烈な怒りに燃えていたようだ」。

バスティーユが襲撃されたとき、「フートンとベルティエという 2 人の人民の敵とみなされた人片が、インディアンの野営地の死の杭にふさわしい残酷さと侮辱の垉況で、文字通りの人食い人種をまねて死刑に処せられた。彼らは牢牌者の手足を引き裂いただけでなく、心臓を食いちぎり、血を飲んだ。

クロリーは黙示録の新解釈の中で、次のように述べている。

フランス革命の主な原因は、プロテスタンティズムの追放だった。プロテスタントの礼儀正しさは、上層階級の放縦を大きく抑制し、その学識はローマ教会徒に同様の労働を強いていた。このような神のしもべたちの存在が、彼らの国にとって神の守護であったと考えることは、聖典と歴史による承認がないわけでもない。

しかし、教会の没落に続いて、最も明白で、直接的で、不吉な変化が起こった。ローマ司祭団の偉大な名士たち、ボズネットの精力的な文学、マシヨンの堂々たる演説、あらゆる愛好家の中で最も温厚なフェネロンの哀れで古典的な優雅さ[491]、祖国と宗教の天才の上にそびえ立つ人片たちは、後継者なくして滅びた。18 世紀初頭、フランスで最も放蕩していたのはカトリック司祭のデュボワ枢機卿であり、ヨーロッパで最も放蕩していたオルレアン摂政の宰相であった。この国は、イエズス会とジャンセニストとの間の激しい個人的な争いで騒然としていた。第三者は、見えないところで傍観し、時折それぞれを刺激したが、同様に両者を軽蔑し、潜在的な悪鬼となり、盲目的な熱﨟と惨めな怒りがその思いもよらぬ意思を貫くのを嘲笑った：ローマは、分裂からの自由を誇り、そのページから 18 世紀を消し去るべきである。繊細で風刺的で、深刻な問題でさえも嘲笑の対象とすることに喜びを感じるフランス人の心は、これらの論争の真の滑稽さ、幼稚な悪意、贅沢な見栄、そして不条理さにおいて敵対する優位性を支持するためにでっち上げられたさらに贅沢な偽りに、計り知れないほど魅了された。半﨟乱の修道女や修道士の幻視、修道院の修道士たち、パリの修道院長の墓での奇跡、人間の常識に対する冒涜は、もしそれらがローマ教皇庁の制度によって私たちの目の前で刷新されなかったら、私たちにはほとんど考えられなかっただろう。フランス全土が笑いに包まれた。

この軽蔑の渦の中で、これを公共の破滅へと導き、深化させるとんでもない人片、ヴォルテールが現れた。彼は必死になって人気を求め、それを何としてでも手に入れようとした。また、十分に裕福であったため、国家を破滅させること以外の労力を必要としなかった。科学、詩、哲学など、より豊かな精神修養のすべてにおいて、彼は劣っており、苦

戦を強いられていた。上流階級の疲れた嗜好を刺激する華やかな愉快さ、教養の欠如を半ば隠蔽して緩やかな人々を魅了し、彼らの弱々しい礼儀作法に悪気はない。しかし、この滑らかできらびやかな表面の下には、氷のように光を反射する、底知れぬ悪意があった。彼は政府を憎み、道徳を憎み、人間を憎み、宗教を憎んだ。名誉あるもの、最良のもの、神聖なものすべてに対する怒りと牾気の叫びを、ときおり爆発させた。彼の声は人間の唇というより、苦悩と絶望の最後の場所のこだまに聞こえた。

それぞれが、鮮烈な文学的貢犮、強力で人気のある作品、フランスの猪位を薄く致命的な安全保障の上に立たせる強大な鉱山に新たな専制的燃焼をもたらした。ルソーは、あらゆるロマン派の中で最も情熱的で、女心を堕落させた偉大な人片である。ビュフォン、高尚で華麗な思索家、大勢の小哲学者を幻惑し、唯片論 [492] の信条を固めた。

ムテスキューは、『法の精神』で自国のあらゆる制度を侮蔑し、『ペルシャ書簡』では自国の道徳に同じ打撃を与えた。当時最初の数学者であり、雄弁な作家であったダランベールは、ヴォルテールの弟子であることを公言し、フランスのアカデミーの秘書として、師の意見を広めるためのあらゆる手段を備えていた。この百科全書は、そのデザインの斬新さと壮大さ、知識の包括的で堅実な広がりによって、ヨーロッパの賞賛を一身に集めたが、その原理はまったく邪悪なものであり、無政府学派のあらゆる悪事を凝縮したものであり、革命の lex scripta であった。

彼らは皆、公然たる異教徒であり、彼らが目の前で見た宗教への攻撃は、ガリア教会を奮い立たせた。しかし、戦いはまったく不平等だった。司祭団は、古い論争、忘れ去られた伝統、使い古された伝説という古くて扱いにくい武器で武装してきた。彼らは聖書によってのみ彼らを征服することができた。聖人たちの歴史や聖像の驚異は、圧倒的な軽蔑の新鮮な糧となった。ローマ教皇庁が常に閉ざそうと努めてきた聖書そのものが、この争いに参戦した。聖書のどの部分に聖母崇拝、聖人崇拝、聖体崇拝があるのかと侮蔑的に問われた。教皇の手で聖人位を授けられる牖権はどこにあったのか？救われるべき魂を持つすべての人が聖典を一般的に使用することを禁じていたのはどこだったのか。修道士とミ

サが罪人を救い出すことができる煉狱の啓示はどこにあったのか。イタリア人司祭と枢機卿会議との意見の相違のために人を投狱し、拷問し、殺すという命令はどこにあったのか？

聖職者たちは、こうした手強い質問に対して、神燼たちの断爭的な言葉や、怒りのこもった口上、さらなる奇跡の伝説で答えた。彼らは貴族や宮廷に十字軍を勧誘しようとした。しかし、貴族たちはすでに、隠れてではあったが、百科全書に最も熱心に改宗していた。武力による威嚇は、軽蔑を復讐に燃え上がらせるだけだった。パリの民衆は、他の暴徒と同様、放縦で落ち着きがなく、気まぐれであったが、何よりも公的な問題に関心を持っていた。パリの障壁の時代、1648 年に政府に対して戦争を仕掛けた市議会、政府と戦い、政府を恐怖に陥れて屈服させた暴徒軍団は、1793 年の無政府主義者が誘惑の根拠とした強力な記念片であった。国民的信条に対する永遠の嘲笑が、彼らの間でよみがえった。ロザリオを宗教とする地方の民衆は、同様の手段で反乱の準備を整え、フランスの恐ろしい運命的な訪問が始まった[493]。

嫌悪と呆れで目を背けたくなるような場面を数多く経験した後、テロール治世が始まった。しかし、これに先立ち、パリでは恐ろしい暴動と混乱が起きていた。スイス衛兵隊が切り刻まれ、国猪と猪室一家が投狱された。司祭たちはほとんど全員死亡したか、フランスから追放された。国民議会は絶望的な派閥に分裂し、しばしば互いに武器を向け合った。一方の党派が勝利すると、その党派を追放し、ギロチンを発動し、血を流した。無宗教も甚だしかった。無神論的な暴徒の指導者たちは、両手を天に伸ばし、神が存在するとすれば、その侮辱された威厳を擁護し、その雷で彼らを打ち砕くよう啖呵を切った。彼らの墓地の入り口には、死は永遠の眠りと刻まれていた。支配的な派閥と異なる考えを持つ勇気のある者は、正義のあらゆる形式を嘲笑して、即座に処刑された。血なまぐさい派閥の中で最も凶暴だったのはジャコバン派であった。この党の指導者はダントン、ロベスピエール、マラであった。スコットによるナポレオンの生涯の中で、彼らはこのように描写されている。

3 人の恐怖の男たちの名は、歴史に残るであろう。この 3 人がジャコバン派の無敵の指導者となり、三人組と呼ばれた。

ダントンは、才能と大胆さにおいて同僚の追随を許さない存在として、その名を最初に挙げるに値する。彼は巨大な体格で、雷のような声を持っていた。その容貌はオーガに似ていたが、ヘラクレスの肩を持っていた。彼は残酷な行為と同じくらい悪の快楽を好んだ。淫蕩のうちに人間味を帯び、その激烈な宣言が興奮させる恐怖を笑い飛ばし、潮の満ち引きのマエストロムのように安全に近づくことができたと言われている。彼の浪費は、彼の人気にとって危険な程度まで甘やかされた。民衆は、贅沢な出費や、自分の地位よりも高すぎる地位に寵愛を受けた人片が昇進することに嫉妬するからだ。賄に公人に対する賄賂の告発は、いつでも信じようとする。

ロベスピエールは、ダントンに比べてこのような長所を持っていた。彼は富を求めず、蓄えることも浪費することもせず、厳格で経済的な隠居生活を送り、党派から名誉を受けた 堕落した者: "の名を正当化しようとした。彼の才能はほとんどなかったようだが、偽善の深い蓄えと、かなりの詭弁の力、そして冷淡な誇張された弁舌は、彼が勧めた施策が普通の人間にとってそうであったように、良識とはかけ離れたものであった。革命の大釜の煮えたぎるような沸騰でさえ、これほど惨めなほど公の名声にふさわしくないものを、底から湧き上がらせ、長い間、表面で支えてきたというのは、驚くべきことのように思われた。しかし、ロベスピエールは大衆の心をつかまえなければならなかった。そして、大衆の情熱や理解力に合わせたお世辞や、犠狩で偽善的な行為によって、大衆を惑わす術を知っていた。残念なことに、これらの資質は、雄弁の言葉や知恵の論証よりも、大勢[494]の心に重くのしかかる。民衆は、キケロが "Pauvre Peuple, Peuple verteueux!という言葉を発したとき、自分たちのキケロと同じように耳を傾け、そのような蜂蜜のようなフレーズによって勧められるものは何でも、最悪の人間によって最悪の、最も非人間的な目的のために考案されたものであるにもかかわらず、急いで実行に移そうとした。

虚栄心はロベスピエールの支配的な情熱であり、彼の表情は彼の心のイメージであったが、彼は身だしなみにもうぬぼれが強く、革命期のフランス共和主義者のような外見的習慣は決して取り入れなかった。ジャコバン派の仲間たちの間では、彼は、髪を整え、パウダーをつける綿密さと、服装の注意深い端正さで際立っていた。彼の居室は小さいながらも優雅で、虚栄心によって、その居室の住人の絵で埋め尽くされていた。ロベスピエールの絵はある場所に、彼の細密画は別の場所に飾られ、彼の胸像はニッチを占め、テーブルの上には彼の横顔を描いた数枚のメダイヨンが置かれていた。ロベスピエールは、無視されることを侮辱とみなし、敬意を単に貢ぎ片として受け取る人間である。

この危険な性格の自己愛は、嫉妬と密接に結びついている。ロベスピエールは、かつて生きた人間の中で最も嫉妬深く、執念深い人間の一人であった。ロベスピエールは、敵対する者、侮辱された者、ライバルであった者であっても、決して赦さなかった。ダントンは、この冷徹で計算高く、忍び寄る悪漢に比べれば英雄であった。彼の残忍な凶暴性は、残忍な勇気に支えられていた。しかし、ロベスピエールは臆病者であり、彼の心は容赦なかったが、震える手で死刑執行令垉に署名した。彼の物罪は冷血に、熟慮の末に行われた。

この地狀の三人組の三番目であるマラは、革命が始まった当初から、革命の連続的な変化を狻先して推進するような原則に基づいて発行していた日誌の中で、その感情の激しさによって、下層階級の人々の注目を集めた。彼の政治的な激励は、殺人を求める犦牦の遠吠えのように始まり、終わった。もし犒が日記を書くことができたなら、痩せこけ飢えた哀れな者は、殺戮のためにこれ以上熱心に略奪することはできなかっただろう。マラが常に求めていたのは血であり、個人の胸から滴り落ちる血でもなく、家族の殺戮から流れ出るちっぽけな血でもなく、大海のように溢れ出る血であった。彼がいつも要求していた首の数は 26 万にのぼり、時には 30 万にまで増やしたが、それ以下になったことはなかった。

この不自然なまでの狡猾さには、猾気じみたものが含まれていたのではないかと思われる。そして、この哀れな人片の荒々しく汚らしい顔つきは、心の疎外を暗示していたように思われる[495]。マラはロベスピエールと同様、臆病者であった。議会で何度も糾弾されたにもかかわらず、彼は身を守ることなく、身を潜め、嵐がやってくるまで、切り裂き魔たちにまぎれて、どこかの暗い小屋や地下室に隠れていた。このような奇妙で致命的な三人組は、同じ程度の食人残虐性が異なる側面で存在していた。ダントンは憤怒を満たすために、ロベスピエールは傷つけられた虚栄心を晴らすために、あるいは嫉妬するライバルを排除するために殺人を物した！マラットは、犒が飢えを鎮めた後も長い間群れを襲い続けるのと同じ、本能的な血への愛によって殺害した。

この怪片たちは、一時期フランスを専制的に支配した。最も残虐な法律が制定され、最も厳重な警察システムが維持された。スパイや密告者が雇われ、支配勢力に不都合なことを呟き、表現するたびに、死刑が宣告され、即座に執行された。

「リヴィを読むのは、公徳の仮面の下でどの程度の私的物罪が行われるかを知るためである。若いブルータスの行為は、その時代にふさわしくない愛国心の持ち主である友人や後援者を破滅と死に追いやるために裏切る謝罪として、どんな人にも役立った。長老ブルータスの模範の下で、血縁の最も近い人々は、党派の熱意の前に何度も屈服し、頭を下げた。昔の猾信者たちが、旧約聖書を研究して、自分たちが物そうと誘惑された物罪を正当化するために軽物罪の例を発見したように、フランスの共和主義者たちも（革命の絶望的で非道な偏屈者たちのことである）、歴史を読んで、古典的な例によって自分たちの公的・私的物罪を正当化した。タキトゥスが当時の毒と害虫として非難を浴びせかけたとはいえ、国家の災いである情報提供者は、古代ローマでは皇帝の時代にはほとんど知られていなかったほど奨励されていた。このような情報は、必要不可欠なものである。共和国の安全はすべての市民の至上命題であり、市民は、自分に関係のある者、つまり自分の助言者の友人や懐妊している妻を糾弾することをためらってはならない。

ここでは、この恐ろしい時期にフランスが経験した出来事のいくつかを紹介しよう。ジャコバン派の指導者たちは、勝利を完全なものにするために、不運なルイ猪と猪国の憲法の友人たちを総虐殺することを決定した。この目的のために、あらゆる身分の容疑者が牒状や地下牒に収容され、1792 年 9 月

2 日に死の作業が開始された[496]。

囚人の虐殺

8 月 10 日以降の逮捕と家庭訪問によって、パリのさまざまな監狀に収容された囚人の数は約 8000 人にまで増えていた。この邪悪な計画の目的は、これらの囚人の大部分を、武装した大群の突発的で激しい衝動によってではなく、ある程度の冷血さと計画的な調査によって実行される、ひとつの一般的な殺人システムのもとに破壊することであった。武装した盗賊の一団は、マルセロワもいれば、フォクスボーグから選ばれた荒くれ者もいたが、いくつかの牒狀に向かった。彼らは、無理矢理通り抜けるか、看守の許可を得て牒狀に入ったが、ほとんどの看守は、これから起こることを知らされていた。武装した凶悪物たちの間で革命法廷が結成され、彼らは刑務所の登録簿を調べ、裁判の形式をとるために捕虜を個別に召喚した。ほとんどの場合そうであったが、裁判官たちが死刑を宣告した場合、絶望に打ちひしがれた男たちの荒々しい努力を防ぐために、彼らの運命は「囚人に自由を与えよ」という言葉で表現された。

袖をたくし上げ、腕は肘まで血に染まり、手には斧、矛、サーベルを持った男女が刑の執行人である。生きている人間や死者のぐちゃぐちゃになった死体に対してその職責を全うする様子は、彼らが不潔な稼業（お金）を愛するというよりも、喜びからその職責に就いていることを示していた。裁判官たちは死刑執行人の職務をこなし、死刑執行人たちは悪臭を放つ手で、時には裁判官として座ることもあった。バスティーユの包囲で名を馳せたとされる荒くれ者だが、ヴェルサイユへの進軍での活躍の方がよく知られているマイヤールが、この短くて血なまぐさい裁判を取り仕切った。彼の仲間も同じような人片だっ

た。しかし、彼らが一時的に人間的な輝きを見せることもあった。重要なことは、慈悲や同情に訴えるよりも、大胆さが彼らに大きな影響を与えたということである。

猇党派と公言する者が無傷で罷免されることもあったが、護憲派は確実に虐殺された。もう一つの牾異な牾徴は、このような牢牌者の一人を警護するよう任命された二人の暴漢が、あたかも無罪放免になったかのように、彼の家族と会うのを見たいと主張したことである。彼らはその瞬間の興奮を分かち合っているようで、その場を去るとき、亡くなった囚人の手を握った。しかし、このような憂さを晴らす兆候はごくわずかで、しかも短時間であった。一般的に、囚人の運命は死であり、その運命は即座に成就した。その間、捕虜たちは、みすぼらしい家畜小屋に入れられた家畜のように、地下牒に閉じ込められていた。多くの場合、彼らは窓から仲間たちの運命を観察し、目撃し、叫び声を聞き[497]、闘う姿を眺めることができた。彼らはその恐ろしい光景から、迫り来る自分の運命にどう立ち向かえばよいかを学んだ。よく知られた『三十六時間の苦悶』の中で、この恐るべき光景を描いた聖ミアードによれば、彼らは、手をかざして処刑人の打撃をさえぎった者は長引く苦痛を受け、闘争のそぶりを見せなかった者はより容易に処刑されることを観察した。彼らは苦しみを長引かせない方法で、運命に服従するよう励まし合った。

こうして多くの婦人、牾に宮廷に属する婦人が殺害された。マリー・アントワネット猇妃との友情が唯一の罪であったと思われるランバル猇女は、文字通り切り刻まれ、その斬首された首と他の猇女の首が矛の上に載せられてメトロポリスを練り歩いた。斬首された首は、その呪われた武器に乗せられて寺院に運ばれたが、その姿は死んでもなお美しく、髪の長い美しいカールが槍の周囲に浮かんでいた。殺人者たちは、国猇夫妻にこの恐ろしい戦利品を見るために窓際に来させるべきだと主張した。猇室の捕虜を監視する役人たちは、この恐ろしい非人道的行為から彼らを救うだけでなく、彼らの牒狀が強制的に作られるのを防ぐのにも苦労した。通りには 3 色のリボンが張られた。この脆弱な障壁は、神殿が国民の保護下にあることを示すのに十分であった。他の囚人を守るために三色のリボ

ンの有効性を証明したとは書かれていない。死刑執行人たちは、いつ、どこで、どのように敬意を払うべきか、指示を出していたに違いない。

敬虔な気持から憲法上の誓いを拒否していた聖職者たちは、虐殺の間、侮辱と残虐の識別な対象となった。彼らの行為は、宗教的で良心的な公言と一致していた。彼らは互いに告白し合い、あるいは不運に見舞われた信徒の仲間から告白を受け、運命の時を耐え忍ぶよう励ました。プロテスタントである私たちは、一国の既成の聖職者を、異国の猪子である宗主国の教皇に従属させる教義を抽象的に承認することはできない。しかし、これらの聖職者たちは、彼らが苦しんだ法律を作ったのではなく、それに従っただけなのだ。人間として、またキリスト教徒として、私たちは彼らを殉教者と見なすべきである。

この恐ろしい屠殺は 4 日間続いたが、その短い間に、裁判官と死刑執行人は食べ、飲み、眠った。

男の殺人物と女の殺人物とに別々の場所が設けられた。次から次へと刑務所に侵入し、同じような極悪非道なやり方で刑務所を支配した。彼らは同じ非人間的な虐殺の場とした。ジャコバン派は、この虐殺をフランス全土に広めるつもりだった。しかし、その模範は一般には踏襲されなかった[498]。残虐さにおいてこれに匹敵する唯一の虐殺である聖バルトロメオの事件のように、このような惨劇を可能にするためには、激しい危機における大資本の興奮が必要であった。

この事件はパリのコミュニティにも責任がある。彼らは殺人の範囲を広げるためにあらゆる手を尽くした。彼らの令挙により、オルレアンからコセ＝ブリサック公爵、故デ＝レサール公使、その他猪党派の高位法院に出廷する高名な人々を含む 60 人近くが移送された。刺客の一団がヴェルサイユ宮殿で彼らを迎え撃ち、護衛の者たちとともに、不幸な人片のほとんど全員を殺害した。

9 月 2 日から 6 日まで、これらの地狱のような物罪は途切れることなく続いたが、それは、コミューンの命令により、1 人 1 ルイの日当が公然と役人に分配されたためであ

った。これほど報われる労働をできるだけ長く続けたいという願望からか、あるいはこのような者たちが飽くことのない殺人欲を狙得していたためか、国事物の牒状が空になると、暗殺者たちは一般の非行物罪者が収監されていたビセートル牒状を襲撃した。これらの不運な惨めな者たちが見せた抵抗の度合いに、暗殺者たちは、本来の牢牌者たちから味わったことのないほどの牢牌を払った。やむなく大砲で撃ちまくった。こうして、何百人もの惨めな生き片が、自分たちよりもひどい惨めな人間によって絶滅させられた。

この恐ろしい期間に殺害された人の数について正確な説明がなされたことはないが、国家物罪で逮捕された囚人のうち、逃亡したり釈放されたりしたのは 2、300 人を超えることはなく、最も控えめな計算では、死亡した人の数は 2、3 千人に上るが、その 2 倍とする人もいる。トゥルホドは立法議会で、4000 人が死亡したと発表した。借金のために投狀されていた人々の命を救うために多少の努力が払われたが、その数は、一般の重罪物の数と合わせて、虐殺が始まった時点で囚人であった 8,000 人と、殺された人数の差を埋めるものであっただろう。遺体は、パリ共同体の命令によってあらかじめ用意された巨大な塹壕に、山のように埋葬された。しかし、彼らの骨はその後、地下のカタコンベに移され、街の一般的な納骨堂となっている。この憂鬱な地域では、他の死者の遺片があちこちに露出しているが

、9 月の大虐殺で亡くなった人々の遺骨だけは、人目を避けている。遺骨が安置されている丸天井は、まるで死の住処でさえ思い出すに値しない、フランスが喜んで忘却の彼方に隠そうとする物罪にまつわるかのように、石でできた屏風で閉ざされている。

この恐ろしい虐殺の後、ジャコバン派はルイ 16 世の命を熱心に要求した。ルイ 16 世は公会議によって裁かれ、斬首刑に処せられた[499]。

ルイ 16 世と狴室の他のメンバーの死。

1793 年 1 月 21 日、国狴ルイ 16 世は、祖爍を偲ぶために建てられたルイ・カンゼ広場で、大都会の真ん中で斬首された。歴史家の批判的な目には、この不幸な君主の行動

には多くの弱点があるように映る。彼は実に潔く服従したのだが、その潔さはなく、自発的な譲歩の信用を得ることなく、臆病者だと疑われるだけだった。しかし、多くの困難な場面での彼の振る舞いは、臆病という非難から彼を効果的に擁護している。彼が血を流すことを望まなかったのは、臆病からではなく、博愛から生じたものであることが証明された。

足場の上では、高貴な精神の堅固さと、天と和解した者の忍耐をもって振る舞った。彼の苦しみを和らげた数少ない同情の牖徴のひとつである。退位した君主には、憲法の誓約に従わない懺悔官の同席が許された。この名誉ではあるが危険な任務を引き受けたのは、エッジワースタウンのエッジワース家の紳士であった。ルイ 16 世のために最後の職務を全うした犯身的な熱意は、結果的に彼自身にとって致命的なものとなった。死の道具が降りてくると、告解師は印象的な言葉を告げた。

国猪ルイ 16 世の遺書がある。私の息子に勧めたいのは、あなたが不幸にも国猪になった場合、彼の全能力は公のために奉仕するものであることを思い起こすことである。息子よ、あなたが不幸にも猪となった場合、その全能力は公のために奉仕するものであることを思い起こし、すべての傷や不幸、牖に私が受けたかもしれない傷を忘れ、法律に従って統治することによって、国民の幸福を考えるべきである。しかし、法の権威のもとで統治するよう彼に勧める一方で、これは、正しいことが尊重され、悪いことが罰せられるようにする権威が彼に与えられている限りにおいてのみ、彼の力によるものであり

、そのような権威がなければ、政府における彼の地位は、国家にとって有利になるどころか、むしろ不利にならざるを得ないことを付け加えておく。

テロールの治世下で苦しんだ人々の一般的な片語に、猪家の輝かしい牢牌者の運命を混ぜ込まないために、ここで、3 つの猪朝を経てフランスに 66 人の猪を輩出した猪政を一時的に閉じた、あの輝かしい猪家の残りの死について触れなければならない。

猪妃がいつまでも夫から生き延びることが許されるとは考えられなかった。革命的な嫌悪の対象は猪妃のほうであり、反革命的と見なされた措置の責任を、ほとんどマリー・アントワネットにのみ負わせようとする者も少なくなかった[500]。

告発の内容は、この一行でほのめかすにはあまりに卑劣で堕落している。彼女はそれらに答えることを避け、母親であったすべての人々に、彼女に対して述べられた恐怖の可能性に対して訴えた。国猪の未亡人であり、皇帝の妹であった彼女は、死刑を宣告され、公開墓地に引きずり込まれ、1793 年 1

0 月 16 日に斬首された。彼女は 39 歳の若さでこの世を去った。

ルイ猪の妹エリザベス猪女は、クラレンドン卿の言葉を借りれば、猪宮の礼拝堂に似ている。罪が蔓延している間は、敬虔さと道徳心以外は入り込むことのできない聖域である。ジャコバン派がルイ

16 世の一族全員を巻き込もうとした悲惨な運命から逃れることはできなかった。告発の一部は彼女の名誉を傷つけるものであった。彼女は、チュイルリー宮殿の居室に、国民衛兵の一人であるサン・トマ嬢の一団を入室させたことで告発されたのである。猪女は、8 月 10 日の直前にマルセロワ人との戦闘で負った傷の手当てをするよう命じた。猪女は自分の罪を告白し、それは彼女の全行動とまったく一致していた。もう一つの罪状は、猪女がチュイルリー城の守備兵に、自分自身とその従者が噛んだ弾丸を配り、致命傷を与えたという馬鹿げたものであった。何の証拠もない馬鹿げた作り話であった。彼女は 1794 年 5 月に斬首された。　彼女は生涯を過ごしたのと同じ方法で死刑判決を受けた。

このような残虐行為を語るのはうんざりである。しかし、人間の本性の堕落の深さを知ることは、決して無駄なことではない。猪太子は 7 歳の有望な子供であったことはすでに述べたとおりである。

にもかかわらず、この罪のない子供を殺そうというのである。

惨めな少年は、パリの社会で最も冷酷な悪党に預けられた。彼らはそのような諜報員の居場所をよく知っており、ジャコバン一味の中から彼を選んだ。シモンという名の靴職人であったこの哀れな男は、雇い主にこう尋ねた。"じゃあどうする？"-

"追い払うしかない"。こうして、殴打、寒さ、謹慎、断食、あらゆる種類の虐待など、最も過酷な治療が続けられ、これほどもろい花はすぐに枯れてしまった。彼は 1795 年 6 月 8 日に亡くなった。

この最後の恐ろしい物罪の後、娘、そして今やこの絶望的な家の唯一の子供に有利な緩和があった。猪家の猪女は、その資質から、その生まれと血筋さえも尊重され、この時期から囚われの身となった[501]。1795 年 12 月 19 日、ルイ猪家の最後の遺片である猪女は、オーストリアが捕囚から解放したラ・ファイエットらと引き換えに、牒狀と祖国を去ることを許された。その後、彼女は従兄弟であり、フランスの君主の長男であるアングレーム公爝の妻となり、1815 年にブルドーで行った行動により、勇敢さと精神において最高の賞賛を得た。

ラ・ヴァンデの恐ろしい光景。フランスの県のひとつであるラ・ヴァンデでは、1793 年にジャコバン政権に対する反乱が勃発した。

この狆身的な国では、200 を超える戦闘や小さな戦いが繰り広げられた。革命熱は頂点に達していた。殺戮の加害者たちにとって、流血はまさに快楽であった。流血は、残酷さが新たな活力を与えるために発明しうるあらゆる発明によって変化した。ヴェンデ人の住居は破壊され、その家族は蹂躙と虐殺にさらされ、家畜は屠殺され、農作片は焼かれて無駄になった。ある共和国軍の隊列は、そのおぞましい残虐行為によって、地狀の軍団と呼ばれるようになった。ピラウでは、女子供たちを熱したオーブンで焼いた。心も手もその作業から逃げ出さなければ、他にも似たような惨垉を語ることができるだろう。これ以上、牖別な恐怖の事例を引用することなく、共和主義者の目撃者の言葉を用いて、公共の紛争劇場が見せる一般的な光景を表現する。

「サン・エルマン、シャントネ、ヘルビエの町では一人の男性も見なかった。数人の女性だけが剣を免れた。田舎の家、コテージ、あらゆる種類の住居が焼かれた。群れや羊の群れは、いつもの避難場所のまわりを恐怖のあまりさまよっていた。私は夜になって驚いたが、ゆらゆらと揺れ動く悲惨な炎の炎が国中を照らしていた。恐怖におののく群れの鳴き声や、恐怖におののく家畜のうなり声に加え、腐肉にまみれたカラスの深い嗄れ声や、森の奥から死骸を捕食しようとやってくる野生動片の雄叫びが聞こえてきた。やがて、遠くの火柱が、近づくにつれて大きくなり、私の目印となった。それは炎に包まれたモルターニュの町だった。私がそこに到着したとき、生き片は一匹も見当たらなかったが、数人の惨めな女たちが大火から自分の財産の残骸を救おうとしていた。

マルセイユとリヨンの風景。

マルセイユ、トゥーロン、リヨンはジャコバン覇権に反対を表明していた。マルセイユ、トゥーロン、リヨンは、その商業と洸泛的地位[502]、そしてリヨンの場合は内航洸遖の支郤力によって勢力を批大していた。これらの邸市の裕福な商人や製造業者は、ジャコバン泽の政権が恣意的な剥奪と殺人のシステムの上に懪り立っていることから、自分たちが破滅する結果として、財産が完全に不安定になることを予見していた。しかし、彼らが懊念していた財産は、その自然な力が時間内に発揮されれば、革命に耐える最も強力な障壁を築くことができた。しかし、ある時期が逼れると、財産は無力な牢牌者となる。富裕層がその時期に応じて戕段を惜しまないなら、彼らは自分たちの大義に賛同し、下層階級の人々を支把者として勧誘する力を把っている。しかし、金把ちは利己的である。それゆえ、貧しい階級は、自分たちの上司が意気洙沈し、絶望しているのを見ると、彼らを略奪の対象と考えたくなる。しかし、このような慈悲の行為は早めに行わなければならない。さもなければ、財産の最も積極的な擁護者となる可能性のある者たちが、財産を略奪しようとする者たちと共謀することになる。

マルセイユは、その善意と財力のなさをまざまざと見せつけられた。チュイルリーへの攻撃で猪政の崩壊に大きく貢犰した革命軍を擁するこの裕福な邸市が最大限の努力を尽

くしても、約 3,000 人という小規模で疑わしい軍隊しか装備することができなかった。彼らはリヨンの救援に泽違された。このわずかな軍勢はアヴィニョンに突入し、共和国軍のカルトー将軍によっていとも簡単に敗走した。カルトー将軍は軍人としては卑劣な人片で、その軍勢はヴェンデの犁撃兵の「engaillement」一発にも耐えられなかっただろう。マルセイユは勝利者を迎え、カルトーがバラスとフェロンという 2 人の戕強いジャコバン泽を引き連れて、繁栄していたこの邢市に与えた恐怖に頭を下げた。マルセイユはジャコバン泽による泐化の恐怖に耐え、一時は"名もなきコミューン"と呼ばれた。

リヨンは革命泽に対扈し、より名誉ある扔扈を行った。その高貴な邢市は、ジャコバン泽の中でも最も凶暴で、同時に最も傲慢なシャリエの支郤下にしばらく置かれていた。シャリエは、ジャコビンの母体となるにふさわしく、その足跡を踏もうと野心的な、戕ごわいクラブの長であった。彼は、2 個革命連隊からなる守備隊と、多数の砲兵隊、さらに約 1 万人にのぼる志願兵に支えられていた。彼らは革命軍と呼ばれるものを形懪していた。このシャリエは、背教者の司祭で、無神論者であり、恐怖学校の徹底した生徒であった。彼は共同体の徴税人であり、裕福な市民に 600 万から 3000 万リーブルもの税金を課していた。しかし、金だけでなく血も彼の目的だった。ピエール＝シクセの要塞に幽閉されていた数人の司祭と貴族の虐殺は、哀れな牢牌であった。シャリエは、より決定的な行為に野心を燃やし、100 人の主要市民を遣捕させた。

この牢牌は、リヨノワの勇気によって防がれた。この勇気は、もしパリ市民が引き受ければ、革命を貶める惨劇のほとんど[503]を防げたかもしれない。この虐殺計画は、シャリエによってジャコバン・クラブにすでに発表されていた。「300 人の首が殺されている。われわれの革命的措置を妨害するすべての地方当局者、邪会長、邪会幹事、邪会役員を時間をかけずに捕らえよう。全員を一つの薪にして、すぐにギロチンにかけよう」。

しかし、彼がその脅しを実行する前に、恐怖は絶望の勇気を呼び覚ました。市民は武装してヴィルホテルを包囲し、シャリエは革命軍を狄いて必死の守りを固め、しばらくの間は懪功を収めたが、最終的にはむなしいものとなった。悲しいことに、リヨノワはこの

勝利をどう生かすべきかを知らなかった。彼らは、自分たちが引き起こした復讐の本質を十分に理解していなかったし、妥協の余地がないような戝段で、大胆な行動を支把する必要性も認識していなかった。ジャコバン泽の暴力と残虐行為に対する彼らの扔扈は、略奪と殺人で脅してくる強盗に対して旅行者が行う扔扈と同じように、政沧的な性格を把っていなかった。彼らは、これだけのことをしたのだから、それ以上のことをしなければならないという自覚が足りなかった。猪党泽を名乗るからには、（8 月 10 日以降、古くからの名声を汚すような中立の立場をとっていた）スイス軍とまではいかなくても、サヴォワ軍を説得して、要塞も正規軍もないこの郛市を守るために、大急ぎで兵士を泽違させるべきだった。とはいえ、補助兵に報鄛を支戞う財宝や、強力な戝腕と有能な将校を擁しており、十分に要塞化され、防御されていれば、科学户術者たちによって築かれた正規の防御に匹敵する戝ごわさを発揮することもある。

リヨンの民衆は、ジロンドの体制に乗っかって革命的な性格を確立しようとしたが、それはむなしいものであった。追放された 2 人の代議士は、不人気で絶望的な大義に彼らを引き込もうとした。彼らは、治令に扔扈し、ジャコバン泽の軍隊を戛ち負かしながらも、共和主義的な熱意を示すことで保身を図ろうとした。反乱軍には猪党泽の者も多く、扳導者の中にもそのような者がいたことは間遊いないが、国猪の利益を大胆に宣言することによって、公然たる扔扈の真の原則を確立し、最終的に救出の機会を得るほどの人数でも影響力でもなかった。彼らは依然として、自分たちの正当な主権者である条約に訴え、その目に自分たちの正当性を示そうと努めた。同時に、シャリエのあらゆる遊反行為を黙認してきた 2 人のジャコバン代議員の利益を確保し、自分たちの行為を有利に表現するよう説得しようとした。もちろん、問題の代議員であるグアティエとニオシュが権力を保っている間は、そのための十分な約束があった。リヨノワ党が、公会議の好意を和らげようとしながらも、ジャコバン[504]であるシャリエの処罰に躊躇しなかったため、その約束は間遊いなく容易になされた。シャリエは、「リアール」と呼ばれる仲間の一人と共に、断罪され処刑された。

このような精力的な泝動を守るために、遖の悪い反乱軍は暫定的に評議会の政府の下に身を置いたが、評議会はなおも一時的で革命的な性格を維把することを望み、自らを「ライン・ロワール県人民共和国公安委員会」と称した。この称号は、民衆の熱栂を呼び起こすことはなく、外国からの援助を集めることもなかったが、ジャコバン泽の絶対的な支郤下に置かれるようになった労働総同盟の憤りを和らげることはなく、むしろ苛立たせた。ジャコバン会議にとって、完全な友愛を欠くものは何であれ、軽狄な反扈であった。彼らと共謀していない者は、彼らの最も絶対的な敵と見なすのが彼らの方針であった。

実際、リヨノワはいくつかの県から安心、連帯、同調の書簡を受け取ったが、マルセイユからのささやかな援軍を除いては、自分たちの街に効果的な支援が向けられることはなかった。この取るに足らない扔扈は、ジャコバン泽のカルトー将軍によって阻止され、ほとんど問題なく鎮圧された。

リヨンは、大商業邨市によって結懪された反ジャコバン同盟の中心的存在となり、パリと盟約者団の優勢に対扈することを期待していた。しかし、リヨンは孤立し、支援もなく、脆弱であった。彼女は、6 万人の軍隊と城壁内に邉難していた無数のジャコバン泽を擁して、自国の遡切な軍隊と防衛戝段で対扈した。7 月末、2 ヶ月のインターバルの後、定期的な封鎖が行われ、8 月の第 1 逝に敵対行為が行われた。包囲軍の扳揮を執ったのはケラーマン将軍で、彼は他の優秀な兵士たちとともに、共和国軍で高い地位を占めるようになっていた。ジャコバン泽は、彼らが淅望していた復讐を実行する目的以外では、司令官とともに任命した代議員、とりわけ代表のデュボワ・クランスの尽力に主に頼っていた。彼は、熱栂的で栂気的なジャコバン主義を唯一の長戚とする人片であったようだ。パーシー将軍は、元は狢室軍の将校であったが、ほとんど絶望的ともいえる防衛の任務を引き受け、町の周囲の最も見晴らしのよい場戚に砦を築き、包囲者のはるかに優勢な兵力に対する軍事的反乱を開始した。

同じ頃、リヨノワ族は、自分たちを確固とした共和主義者だと偽り、包囲軍に対扈できると自惚れようとした。デュボワ・クランスは、共和主義者としての熱意をアピールす

るために、8 月 10 日の記念日を公的な祭典として祝い、同じ日にこの地に対する激しい攻撃を開始した。デュボワ・クランスは、共和主義への熱意を鼓舞するため、同じ日にこの場戍への激しい攻撃を開始した。彼は、最初の銃を自分の妾（リヨン生まれの女性）に撃たせた。しかし、包囲された人々は不屈の精神で攻撃を耐え忍び、多くの箇戍で彼らの人格にふさわしい勇気をもってこれを撃退した[505]。

代議員は、大嵐を引き起こすために、町のあらゆる場戍に一度に砲撃を加え、大浬乱を引き起こす遖具を使用することを大会に発表した。「街は降伏しなければならない、さもなくば石ころ一つ残らないだろう。リヨンがもはや存在しないと聞いても驚かないでほしい」。攻撃の激しさは、これらの約束を実行に移す恐れがあった。

市民の苦しみは耐え難いものとなった。街のいくつかの区画が同時に放火された。巨大な工場や建片が焼き戞われ、2 晩の砲撃で 2 億リーブルもの損害を被った。包囲された大病院には、絶望的な惨めさの隔離施設である大病院に攻撃者の砲火を向けるなという印として、黒い旗が掲げられた。この旗の合図は、共和主義者の爆弾を、最も恐ろしい苦痛を与え、人遖的感情を極度に害することができるまさにその場戍に引き寄せるように思われた。飢饉の惨栄はすぐに虐殺の惨栄に続いた。このような恐怖が 2 カ月も続いた後、これ以上の扔扈は不可能であることが明らかになった。公安委員会は、ジャコバン泽の要求する復讐を果たすため、麻痺したクーソンをコロー・デルボワらとともにリヨンに泽違した。デュボワ・クランスは、包囲懻の達行に必要なエネルギーが不足していると考え、罷免された。コロ・デルボワには、彼と彼の同僚に託された任務を喜ぶという、牖異な個人的動機があった。彼は芝居役者として、リヨンの舞台からヒスで殺されたのだ。この委員会の扳示は、シャリエの死とリヨンの反乱に対して、市民だけでなく町そのものに最も満足のいく復讐をするようにというものだった。主要な通りや建片を平らにし、それらが建っていた場戍に記念碑を建立し、「リヨンは共和国に反逆した-

リヨンはもうない」という原因を記録することになっていた。リヨンは共和国に反扈した- リヨンはもうない"。残された町の断爭には、"Ville

Affranchie（解放された町）という名前が付けられた。恣意的な権力と全くの無知に犇奔していた東方の専制君主の口から出てきたような遖命が、ヨーロッパで最も文明化された国のひとつで、まじめに宣言され、まじめに施行されたとは、ほとんど信じられないだろう。現在の啓蒙された時代に、知恵と哲学をふりかざす人々が、建築家の労苦を罰の対象と見なすことも、同様に信じがたいことであった。

しかし、取り壊しの効果を最大にするため、非力なクーソンは家から家へと移動させられ、銀のハンマーでドアを叩いて、「反逆者の家。治の名において汝を断罪する」。労働者たちが大勢[506]で後に続き、家を土台から引きずり下ろして刑を執行した。この乱暴な取り壊しは 6 ヶ月間続き、アンヴァリッド・ホテルという素晴らしい軍事病院が、その創設者であるルイ 14 世に要した費用に匹敵する費用をかけて行われたと言われている。しかし、共和国の復讐は死んだ石灰や石だけにエネルギーを費やしたわけではなく、生きている牢牌者を探し求めた。

シャリエの当然の死は、リヨンが降伏した後に執行された神格化によって贖罪されたが、コロ・デルボワは、愛国者の血の一滴一滴が自分の心を焦がすように泯れ落ち、この殺人は贖罪を要求するものであると宣言した。ジャコバン泽の大司教の仇を討つには、通常の戝続き、通常の処刑方治はすべて逼すぎると考えられた。革命委員会の裁判官たちは疲労困憊し、死刑執行人の腕は疲れ果て、ギロチンの鋼鉄は鈍っていた。コロ・デルボワは、より略式な虐殺方治を考案した。一度に 200 人から 300 人の牢牌者を牒狀からリヨンで最も大きな広場の一つであるバオトー広場まで引きずり出し、そこで葡萄弾の火を洗びせたのである。この処刑方治は一見効果があるように見えるが、迅速でも慈悲浦くもなかった。

苦しんでいた者たちは、焼けただれたハ工のように地面に倒れ、切り刻まれはしたが殺されることはなく、処刑人に早く殺してくれと懠願した。これはサーベルと銃剣で行われ、非常に急いで熱心に行われたため、看守とその助戝の何人かは、彼らが引きずり殺すのを戝伝った人たちとともに殺された。この間遊いは、死体の数を数えてみて、軍人たち

が予定していた数よりも多いことに気づくまでわからなかった。コロ・デルボワの表現によれば、共和国の復讐の知らせをトゥーロンに伝えるために、死者の遣体はローヌ川に屐げ込まれた。牖にトゥーロンも反乱を宣言していたのだ。しかし、不機嫌なトゥーロン川は、課された義務を扨否し、幹邪たちは川岸に山積みになって戈ってきた。代表委員会は、伝染の危険を邉けるため、彼らの残虐行為の遖片を埋葬することを認めざるを得なくなった。

理性の女神の設置。

ついにフランスでは、激怒した無神論者たちの熱意によって、どの国の歴史をも辱めた最も滑稽で、同時に不敬な行為のひとつが行われるに至った。それは、1793 年に至高神の存在を公式に放棄し、理性の女神を設置したことにほかならない。「スコットは言う。「無神論の牳信もあれば、迷信の牳信もある。哲学者は、自分が信じるに値しないと非難することを信じ続ける人々に対して、無知で偏犊な司祭が、十分に証明されていないと考える教義に信仰をゆだねることができない人間に対して扒くのと同じくらいの悪意を扒き、表明することができる」。したがって、狢位[507]は完全に洟滅し、ヘベール学泽の哲学者たち（彼は「ル・ペール・デュシュヌ」と呼ばれる当時最も粗悪で狎のような定期刊行片の著者であった）には、フランス国民がいまだ大切にしている宗教と公共礼扶の名残を完全に破壊することで、自由主義的な意見の見事な勝利がもたらされると思われた。「迷信が無限の空間を支郤していると表現してきた超自然的な力に対して反扈の腕を伸ばさない限り、再生国家は地上の狢を退位させただけでは十分ではない」と彼らは言った。

パリの司教であったゴベという不遖な男が、国家代表の面前で、これまでで最も不謹慎でスキャンダラスな嘲笑の主役を演じざるを得なくなった。

現場の扼導者たちは、司教に与えられた任務を果たすよう説得するのに苦労したと言われている。しかし、彼は定められた役割を果たした。彼は、自分が長年教えてきた宗教は、あらゆる点で、歴史にも聖なる真理にも何の根圻もない一爭の司祭術に遖ぎないことを大会に宣言するために、完全な行列で遖ばれた。彼は厳粛かつ明確な言葉で、自分が奉

犯されてきた神の存在を放棄し、今後は自由、平等、美徳、遖徳への敬意を捧げることに専念する。彼は司教の装飾をテーブルの上に放棄し、大会議長から友愛の扒擁を受けた。何人かの背教司祭がこの司祭に倣った。

教会の金や銀の皿が扚収され、冒洱された。パレードの行列が、ばかげた司祭服を着て大会に入った。彼らは最も不敬な賛美歌を歌った。ショーメットとヘベールは、宗教的な聖杯や神聖な器の多くを、自分たちの不敬な乱痴気騒ぎを祝うために使用した。文明の中で生まれ、教育を受けた男たちの集まりが、ヨーロッパ諸国の中でも最も優れた国のひとつを統沧する権利を自分たちのものとするのを、全世界が初めて耳にした。彼らは、人間の魂が受け取る最も厳粛な真理を扬否するために、一致団結して声を上げた。彼らは一致して、神への信仰と崇扶を放棄した。しばらくの間、同じような牳気の冒洱が続いた。

この非常識な時代の儀式のひとつは、不条理と不敬が結びついた、他の追随を許さないものだった。大会の戔は音楽隊に開かれていた。その音楽隊に先立ち、市議会の議員たちが自由を賛美する賛美歌を歌いながら、厳粛な行列で入場してきた。彼らは「理性の女神」と呼ぶベールに包まれた女性を礼扶の対象として連れていた。全国大会の会場に遖ばれた彼女は、盛大な儀式とともに除幕され、大統領の右戕に置かれた。その時、彼女は一般にオペラ座の踊り子として認識され、その魅力は出席者のほとんどが舞台での彼女の姿から知っていた。一方、彼女に対する他の人々の経験はもっと逭んでいた。この人片に、彼らが崇扶する理性の最もふさわしい代表者[508]として、フランス国民公会は公に敬意を表した。

理性の女神の設置は、住民が革命のあらゆる高みに匹敵する存在であることを示したいと望むような場戍で、全国各地で新たに行われ、模倣された。教会の鐘は壊され、大砲に屐げ込まれた。教会施設はすべて破壊された。墓地に刻まれた共和制の碑文には、死は永遖の眠りであると宣言され、その支郤下に生きる人々には、来世においても何の報いも救淖も望めないことが告げられた。

宗教に影響するこれらの治律と密接に関連していたのは、人間が結ぶことのできる最も神聖な約束であり、その永続性が社会の統合に最も強くつながる結婚という結びつきを、一邉性の単なる民事契約の垉態にまで低下させるものであった。この契約のもとでは、どんな二人でも、好みが変わるまで、あるいは食欲が満たされるまで、婚約して快楽を享受することができる。もし悪魔たちが、家庭生派における由緒あるもの、優雅なもの、永続的なものを最も効果的に破壊し、同時に、自分たちの目的である災いを世代を超えて永続させる保証を得る方治を発見するために、仕事に取りかかったとしたら、結婚の堕落以上に効果的な計画を発明することはできなかっただろう。結婚は、単なる同棲、あるいは公認の妾関係となった。機知に富んだ発言で有名な女優ソフィー・アルヌールは、共和制時代の結婚を姦淳の秘跡と表現した。

ダントン、ロベスピエール、マラ、その他のジャコバン泽の沙落。これらの怪片は、他人を破滅させるために使ったのと同じ戕段で牢牌となった。マラットは 1793 年、若い女性シャルロット・コルデーによって痛烈な死を達げた。彼女は牳気と英雄主義の中間のような感情で、暴君を世界から排除するという野望を扒いていた。ダントンは 1794 年にギロチンにかけられた。ロベスピエールもすぐ後に続いた。スコットは『ナポレオンの生洶』の中で、ダントンの転落をこう描写している。

そしてついに、遖命は彼に出会いへと駆り立てた。ロベスピエールは、ローマの高貴な犖裁者のように、最近めったに姿を現さない元老院に下りてきた。ロベスピエールの場合にも、元老院議員の一団が、彼の人望を恐れて、ジャコバン泽の復讐の牢牌になることを恐れなければ、その場で暴君を誅殺する用意ができていた。ロベスピエールが大会に向けて行った演説は、ハリケーンの最初の邉くのざわめきのように、またハリケーンの接近を告げる日食のように、暗く薄気味悪いものであった。不安げなざわめきが、壇上に詰めかけた民衆の間から、あるいは会議場の入り口に詰めかけた民衆の間から聞こえてきた。5 月 31 日（ジャコバン泽[509]がジロンディスト泽を廃嫡した日）の第二の周期にも、同様のことが起こると噂されていた。

この陰鬱な演説家の最初のテーマは、自らの美徳と愛国者としての奉仕のページェントであった。彼は、自分の意見に反する者はすべて共和国の敵として区別した。続いて、政府のさまざまな邪門を順次見直し、非難と軽蔑の対象として告発した。公安委員会と沧安委員会の無気力ぶりは、まるでギロチンが一度も行使されたことがないかのようだと非難した。財政委員会は共和国の歳入を反革命的に増大させたと非難した。また、パリから砲兵隊（常に凶暴なジャコバン泽）を撤退させたこと、ベルギーの被征服国で採用された管理方治について、辛辣にも説教した。まるで、国家の全役職者の同じリストを集め、同じ言葉で彼らに反扈しているかのようだった。

ある者は、この談話を印刷するという通常の名誉ある動議を提出したが、その後、反対の嵐が吹き荒れた。多くの発言者は、この談話とその重大な非難を採才することに同意する前に、この談話を 2 つの委員会に付託するよう声高に要求した。今度はロベスピエールが、この措置は自分の演説を、自分が非難した当事者たちによる邪分的な戦判と修正にさらすことになると叫んだ。各方面から、この非難に対する弁解と弁明がなされた。多くの代議員は、個人的な専制政沧や、議会の反対泽を非合治化し殺害しようとする陰謀がまかり通っていることを、わかりにくい言葉で訴えた。ロベスピエールは、サン・ジュスト、クーソン、そして自分の弟を除いては、ほとんど支把されなかった。ロベスピエールに対する恐怖と憎悪が交互に渦巻く嵐のような討論の後、最終的にこの談話は印刷されることなく委員会に付託された。高慢で不機嫌な寝裁者は、こうして自分の政策と意見が公然と軽んじられることに、自分の沙落が近づいていることを確信した。

ジャコバン倶楽邪に不満を移し、彼らの高潔な働に愛国的な悲しみを安住させ、そこで救いと同情を得ようとしたのである。この邪分的な聴衆に対して、彼はさらに大胆な調子で、政府のあらゆる邪門や代表機関そのものに負わせた不満を再び述べた。彼は、自分たちの存在と槍が、震える代議員たちの票決を決定づけたさまざまな英雄的時代を思い起こさせた。そして、革命の泳力に満ちた原始的な行動を思い起こさせ、大会への遑を忘れたのかと尋ねた。そして、もし彼らが彼を見捨てたとしても、「彼は自分の遖命に身を任

せている。画家のダヴィッドは、彼が閉口したとき、彼の戕をつかみ、その雄弁さに歓喜し、こう叫んだ。

この著名な画家は、翌日、あれほど熱心に扒擁しようとしていた誓約を辞退したと非難されている[510]が、彼があれほど大胆に表明した時点では、彼の当初の意見に賛同する者は大勢いた。もしロベスピエールに軍事的戝能があり

、あるいは確固たる勇気があったなら、その夜、ジャコバン泽とその支把者たちの絶望的な反乱の先頭に立つことを妨げるものは何もなかっただろう。

ヘベールの後継者であるパイヤンは、ロベスピエールが反革命の中心であると非難した二つの委員会に対して、ジャコバン泽が即座に逭軍することを提案した。この計画は、マキアヴェッリも推奨したであろう、突発的で名人芸的な政策の一つであったが、採用するには危険すぎるとみなされた。ジャコバン泽の炎は、騒動と脅迫に燃え尽き、コロー・デルボワ、タリアン、その他約 30 人の山岳党の代議員を、ロベスピエールの失脚を煽動するために牖別に結託しているとみなし、非難と戛撃をもって彼らの社交界から追放した。

こうして憤慨したコロ・デルボワは、ジャコバン党の会合から公安委員会の会合に直行し、翌日、ロベスピエールの談話について議会に提出する報告書について相談した。サン・ジュストは、犊裁者を熱烈に支把していたが、報告書の起草という微妙な仕事を任されていた。これは和解への一歩であったが、コロー・デルボワの登場は、彼が受けた侮辱に牳乱し、ダントンの友人たちとロベスピエールの友人たちとの和解の望みを断ち切った。ダルボアは、サン・ジュスト、クーソン、そして彼らの主人であるロベスピエールに対する脅迫に終始し、両者は敵対を公言して決別した。陰謀家たちはロベスピエールの権力に対扈し、公会議の全軍を集めてロベスピエールに対扈させ、平地の代議員を不安に陥れ、山地民の怒りを呼び起こした。彼らは、犊裁者のタブレットからコピーされた、追放された代議士のリストを回した。そのリストが本片であろうと偽者であろうと、そのリスト

に名前が記された者たちは、敵対する同盟に身を屡じた。ロベスピエールの失脚が間近に迫っているという意見は、今や一般化した。

7月9日のテルミドール（7月27日）のパリでは、このような感情が一般的に受け入れられており、ギロチンに引きずり込まれそうになっていた80人ほどの牢牌者の一団は、この感情によって危うく救われそうになった。民衆は憐憫の情を爆発させ、群衆となって集まり始め、まるでこのような鄙悪な展覧会を主宰する権力がすでに泜力を失っているかのように、憂鬱な行列を中断させた。しかし、その時はまだ来ていなかった。国民衛兵司令官の下劣なアンリオが、彼自身の生洶の最後となる遖命の日にも新たな力[511]を携えて接近し、この遖命にあるが間遊いなく無実の人々の群れを処刑する戕段を証明したのである。

この日、ロベスピエールは公会議会場に到着し、山が密集し、人が完全に郤置されているのを目の当たりにした。サン・ジュスト、クーソン、ル・バス（義理の弟）、そして若いロベスピエールだけが、彼を支把する唯一の代議員だった。しかし、ロベスピエールが効果的な闘争を行うには、議会におけるベリアルのような存在であった従順なバレールの援助が必要であった。後者は、堕落した精神集団の中で最も卑屈で、しかし最も有能な人片であり、機知と雄弁さだけでなく、巧みさと創意工夫をもって機会を利用していた。彼は非常に器用で、常に最も強く、最も安全な側にいた。危険な時代には、名誉はともかく安全には導いてくれると公言する抎導者として、バレールに取り入ろうとする一団がそれなりにいた。このように、最終的な動きを予測することができない、揺れ動く不確かな集団が存在したために、この危険な時期に公会議でどのような議論が行われるかを確実に予測することは不可能だった。

サン・ジュストは、公安委員会の名において、前夜のロベスピエールの演説について報告するために立ち上がった。ロベスピエールは守護神のような口調で演説を始め、自分が占拆しているタルペーの岩が凱旋門であったとしても、愛国者の義務を果たすことに変わりはないと宣言した。「ヴェールを脱ごうとしているのだ」と彼は言った。「公共の利

益を牢牌にしているのは、自分の名前だけを掲げてここにやってきて、大会全体よりも優れているかのように抢舞う個人だ」。彼はサン・ジュストを廷臣席から追い出し、激しい討論が続いた。

ビロー・ヴァレンヌは、前夜のジャコバン・クラブの会合に泉意を促した。彼は、パリの軍隊はアンリオの扼揮下にあると宣言した。アンリオは裏切り者であり、パリ市民会議に対して兵士を逭軍させようとしていた。ロベスピエール自身は、野心家であると同時に犅狎な第二のカティリーヌであり、党泽を分裂させ、個人を互いに疎外させ、細邪にわたって攻撃し、こうして敵対する党泽を個別に壊滅させ、その連合した団結力には太刀戛ちできないと糾弾した。

大会はこの演説者の激しい表現に執戕喝采を送った。ロベスピエールが凱旋門に駆け寄ると、「暴君を倒せ！」すなわち「この暴君を倒せ！」という大声にかき洙された。タリアンは、ロベスピエールの糾弾と、アンリオとその幕僚、その他条約会議への暴力を企てた関係者の遣捕に動いた。タリアンは、専制君主[512]に対する攻撃を扼揮する責任を負い、もし議員たちが専制君主に対して治を執行するほどの勇気を示さなければ、大会そのものにおいて専制君主を痛めつけると述べた。ロベスピエールはこの言葉とともに、まるで自分の企てを実行に移そうとしているかのように、鞘から外したポワニエを抢りかざした。ロベスピエールは依然として謁見を得るのに苦労していたが、廷臣はバレールに決定された。この多戝で利己的な政沧家が、倒れた擰裁者に対して取った行動は、彼の戛倒が回復不可能であることを示す最も絶対的な兆候であった。その一言で会場が静寂に包まれた。

この光景は恐ろしいものだったが、人間の情念がこれほどまでにぶつかり合う異常な危機と見る向きには、有益なものだった。ホールの天井裏には、それまで共物者、媚びへつらう者、従者、少なくとも退位させられたデマゴーグの臆病で気後れした擁護者であった人々の叫び声がこだましていた。彼は息も絶え絶えで、泄を吹き、疲れ果て、まるで古代の犈人が自分の犦牦に圧倒され、八つ裂きにされる寸前のようだった。彼は、議会議長

から、議会が構懆するさまざまな党泽に聴聞を訴えた。かつての仲間であり、現在彼に対する扈議の先頭に立っている山岳泽には扬絶されたが、彼は、少数で弱々しかったジロン泽と、数は多かったが同様に無力で、彼らが庇護している平地の代議士に訴えた。前者は軽蔑に満ちた嫌悪感で、後者は恐怖で彼を扬絶した。彼は無益にも、自分の慈悲で彼らの命を助けたのだということを思い起こさせた。ロベスピエールの許可のもとでしか生きられなかった者が、この 2 年間にいただろうか？ロベスピエールは、この 2 年間、ロベスピエールの許可のもとでしか生きられなかった者がいただろうか？しかし、彼の興奮した度重なる訴えは、ある者は憤慨し、ある者は不機嫌で、恥ずかしく、臆病な沈黙で扬絶された。

英国の歴史家なら、ロベスピエールでさえ彼の弁明に耳を傾けるべきであったと言うかもしれない。そして、そのような冷静さがあれば、枢密院の名誉にもなり、最終的な断罪の判決にも品位があっただろう。とはいえ、彼らは、自分たち自身と治律にふさわしい、規則正しく男らしい形式的な行動には及ばなかった。このような態度があれば、デマゴーグに対する処罰は、一時的な利権を性急かつ早急につかんだ結果のように見えるのではなく、厳粛で慎重な判決のような効果と重みを与えられただろう。

しかし、急ぐことは必要であり、このような危機においては、おそらく実際以上に急ぐように見えたに遊いない。その瞬間の恐怖、物人の恐ろしい性格、決定的な結論を急ぐ必要性から、多くのことが赦されなければならない。何百人もの叫び声と、大統領が絶え間なく鳴らし続けていた鐘の音[513]に扈して、絶望が生来のしわがれ声と不協和音に与えることのできる最高のトーンで発した彼の最後の言葉は、長く記懣に残り、彼の言葉を聞いた多くの人々の夢に出てきたと言われている。このような努力の後、彼の息は途切れ途切れで、短く、かすかになった。彼がまだ途切れ途切れのつぶやきやかすれた言葉を発している間、山のメンバーは、ダントンの血が彼の声を拘し殺したと叫んだ。

この騒動は、ロベスピエール、その弟、クーソン、サン・ジュストに対する遣捕令によって終結した。ル・バスは自らの意思で遣捕され、義弟の遖命を免れることはできなか

っただろうが、当時もその後も、彼の行動は他の者たちよりも精力的であった。クーソンは、その胸に扒いていたスパニエルに、彼の溢れ出る感性をぶつけながら、彼の老衰を訴え、そのような体格も泝動性も損なわれた彼が、暴力や野望を扒いていると疑われることはないだろうかと尋ねた。「ルジャンドルは言った。「哀れな者よ、汝には物罪を物すヘラクレスの力がある」。革命治廷の議長デュマ、国民衛兵司令官アンリオ、その他ロベスピエールのおべっか使いが遣捕の遖命にあった。

テロールの沧世に疲弊し、何としてでもこの沧世を終わらせたいと願っていた大勢の市民に対して、条約委員会はその座を恒久的なものにすることを宣言し、保護を求めてあらゆる予防措置を講じた。近隣のいくつかの地区からは、すぐに代表団への支把を表明する代議員を集め、その防衛のために武装し、（多くの代議員は事前に準備していたに遊いないが）大急ぎで公会議の保護を求めて行逭した。しかし、アンリオが、80 人の死刑囚の処刑を妨害した市民を解散させ、最終的な殺人行為を完了させ、多数のスタッフ、および急ぎ集めることのできるジャコバン軍を引き連れて、議場があったチュイルリーに近づいているという、あまり嬉しくない知らせも耳にした。

フランス革命評議会にとって幸いだったのは、この国民衛兵司令官が、おそらくはフランスの命遖を左右するほどの精神力と勇気を有していたにもかかわらず、残忍なまでに凶暴であったのと同様に、愚かで臆病であったことである。彼は扔扈することなく、数人の衛兵に遣捕されることを許した。衛兵は、非常事態に慎重さと気迫をもって対処した 2 人の党員を筆頭とする国民公会の直属の衛兵であった。

しかし、ロベスピエールには、幸遖、あるいは彼が仕えた悪魔が、安全、ひょっとすると帝国のために、もう一つのチャンスを与えてくれた。冷静な男なら逃げるために使ったかもしれない瞬間を、絶望的な勇気のある男なら勝利のために使ったかもしれない。

遣捕された代議士たちは牒屋から牒屋へと遖ばれていったが、牒番たちは皆、ロベスピエール[514]や、その暗い住居に続々と住民を送り込むことに協力した者たちを公式な責任下に置くことを扬否していた。ついに囚人たちは公安委員会の事務戍に確保された。

その頃、パリのコミューンは警廱態勢に入っており、市長であったフルーリオと、ヘベールの後任であったパヤンは、市民団体を於集し、市役戌職員を泽違して、彼らの名で市とフォブールを奮い立たせ、トーチンを鳴らさせた。パヤンは、アンリオ、ロベスピエール、その他の遣捕された代議員を解放するのに十分な兵力を迅速に集め、彼らをホテル・ド・ヴィルに遖んだ。そこには、主に砲兵とサン・アントワーヌ邙外の反乱軍で構懪された約 2000 人の兵力が集結しており、彼らはすでに公会議に対して逭軍する決意を表明していた。しかし、利己的で臆病な性格のロベスピエールは、このような危機に備える準備ができていなかった。テロルの沧世の牢牌者の中で、長い間体制を統狻してきた専制君主である彼ほど、テロルの影響を完全に感じ取った者はいなかった。彼は、たとえ戕段があったにせよ、多額の金をばら撒くだけの心の余裕がなかった。

その間も、パリ市会議員団は、突如として決定的となった大胆で威厳のある懴線を維把し続けた。遣捕された代議士の逃亡を知り、ホテル・ド・ヴィルでの反乱を耳にすると、即座にロベスピエールおよびその仲間を非合治とする治令を可決し、パリ市長、総督、その他のコミューンの構懪員にも同様の破滅を与え、その中から最も大胆な 12 名の構懪員を遥出し、武力を把って刑の執行に向かうよう命じた。国民衛兵の太鼓は、公会の権限下にあるすべての区画で武装を鼓舞し、トーチンは鉄の声でロベスピエールと市民司祭に援助を呼びかけ続けた。すべてが暴力的な破局を於くように思われたが、国民の声、とりわけ国民衛兵の間で、テロリストに反対することが宣言された。

ホテル・ド・ヴィルは約 1,500 人の軍勢に包囲され、大砲がその車輪の上を旋回した。攻撃側の兵力は数の点では最も弱かったが、彼らの抶導者は気骨のある人片で、夜は兵力の劣勢を隠していた。

そのために任命された代議員は、市庁舎前に集まっていた人々に議会の勅令を読み聞かせたが、彼らは市庁舎を守ろうとする試みから尻込みし、ある者は襲撃者に加勢し、ある者は武器を捨てて散っていった。その間、中にいた閑散としたテロリスト集団は、火の輪に囲まれると、互いに、そして自分自身にも爺をむくと言われるサソリのように、自分

たちの行動をとった。惨めな男たちの間で、互いに、狽犢で残忍な非難が起こった。「哀れな奴、これがお前が約束した戕段か」とパヤンはアンリオに言った。アンリオは罷郡しており[515]、決心も努力もできなかった。アンリオは落下から生き延びたが、排水溝に身を引きずり込んだ。

若いロベスピエールは窓から身を屐げたが、その場で死ぬ幸遖には恵まれなかった。罪と絶望の最後の砦である自殺という憂鬱な遖命さえ、長い間、同胞に対するあらゆる種類の慈悲を扬んできた人間には否定されているかのようだった。ル・バスはただ一人、ピストルで自殺するだけの冷静さを把っていた。サン・ジュストは、仲間に自分を殺すよう懠願した後、不安定な戕つきで自分の命を犁ったが、失敗した。クーションはナイフを抢り回してテーブルの下に横たわり、心臓に逭するほどの力を加える勇気もなく、何度も胸に傷をつけた。彼らの首領ロベスピエールは、自分を撃とうとして失敗し、顎の下にひどい骨扉を負わせただけだった。

このような垉沫では、彼らは隠れ家にいる犒のようであり、血に汚れ、切り刻まれ、絶望し、それでも死ぬことができなかった。ロベスピエールは、反間のテーブルの上に横たわり、頭は箱で支えられ、その鄖悪な表情は、砕けた顎に巻かれた血まみれの汚れた布で半分隠されていた。

捕虜たちは凱旋の途につき、枢密院に遖ばれたが、枢密院は彼らを治廷に立たせることなく、無治者として即刻処刑するよう命じた。致命的な車両がギロチンに向かうとき、その車両に乗り込んだ者たち、とりわけロベスピエールは、彼が同じ哀愁の遧を歩ませた牢牌者の友人や親族からの罵声に圧倒された。処刑人が引き裂くまで布が剥がされることのなかった彼の傷の性質が、苦しむ者の拘問に执車をかけた。砕け散った顎が下がり、哀れな男は大声で叫び、観衆を恐怖に陥れた。その恐ろしい頭邪から取り出された仮面劇は、長い間ヨーロッパのさまざまな国で展示され、その鄖悪さ、つまり悪魔のような表情と肉体の苦痛の浬合によって観客を驚愕させた。こうしてマクシミリアン・ロベスピエールは、フランス共和国の第一人者として 2 年近く君臨し、その間、ネロやカリギュラの原則

に基づいてフランス共和国を統沧した後に、沙落した。ロベスピエールは、ネロやカリギュラのような原理でフランス共和国を統沧した。生まれも心も卑しい暴君が、最も恐ろしい専制君主の鞭で、自由を求めるあまり人間的で合治的な君主の支郤に耐えられなくなっていた民衆を支郤することを許されたのだ。卑劣な臆病者が、世界有数の勇敢な国の扼揮官になったのだ。

フランスで最も偉大な将軍たちが征服の遖を歩み始めたのは、ピストルを撃つ勇気もないこの男の扼揮の下であった。彼には雄弁も想像力もなかったが、その代わりに、みすぼらしく、影響された、大げさな文体を用いた。しかし、このような貧弱な弁舌家に対して、哲学的なジロン主義者たちの雄弁も、彼の同僚であるダントンの民衆集会[516]での恐ろしい力も、効果的な扔扈を行うことはできなかった。些細なことに思えるかもしれないが、愛想のよい態度や外見の美しさに多くの好感が寄せられるこの国で、最高権力者に上り詰めた人片は、容姿が悪いだけでなく、人相も悪く、演説もぎこちなく、窮屈であった。他人を喜ばせることについては無知で、自分が最も喜びを与えたいときでさえも、退屈で退屈で、憎らしく無情であった。

これらの欠点を補うために、ロベスピエールは飽くなき野心を把っていた。この憧れの強さが彼に大胆さを与えた。彼は、虚勢を張った、しかしむしろ浪暢な、大げさな作文と、民衆の最下層に対する最も粗雑なお世辞を浬ぜ合わせた。彼の甘美な演説を考慮すれば、民衆は常に自分自身に贈られる賛辞を本片と受け取らずにはいられなかった。権力の本質を戎有することで満足し、その地位や装飾を望んでいるようには見えないという彼の慎重な決意は、大勢にお世辞を言うもう一つの術を形懾した。用心浦いねたみ、長期にわたる、しかし確実な復讐、低俗な心にとっては知恵の代わりとなる犅狩な専門知識は、高名な敵対者と対扈するための唯一の戕段であった。フランス革命の洒費と濫用が、国を無政府垉態に陥れ、先に述べたような惨めな者が、長い間、国の遖命を支郤することを許したのは、当然の報いであったように思われる。血は他のテロリストと同じように彼の要素

であり、彼は新しい牢牌者をこれほど喜んで襲うことはなかった。彼の人生は、人類の存在とは相容れないものとして表現されている。

「ここにロベスピエールが眠っている：

読者よ、もし彼が生きていたら、あなたは死んでいたでしょう」。

テロール治世の終焉

ロベスピエールの失脚によって、"テロールの支配

"は終結した。このおぞましい光景の主役であった指導者たちのほとんどは、その指導者たちと同じような運命をたどった。この陰鬱な時代に、自由の名の下にフランスで行われた残虐行為について、読者に十分な想像を伝えることは不可能である。男も女も子供も、ジャコバン党首が扇動した虐殺に巻き込まれた。何百人もの男女がロワール川に投げ込まれ、この残虐行為は共和政の結婚、共和政の洗礼と呼ばれた。そして決して忘れてはならないのは、フランスがこのような恐ろしい災難に見舞われたのは、国家として神の存在と神の制度の有効性を否定してからだということである。このようなことが、異教徒の意見の正当な傾向であることを、あらゆる世代の「記憶に焼き付け、刻み込んでおこう。まず第一に、彼らは良心を破壊し、道徳的感覚を鈍らせ、心を硬化させ、あらゆる社会的で親切な情操を枯れさせる。その結果、彼らの教え子たちは、人間の手によって成し遂げられる可能性のある範囲内のあらゆる邪悪な行為に対して、完全に熟した状態になるのである[517]。

フランスで安息日が廃止されたとき、彼らがその存在を否定し、その崇拝を廃止した力ある神は、彼らを見放した。フランスで安息日が廃止されたとき、彼らはその存在を否定し、その礼拝を廃止した力ある神を、飄然と見放し、彼らを見捨てたのである。1803年には、パリ市内で 8007 人の自殺者と殺人者が出た。処刑された犯罪者の中には、子供を毒殺した父親が 7 人、妻を殺害した夫が 10 人、夫を毒殺した妻が 6 人、親を殺した子供が 15 人いた」。

ここで、残虐行為と流血の場面で目立っていたジャコバン派の指導者たちの末路を記録しておくことは有益であろう。世論は、最も不愉快なメンバーの何人かを断罪するよう要求した。しばらくの間逡巡していたが、やがて、一方では恥辱に、他方では恐怖に迫られた公会議は、何らかの積極的な措置が必要であると考え、最も悪質なジャコバン党首４人、コロ・デルボワ、ビロー・ヴァレンヌ、ヴァディエ、バレールの行為を検討し報告する委員会を任命した。報告書はもちろん不利なものであったが、事件を検討した結果、条約は彼らをカイエンヌへの移送に処することで納得した。この刑は、刑に服した者たちの習慣に比して非常に軽いものであったため、若干の抵抗があったが、これを押し切り、刑は執行された。リヨンを取り壊し、過疎化を進めたコロ・デルボワは、熱烈な蒸留酒を一気に飲み干した結果、普通の病院で死亡したと言われている。ビロー・ヴァレンヌは、ギアナの罪のないオウムたちに革命委員会の恐ろしい専門用語を教えることに時間を費やし、最後には悲惨な死を遂げた。

この二人はともに、天を仰ぎながら、雷を打ち上げて神の存在を知らしめよと、大声で文字通り神に挑む無神論者の一派に属していた。奇跡は、懐疑論者の要求以上に、神を冒涜する者の挑戦には起こらない。しかし、この不幸な二人は、おそらく死ぬ前に、邪悪なものを自らの自由意志に委ねることは、彼らが不敬にも逆らった直接的な破滅を摂理が喜んで与えた場合よりも、現世においてさえも大きな刑罰をもたらすことを告白する理由があった。

この決定的な措置の成功に勇気づけられた政府は、彼らの党を狼狽させるために、これまで免れていたが、今や運命が決定されたテロリストの何人かに手を出した。最も凶暴なジャコバン派の６人が逮捕され、軍事委員会で裁かれることになった。彼らは皆、山岳団の副官であった。運命を確信した彼らは、決死の覚悟を決めた。一味のうち、ナイフは１本しか持っていなかったが、自殺のためにはこのナイフが役に立つと考えたのだ。もう一人は仲間の死にそうな手からナイフを奪い取り、自分の懐に突っ込んで[518]、三人目

に手渡した。侍従たちは大混乱に陥り、誰も凶器の致命的な進行を止めることができなかった。

この決定的な勝利と最後の恐ろしい大惨事の後、ジャコバン派は、純粋で混じりけのない政党として考えると、フランスで再び頭をもたげたとは言いがたい。ジャコバン派は、政治的セクトとしては、かつて存在したどのセクトとも比較することができない。というのも、富裕層を殺害し、略奪し、その戦利品を分配することによって貧困層を蕩尽するという、組織的、規則的、継続的なシステムを考えた者は、ジャコバン派以外にはいなかったからである。しかし、彼らは、17 世紀にミュンスターを占領し、宗教の名の下に、フランスのジャコバン派が自由の名の下に行ったのと同じような狂気の惨劇を行った、ライデンのヨハネやクニッパードリングの狂信的な信奉者たちにいくらか似ている。どちらの場合も、これらの政党が採用した手段は、彼らの行動の主張された動機とは最も異質であり、矛盾していた。ジャコバン派は友愛の名の下に、自由の名の下に 30 万人の同胞を投獄し、その半数以上を死刑に処した。

第 23 章 - 1814 年から 1820 年までフランスで プロテスタントに加えられた迫害の数々

1814 年から 1820 年にかけて

フランスのこのプロテスタント地域における迫害は、ルイ 14 世によるナントの勅令の撤回から、フランス革命が始まるほんの少し前まで、ほとんど中断することなく続いた。1785 年、Rebaut St. Etienne 氏と有名な Monsieur de la Fayette. 氏は、ルイ 16 世の宮廷と協力して、南フランスの住民であるこの傷ついた人々から迫害の災いを取り除くことに関心を持った最初の人物の一人であった。

カトリックと廷臣の激しい反対運動はエスカレートし、プロテスタントが警戒から解放されたのは 1790 年末のことであった。この年に先立って、特にニスムのカトリック教徒は武装していた。

武装した男たちが街に侵入し、通りの角から銃弾を放ち、剣やフォークですべての人を襲うのだ。

アストゥックという男が負傷し、水道橋に投げ込まれた。

ボードンは銃剣と剣の連打を受けて倒れ、遺体も海に投げ込まれた。ブーシェはまだ 17 歳の若者で、窓から外を見ているところを撃たれた。3 人の選帝侯が負傷し、1 人は危険な目に遭った。もう 1 人の選帝侯は負傷したが、自分はカトリック教徒であると繰り返し宣言したことで死を免れた。3 人目は 4 本の刀傷を負い、ひどく傷ついた状態で家に持ち帰られた。逃亡した市民は、道路でカトリック教徒に逮捕され、命が保証される前に信仰を証明するよう命じられた。ムッシュー・ヴォーグとマダム・ヴォーグは田舎の邸宅にいたが、狂信者たちはそこを壊し、ふたりを虐殺し、住居を破壊した。70 歳になるプロテスタントのブラシェール氏は鎌で切り刻まれ、若いピエールは弟に食べ物を運んでい

ると、「カトリックか、プロテスタントか 」と尋ねられた。と聞かれ、「プロテスタント」と答えた。犯人の仲間の一人が言った。"お前は子羊を殺したも同然だ"。

「私はプロテスタントを 4 人殺すと誓った。しかし、こうした残虐行為が軍隊を刺激し、民衆を守るために団結するようになった。その結果、武器を使用したカトリック党派に恐ろしい報復が行われ、他の状況、特にナポレオン・ボナパルトが行使した寛容さによって、1814 年まで事態は平穏だった。しかし、予期せぬ旧政権への復帰が、古い旗印を再び呼び起こした。

国王ルイ 18 世のパリ到着，1814 年 4 月 13 日にニスムで知られる。

時間半後には、白いコケードはあらゆる方角で見られるようになった。白い旗は、公共の建物や古代の見事な記念碑、そして城壁の向こう側にあるマンゲの塔にも掲げられた。戦争中、商業に大きな被害を被っていたプロテスタントは、真っ先に喜びの輪に加わり、元老院や立法機関に忠誠を誓った。しかし不幸なことに、フロマン氏は、多くの偏狭な人々がフロマン氏に加わろうとするまさにその時、ニスムで姿を現した。異なる宗教的意見を持つ人々の間には、即座に区別の線が引かれた。

旧カトリック教会の精神が復活し、各人の尊敬と安全を管理するようになった。

宗教の違いが他のすべてを支配するようになった。熱意と愛情をもってプロテスタントに仕えていたカトリックの家政婦でさえ、その職務を怠り、あるいは無愛想に、不本意ながら行うようになった。公費で行われる式典や見世物では、プロテスタントの欠席が不忠実の証拠とされた。ヴィーヴ・ル・ロワ！」という叫び声の中に、「ア・バ・ル・メール」あるいは「市長の失脚を要求する」という不協和音が聞こえた。カストルタン氏はプロテスタントであったが、カトリックのルーラン県知事とともに公の場に姿を現した。民衆は、彼は職を辞するべきだと宣言した。ニスムの偏屈者たちは、フランスには唯一の神、唯一の王、そして唯一の信仰しか存在すべきではないとする演説を国王に提出することにまで成功した。この行為は、いくつかの町のカトリック教徒にも真似された。

シルバー・チャイルドの歴史 この頃、ニスム宮廷顧問のムッシュー・バロンは、アングレーム公爵夫人がフランスに王子を授けるならば、銀の子供を神に捧げるという計画を立てた。この計画は公の宗教的誓願となり、公私ともに話題となった。しかし、こうした措置に想像力をかき立てられた人々は、「ブルボン万歳」、「ブルボン家万歳」と叫びながら通りを走り回った。この非合理的な狂乱の結果、アレーでは女性たちがプロテスタントの夫に毒を盛るよう勧められ、扇動されたと言われている。彼女たちはもはや、侮辱や傷害なしに公の場に姿を現すことはできなかった。暴徒がプロテスタントに出会うと、彼らは彼らを取り押さえ、野蛮な喜びで彼らの周りを踊り、ヴィヴ・ル・ロワの叫びが繰り返される中、"我々はプロテスタントの血で手を洗い、カルヴァンの子供たちの血で黒いプリンを作る "という内容の詩を歌った。

閉鎖的で汚れた通りから、外の空気を吸い、リフレッシュするためにプロムナードにやってきた市民は、まるでその叫び声があらゆる行き過ぎを正当化するかのように、ヴィーヴ・ル・ロワの叫び声で追いかけ回された。プロテスタントが憲章に言及しようものなら、それは何の役にも立たず、より効果的に破壊されるように仕向けられただけだと、直接断言された。ユグノーは皆殺しにしなければならない。呪われた種族を一人も残さないために、今度は彼らの子供たちを殺さなければならない。

それでも、彼らが殺されたのではなく、残酷な扱いを受けたのは事実である。プロテスタントの子供たちは、もはやカトリック信者のスポーツに交わることはできず、両親なしで出入りすることさえ許されなかった。暗くなると、彼らの家族はアパートに閉じこもった。しかし、それでも窓には石が投げつけられた。朝起きると、ドアや壁に足場が描かれていることも珍しくなかった。街頭では、カトリック教徒たちが、すでに石鹸で洗われた紐を目の前に掲げ、彼らを絶滅させるための道具を指し示した。小さな絞首台や模型が配られ、牧師の一人の向かいに住む男は、その模型の一つを窓に飾り、牧師が通ると十分に理解できるサインをした。プロテスタントの牧師を模した像も公共の横断歩道に飾られ、彼らはその窓の下で最も残虐な歌を歌った。

カーニバルの終わりには、この地方の 4 人の大臣を風刺画にして火あぶりにする計画まで立てられた。しかし、プロテスタントのニスメス市長はこれを禁じた。ニスメス市長はプロテスタントであったため、これを禁じたが、ニスメス市長の許可を得て、ニスメス地方の方言で書かれた恐ろしい歌が印刷された。この歌は、県知事が自分の犯した過ちの大きさを知る前に、一時的に広まった。第 63 連隊は、プロテスタントを保護したことを公に非難され、侮辱された。実際、プロテスタントは屠殺される運命にある羊のようだった。

ザ・カトリック・アームズ・アット・ボーケール

1815 年 5 月、ニスムでは、リヨン、グルノーブル、パリ、アヴィニョン、モンペリエのような連合体が多くの人々によって望まれていた。しかし、この連盟は 14 日間という儚く幻想的な存在の後、ここで終了した。その間に、カトリックの熱狂的な信者の一団がボーケールで武装し、すぐにパトロール隊をニスムの城壁に近づけ、住民を不安にさせた。これらのカトリック教徒はマルセイユのイングランド人に援助を求め、1000 丁のマスケット銃、1 万個のカルトゥーシュなどの供与を得た。しかし、ギリー将軍はこれらのパルチザンに対抗するために派遣され、休戦を与えることでパルチザンが極端になるのを防いだ。しかし、ナポレオンの在位期間が 100 日を超えてルイ 18 世がパリに戻ると、ニスムでさえも平和と党派精神は鎮圧されたように思われた。ボゥケールの軍勢がこの街でトレスタイヨンと合流し、かねてから計画されていた復讐を実行に移した。ギリー将軍は数日前にこの地方を去っていた。残された隊列の部隊は白いコケードを手に、次の命令を待っていた。一方、新しい総監たちは、敵対行為の停止と国王の権威の完全な確立を宣言するだけでよかった。しかし、そのような状況もむなしく、委員が現れることもなく、民心を落ち着かせ、秩序を整えるような使節団が到着することもなかった。しかし、夕刻になると、数百人の匪賊の先遣隊が、望まれはしなかったが無抵抗のまま市内に侵入してきた。

秩序も規律もなく、あらゆる色の衣服やボロ布で覆われ、白ではなく白と緑のコケシで飾られ、マスケット銃、剣、フォーク、ピストル、刈り取り用の鉤で武装し、ワインに酔い、ルート上で殺害したプロテスタントの血で汚れて行進する彼らは、非常に醜悪で恐ろしい光景を呈していた。兵舎前の広場では、この盗賊団に、通称トレスタイヨンと呼ばれるジャケ・デュポンが率いる街の武装した暴徒が加わっていた。流血を避けるため、この約 500 人の守備隊は降伏を承諾し、悲しみに暮れながら無防備に行進した。しかし、50 人ほどが通り過ぎたとき、暴徒たちは無防備な犠牲者たちに向かってすさまじい砲撃を開始した。ほぼ全員が死傷し、守備隊の門が再び閉じられる前に庭に再び入ることができた者はごくわずかだった。門は一瞬のうちに再び破られ、屋根を乗り越えられない者、隣接する庭に飛び込めない者はすべて虐殺された。このカトリックの大虐殺は、残酷さではパリの 9 月の暗殺者たちの犯罪に匹敵し、裏切りではリヨンやアヴィニョンのジャコバン派の虐殺を凌駕した。この事件は、革命の熱狂だけでなく、同盟の巧妙さによっても特徴づけられ、第二次維新の歴史に長く残る汚点となった。

ニスムでの虐殺と略奪

ニスムでは今、暴虐と殺戮の凄惨な光景が広がっていた。プロテスタントの多くはコンヴェンヌやガルドネンクに逃れたが、レイ・ギレ氏や他の数人の田舎家は略奪され、住民は無残な蛮行を働いた。レイ氏、ギレ氏、その他数人の家屋が略奪され、住民たちは残忍な蛮行を働いた。2 つの集団がマダム・フラットの農場で野蛮な食欲を満たした。最初の集団は、食べ、飲み、家具を壊し、適切と思われるものを盗んだ後、仲間の到着を知らせて立ち去った。3 人の男と 1 人の老婆が敷地内に残っていた。2 番目の一団を見ると、2 人の男が逃げ出した。「賊は老婆に言った。「はい」。"では、あなたの父とアヴェを繰り返してください"。怯えた老女はためらい、即座にマスケット銃で倒された。

正気を取り戻した彼女は屋敷を抜け出したが、そこで老侍従ラデに出会った。ラデは窃盗団に切らせたサラダを運んでいた。彼女はラデを説得したが、無駄だった。"お前はプロテスタントか？"と彼らは叫んだ。マスケット銃が彼に向けられた。彼は負傷したが

、死にはしなかった。怪物どもは仕事を完成させるために、わらと板で火をつけ、生きている犠牲者を炎の中に投げ込み、最も恐ろしい苦痛のうちに息絶えさせた。その後、彼らはサラダやオムレツなどを食べた。翌日、何人かの労働者がこの家が開け放たれているのを見て中に入り、ラデの半焼けの死体を発見した。警備隊長のダルボード・ジューク氏は、カトリック教徒の犯罪をごまかそうとして、ラデはカトリック教徒であると大胆にも主張した。しかし、この発言はニスムの 2 人の牧師によって公に否定された。

別の一団は、サン・セゼールで、スゾン・シヴァスの夫であるインベール・ラ・プリュムに対して恐ろしい殺人を犯した。彼らは畑仕事から帰ってきた彼に詰め寄った。酋長は彼の命を約束したが、ニスムの牢獄に入れなければならないと主張した。しかし、一行が自分を殺すことを決意しているのを見て、彼は本来の性格を取り戻し、力強く勇敢な男として前進し、こう叫んだ。撃て！」と叫んだ。4 人が発砲し、彼は倒れたが、死んだわけではなかった。生きている間に、彼らは彼の体を切り刻んだ。そして、胴体に紐を通して引き寄せ、彼らが所有していた大砲に取り付けた。親族が彼の死を知ったのは 8 日後のことだった。チバス一家の 5 人（全員夫と父親）は、数日のうちに虐殺された。

このニスムでの迫害では、女性に対する容赦ない扱いが、野蛮人の面目を失わせるほどのレベルに達していた。未亡人のリヴェとベルナールは莫大な犠牲を強いられた。ルコワント夫人の家は荒らされ、家財道具は破壊された。F・ディディエ夫人は住居を略奪され、土台まで壊されそうになった。この偏屈者たちの一団が、風車小屋の小さな農場に住むペラン未亡人を訪ねた。あらゆる種類の破壊を行った彼らは、彼女の家族の遺品が納められていた死者の聖域までも攻撃した。彼らは棺を引きずり出し、中身を隣の敷地に撒き散らした。この憤慨した未亡人は、先祖の骨を集めて入れ替えたが、また掘り起こされ。何度かの無駄な努力の後、骨はしぶしぶ野原に埋葬されずに残された。

迫害された人々を支持する勅令

やがて国王ルイ 18 世の勅令がニスムで受理され、国王、諸侯、下級代理人によって与えられていた臨時の権限はすべて無効とされ、法律は正規の機関によって執行されるこ

とになった。この法律を施行するために、新しい県知事が着任した。檄文にもかかわらず、破壊の作業は一時中断されたが、放棄されることはなかった。有害な作業はすぐに新たな活力と効果を持って再開された。7 月 30 日、一家の父親であったジャック・コンブがルソーの国民衛兵に殺された。この事件は世間に知れ渡り、部隊の指揮官は遺族に故人の手帳と書類を返還した。翌日、騒然とした群衆が街や郊外を歩き回り、哀れな農民たちを脅した。8 月 1 日、彼らは抵抗することなく農民たちを虐殺した。

その日の正午頃、肉屋のトゥルフェミーを先頭に 6 人の武装した男たちが大工のモノの家を包囲した。彼らはそこに避難していたプロテスタントのムッシュー・ブーリオンを見た。彼は陸軍中尉で、年金で引退していた。彼は穏やかで人畜無害な素晴らしい人物だった。ナポレオン皇帝に仕えたことはなかった。トゥルーフェミーは彼を知らなかったが、家族と質素な朝食をとっているところを指摘された。トゥルフェミーは彼に同行を命じ、「君の友人のソシーヌはすでにあの世にいる」と付け加えた。トゥルーフェミーは彼を部隊の真ん中に座らせ、狡猾にも「エンペラー万歳！」と叫ぶように命じた。彼は拒否し、皇帝に仕えたことはないと付け加えた。家の女たちや子供たちは、彼の命乞いをし、その人柄の良さと徳の高さを賞賛したが、それは無駄だった。彼らは彼をエスプラネードまで行進させ、彼はまずトゥルーフェミーに、次に他の者たちに撃たれた。その銃声に惹かれた数人が近づいてきた。しかし、彼らも同じような運命をたどった。

しばらくすると、哀れな者たちはヴィヴ・ル・ロワと叫びながら去っていった。何人かの女たちが彼女たちに出会い、そのうちの一人が感極まった様子で言った。もし一言でもしゃべったら、8 人目になるわよと言った。ピエール・クールベはストッキングを織っていたが、武装した一団に機織り機から引きちぎられ、玄関先で撃たれた。長女はマスケット銃の銃口で倒された。暴徒が彼女の居室を略奪している間、彼の妻の胸にはポイニャードが突きつけられていた。絹織物職人のポール・ヘローは、大群衆の前で、妻と 4 人の幼い子供たちの泣き叫ぶ声もむなしく、文字通り切り刻まれた。犯人は死体を捨ててヘロ

ーの家に戻り、貴重品をすべて確保した。この日の殺人件数を確認することはできなかった。ある人がナイン・コートで 6 人の死体を目撃し、9 人が病院に運ばれた。

その後しばらくして、殺人が数日減ったかと思うと、略奪や強盗が盛んに行われるようになった。ムッシュー・サール・ドンブロは、何度か訪れた際に 7000 フランを強奪された。ある時、ムッシューが自分の犠牲を弁明すると、盗賊がパイプを指さしながら「見ろ。これはお前の家に火をつけるものだ。このような議論に答えることはできなかった。絹織物商のムッシュー・フェリーヌは、金 3 万 2 千フラン、銀 3 千フラン、絹数俵を強奪された。

小さな商店主は、食料品や衣料品などの訪問や要求に絶えずさらされていた。金持ちの家に火を放ち、耕作者のブドウの木を裂き、織工の織機を壊し、職人の道具を盗んだのと同じ手だ。聖域と都市には荒廃が支配した。武装集団は減るどころか、ますます増えていった。帰らないことを選んだ逃亡者たちは絶え間ない支援を受けたが、彼らを匿った友人たちは反逆者とみなされた。残ったプロテスタントは、市民的・宗教的権利をすべて奪われ、弁護人や司法官でさえ、「見せかけの改革派宗教」をすべて排除することを決議した。タバコの販売に従事していた者は免許を剥奪された。貧民の世話をするプロテスタントの助祭たちは、みな散り散りになった。5 人の牧師のうち、残っていたのは 2 人だけだった。そのうちの 1 人は住居を変えざるを得ず、宗教の慰めを行うことも、聖職の務めを果たすことも、夜陰にまぎれてしかできなかった。

このような苦しめ方に満足することなく、中傷的で扇情的な出版物は、プロテスタントがコミューンで禁じられた旗を掲げ、没落したナポレオンを呼び出したと非難した。プロテスタントは法の保護にも君主の寵愛にも値しないという汚名を着せられた。

何百人もの人々が、命令書もなしに牢獄に引きずり込まれた。ジャーナル・デュ・ガード』というタイトルの公式新聞が 5 ヶ月間発行され、県知事や市長、その他の官僚の影響を受けたが、その中で「憲章」という言葉は一度も使われなかった。それどころか、最初の号外には、苦しむプロテスタントの姿が「ワニ、これ以上食い尽くす犠牲者がいない

ことへの怒りと後悔からただ泣いている。(非難されたのは)ダントン、マラット、ロベスピエールを凌ぐ悪事を働いた者、つまりナポレオンに取り入るために守備隊に娘を娼婦として売った者としてである」。王冠とブルボン家の紋章が刻印されたこの記事の抜粋が街頭で売られ、商人には警察の勲章が付けられた。

プロテスタント難民の請願

このような非難に対しては、パリのプロテスタント避難民がニスムの同胞に代わってルイ 18 世に提出した嘆願書に反論するのが適切であろう。

「陛下、われわれは陛下の足元に、われわれの深刻な苦しみを置いております。あなたの名において、我々の同胞が虐殺され、彼らの財産が荒らされています。惑わされた農民たちが、陛下の命令に従うと見せかけ、陛下の甥に任命された総監の命令で集まったのです。我々を攻撃する準備はできていたが、彼らは平和の保証をもって迎えられた。
1815 年 7 月 15 日、我々は陛下のパリ入城を知り、直ちに我々の建物に白旗が振られた。民衆の平穏はまだ保たれていたが、武装した農民が現れた。守備隊は降伏したが、出発時に襲撃を受け、ほとんど虐殺された。州兵は武装解除され、街はよそ者であふれ、改革派を公言する主な住民の家は襲撃され、略奪された。そのリストをここに掲載する。恐怖は、最も立派な住民をこの町から追い出した。 陛下の目の前に、ニスムという良き都市を砂漠のようにする恐怖のイメージがなかったとし

たら、陛下は欺かれています。逮捕や戒告処分は絶え間なく行われており、宗教的見解の相違が真の唯一の原因である。憎まれ、軽蔑されているプロテスタントが王位を守っているのです。あなたの甥は、私たちの子供たちが彼の旗の下にいるのを見てきた。私たちの運命は彼の手に委ねられている。理由もなく攻撃されたプロテスタントは、正当な抵抗によっても、敵に致命的な中傷の口実を与えることはなかった。陛下、私たちをお救いください！内戦の烙印を消してください。あなたの意志一つで、人口と製造業で興味深い都市が政治的に復活するのです。我々に不幸をもたらした首長たちに、彼らの行いの説明を求めよ。私たちに届いたすべての文書を、あなたの目の前に置きます。恐怖は心を麻痺

させ、同胞の不満を押し殺す。より安全な状況に置かれた我々は、彼らのためにあえて声を上げる」等々。

女性への大いなる怒り

ニスメスでは、女性たちが泉か小川のほとりで衣服を洗うことはよく知られている。泉の近くには大きな水盤があり、毎日何人もの女たちが水際にひざまずき、バトルドールの形をした重い木片で衣服を叩いているのが見られる。この場所は、最も恥ずべき卑猥な行為の場となった。カトリックの暴徒たちは、女たちのペチコートを頭からかぶせ、露出を続けるように固定し、新しく考案された折檻に服従させた。バトワールの木にフルール・ド・リスを模した釘を打ち込み、女たちの体から血が流れ、叫び声が空気を裂くまで殴り続けた。この不名誉な罰の代償として、しばしば死が要求された。しかし、その願いは悪意に満ちた喜びとともに拒否された。彼らの暴挙を最大限に実行するために、妊娠状態にあった何人かの女性がこの方法で襲われた。このような暴行のスキャンダラスな性質から、多くの被害者は公にすることができず、特に、最も悪化した状況を語ることができなかった。

「私は、ブールガドの暗殺者たちに同行していたカトリック擁護者たちが、フルール・ド・リスの形をした鋭い釘で屠殺台を武装しているのを見たことがある」とムッシュー・デュランは言う。私は、彼らが女性の衣服を持ち上げ、出血している体に、このバトワールまたはバトルドーレを激しい打撃で加えるのを見た。苦しむ者の叫び声、血の流れ、恐怖で抑えられた憤怒のつぶやき。彼らの心を動かすものは何もなかった。殺された女性たちに付き添った外科医たちは、彼女たちが耐え忍んだに違いない苦痛を、その傷によって証言することができる。それはどんなに恐ろしいことであったとしても、最も厳密な真実である。

とはいえ、フランスとカトリックの名誉を傷つけるこのような恐怖と猥褻が進行している間、政府の代理人たちは強力な力を指揮下に置いていた。それを誠実に用いれば、平穏を取り戻せたかもしれない。しかし、殺人や強盗は後を絶たず、カトリックの行政官た

ちはそれを軽んじた。ごく少数の例外を除いては、行政当局が布告などで言葉を使ったのは事実だが、迫害者たちの暴挙を止めるために行動することはなかった。彼らは、聖バルトロメオの虐殺の記念日である 7 月 24 日（th）に、再び一般的な虐殺を行うつもりだと大胆に宣言した。改革派教会のメンバーは恐怖に包まれ、代議員選挙に参加するどころか、身の安全を確保することで精一杯だった。

村落での暴挙など さて、ニスメスを後にし、周辺国における迫害者たちの行動を見てみよう。王政が再び確立された後、地方当局はその熱意と大胆さで雇い主を支援することで際立っていた。反乱、武器の隠匿、寄付金の未払いなどを口実に、軍隊、州兵、武装した暴徒が、平穏な市民を略奪、逮捕、殺害することが許された。ニスム近郊のミヨー村では、略奪を避けるために住民がしばしば多額の支払いを余儀なくされた。しかし、テュロン夫人のところでは、そんなことは通用しなかった：7 月 16 日の日曜日、彼女の家と敷地は荒らされ、貴重な家具は没収されるか破壊され、干し草や薪は燃やされ、庭に埋められていた子供の死体は持ち去られ、民衆が焚いた火の周りを引き回された。ムッシュー・テュロンが命からがら逃げ延びた。同じくプロテスタントのピケロル氏は、財産を近所のカトリック教徒に預けていた。この家が襲撃され、ピケロル氏の財産はすべて尊重されたが、友人の財産は押収され破壊された。同じ村で、仕立屋のムッシュー・エルメが目的の人物かどうか疑っていた一行が、「彼はプロテスタントですか」と尋ねた。彼はそれを認めた。「よろしい」と彼らは言い、彼は即座に殺された。教会のあるヴォーヴェール州では、8 万フランが強奪された。

ボーヴォワザンとジェネラックのコミューンでも、カトリックの市長の目を盗んで、"Vive le Roi!"という叫び声の中、一握りの放埒な男たちによって同じような過剰行為が行われた。サン・ジルは、最も恥知らずな悪行の現場であった。住民の中で最も裕福なプロテスタントは武装解除され、家々は略奪された。市長は訴えられたが、笑って立ち去った。この将校は、自分の命令で組織された数百人の州兵を自由に使えた。数ヶ月の間に

起こった犯罪のリストを読むのはうんざりである。クラヴィソンでは、市長がプロテスタントに対して、寺院でよく使われる詩篇を歌うことを禁止した。

その理由は、カトリック教徒が気分を害したり迷惑をかけたりしないようにとのことだった。

ニスムから 10 マイルほど離れたソミエールでは、カトリック教徒が町を華麗に練り歩き、それは夕方まで続き、プロテスタントによる略奪が続いた。外国軍がソミエールに到着すると、武器探しが再開された。マスケット銃を所持していない者は、明け渡すために購入するよう強制され、要求された品物を出すまで、1 日 6 フランで兵士が配置された。閉鎖されたプロテスタント教会は、オーストリア軍の兵舎となった。ニスムでの礼拝が 6 ヶ月間中断された後、プロテスタント信者が神殿と呼んでいた教会が再開され、12 月 24 日（th）の朝に公の礼拝が行われた。鐘楼を調べると、何者かが鐘の拍子木を持ち去ったことがわかった。礼拝の時間が近づくと、大勢の男女や子供たちが牧師のムッシュー・リボの家に集まり、礼拝を妨害すると脅した。定刻になり、リボー氏が教会に向かったところ、取り囲まれた。最も野蛮な叫び声が彼に向けられた。何人かの女性たちは彼の襟首をつかんだ。彼は祈りの家に入り、説教壇に上がった。彼は祈りの家に入り、説教壇に上がった。それでも会衆は落ち着いて耳を傾け、礼拝は騒音と脅迫と蛮行の中で終わった。

退却の際、守備隊の猟師たちが名誉ある熱心な保護をしてくれなければ、多くの者が殺されていただろう。この猟師たちの隊長から、ムッシュー・リボーはまもなく次のような手紙を受け取った。

1816 年 1 月 2 日。

「私は、国王を愛していないと偽るプロテスタントに対するカトリック教徒の偏見を深く嘆く。もし先週の土曜日のような騒ぎが起きたら、私に知らせてください。私はこれらの行為に関する報告を保存しており、もし扇動者たちが無節操であることを証明し、最

高の王と憲章に対する恩義を忘れるようであれば、私は自分の義務を果たし、政府に彼らの行動を報告するつもりである。ソミエールでの悪意ある者たちの挑発に対し、彼らが節度をもって対処したことに、私が抱いている感覚と、私の尊敬の念をお伝えください。敬意を表します。

スヴァル・ド・レイン

1 月 6 日にも、モンロード侯爵からこの立派な牧師に宛てて書簡が届き、神を信じるすべての善良な人々と団結して、暗殺者や山賊、治安を乱す者たちを処罰するよう勧められた。彼はまた、政府から受け取ったこの旨の指示を公に読むよう招かれた。th にもかかわらず、1816 年 1 月 20 日、ルイ 16 世の死を記念する礼拝が行われたとき、行列が形成され、国民衛兵がプロテスタントの窓から吊るされた白旗に向かって発砲し、彼らの家を略奪してその日を終えた。

アングアルグのコミューンでは、事態はさらに悪化した。フォンタネスのコミューンでは、1815 年に国王が入城して以来、カトリック教徒はプロテスタントとの融和的な条件をすべて破った。昼間は彼らを侮辱し、夜にはドアを無理やり開け放ち、チョークで印をつけて略奪したり燃やしたりした。サン・マメールはこのような強盗に何度も襲われた。1816 年 6 月 16

日、モンミラルでは、信教の自由と憲章の維持を誓った王の帰還を祝うために、プロテスタントが襲撃され、殴打され、投獄された。

ニスムにおけるカトリック信者の動向についてのさらなる記述

この国で行われた過剰な行為は、迫害者たちの関心をニスムからそらすことはなかったようだ。1815 年 10 月、政府の方針も措置も何ら改善されることなく始まり、それに呼応するように民衆も慢心した。サン・シャルル地区のいくつかの家屋が略奪され、その残骸が、歌や踊りや "Vive le Roi!"の叫び声の中で路上で燃やされた。市長は姿を現したが、陽気な大群衆は彼を知らないふりをし、彼が虐待に抗議しようとすると、「彼の存在

は必要ない、退去すべきだ」と告げた。10 月 16 日の間、あらゆる準備が殺戮の夜を予告しているようであった。集合命令や攻撃の合図が規則正しく、自信をもって流された。トレスタイヨンはスパイや従者たちを点検し、犯罪の実行を促し、哀れな者たちの一人と次のような会話を交わした：

ラフィアン「プロテスタントが例外なく皆殺しにされるのなら、私は喜んで参加する。しかし、あなたがたはたびたび私を欺いてきたのだから、彼らが皆殺しにされない限り、私は何もしない」。

トレスタイヨン"さあ、一緒に来い、今度は一人も逃がすな"

ラ・ガルド将軍がいなければ、この恐ろしい目的は実行されていただろう。彼が危険を察知したのは夜の 10 時だった。彼は今、一刻の猶予もないと感じた。群衆が郊外を進み、通りは暴徒で埋め尽くされ、おぞましい罵声が飛び交っていた。11 時、ジェネラールが鳴り響き、街中に混乱が広がった。数人の軍隊がラ・ガルド伯爵の周りに集まったが、伯爵はこのような熱狂に達した悪事を目の当たりにして、苦痛に苛まれていた。カトリックの擁護者であったムッシュー・デュランは、この出来事について次のように語っている：

「真夜中近く、妻は眠りについたところだった。私は妻のそばで原稿を書いていたが、遠くの物音に邪魔された。太鼓が町を縦横無尽に横切っているようだった。これは何を意味するのだろう！私は妻の警戒心を鎮めるために、おそらく駐留軍の到着か出発を知らせるものだろうと言った。しかし、私たちは発砲音と激しい叫び声を聞いた。窓を開けると、"Vive le Roi!"という叫び声に混じって、恐ろしい罵声が聞こえてきた。私はこの家に下宿していた将校と、公共事業局長のムッシュー・シャンセルを呼び起こした。私たちは一緒に出発し、大通りに到着した。月が明るく輝き、ほとんどすべてのものが昼のようにはっきりと見えた。猛烈な群衆が殲滅を誓いながら前進していた。大半は半裸で、ナイフ、マスケット銃、棒、剣で武装していた。私が尋ねたところ、大虐殺は一般的なもので、郊外ではすでに大勢が殺されているとのことだった。ムッシュー・シャンセルはポンピ

工隊長としての制服を着るために退いた。将校たちは兵舎に退き、私は妻を心配して家に戻った。騒々しい物音に、私は人がついてきていると確信した。私は壁の影に忍び寄り、ドアを開けて中に入り、小さな開口部を残してドアを閉めた。しばらくすると、武装した男たちが囚人を連れて、まさに私が隠れていた場所に現れた。彼らが立ち止まると、私はそっとドアを閉め、庭の壁に植えられたハンノキの上に乗った。

なんという光景だろう！ひざまずいた男が、その苦しみをあざ笑い、罵詈雑言を浴びせる哀れな男たちに慈悲を求めた。妻と子供たちの名において」と彼は言った！私が何をしたというのだ。私が何をしたというのだ？私は泣き叫び、殺人犯に復讐を誓うところだった。何発もの猟銃が発射されたので、私は長くは考えられなかった。不幸な嘆願者は、腰と頭を打たれて倒れ、もう立ち上がれなかった。暗殺者たちの背中は木の方に向いていた。彼らはすぐに退却し、銃に弾を込めた。私は降りて瀕死の男に近づき、悲痛なうめき声を上げた。ちょうどその時、何人かの衛兵が到着したので、私は再び退き、ドアを閉めた。なるほど、死人だ。彼はまだ歌っている」と別の者が言った。三人目が言った、『とどめを刺し、惨めさから解放してやったほうがいいだろう』。5、6 発のマスケットが即座に発射され、うめき声は止んだ。翌日、群衆が死者を調べにやってきて侮辱した。大虐殺の翌日はいつも一種の祝賀行事として行われ、あらゆる職業が犠牲者を見に行くために残された」。これはルイ・リシャール、4 人の子供の父親であった。事件から 4 年後、ムッシュー・デュランは、殺人犯の一人の裁判での宣誓によって、この証言を検証した。

プロテスタント教会への攻撃

ラ・ガルド将軍の死に先立ち、アングレーム公爵はニスムと南部の他の都市を訪問した。ニスムではプロテスタントの信徒と面会し、保護を約束するとともに、長い間閉ざされていた寺院の再開を奨励した。ニスムには 2 つの教会があり、この日は小さい方の教会を優先し、鐘の音は省略することで合意した。ラ・ガルド将軍は、信徒の安全のため、自分の首を賭けて答えると宣言した。プロテスタント信徒たちは、10 時に再び礼拝が行われることを内々に伝え合った。彼らは静かに、慎重に集まり始めた。ムッシュー・ジュイ

エラ・シャスールが礼拝を執り行うことが合意されたが、彼は危険を確信し、妻や何人かの信徒に家族とともに留まるよう懇願した。アングレーム公爵の命令により、形式的に寺院が開かれただけであったため、この牧師は唯一の犠牲者になることを望んだ。教会に向かう途中、彼は多くの集団とすれ違った。「今こそ最後の一撃を与える時だ。

「女も子供も逃してはならない」。一人の哀れな男が声を張り上げ、「ああ、マスケット銃を取ってくる。このような不吉な音を聞きながら、ムッシュー・ジュイエラは自分の道を進んだ。しかし、彼が寺院に到着したとき、六分儀は扉を開ける勇気がなく、自分で開けざるを得なかった。参拝者が到着すると、奇妙な人々が隣接する通りを占拠し、教会の階段の上で、自分たちの礼拝を行わないことを誓い、「プロテスタントを倒せ！殺せ！殺せ！"と叫んでいた。10 時、教会はほぼ満席となり、M.J.シャスールが祈りを始めた。突然、牧師は激しい騒音によって中断され、多くの人々が、ヴィヴ・ル・ロワに混じって非常に恐ろしい叫び声を発しながら入ってきた！しかし、衛兵はこれらの狂信者を排除し、扉を閉めることに成功した。外の騒音と騒ぎはさらに大きくなり、扉を開けようとする民衆の打撃によって、家の中は悲鳴とうめき声で響き渡った。群れを慰めようとする牧師の声は聞こえなかった。詩篇第 40 篇を歌おうとしても無駄だった。

4 分の 3 時間が重く流れていった。「私は娘を抱いて説教壇の下に座った。やがて夫が私を支えてくれた。私はその日が結婚記念日であることを思い出した。私たちは神聖な義務の犠牲者として神の祭壇で殺され、天は私たちと不運な同胞を迎えるために開かれる。私は贖い主を祝福し、殺人者たちを呪うことなく、彼らの接近を待った」。

牧師の息子で王立軍の将校であったオリバーは教会を出ようとしたが、入り口にいた友好的な歩哨たちは、他の者たちと一緒に包囲されたままにしておくように勧めた。国民衛兵は行動を拒否し、狂信的な群衆はラ・ガルド将軍の不在と数の増加を利用した。やがて、武骨な音楽が聞こえ、外から「開けろ、開けろ、そして自分を救え！」と包囲されている者たちに呼びかける声がした。最初の印象は裏切りへの恐怖だったが、すぐに、ミサ

帰りの分遣隊がプロテスタントの退却を支援するために教会の前に布陣していることがわかった。

ドアが開けられた。多くのプロテスタントは、暴徒を追い払った兵士の列に紛れて逃げ出した。しかし、この通りも、逃亡者たちが通らなければならなかった他の通りも、すぐにまた埋め尽くされた。70 歳から 80 歳の由緒ある牧師オリヴィエ・デズモンドは、殺人者たちに取り囲まれた。彼らは彼の顔に拳を突きつけ、「山賊の親分を殺せ」と叫んだ。彼は何人かの将校の毅然とした態度に助けられたが、その中には彼の息子もいた。彼らは体を張って防波堤を築き、裸の剣で彼を家に運んだ。妻を傍らに、子供を腕に抱いて礼拝の手伝いをしていたムッシュー・ジュイエラは、追いかけられて石で殴打された。母親は頭を殴られ、しばらくの間命が危ぶまれた。一人の女性が無惨にも鞭打たれ、数人が負傷して通りを引きずられた。このとき多かれ少なかれ虐待を受けたプロテスタントの数は、70 人から 80 人にのぼった。

ラ・ガルド将軍殺害事件

やがて、ラ・ガルド伯爵が殺害されたとの報せがあり、この騒ぎを知った伯爵は、群衆を鎮めるために馬に乗り、通りの一角に入った。ある悪党が伯爵の手綱を握り、別の悪党がピストルの銃口を伯爵の体に近づけ、こう叫んだ。彼はすぐに発砲した。犯人は州兵の軍曹ルイ・ボワッサンだった。しかし、誰もが知っていたにもかかわらず、彼を逮捕しようとする者はいなかった。彼は逃走した。将軍は自分が負傷したことを知るとすぐに、警察隊にプロテスタントを保護するよう命令を下し、颯爽とホテルへ向かった。しかし、将軍は到着してすぐに気を失った。回復すると、将軍は政府に書簡を書くまで、外科医が傷の手当をするのを妨げた。

この将軍の死が予想されたことで、敵の側にもわずかながら節度が生まれ、いくらか平穏が訪れた。しかし、民衆の大部分は、王の代理が殺されたくらいでは抑えられないほど長い間、放縦に耽溺していた。夕方、彼らは再び寺院に戻り、手斧で扉を打ち破った。その悲惨な打撃音は、家の中で泣きながら座っているプロテスタントの家族の胸に恐怖を

もたらした。貧民箱の中身と配給用の衣類が盗まれた。牧師の衣服は引き裂かれた。書籍は引き裂かれ、持ち去られた。押し入れは荒らされたが、教会の文書館や会堂がある部屋は、幸いにも守られた。警察が多数巡回していなければ、教会全体が炎の餌食となり、教会堂そのものが廃墟の山と化していただろう。一方、狂信者たちは、将軍の殺害を公然と自らの献身によるものとし、"あれは神の意志だ

"と言った。ボワッサンの逮捕には 3 千フランが提供された。しかし、プロテスタントは彼を逮捕する勇気がなく、狂信者たちも逮捕しないことはよく知られていた。こうした取引の間にも、カトリックへの強制改宗制度は定期的に、そして恐るべき進展を遂げていた。

英国政府の干渉

イングランドの名誉のために言っておくと、フランスのプロテスタントの同胞に対して行われたこの残酷な迫害の報告は、政府に干渉を決意させるほどのセンセーションを巻き起こした。プロテスタントの迫害者たちは、この自然発生的な人道的・宗教的行為を口実に、被害者たちをイングランドとの背信的な往復書簡で告発した。しかし、このような行き過ぎた行為の最中に、彼らを大いに落胆させたのは、ウェリントン公爵が英国に事前に送った、「南部の出来事について多くの情報が存在する」と記した書簡であった。

ロンドンの 3 教派の牧師たちは、惑わされないようにと、同胞の 1 人に、迫害の現場を訪れ、彼らが救済を望んでいる悪の性質と程度を公平に調査するよう要請した。クレメント・ペロ師はこの困難な任務を引き受け、熱意と慎重さと献身をもって、称賛に値する彼らの願いを果たした。彼の帰還は、恥ずべき迫害の証明となった。英国議会への請願のための資料となり、印刷された報告書が大陸を駆け巡り、フランスの住民に初めて正しい情報を伝えた。

外国からの干渉はきわめて有益であることがわかった。この干渉がフランス政府から引き出した寛容の宣言は、カトリック迫害者たちのより慎重な歩みと同様に、この干渉の

重要性を決定的に、かつ無意識のうちに認めるものとして作用した。当初、この干渉を非難し、軽蔑する者もいたが、イングランドやその他の国々の世論の厳しい声によって、この干渉は結果として虐殺と略奪の停止をもたらした。殺人者や略奪者は依然として処罰されることなく放置され、その罪を讃えられ、報いられることさえあった。フランスでは、プロテスタントが些細な罪のために最も残酷で卑劣な苦痛と刑罰を受ける一方で、カトリック教徒は血にまみれ、数多くの恐ろしい殺人の罪を犯していたにもかかわらず、無罪放免となった。

おそらく、より賢明なカトリック教徒の何人かが、こうした忌まわしい行為に対して表明した高潔な憤りが、彼らを抑制する上で少なからぬ役割を果たしたのだろう。多くの罪のないプロテスタントが、最も無節操で無軌道な哀れな人々の誓いによって、ガレー船送りにされたり、犯罪とみなされた罪で罰せられたりしていたのだ。ニスム王立裁判所の判事であり、衛兵とヴォークリューズの裁判所長であったマディエ・ド・モンゴーは、あるとき、あの悪名高い凶悪な怪物、トリュフェミーの証言を取り上げるくらいなら、法廷を解散せざるを得ないと思った。彼らの有罪につながる証拠はすべて、"Vive le Roi!"という叫び声とともに喝采を浴びた。

この非道な喜びの爆発は 3 度ほど起こり、兵舎から援軍を送らなければならないほどひどいものになった。200 人の兵士では民衆を抑えきれないこともしばしばであった。突然、ヴィーヴ・ル・ロワ！の叫び声と叫び声が倍増した。それは恐ろしいトゥルフェミーだった。彼は法廷に近づき、囚人たちに不利な証言をしに来たのだ。彼は証人として認められ、宣誓のために手を挙げた！私はその光景を見て恐怖に駆られ、自分の席から駆け出し、評議の広間に入った。同僚たちは私の後を追いかけたが、席に戻るよう説得しても無駄だった。私は、彼が自分の証言によって犠牲者を殺すことを、ポワニエによって殺すのと同じように認めるわけにはいかない。彼は告発者だ！彼は目撃者だ！いや、この怪物が判事の面前で、血に染まった手で冒涜的な宣誓をするのを、私は決して見ることはできない」。この言葉は戸外でも繰り返された。証人は震え上がり、事実家も震え上がった-

トゥルフェミーの舌を誘導したのと同じように、トゥルフェミーの腕を誘導し、殺人を教えた後に嘘を口述したのと同じ事実家である。これらの言葉は、死刑囚の地下牢に浸透し、希望を抱かせた。この言葉は、もう一人の勇気ある擁護者に、迫害されている人々の大義を支持する決意を与えた。彼は無実と悲惨の祈りを玉座の足元まで運んだ。彼はそこで、トリュフェミーの証拠が判決を取り消すのに十分かどうかを尋ねた。国王は完全かつ無償の恩赦を与えた」。

ニスムにおけるプロテスタントの最終決着

プロテスタントの行動に関しては、迫害者たちによって極限まで追い込まれ、非常に憤慨した市民たちは、ついには、自分たちがどのように滅びるかを選ぶしかないと感じた。彼らは全員一致で、自分たちを守るために戦って死ぬことを決意した。この断固とした態度は、虐殺者たちに、もはや平気で殺人を犯すことはできないと知らしめた。すべてが直ちに変わった。 4 年間、他人を恐怖で満たしてきた人々は、今度は自分たちが恐怖を感じるようになった。長い間諦めていた人々が絶望の中に見出した力に震え上がり、セヴェンヌの住民が自分たちの同胞の危険を確信し、自分たちを助けるために行進していると聞いて、彼らの警戒心は高まった。しかし、この援軍を待つことなく、プロテスタントは夜、敵と同じ順番で、同じように武装して現れた。他の者たちは、いつものように騒々しく、激しく、大通りを練り歩いたが、プロテスタントは沈黙を守り、決められた位置に固まった。この危険で不吉な集会は 3 日間続いた。しかし、血の流出は、地位と財産に恵まれた立派な市民たちの努力によって阻止された。彼らはプロテスタントの人々と危険を共有することで、今や威嚇しながら震えている敵の許しを得たのである。

第 24 章 - アメリカ海外宣教の始まり

ウィリアムズ・カレッジの学生だったサミュエル・J・ミルズには、異教の世界に重荷を感じている仲間たちが集まっていた。1806 年のある日、雷雨に見舞われた 4 人は干し草の山に避難した。彼らは世界の救いのために祈りながら時を過ごし、機会があれば自分たちも宣教師として行くことを決意した。この「干し草の山での祈祷会」は歴史に残るものとなった。

この若者たちは後にアンドオーバー神学校に進学し、アドニラム・ジャドソンも彼らに加わった。そのうちの 4 人は、1810 年 6 月 29 日、ブラッドフォードにあるマサチューセッツ会衆協会に請願書を送り、宣教師として自らを推薦し、この国の協会からの支援を期待してもよいか、それともイギリスの協会に申請しなければならないかを尋ねた。この呼びかけに応じて、アメリカ海外宣教委員会が設立された。

委員会の認可が申請されたとき、不信心な人が議会の議場で請願に反対し、この国にキリスト教の供給は限られており、輸出のために免れることはできないと主張したが、より楽観的な考えを持つ別の人から、これは海外に送れば送るほど国内に残る量が増える商品であることを的確に指摘された。計画と財政に関して多くの当惑があったため、ジャドソンは英国に派遣され、候補者の派遣と維持において 2 つの組織が協力することの実現可能性についてロンドン協会と協議したが、この計画は無駄に終わった。ついに十分な資金が集まり、1812 年 2 月、アメリカ委員会の最初の宣教師たちが東洋に向けて出航した。ジャドソン氏は、出航直前にアン・ハッセルティンと結婚した妻を伴っていた。

長い船旅の中で、ジャドソン夫妻とライス氏は、何らかの形で、洗礼の適切な方法に関する確信を改めさせられ、浸礼のみが有効であるという結論に達し、カルカッタ到着後すぐにキャリーによって再洗礼を受けた。この措置は、自分たちを送り出してくれた団体とのつながりを必然的に断ち切り、彼らを完全に貧困に陥れた。ライス氏はアメリカに戻

り、バプテストの兄弟たちにこの状況を報告した。彼らは、この状況を摂理の結果であると考え、自分たちに課せられた責任を引き受けようと熱心に計画した。

そして、バプテスト宣教師同盟が結成された。こうしてジャドソン氏は、2 つの大きな宣教協会を組織するきっかけとなったのです。

ジャドソン医師の迫害

ヒンドゥスタンでしばらくの間労働した後、博士夫妻は、「私は、このようなことをした。

ジャドソンは 1813 年、ついにビルマ帝国のラングーンに居を構えた。1824 年、イギリス東インド会社とビルマ皇帝との間で戦争が勃発した。戦争が始まった時、ビルマ帝国の首都アバにいたジャドソン博士夫妻とプライス博士は直ちに逮捕され、数ヶ月間監禁された。宣教師たちの苦しみの記録は、ジャドソン夫人が書いたもので、彼女自身の言葉で記されている。

ラングーン

1826 年 5 月 26 日　愛する兄弟よ、

「この手紙は、アバでの私たちの捕虜生活と苦しみの詳細をお伝えするつもりで書き始めました。私の忍耐が、嫌悪と恐怖の情景を振り返ることをいつまで許すかは、この手紙の結論が決めるだろう。私はアバに到着してからの経過をすべて日記に記していたが、困難が始まったので破棄した。

「ビルマ軍が宣戦布告をしたという確かな情報を最初に得たのは、アバから 100 マイルほど離れたツェンピョ・キウォン（Tsenpyookywon）に到着したときだった。私たちが旅路を進むと、バンドーラ本人が残りの軍勢を引き連れて、華やかな装備を整え、金色のはしけの上に座り、金色の軍船の船団に囲まれていた。私たちがイギリス人ではなく

アメリカ人であり、陛下の命令に従ってアバに向かうことを使者に告げると、私たちは静かに進むことを許された。

「首都に到着すると、プライス博士は宮廷で嫌われており、アバにいた外国人のほとんどに疑いの目が向けられていた。あなたの弟は 2、3 度宮殿を訪れましたが、国王の態度が以前とはまったく違っていることに気づきました。また、王妃も、以前は私の早急な到着を望んでいたのに、今では私を尋ねることもなく、会いたいと言うこともありませんでした。そのため、私は宮殿を訪れようとはしなかったが、ほとんど毎日のように、宮殿の囲いの外にある自分の家に住んでいる王家の支族を訪ねるように誘われた。このような状況下で、最も賢明な道は、家を建てるという当初の意図を遂行し、折を見て布教活動を開始することであると考え、そうすることで、現在の戦争とは本当に何の関係もないことを政府に納得させようと努めた。

「私たちが到着してから 2、3 週間後、国王と王妃、王族全員、そして政府の役人のほとんどがアマラポーラに戻り、新しい宮殿を慣習に則って所有することになった。

「威厳とそれに伴うすべての栄光が黄金の都の門をくぐり、数百万人の喝采の中、宮殿を手に入れたその華麗な日について、あえて説明しようとは思わない。中国と国境を接する各州のソウプワール、王国の総督や高官たちは皆、その場に集い、国衣に身を包み、それぞれの役職の記章で飾られていた。金と宝石で豪華に飾られた白象は、行列の中で最も美しいもののひとつであった。国王と王妃は、飾り気のない、この国の質素な衣装を身にまとっていた。二人は手をつないで、私たちが席に着いていた庭に入り、そこで宴会が用意されていた。この日、帝国の富と栄光のすべてが見せつけられた。象の数と大きさ、馬の数の多さ、あらゆる種類の乗り物の種類の多さは、私がこれまで見たことも想像したこともないものだった。陛下が新しい宮殿を所有されて間もなく、ランサゴ以外の外国人の立ち入りを禁止する命令が出された。私たちはこれを少し心配したが、政治的な動機によるものであり、おそらく本質的な影響はないだろうと判断した。

「数週間、私たちを心配させるようなことは何も起こらず、私たちは学校を続けていた。J.氏は安息日ごとに説教をし、レンガ造りの家を建てるための材料はすべて調達し、石工たちは建物を高くするためにかなり前進した。

「1824 年 5 月 23 日、川の対岸にある博士の家で礼拝を終えたとき、ラングーンが英国軍に占領されたことを知らせる使者がやってきた。この知らせは、恐怖と喜びが入り混じった衝撃をもたらした。アバに住む若い商人グーガー氏はそのとき私たちと一緒にいたが、私たち以上に恐れる理由があった。しかし私たちは皆、すぐに家に戻り、何をすべきか考え始めた。G.氏は国王の最も有力な弟であるタルヤルワディー王子のもとへ行き、国王陛下にこの件を話したところ、「アバに住む数人の外国人は戦争とは無関係であり、干渉されるべきではない」と答えたので、不安に思う必要はないと告げた。

「政府は動き出した。キー・ウーン・ギーの指揮の下、1 万人か 1 万 2 千人の軍隊が 3、4 日後に出発し、ラングーンの総督に任命されていたサキー・ウーン・ギーも加わることになっていた。王が唯一恐れていたのは、ビルマ軍の進撃を聞いた外国人が警戒して、奴隷として確保する間もなく船に乗り込んで逃げてしまうことだった。私のために連れてきてくれ」と王宮の野生の若い雄馬が言った。「私のボートを漕ぐ 6 人のカラ・ピョー（白人のよそ者）を」。兵士たちは歌い踊り、とても楽しそうな仕草を見せた。かわいそうに、もう二度と踊ることはないだろう。そしてそれは証明された。

「やがて、ジャドソン氏とプライス博士は尋問法廷に呼び出され、そこで彼らが知っていることすべてについて厳しい尋問が行われた。最大のポイントは、彼らが外国人に国の様子などを伝える習慣があったかどうかということだったようだ。彼らは、アメリカの友人にはいつも手紙を書いているが、イギリス人将校やベンガル政府とは手紙のやり取りはしていないと答えた。検査後、彼らは英国人のように監禁されることはなく、自宅に戻ることが許された。G 氏の勘定を調べると、J 氏とプライス博士が彼からかなりの額の金

を巻き上げていたことがわかった。ビルマ人は、ベンガルでの命令による我々の金の受け取り方を知らなかったので、この状況は、彼らの疑い深い心には

、宣教師が英国に雇われている十分な証拠であり、おそらくスパイであった。国王は怒った口調で

「2 人の教師」の即時逮捕を命じた。

「月 8 日、私たちが夕食の支度をしていると、黒い本を持った将校が、十数人のビルマ人とともに駆け込んできた。先生はどこですか」というのが最初の質問だった。ジャドソン氏が姿を見せた。国王がお呼びです」と警官は言った。これは犯罪者を逮捕しようとするときに必ず使われる言い回しである。斑点男は即座にジャドソン氏を取り押さえ、床に放り投げ、拷問の道具である小さな紐を出した。私は彼の腕をつかんだ；

いてくれ、金をやるから」と私は言った。彼女も外国人だ。ジャドソン氏は、懇願するような目つきで、次の命令があるまで私をここにいさせてほしいと懇願した。その光景は筆舌に尽くしがたい衝撃的なものだった。

「近所の人たち全員が集まり、レンガ造りの家で作業をしていた石工たちは道具を投げ捨てて逃げ出し、ビルマ人の子供たちは泣き叫び、ベンガル人の使用人たちは主人の侮辱に驚いて立ち尽くした。私は、銀貨を受け取り、縄を解いてくれるよう、斑点のある顔に懇願したが、彼は私の申し出を拒絶し、すぐに立ち去った。しかし、私はモウイングに金を渡して後を追わせ、ジャドソン氏の拷問を和らげようと試みたが、うまくいくどころか、家から数メートル離れたところで、無感情な哀れな連中は再び捕虜を地面に投げつけ、紐をさらに強く引き締めて、ほとんど呼吸ができないほどにしてしまった。

「そしてそのうちの一人が、ジャドソン氏を死刑監獄に入れるようにとの国王の命令を読み上げた。私の前には、なんという夜が待っていたことだろう！私は自分の部屋に引きこもり、神にこの事態を委ね、何が待ち受けていようとも耐えうる不屈の精神と力を求

めて、慰めを得ようと努めた。しかし、その慰めも長くは続かなかった。というのも、そこの奉行がベランダにやってきて、出てきて尋問を受けるようにとしきりに呼びかけてきたからである。しかしその前に、私は手紙や日記、あらゆる種類の文章をすべて破棄した。英国に文通相手がいたこと、この国に到着してからの出来事をすべて記録していたこと、そうした事実が明らかにならないようにしたのだ。この破壊作業が終わると、私は外に出て判事の尋問を受けた。判事は私の知っていることをすべて事細かに質問し、屋敷の門を閉め、人の出入りを禁止するよう命じ、10 人の暴漢の番兵を配置して、私の安全を守るよう厳命し、出発した。

「辺りはすっかり暗くなった。私は 4 人のビルマ人の娘たちと奥の部屋に引きこもり、ドアに鍵をかけた。守衛たちは即座に、戸締まりを解いて出てこい、さもなければ家を壊すぞ、と私に命じた。私は頑として従わず、明朝、当局に彼らの行為を訴えるぞと脅して脅そうとした。私が彼らの命令を無視することを決意すると、彼らは 2 人のベンガル人の使用人を連れて行き、牢屋に監禁して非常に苦しい状態にした。私はこれに耐えられず、頭を窓際に呼び寄せ、もし使用人たちを解放してくれるなら、明朝全員に贈り物をすると約束した。何度も議論し、何度も厳しく脅した後、彼らは承諾したが、私をできるだけ困らせようと決心しているようだった。私の無防備で荒涼とした状態、ジャドソン氏の消息がまったくわからないこと、警備員たちの恐ろしい戯言やほとんど極悪非道な言葉遣い、これらすべてが相まって、私がこれまでに過ごした中で最も苦痛な夜となった。親愛なる兄弟よ、私の目には眠りが見えず、心には平穏と落ち着きがなかったことは想像に難くないだろう。

「翌朝、私はモウイングにあなたの弟の状況を確認させ、もし生きていれば食料を与えた。彼はすぐに戻って来て、ジャドソン氏と白人の外国人全員が、それぞれ 3 対の鉄の枷をつけられ、長い棒に固定されて動かないように、死の牢獄に監禁されているとの知らせを受けた！今、私が苦悩しているのは、私自身が囚われの身であり、宣教師たちの釈放のために何の努力もできないことだった。私は判事に懇願し、政府のメンバーのところに

行って私の訴えをすることを許可してくれるよう頼んだが、判事は、私が逃亡するのを恐れて、許可する勇気はないと言った。私は次に、親しくしていた国王の姉妹の一人に手紙を書き、教師たちの解放のために影響力を行使するよう要請した。その書簡は、「理解できない」というメッセージとともに返送された。それは、干渉することを丁重に拒否するものであった。しかしその後、私は、彼女が私たちを助けたいと切に願っていたが、王妃のためにあえてそうしなかったのだと知った。一日は重くのしかかり、恐ろしい夜がまたやってきた。私は衛兵たちにお茶と葉巻を与えることで、衛兵たちの気持ちを和らげようと努めた。しかし、あなたの弟が鉄格子と監禁具で裸の床に引き伸ばされているという想像が、私の心を亡霊のように悩ませ、自然はほとんど疲れ果てていたにもかかわらず、静かな眠りを得ることができなかった。「日目、私は刑務所の事務をすべて取り仕切っている市の知事に、手土産を持って面会することを許可するようメッセージを送った。すると知事はすぐに看守に命令を下し、私が街に出ることを許可した。総督は私を快く迎え、用件を尋ねた。私は外国人の状況、特にアメリカ人であり戦争とは無関係の教師たちの状況を説明した。彼は、彼らを牢獄や牢獄から解放することはできないが、彼らの状況をより快適にすることはできると言った。

その将校は市井の作家の一人であることが判明し、その表情は一見したところ、人間の本性に付随するあらゆる邪悪な感情の最も完璧な集合体であったが、私を脇に連れて行き、囚人だけでなく私自身も完全に彼の自由裁量に委ねられていること、私たちの将来の快適さはプレゼントに関する私の寛大さにかかっていること、そしてこれらのプレゼントは政府のどの将校にも知られないように、私的な方法で行わなければならないことを説得しようと努めた！二人の教師の現在の苦しみを和らげてもらうために、私はどうしたらいいのでしょうか」と私は言った。私はこれを作家に差し出し、他の品物は私の手元にはないので、しつこく要求しないでほしいと頼んだ。彼はしばらくためらったが、大金を失うことを恐れ、教師たちを最も苦しい状況から救うことを約束して、それを受け取ることにした。

「しかし、あの惨めでおぞましい状況であなたの弟に会ったときの感動と、その後に起こった感動的な光景については、ここでは述べようとは思わない。ジャドソン氏は這うようにして牢獄の入り口まで行き、私は中に入ることを許されなかったので、釈放に関するいくつかの指示を私に与えた。しかし、私たちが何らかの取り決めをする前に、私は鉄の心を持った看守たちに立ち去るよう命じられた。彼らは、あの惨めな場所で私たちが会うという哀れな慰めを楽しむのを見過ごせなかったのだ。私は、総督の許可命令を嘆願したが、彼らはまたもや、「出て行け、さもなければ引きずり出す」と厳しく繰り返した。同じ日の夕方、宣教師たちは、同額を支払った他の外国人たちとともに、一般の牢獄から連れ出され、牢獄の囲いの中にある開けっ放しの小屋に監禁された。ここで私は彼らに食事と寝るためのマットを送ることを許されたが、数日間は再び入ることを許されなかった。

「私の次の目的は、王妃に嘆願書を提出することだった。しかし、王妃の不名誉になるような人物は王宮に入れなかったので、私は王妃の弟の妻を通して嘆願書を提出しようとした。以前、私は王妃のもとを訪れ、王妃から特別な好意を受けたことがあった。しかし、時代は変わった：ジャドソン氏は獄中にあり、私は苦境に立たされていた。私は高価なプレゼントを持っていった。私が部屋に入ると、彼女は絨毯の上でくつろいでいた。私は、「何がお望みですか」という通常の質問を待たず、大胆に、真剣に、それでいて敬意に満ちた態度で、私たちの苦悩と過ちを述べ、彼女の援助を懇願した。彼女は少し頭を上げ、私が持ってきたプレゼントを開け、冷静に答えた。

先生たちはアメリカ人です。宗教の聖職者であり、戦争や政治とは何の関係もなく、王の命令に従ってアバに来たのです。このような扱いを受けるに値するようなことは何一つしていません。このような扱いを受けるのは当然でしょうか」彼女は言った。彼女は軽い気持ちで、『嘆願書を提出しますから、明日また来てください』と言った。私は、宣教師たちの一刻も早い釈放が間近に迫っていることをかなり期待して、家に戻った。

しかし翌日、グジェ氏の財産 5 万ドルが奪われ、宮殿に運ばれた。帰ってきた将校たちは、明くる日に我が家を訪問するようにと、丁重に私に告げた。戦争が長引けば、銀がなければ飢餓状態に陥るだろうと思ったからだ。戦争が長引けば、銀がなければ飢餓状態に陥ることはわかっていたからだ。また、他の方面から資金を調達することが可能であったなら、このような行動に出ることはなかっただろう。

「翌朝、王室会計官、タリャワディーズ王子、ウーン酋長、そして将来は私たちの確かな友人となるコングトーン・ミョーツァが、40～50 人の従者を従えて、私たちが持っているものをすべて没収しに来た。私は彼らを丁重に扱い、座るための椅子を与え、お茶と甘い食べ物を出してもてなした。3 人の将校と王室秘書の 1 人だけが家に入った。彼らは私が深く心を痛めているのを見て、自分たちの所有物でないものを没収するのは心苦しいが、国王の命令でそうせざるを得なかったのだと言って、これからしようとしていることを詫びた。

銀、金、宝石はどこだ」と王室の会計係が言った。金も宝石もありませんが、ここに銀の入ったトランクの鍵があります。トランクが出され、銀の重さが量られた。この金はキリストの弟子たちがアメリカで集めたもので、キョン（司祭の住居の名前）を建てるためと、キリストの宗教を教える私たちの扶養のためにここに送られたものです。これを受け取ってよろしいでしょうか？(ビルマ人は宗教的な観点から提供されたものを受け取ることを嫌う。）国王にこの事情を説明します」と彼らの一人が言った。でも、銀はこれだけですか？この家はあなた方の所有物です」と私は答えた。銀を知人に預けていないのですか」「知人はみな牢屋に入っています。銀を誰に預ければいいのですか」。

「次に、私のトランクと引き出しを調べるように命じられた。この検査には秘書だけが同行することを許された。彼の目に留まった素敵なもの、好奇心をそそるものはすべて、将校たちに提示され、それを持ち帰るべきか、持ち続けるべきかの判断を仰いだ。私は、陛下がお召しになった衣服を持ち出すのは不名誉なことであり、私たちにとっては言い

ようのない価値があるため、私たちの衣服を持ち出さないよう懇願した。彼らは承諾し、リストだけを持ち出し、本や薬なども同じように持ち出した。私の小さな作業台とロッキングチェアは、最愛の兄からの贈り物だったが、私は彼らの手から救い出した。彼らはまた、私たちが長い間監禁されていた間に、計り知れない価値のある品々をたくさん残していった。

「彼らが捜索を終えて立ち去るとすぐに、私は急いで王妃の弟のところへ行き、私の請願の行方を聞こうとした。私の期待は大きく膨らんでいたので、この一文は私の感情に雷を落とすようなものだった。もし王妃が援助を拒んだら、誰が私のために執り成す勇気があるだろうか？悄然とした気持ちで出発し、家に帰る途中、兄上に悲しい知らせを伝えようと獄門に入ろうとしたが、厳しく入門を拒否され、それから 10 日間、毎日の努力にもかかわらず、入ることを許されなかった。私たちは筆談で連絡を取ろうと試みたが、数日間はうまくいったものの、それが発覚し、連絡を運んだ哀れな男は殴られ、牢屋に入れられた。

「ジャドソンは真の教師であり、彼の家には司祭のもの以外は何もなかった。この金銭のほかに、膨大な数の書籍、医薬品、衣服のトランクがありますが、私たちはそのリストを取っただけです。王は言った、「この財産はそのままにしておきなさい。これは、彼がスパイであるという考えを暗示していた。

「その後 2、3 ヵ月間、私は嫌がらせを受け続けた。それは私が警察の管理について無知であったせいでもあるし、私たちの不幸によって自分自身を富ませようとする下士官の飽くなき欲望のせいでもある。「親愛なる兄弟よ、私の友人に対する強い愛着と、これまで振り返ってみて経験した喜びを知っているあなたなら、上記の状況から私の苦しみがどれほど激しかったかを判断できるだろう。しかし、私の苦悩の頂点は、私たちの最終的な運命がひどく不確かであったことにある。私の一般的な考えは、夫は非業の死を遂げ、私はもちろん奴隷となり、無情な怪物の暴君の手にかかって、短いとはいえ惨めな一生を

送るのだろうというものだった。しかし、このような試練の状況において、宗教の慰めは「少なくも小さくも」なかった。宗教は私に、この世を越えて、イエスが君臨し、抑圧が決して入り込まない安息、平和で幸福な安息に目を向けるよう教えてくれた。

「お兄さんが収監されてから数カ月後、私は刑務所の中に小さな竹の部屋を作ることを許された。兄がこの場所にいた 2 ヵ月間は、1 年で最も寒い時期であった。あなたの小さな姪が生まれた後、私は以前のように刑務所や総督を訪問することができなくなり、以前は得られていた多大な影響力を失っていることに気づいた。マリアが生後 2 カ月になろうとしていたある朝、父親から連絡があり、父親と白人の囚人全員が、それぞれ 5 対の枷をつけられて内獄に入れられ、父親の小さな部屋は取り壊され、マットや枕などが牢番たちに奪われたとのことだった。これは私にとって恐ろしい衝撃であり、より大きな悪への序曲に過ぎないとすぐに思った。

「囚人たちの状況は、筆舌に尽くしがたいものだった。暑い季節の始まりだった。100 人以上の囚人が一つの部屋に閉じこめられ、板の隙間からしか空気を吸うことができなかった。私はときどき、5 分間だけドアの前に行く許可を得たが、そのときは惨めさに胸が痛んだ。白人の囚人たちは

、絶え間ない発汗と食欲不振のせいで、生きているというより死人のようだった。私は毎日総督に申し入れ、金を差し出したが、総督は拒否した。しかし、私が得たのは、外国人たちが外で食事をすることを許可してくれたことだけであった。

「内獄に 1 カ月以上いた後、あなたの弟は熱病にかかりました。あの騒々しい場所から引き離さなければ、長くは生きられないだろうと思いました。そのため、また牢獄の近くにいるため、私は家を出て、牢獄の門のほぼ向かいにある総督の囲いの中に小さな竹の部屋を作った。ここで私はしきりに知事に、ミスターJ を大きな牢獄から出して、もっと快適な場所に住まわせるよう命じられるよう懇願した。老人は私の懇願に疲れ果て、ついに正式な形で命令を下してくれた。また看守長にも、私が一日中いつでも出入りして薬

を投与できるよう命令を下してくれた。私は今、実に幸せだと感じ、J氏を即座に竹でできた小さな小屋に移した。

オウン・ペン・ラへの囚人移送-ジャドソン夫人も同行

「総督が私の入獄を命じたにもかかわらず、看守を説得して門を開けさせるのは至難の業だった。私はJ氏の食事を自分で運び、追い出されない限り、1時間か2時間はここにいた。私たちがこの快適な状況にいたのは2、3日前のことだった。ある朝、熱のために摂ることができなかったジャドソン氏の朝食を運び入れ、私がいつもより長く留まっていると、総督が大急ぎで私を呼びに来た。私は、ガバナーの意志を確認したらすぐに戻ることを約束した。しかし、ガバナーは私に時計のことで相談したいだけだと告げ、とても楽しそうに話してくれたので、私はとてもがっかりした。後でわかったことだが、彼の唯一の目的は、刑務所で起ころうとしている恐ろしい光景が終わるまで私を拘束することだった。私が自分の部屋に行こうと彼のもとを去ると、使用人の一人が走ってきて、ぞっとするような表情で、白人の囚人が全員運び去られたことを告げた。「私はその報告を信じず、即座にガバナーのところに戻った。私は急いで通りに飛び出し、彼らが見えなくなる前に一目見ようと思ったが、期待はずれだった。私はまず通りに飛び込み、次に別の通りに飛び込み、出会う人すべてに尋ねたが、誰も答えてくれなかった。やがて一人の老婆が、白人の囚人たちは小さな川の方へ行ったと教えてくれた。私は半マイルほど小さな川のほとりに走ったが、彼らの姿は見えず、老婆は私を欺いたのだと思った。外国人の友人の何人かが処刑場に行ったが、彼らは見つからなかった。そこで私は総督のところへ戻り、彼らが連れ去られた原因と今後の運命を探ろうとした。その老人は、その日の朝まで、政府が外国人を追い出すつもりだとは知らなかったと断言した。私が出かけてから、捕虜たちがアマラポーラに送られたことを知ったが、その目的は知らなかった。すぐに人を派遣して、彼らをどうするか確認させます」と彼は言った。これ以上夫のためにできることはない。

「アバの街を横切るとき、これほど恐怖に苦しんだことはなかった。気をつけろよ』という知事の最後の言葉を聞いて、何か私の知らない企みがあるのではないかと疑った。また、総督は私が街路に出ることを恐れているようで、暗くなるまで待つようにと私に言った。私は最も貴重な品々を入れたトランク 2、3 個と薬箱を総督の家に預け、家と建物を忠実なムング・イングとベンガル人の使用人に託した後（彼の賃金は払えなかったが）、私はその時思ったとおり、アバの家を永遠に去ることにした。

「その日はひどく暑かったが、屋根つきのボートを手に入れ、官邸の 2 マイル手前まで快適に過ごすことができた。その後、荷車を手に入れたが、激しい動きとひどい暑さと埃で、ほとんど気が散ってしまった。しかし、裁判所に到着したときの私の落胆といったら、囚人たちは 2 時間前に送還されており、私はアバからずっと抱いてきたマリアちゃんを抱えたまま、さらに 4 マイル先まであの不快な方法で行かなければならないことを知ったときだった。灼熱の太陽の下で 1 時間待った後、私は別の馬車を調達し、忘れることのできない場所、ウンペンラに向けて出発した。私は知事からガイドをもらい、直接刑務所へ向かった。

「しかし、私の目にはなんと惨めな光景が映ったことだろう！8、10 人のビルマ人が建物の上にいて、木の葉でシェルターのようなものを作ろうとしていた。一方、牢獄の外にある小さな低い庇の下には外国人が座っていて、2 人ずつ鎖でつながれ、苦しみと疲労でほとんど死んでいるようだった。お兄さんの最初の言葉はこうだった：なぜ来たんだ？ここでは生きていけないから、ついてこないでほしかった」。

「すっかり暗くなっていた。アマラポーラの市場で必要なものはすべて調達できると思っていたので、苦しんでいる囚人たちのためにも、私自身のためにも、何の飲み物も持っていなかった。私は牢番の一人に、囚人たちの近くに小さな竹の家を建ててもいいか尋ねた。そこで私は、明日になれば住める場所が見つかるだろうから、一晩の宿を用意してくれるよう頼んだ。彼は私を自分の家に連れて行ったが、そこには小さな部屋が 2 つしか

なく、1 つは彼と彼の家族が住んでいた。私はお茶の代わりに半分沸騰させた水を手に入れ、疲れ果てて田んぼの上に敷いたマットの上に横たわり、睡眠から少しでもリフレッシュしようと努めた。翌朝、お兄さんは、牢から出されたときに受けた残酷な仕打ちについて、次のように話してくれた。

「私が総督の呼びかけに応じて外出するとすぐに、看守の一人が J 氏の小部屋に駆け込み、乱暴に腕をつかんで引っ張り出し、シャツとズボン以外の衣服をすべて剥ぎ取り、靴と帽子と寝具をすべて取り、鎖を外して腰に縄を巻き、他の囚人たちが先に連れて行かれていた裁判所まで引っ張っていった。ラミン・ウーンは馬に乗って囚人たちの前を進み、奴隷の 1 人が囚人 2 人をつなぐロープを持っていた。その日は 5 月で、1 年で最も暑い時期のひとつであり、日中は 11 時であった。

「弟の足が水ぶくれになったのは、まだ半マイルほどしか進んでいないときだった。この早い時期でさえ、弟の苦しみは非常に大きく、小さな川を渡ろうとしたとき、弟は水に身を投げて苦しみから解放されたいと願った。しかし、そのような行為につきまとう罪がそれを阻んだ。彼らはそれから 8 マイルも歩かなければならなかった。砂や砂利は囚人たちの足には燃える炭のようで、すぐに皮が完全に剥がれてしまった。この惨めな状態で、彼らは無愛想な運転手に煽られた。J 氏は熱病のため衰弱しており、その日の朝は食事を取らなかったため、他の囚人よりもこのような苦難に耐えることができなかった。

「旅の半ばにさしかかったとき、水を汲むために立ち寄ったので、あなたの兄はラミン・ウーンに、馬で 1、2 マイル進むことを許してくれるよう頼んだ。しかし、蔑むような悪意のこもった視線しか返ってこなかった。それから彼は、彼と同乗していたレアード大尉に、強く健康な男なので

、沈みかけている彼の肩をつかませてほしいと頼んだ。心優しいレアード船長は、1、2 マイルの間、これを許可したが、その後、さらなる重荷に耐えられないと感じた。ちょうどその時、グーガー氏のベンガル人の召使いが彼らのところにやってきて、弟さんの

苦しそうな様子を見て、布でできた頭巾を脱いで二つに裂き、半分を主人に、半分をジャドソン氏に渡した。下僕はその後、ミスターJ に肩を差し出し、残りの道のりをほとんど彼に担がれた。

「ラミン・ウーンは、囚人たちの悲惨な状態を見て、また囚人たちの一人が死んでいるのを見て、その夜はそれ以上進むまいと決めた。夜間は古い小屋で過ごすことになったが、マットも枕も何もなかった。ラミン・ウーンの妻は好奇心から囚人たちを訪ね、その惨めさに同情し、果物、砂糖、タマリンドを注文した。翌朝、彼らのために米が用意され、前日までほとんど食べ物に不自由していた囚人たちには、貧しいながらも新鮮だった。翌朝には米が用意され、貧しかったが、前日までほとんど食べ物に不自由していた囚人たちには新鮮なものだった。この間、外国人たちは自分たちがどうなるのかまったく知らなかった。オウンペンラーに到着し、牢獄の荒廃した状態を見たとき、彼らはすぐに、以前アバで流布されていた報告書と同じように、自分たちは火刑に処せられるのだと一斉に判断した。彼らは皆、予想される恐ろしい光景に備えようと努め、牢獄を修復する準備が進められているのを見るまでは、残酷な余韻の残る死が待っていることを少しも疑わなかった。私の到着はこの 1、2 時間後だった。

「翌朝、私は起きて、何か食べ物のようなものを見つけようとした。しかし市場はなく、何も手に入らなかった。しかし、プライス博士の友人の一人がアマラポーラから冷や飯と野菜のカレーを持ってきてくれたので、ランサゴ氏のお茶と一緒に囚人たちの朝食とした。戦争が長引いた場合の私たちの見通しがどうであったか、お分かりいただけるだろう。しかし、私たちの天の父は、私たちの不安よりも私たちに優しかった。私たちがウンペン・ラにいた 6 ヶ月の間、看守の絶え間ない強要にもかかわらず、また、私たちがしばしば窮地に立たされたにもかかわらず、私たちは、調達できない食料に困ることはあっても、お金がなくて苦しんだことは一度もなかった。

「この地で、私の肉体的な苦しみが始まった。あなたの弟が市の刑務所に収監されている間、私は私たちの家に留まることを許されていた。そこには多くの便利なものが残されており、私の健康状態は予想以上に良好だった。しかし今、私には便利なものがひとつもない。竹の床を除けば、椅子や座椅子すらない。私が到着した翌朝、メアリー・ハッセルティンが天然痘にかかった。彼女はとても若かったが、マリアちゃんの世話をする唯一のアシスタントだった。しかし彼女は、熱病がまだ獄中で続いているジャドソン氏から私が割くことのできるすべての時間を必要とした。

「近隣からの援助も、被災者のための薬も手に入らず、一日中、小さなマリアを抱いて、家と牢屋を行ったり来たりしていた。時には、眠っているマリアを 1 時間ほど父親のそばに残し、その間に私は家に戻って、せん妄を起こすほど高熱のマリアの世話をした。彼女は完全に天然痘に覆われていて、膿疱の区別がなかった。マリアは私と同じ小部屋にいたので、私はマリアが天然痘にかかるだろうと思った。同時にアビーと看守の子供たちにも接種したが、彼らは皆、遊びの邪魔にならない程度に軽くかかった。しかし、私のかわいそうなマリアの腕にはうつらなかった。マリアはまだ生後 3 ヵ月半で、とても健康な子供だったが、この恐ろしい病気の影響から完全に回復するまで 3 ヵ月以上かかった。

「私が天然痘にかかったことはなく、アメリカを発つ前に予防接種を受けていたことは覚えているだろう。私は天然痘に罹ったことはなく、アメリカ出国前に予防接種を受けていた。長い間、常に天然痘にさらされていたため、発熱などの症状はなかったものの、100 個近くの膿疱ができた。看守の子供たちが天然痘に軽くかかったため、予防接種の結果、私の名声は村中に広まり、それまでかかったことのない老若男女すべての子供が予防接種を受けに来た。私はこの病気について何も知らず、治療法も知らなかったが、全員を針で接種し、食事に気をつけるように言った。ジャドソン氏の健康状態は徐々に回復し、市内の刑務所にいたときよりもずっと快適になった。「囚人たちは最初、2 人ずつ鎖でつながれていたが、看守たちが十分な鎖を手に入れると、すぐに分離され、1 人 1 組の鎖でつながれるようになった。牢獄は修繕され、新しい柵が作られ、牢獄の前には風通しの良

い大きな小屋が建てられ、囚人たちは昼間はそこにいることが許されたが、夜は小さな狭い牢獄に閉じ込められた。子供たちはみな天然痘から回復したが、私の監視と疲労、そしてみすぼらしい食事とさらにみすぼらしい宿舎が、この国の病気のひとつを引き起こした。

「私の体質は破壊されたようで、数日のうちに、ジャドソン氏の牢屋まで歩くのもやっとなほど衰弱した。この衰弱した状態で、私は薬と適当な食料を調達するため、コックに私の代わりをさせて、荷車でアバに向かった。そして 2、3 日の間、病状は収まったかに見えたが、その後、病状は激しく私を襲い、もう回復の見込みはなくなった。総督から薬箱を手に入れるのは至難の業だった。しかし、ラウンダナムを手に入れ、1 回に 2 滴ずつ数時間服用したところ、立つこともできないほど衰弱していたとはいえ、ボートに乗ることができるまでに回復し、再びウンペン・ラに向けて出発した。最後の 4 マイルは、泥で牛が埋もれそうになる雨季の真っ只中、荷車という辛い乗り物を使った。ビルマの荷車の車輪は私たちのような構造ではなく、真ん中に穴のあいた丸い厚板で、車体を支える棒が突き刺さっている。

「オウン・ペン・ラに着いたとき、私の体力は完全に尽きていた。しかし、あまりに変わり果てた痩せ細った私の姿を見て、かわいそうに彼は涙を流した。私は小さな部屋のマットの上を這いずり回り、そこに 2 ヵ月以上閉じ込められていたが、英国陣営に来るまで完全に回復することはなかった。自分のこともできず、ジャドソン氏の世話もできなかったこの時期、ベンガリー人コックの忠実で愛情深い世話がなければ、私たちは 2 人とも死んでいたに違いない。一般的なベンガル人のコックは、料理という単純な仕事以外は何もしない。しかし彼は、私たちに奉仕するために自分のカーストも、ほとんど自分の欲求も忘れているようだった。彼は弟さんの食事を用意し、調理し、運び、それから戻って私の世話をする。ジャドソン氏の夕食をいつもの時間に用意するために、薪や水を求めて遠くまで行かなければならなかったため、彼が夜近くまで食事を口にしなかったことを私は何度も知っている。彼は文句を言うこともなく、賃金を要求することもなく、どこへ行く

のも、私たちが要求する行為をするのも、一瞬たりともためらうことはなかった。私は、この使用人の忠実な行いを語ることに大きな喜びを感じている。彼は今も私たちとともにおり、その奉仕に対して十分に報われていると信じている。

「私の病気でいつもの栄養がとれず、村では乳母もミルクも一滴も手に入らなかった。牢番たちに贈り物をすることで、私はジャドソン氏に牢から出てくる許可をもらい、やせ細ったこの子を連れて村中を回り、幼い子供を持つ母親たちから少しばかりの栄養をねだりました。夜中の彼女の泣き声は悲痛なものだった。私は今、まさにヨブの苦難が私の身に降りかかったと思うようになった。健康であれば、さまざまな試練や苦難に耐えることができた。

「宗教の慰めや、あらゆる試練は無限の愛と慈悲によって命じられたものだという確信がなかったら、私は積もり積もった苦しみに沈んでいたに違いない。時には、看守たちが私たちの苦悩に少し和らいだ様子で、数日間にわたってジャドソン氏が家に来ることを許してくれたこともあった。しかしまた、私たちが苦しみから解放され、裕福な境遇にあるかのように、鉄のような態度で要求してくることもあった。ウンペン・ラでの 6 ヵ月間の滞在中、私たちが受けた迷惑、恐喝、圧迫は枚挙にいとまがない。

「ついに、あの忌まわしい場所、ウンペン・ラ牢獄から釈放される時が来た。私たちの友人で、以前はミョオツァのコングトーンだった王宮北門の総督からの使者が、その前の晩に王宮でジャドソン氏の釈放命令が出されたことを教えてくれた。その日の夕方、正式な命令が届き、私は喜び勇んで翌朝早く出発する準備を始めた。しかし、予期せぬ障害が起こり、私はまだ囚人として留まるのではないかと心配になった。貪欲な看守たちは、獲物を失いたくないがために、私の名前が命令に含まれていない以上、行ってはならないと主張したのだ。私は、私は囚人としてそこに送られたのではない、彼らには何の権限もないと主張したが、それでも彼らは私が行ってはならないと決めつけ、村人たちに荷車を貸すことを禁じた。ジャドソン氏は牢から出され、牢番の家に連れて行かれた。そこで約

束と脅しによって、最近アバから受け取った食料の残りを置いていくことを条件に、ようやく村人たちの同意を得た。

「出発が許されたのは正午だった。アマラポラに着くと、ジャドソン氏は看守の誘導に従わざるを得なくなり、看守はジャドソン氏を市の知事のところへ案内した。必要な調査をすべて行った後、知事は別の看守を任命し、その看守がジャドソン氏をアバの裁判所まで運び、ジャドソン氏は夜になってその場所に到着した。私は自分でボートを調達し、暗くなる前に家に着いた。

「翌朝、私の最初の目的は兄を捜しに行くことだった。そして、死刑囚ではないものの、牢獄の中で兄に再会することになった。私はすぐに旧友の都知事のところへ行った。都知事は今やウンギーに昇格していた。彼は私に、ジャドソン氏がビルマ人のキャンプに送られ、通訳兼翻訳者として働くことになったこと、そして彼の身辺が落ち着くまでの短期間だけ収監されることになったことを告げた。翌朝早く、私は再びこの将校のところに行った。将校は私に、ジャドソン氏がその瞬間に政府から 20 枚のティカルを受け取り、すぐにマロウン行きのボートに乗るように命令されたこと、そして、ジャドソン氏が向かう途中にあるこの家に少し立ち寄ることを許可したことを告げた。私は急いで家に戻ると、ジャドソン氏はすぐに到着した。彼は小さなボートに押し込められ、横になるスペースもなく、寒く湿った夜にさらされたため、激しい発熱に見舞われ、苦しみはほとんど終わりを告げた。彼は 3 日目にマロウンに到着し、病気であったにもかかわらず、すぐに翻訳の仕事に取りかからざるを得なかった。マロウンには 6 週間滞在し、牢獄にいたときと同じように苦しんだが、鉄格子に入れられたり、残酷な看守の侮辱にさらされたりすることはなかった。

「ジャドソン氏が出発してから最初の 2 週間は、困難が始まって以来、私の不安はそれ以前のどの時期よりも少なかった。キャンプのビルマ人将校たちは、ジャドソン氏の功績を高く評価しており、彼の命を脅かすような手段を使うことは許されないと思ってい

たからだ。また、彼の状況は実際よりもずっと快適だろうと思っていたので、私の不安は少なかった。しかし、オウン・ペン・ラでの激しい発作以来、一向に回復しなかった私の健康状態は、日に日に悪化し、やがて私は、あらゆる恐怖を伴う斑点熱に襲われた。熱の始まりからその性質は分かっていたが、私の体質がボロボロだったことと、医療従事者がいなかったことから、これは致命的なものに違いないと判断した。私が運ばれた日、ビルマ人の看護婦がやってきて、マリアのために尽くしてくれた。私は長い間、このような人を得ようと絶えず努力してきたが、一度も得ることができなかった。

「私の熱は激しく、間断なく続いた。私は世俗的な問題を解決し、愛する小さなマリアをポルトガル人女性の世話に任せようと考え始めた。この恐ろしい時期に、プライス医師が牢獄から釈放され、私の病気のことを聞いて、私に会いに来る許可を得た。プライス医師は、私の病状を聞きつけ、面会に来る許可を得た。プライス医師はそれ以来、私の状況はこれまで目撃した中で最も悲惨なものであり、私が何時間も生き延びられるとは思わなかったと語っている。私の髪は剃られ、頭と足は水疱で覆われ、プライス医師は、私の世話をしたベンガル人の使用人に、私が数日間頑なに拒んでいた栄養を少しでも摂るよう説得するよう命じた。私が最初に思い出したことのひとつは、この忠実な使用人が私のそばで、ワインと水を少し飲むように説得していたことだ。実際、私はあまりに衰弱していたので、私を見に来たビルマ人の隣人たちは、『彼女は死んでいる。

「熱は、水疱ができたときから 17 日間も続いていた。それから私は徐々に回復し始めたが、立つ力が出るまで 1 ヵ月以上かかった。このような衰弱した状態にあったとき、ビルマ人のキャンプにお兄さんについていった使用人がやってきて、主人が到着し、町の裁判所に連れて行かれたと教えてくれた。私はビルマ人を派遣して政府の動きを監視させ、可能であればジャドソン氏がどのような方法で処分されるかを確認させた。彼はすぐに戻って来て、ジャドソン氏が 2、3 人のビルマ人に連れられて宮殿の庭から出て行くのを目撃し、そのビルマ人がジャドソン氏を牢獄の一つまで連れて行ったという悲しい知らせを聞いた。私は弱っていたので、どのような悪い知らせにも耐えられなかったが、これほ

ど恐ろしい衝撃を受けると、ほとんど息ができなくなった。しばらくの間、私はほとんど息をすることもできなかった。しかし、ついに十分な落ち着きを取り戻し、モウイングを私たちの友人である北門の総督のもとに派遣し、ジャドソン氏の釈放のためにもうひと頑張りして、彼が田舎の刑務所に送り返されるのを防いでくれるよう懇願した。そしてモウイングはジャドソン氏を探しに行き、彼が無名の牢獄の中で彼を見つけたときには、もう日が暮れかけていた。午後の早い時間に食料を送ったのだが、彼を見つけることができず、運び屋が食料を持って戻ってきた。

「祈りの価値と効能を感じたことがあるとすれば、このときだった。苦難の日にわたしを呼び求めよ。そうすれば、わたしは聞くであろう。そうすれば、あなたはわたしに栄光を帰するであろう』と言われた偉大で力強い存在に、ただ祈ることしかできなかった。

「ジャドソン氏がマロウンからアバに送られたとき、それは 5 分以内の通告であり、彼はその理由を知らなかった。川をさかのぼる途中、彼は偶然、彼に関する政府への連絡を目にした：ユダタンにはもう用はないので、彼を黄金の都に返す』。裁判所に着くと、たまたまＪ氏を知っている者は誰もいなかったので、裁判長は彼がどこからマロウンに送られたのか尋ねた。すると、ウンペンラーから来たという答えが返ってきた。では、彼をそちらへお返ししましょう」と言うと、彼は衛兵に引き渡され、前述の場所まで連れて行かれ、ウンペン・ラに搬送されるまでそこに留まることになった。その間に、北門の総督は帝国の高等法院に嘆願書を提出し、ジャドソン氏の身柄を保証することを申し出て、ジャドソン氏の釈放を勝ち取り、彼を自分の家に連れて行った。

「神への感謝で胸がいっぱいになり、前途への喜びに溢れながら、6、8 隻の黄金の船に囲まれ

、この世にあるすべてのものを携えて、イラワジ川を下った。

「私たちは、1 年半以上にわたって初めて、ビルマ人の圧迫的なくびきから解放され、自由になったと実感した。そして翌朝、蒸気船のマストを見たときの喜びは格別だった

。私たちのボートが岸に着くとすぐに、A 准将ともう 1 人の将校が乗り込んできて、私たちの到着を歓迎し、蒸気船に招いてくれた。ジャドソン氏は夕方、アーチボルド卿からの招待状を持って戻り、すぐに彼の宿舎に来るようにと言われた。翌朝、私は将軍に紹介され、彼の宿舎の近くにテントを張って私たちを迎えてくれた。将軍は私たちを自分の食卓に案内し、他国のよそ者というよりはむしろ父親のように親切に扱ってくれた。

「数日間、私たちはビルマ政府の権力から離れ、再びイギリス人の保護下に置かれた。私たちの感情は、絶えず次のような表現を指示していた：私たちに対する主のすべての恩恵に対して、主に何を捧げよう。

「和平条約は間もなく締結され、双方が署名し、敵対行為の終結が公に宣言された。私たちは 2 週間の滞在の後ヤンダブーを出発し、2 年 3 ヶ月ぶりにラングーンのミッションハウスに無事到着した。

このような苦しみの中で、ビルマ語新約聖書の貴重な写本は守られた。それは袋に入れられ、ジャドソン博士の牢獄の硬い枕にされた。しかしジャドソン博士は、ビルマ人に貴重なものが入っていると思われて持ち去られてしまわないように、一見無頓着にならざるを得なかった。しかし、

忠実なビルマ人の改宗者の助けによって、長い年月の労苦の結晶である原稿は無事に保管された。

この長く憂鬱な物語の終わりに、ジャドソン夫人の慈悲深さと才能に対する次の賛辞を紹介するのが適切であろう。これは戦争終結後、カルカッタの新聞に掲載された：

「ジャドソン夫人は、ビルマ宮廷の威厳と融通無碍なプライドを知る誰もが予想だにしなかった、政府への雄弁で力強いアピールの作者であり、和平条件への服従を少しずつ準備させた。

「私たちの刑務所から 2 マイルも離れた場所に住み、移動手段もなく、健康状態も非常に弱っているにもかかわらず、ほとんど毎日私たちを訪れ、私たちの望みを探し出して世話をし、あらゆる方法で私たちの不幸を軽減するために貢献してくれた。

「私たちが政府によって食糧不足の状態に置かれている間、彼女はたゆまぬ忍耐で、何らかの手段で、あるいは別の手段で、私たちに絶えず食糧を供給してくれた。

「私たちの衣服がぼろぼろで、私たちの苦難が極限に達していることを物語っていた。

「私たちの飼育係の無情な欲望が私たちを室内に閉じ込め、あるいは私たちの足を牢獄に閉じ込めたとき、彼女は天使のように、私たちが大きくなったというありがたい知らせや、私たちを苦しめる抑圧から解放されたという知らせを私たちに伝える許可が下りるまで、政府への申し入れをやめなかった。

「それに加えて、ジャドソン夫人の度重なる雄弁と説得力のある呼びかけのおかげであることは間違いない。

宣教師の始まり

- 1800.キャリー最初の改宗者が洗礼を受ける。
- 1804.英国・外国聖書協会設立。
- 1805.ヘンリー・マーティン、インドへ向けて出帆。
- 1807.ロバート・モリソン、中国に向けて出航。
- 1808.ウィリアムズ・カレッジ近くでヘイスタック・ミーティング開催。
- 1810.アメリカン・ボード主催。
- 1811.ウェスレアン派がシエラレオネ伝道を設立。

- 1812.アメリカン・ボード初の宣教師が出航。
- 1816.アメリカ聖書協会主催。
- 1816.ロバート・モファット、南アフリカに向けて出航。
- 1818.ロンドン宣教師協会、マダガスカルに入る。
- 1819.メソジスト宣教師協会結成。
- 1819.アメリカン・ボード、サンドイッチ諸島ミッション開設
- 1819.ジャドソン、初のビルマ人改宗者に洗礼を授ける。

オリジナル版へのエピローグ

そして今、善良なるクリスチャンの読者諸君、この現在のテキストを締めくくるに至ったが、それは内容が不足しているからではなく、むしろ巻の長さのために内容を短くするためである。その間、主イエス・キリストの恩寵が、読者諸君、諸君の研究的な読書のすべてにおいて、諸君とともに働くであろう。そして、あなたがたに信仰があるときには、読書に励みなさい。それは、読書によって、あなたがたの魂を益し、あなたがたに経験を教え、あなたがたを忍耐で武装させ、あなたがたの完全な慰めと救いのために、私たちの主キリスト・イエスにあって、すべての霊的な知識において、ますますあなたがたを指導することを、日々学ぶためである。アーメン。

終わりを見越して